

富山県文化振興財団  
埋蔵文化財発掘調査報告第26集

# 中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告

—公害防除特別土地改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告IV—

第一分冊

2005年

財団法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所



中名 V・VI 遺跡 全景



上=中名VI遺跡A地区 古代面 SI01（西から）

下=中名VI遺跡A地区 中世面 井戸群（東から）



上=中名VI遺跡A地区 中世面 SX01 治水関連遺構（南から）  
下=中名V遺跡D1・D2・D4地区 中世面 SB04（東から）



上=中名V遺跡D4地区 古代面 全景（東から）

下=中名V遺跡B5地区 SX03（南から）



上=中名V遺跡F3地区 全景（東から）  
下=中名V遺跡F3地区 SK05（東から）



上=中名V遺跡E地区 中・近世面 全景（北から）

下=砂子田I遺跡B地区 全景（南から）

富山県文化振興財団  
埋蔵文化財発掘調査報告第26集

# 中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡発掘調査報告

—公害防除特別土地改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告IV—

第一分冊

2005年

財團法人 富山県文化振興財団  
埋蔵文化財調査事務所

# 序

当埋蔵文化財調査事務所では、平成7年度より県営公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査を行っております。

本書は、平成8～12年度に実施した、婦負郡婦中町中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡の発掘調査成果を報告書としてまとめたものです。

中名V遺跡では、おもに古代から近世に至る集落跡がみつかりました。とくにB5地区では、熊野神社に関連すると考えられる鳥居跡や道路状遺構を検出しました。E地区では中世末～近世の屋敷地跡を調査いたしました。D4地区では、古代の掘立柱建物と竪穴住居が同時にみつかりました。中名VI遺跡では、飛鳥時代の竪穴住居群や中世の掘立柱建物が多数検出されたほか、旧河道の合流点付近において、治水・利水に関連すると考えられる遺構を発掘いたしました。この他に砂子田I遺跡でも古代・中世の遺構・遺物が出土しております。

また、これらの調査に伴って膨大な数の遺物が出土しています。これらの遺物には土器・陶磁器をはじめ、金属製品・石製品・木製品など多彩な内容のものがあります。大半は日常生活で使用されたものですが、このような遺物から当地で生活を営んでいたかつての人々の姿をかいまみることができます。

公害防除特別土地改良事業に伴う発掘調査報告書も、本書が4冊目となります。とくに本書の刊行をもって、婦中町域での発掘調査の報告は、一応の完結をみることになります。本書が地域の郷土史研究や歴史教育などに少しでも寄与することがあれば幸いです。

最後に、本書を作成する過程において、多大なご指導、ご助力を賜りました関係機関・団体および諸氏に、厚くお礼申し上げます。

平成17年3月

財團法人富山県文化振興財團

埋蔵文化財調査事務所

所長 桃野真晃

## 例　　言

- 1 本書は富山県婦負郡婦中町中名地内に所在する中名V・VI遺跡と、砂子田地内に所在する砂子田I遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本書は3分冊からなる。第一分冊には本文・挿図・表を、第二分冊には遺跡・遺構・遺物図面を、第三分冊には自然科学分析および写真図版を掲載する。また遺跡全体図は付図として本書に添付した。
- 3 調査は富山農地林務事務所からの委託を受けて、財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所が実施した。
- 4 発掘調査と内業整理の期間については以下のとおりである。

発掘調査期間 平成8(1996)年10月14日～12月17日

平成9(1997)年5月12日～7月4日

平成11(1999)年5月21日～12月17日

平成12(2000)年6月29日～12月6日

内業整理期間 平成12(2000)年4月1日～平成17(2005)年3月31日

- 5 本書の執筆・編集は中村亮仁が全て担当・実施した。また巻末の「付論」は、森隆、中村亮仁、武田健次郎、内田亜紀子が分担執筆し、それぞれ文責を記した。
- 6 出土遺物の写真については、寿福写房(代表 寿福 滋)、楠華堂(代表 内田真紀子)に委託した。
- 7 自然科学的な分析は、以下の諸機関に委託し、その成果について報文を得た。

金属製品等分析 JFEテクノリサーチ(旧川鉄テクノリサーチ)

漆塗膜分析 漆器文化財科学研究所(代表 四柳嘉章)

自然科学分析 (株)パリノ・サーヴェイ

樹種同定 (財)元興寺文化財研究所

株式会社古環境研究所

- 8 本書に記載される図面・図版・記述の凡例については、必要に応じてその都度本文中で言及した。
- 9 本書で使用した遺構の略号は次のとおり  
SI: 壁穴住居 SB: 据立柱建物・礎石建物 SA: 檻列 SE: 井戸 SK: 土坑等  
SP: 柱穴等 SD: 溝・自然流路 SX: その他の遺構
- 10 本書の作成にあたり、出土石製品の石材については赤羽久忠氏(富山市科学文化センター)から、瀬戸美濃施釉陶器については藤澤良祐氏(財團法人瀬戸市埋蔵文化財センター)から、中国陶磁器については山本信夫氏(山本考古学研究所)から、骨については森沢佐歳氏(富山医科大学)から、木製品については山田昌久氏(東京都立大学)から多大なご教示・助言を得た。記して感謝申し上げたい。

# 目 次

<b>第Ⅰ章 周辺環境と調査経緯</b>	.....	1
1 地理的環境	.....	1
2 歴史的環境	.....	2
3 調査経緯	.....	5
(1) 調査に至る経緯	.....	5
A 調査の契機	.....	5
C 試掘調査	.....	5
B 分布調査	.....	5
D 本調査	.....	6
(2) 調査経過	.....	6
A 調査方法	.....	7
C 調査体制	.....	10
E 現地説明会	.....	10
F 整理体制	.....	11
<b>第Ⅱ章 中名V・VI遺跡の調査</b>	.....	13
1 調査地区の設定と基本層序	.....	13
A 調査地区の設定	.....	13
B 基本層序	.....	14
2 中名V遺跡（遺構）	.....	15
(1) A1地区	.....	15
(2) B5地区	.....	25
(3) D1・D2・D4地区	.....	27
(4) D3地区	.....	40
(5) E1・E2地区	.....	53
(6) F1地区	.....	68
(7) F2・F3地区	.....	71
3 中名VI遺跡（遺構）	.....	82
(1) A地区	.....	82
(2) B・C地区	.....	103
4 出土遺物	.....	121
A 上器・陶磁器	.....	121
B 木製品	.....	179
C 金属製品	.....	193
D 石製品	.....	196
<b>第Ⅲ章 砂子田I遺跡の調査</b>	.....	201
1 調査地区の設定と基本層序	.....	201
A 調査地区の設定	.....	201
B 基本層序	.....	201
2 遺構	.....	202
3 出土遺物	.....	212
A 土器・陶磁器	.....	212
B 木製品	.....	218
C 金属製品	.....	219
D 石製品	.....	219
<b>第Ⅳ章 結語</b>	.....	221

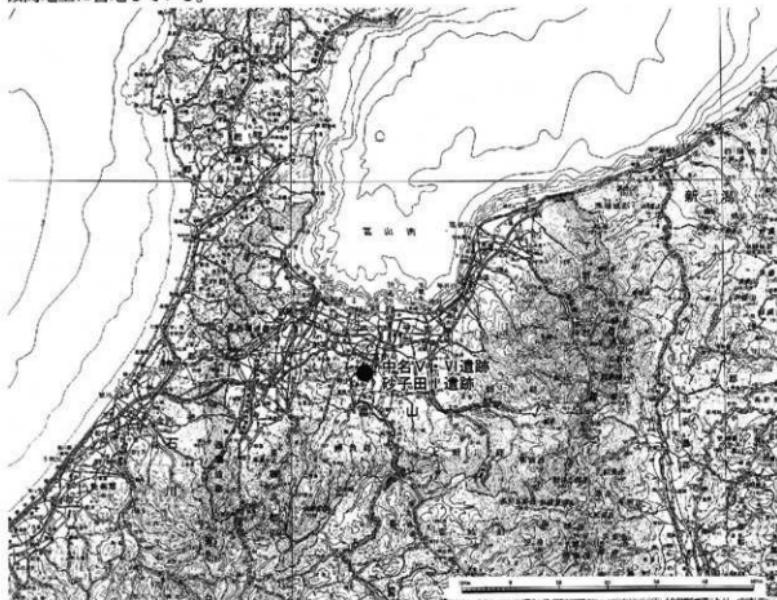
## —付論—

1. 婦中町域における古代集落の変遷 ..... 内田亞紀子
2. 中世の河川構築遺構について ..... 武田健次郎
3. 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器組成について ..... 森 隆
4. 中名V・VI遺跡出土の中世土器・陶磁器資料 ..... 森 隆
5. 中名遺跡群における古環境復元 ..... 中村 亮仁

# 第Ⅰ章 周辺環境と調査経緯

## 1 地理的環境

本書で報告する中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡の所在する富山県は、北東日本海側の能登半島の付け根付近に位置する。北陸4県のひとつで、石川県と新潟県の中間にあたる。県内は中央部を南北に走る呉羽丘陵で大きく東西に二分し、それぞれ「呉西」「呉東」と呼称されることが多い。中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡の所在する婦中町は呉東に入るものの、実際は県のほぼ中央部に位置している。一方県域全体を見渡すと、県域南部は大きく山岳地域に、県域中央から北部の海岸線に沿っては平野部が発達している。この平野部は大きく4つからなり、西から東にかけて水見平野、砺波・射水平野、富山平野、黒部平野と続く。このなかで富山平野は県中央部に位置し、東は早月川扇状地を東端に、西は前述の呉羽丘陵を西端とする地域に広がりをみせる。平野内には早月川、神通川、常願寺川などの水系があり、とくに常願寺川扇状地の発達が顕著である。婦中町は富山平野内では常願寺川からさらに西側の、神通川左岸から呉羽丘陵付近までの、富山平野のなかでも西端付近に位置する。町内の基本地形は、西側の丘陵部と東側の低地部からなる。丘陵部は呉羽丘陵から南の牛岳へと連なっている。低地部は神通川と井田川が形成した複合扇状地が主体となる。このうち神通川は町域の東部に沿って北流する。井田川は婦中町の中央部を貫流し、これに支流の山田川が西南部の山谷から出て羽根付近で合流する。本書で取り扱う中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡は、井田川右岸に近い標高20m前後の微高地上に占地している。



第1図 中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡位置図 (1:1,000,000)

## 2 歴史的環境

本報告書に記載した遺跡の所在する婦中町では、旧石器時代から近世まで長期にわたる各種の遺跡が見られる。旧石器時代の遺跡は多くないが、細谷遺跡など数カ所の所在が知られる。とくに細谷遺跡は表面採集資料ではあるが、富山県における旧石器遺跡の早い時期の調査・研究事例として知られる。縄文時代の遺跡では、婦中町ではないが、国指定史跡の北代遺跡が、呉羽丘陵の北側の富山市側に所在する。婦中町内では平岡遺跡で縄文土器前期中葉の土器が出土した他、石鎌・石槍・石錘・石匙・磨製石斧・凹石・抉狀耳飾りなどの遺物も出土している。滝谷遺跡（中期前葉）や牛滑遺跡（中期中葉）においても発掘調査で竪穴住居が調査されている。弥生時代の集落遺跡では、まず南部I遺跡、銀治町遺跡がある。また六治古塚や富崎遺跡、鏡坂遺跡などでは、山陰地域との文化的接触を物語る四隅突出墓がみつかっている。弥生時代から古墳時代では千坊山遺跡で竪穴住居がまとまって調査されており、近年は六治古塚などの弥生墳墓群とともに、千防山遺跡群と呼称され、研究・調査が進められている。古墳時代では杉谷A遺跡、五つ塚古墳、富崎千里古墳群などの存在が知られる。西部の丘陵上には玉塚古墳、勅使塚古墳などの首長墓級の前方後方墳が築造されている。古墳時代後期には、呉羽丘陵の斜面を利用した横穴墓がみられる。

本報告書で取り扱う古代以降になると、婦中町の低地側扇状地上にも多くの集落遺跡が形成されるようになる。律令期の国郡制のもとでは、婦中町は婦負郡の郡城にある。「和名類聚抄」によると婦負郡内には十余りの郷名が知られるが、史料的に裏付けされるものは少ない。この中で川合郷のみが平城京木簡等によってその存在が確認される。川合郷の位置は、その名称の由来からも神通川や井田川、山田川など複数河川の合流点付近に想定される。本調査地の周辺もまたその候補地となりえる。道場I・II遺跡では古代の集落構造は確認されなかったが、周辺では中名I・V・VI遺跡や友坂遺跡などで、奈良・平安時代の堅穴住居や掘立柱建物がみつかっている。また中名I・V・VI遺跡の東側に隣接する熊野神社は、『延喜式』の神名帳に記載された式内社と推定される神社の一つである。婦負郡には『延喜式』(927年)の神名帳にその名が記載された所謂式内社が7箇所ある。このうち熊野神社は稚児舞で知られる神社で、伝承によると久寿二年(1155)、立山山麓の五智山円福寺が萩の島に移され、それがこの神社であるという。中世になると付近は徳大寺領宮河荘の一角にあったものと推定されている。この宮河荘は文和三年(1354年)の足利義詮御判御教書案(徳大寺文書)、新潟県小千谷市魚沼神社所蔵の大般若経の至徳二年(1385年)十月六日付の奥書「婦負郡宮河荘押上」、同四年五月十二日付「宮河荘新保」、嘉慶二年(1388年)五月付の「婦負郡宮河荘鶴坂社」などによって名が知られ、その荘域は現婦中町の神通川左岸から対岸の富山市の熊野川に及ぶ広大なものであったと考えられている。宮河荘の推定地のうち婦中町側に所在する中世遺跡としては、清水島II遺跡、中名I・II・V・VI遺跡、持田I遺跡などがある。これらの諸遺跡は東西1km、南北1kmの範囲内に密集して所在しており、さながら一続きの中世遺跡群を形成しているかのような様相を呈している。このうち道場I遺跡では、中世莊園の物流拠点と考えられる建物群と区画溝、倉庫、河川施設などがみつかっている。また中世城郭では、豊臣秀吉が佐々成政を攻めた際の陣営の一つとなったと安田城跡や富崎城跡などがある。近世の集落は、主に過去の遺跡調査に付随して検出されることが多い。とくに今回の報告遺跡においては、熊野神社に近接した中名V遺跡B5地区やE地区で近世の遺構が多くみつかっている。但し村落の周辺に広がる水田地域を含め、現代に連なる村落景観が成立するのは、基本的には近世以後のことと考えられる。



第2図 周辺遺跡分布図 (1:50,000)

番号	遺跡名	所 在 地	種 類	時 代
1	中名V・VI遺跡	帰良附城中町中名	集落	古墳・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
2	砂子田・追跡	帰良附城中町砂子田	集落	古墳・古代・中世（鎌倉・室町）・近世
3	中名I遺跡	帰良郡城中町中名阿木大地	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
4	持田I遺跡	帰良附城中町持田	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
5	岩I遺跡	帰良附城中町岩字立寺旁	塚状遺跡・墓	中世（室町）・近世
6	清水大塚遺跡	帰良附城中町清水鳥字大塚口	集落	中世（室町）・近世
7	道場I・追跡	帰良附城中町道場字江戸田	集落	中世（室町）・近世
8	道場II・追跡	帰良附城中町道場宇柏原	集落	中世（室町）・近世
9	中名II遺跡	帰良附城中町中名字大日向	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
10	武進跡	帰良附城中町武字宿免	散布地	古代（奈良・平安？）
11	下膳川I・追跡	帰良附城中町下膳川	散布地	中世・近世
12	窓ヶ島II・追跡	帰良附城中町窓ヶ島	散布地	中世・近世
13	鶴寺古跡	帰良附城中町鶴寺	寺社	中世（鎌倉・室町）
14	鶴寺II・遺跡	帰良附城中町鶴寺坂	集落	古墳（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
15	友坂II・追跡	帰良附城中町友坂坂下。条。安田。小糸	集落・城郭	鐵文・古代（平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
16	友坂天神遺跡	帰良附城中町友坂天神	集落	鐵文・古代
17	安田城跡	帰良附城中町安田城跡	城跡	中世（鎌倉・室町）・近世
18	杉谷古墳群	帰良附城中町杉谷。富山市	古墳	鐵文・弥生・古墳
19	野下遺跡	帰良附城中町野下	集落	先王國・鐵文（中・唐）・古代（奈良）
20	平岡遺跡	帰良附城中町小長沢字大堀。字宮ノ高。字大山。富山市	散布地	鐵文
21	新開遺跡	帰良附城中町小長沢字新開。富山市	集落	先王國・鐵文・古代（奈良・平安）
22	新町II・遺跡	帰良附城中町新町	集落	鐵文・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
23	下邑遺跡	帰良附城中町下邑。小長沢	散布地	鐵文・古代（奈良・平安）・中世・近世
24	下邑東遺跡	帰良附城中町羽根字東	集落	古墳（飛鳥）。古代（奈良・平安）・中世・近世
25	千汎山遺跡	帰良附城中町羽根字千汎。長沢字天王	古墳	先王國・鐵文・古墳
26	王塚II・遺跡	帰良附城中町羽根字王塚	古墳	古墳（初）
27	剣使吉塚	帰良附城中町羽根字上平	古墳	古墳（初）
28	五ノ原	帰良附城中町五ノ原	古墳	古墳
29	向野野	帰良附城中町長沢字向野	弥生居器（前方後方形埴丘墓）	弥生居器
30	六治合環	帰良附城中町六治字内野	弥生居器（四面突出形埴丘墓）	弥生居器
31	鹿治町遺跡	帰良附城中町鹿治字穴越。鹿治町。櫛川。中江	集落	弥生居器・古墳（奈良）。中世・近世
32	飛坂I・遺跡	帰良附城中町飛坂字石屋坂	集落	鐵文（中）
33	篠花寺遺跡	帰良附城中町長沢字寺屋敷	社寺（寺院）	中世（室町）
34	富崎城跡	帰良附城中町富崎	散布地・城壁（山城）	鐵文・弥生・中世（鎌倉・室町）
35	富崎I・坐古墳群	帰良附城中町富崎	古墳	古墳
36	ゴダI・遺跡	帰良附城中町ゴダ	塚	中世（鎌倉・室町）
37	富崎遺跡	帰良附城中町西字二川口他	散布地	近世
38	千里II・遺跡	帰良附城中町千利	集落	古墳・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
39	上吉川I・遺跡	帰良附城中町上吉川	集落	鐵文（後）・古墳（前）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
40	南部I・遺跡	帰良附城中町熊野道。上井沢。鳥田。高日附。八尾町	集落	奈良（後）・古墳（前）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
41	前山I・遺跡	帰良附城八尾町福延字前山	集落	鐵文
42	天ノ平遺跡	帰良附城八尾町福延	散布地	先王國・鐵文
43	井田遺跡	帰良附城八尾町井田	城跡	中世（室町）
44	鳥山遺跡	帰良附城八尾町深見長山	集落	鐵文
45	葛先塚跡	帰良附城八尾町葛先	集落	鐵文
46	大杉遺跡	帰良附城八尾町大杉	集落	鐵文（中）
47	良者塚	帰良附城八尾町谷谷	墓	中世（鎌倉・室町）
48	押上古墳	富山市押上	古墳？	古墳？
49	南中臣D遺跡	富山市南中臣	集落	鐵文（南）・古墳（北）・古墳（白萬）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
50	吉曾II・遺跡	富山市吉曾の木又前・津上学跡地割・南中町字吉曾野前・住吉・新保	集落	古代（奈良・平安）・中世
51	任海遺跡	富山市任海	集落	古代（奈良・平安）・中世
52	任海若田遺跡	富山市任海字富田前・字大堀前・字田町前・新保前・字津上学跡地割・南中町字吉曾野前・住吉・新保	型落	鐵文（南）・古墳（古墳・白萬）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
53	友松遺跡	富山市友松字若木前・字大堀前・字田町前・新保前・字津上学跡地割・南中町字吉曾野前・住吉・新保	集落	古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）・近世
54	杉谷A・遺跡	富山市杉谷字上野山畠	墓	弥生（末）・古墳（初）
55	向野塩遺跡	富山市浪野塩	集落	古代（奈良・平安）・中世・近世
56	北押川II・遺跡	富山市北押川	集落	鐵文（又）
57	池多菱形跡	富山市池多	散布地	先王國・鐵文（初）・古代（奈良・平安）・中世・近世
58	御山山遺跡	富山市御山池多	集落・生產（製鉄）	先王國・鐵文（初）・古代（奈良・平安）
59	勝ヶ丘谷川II・遺跡	富山市勝ヶ丘谷川	集落	鐵文（中）・古代（奈良・平安）・中世（鎌倉・室町）
60	勝ヶ丘谷川遺跡	富山市勝ヶ丘谷川	集落	鐵文（前・中）・古代（奈良・平安）
61	勝ヶ丘谷川III・遺跡	富山市勝ヶ丘谷川	集落	鐵文（中）・古代（奈良・平安）
62	田中越跡	帰良附城尾町由中	城跡	中世（鎌倉・室町）

第1表 遺跡地名一覧

### 3 調査経緯

#### (1) 調査に至る経緯

##### A 調査の契機

岐阜県神岡鉱山から排出されたカドミニウムによる汚染田の復元工事は、該当地域において大きな懸案事項となってきた。このなかで昭和45年に農業用地の土壤汚染防止法が公布され、昭和49年・52年に、富山県は神通川流域の829.9haを農用地土壤汚染対策地域として指定した。その結果昭和54年から、県営公害防除特別土地改良事業による本格的な土壤復元が始まった。この事業により、婦中町町域でも1～3次地区、2期地区に分けて復元工事が進められることになった。事業は大型圃場による区画整理で、汚染対策地域と指定された農地に隣接する地域を併せて行われることとなった。復元工法は上乗せ客土法と埋め込み客土工法の二つの工法が採用された。両工法とも地下の埋蔵文化財に影響が及ぶことが予想されたため、個々の復元計画の内容に応じて発掘調査が必要な場合、事前協議のうえで発掘調査の計画を立案した。婦中町の第1次地区は12haで昭和55年に始まり昭和58年に完了、第2次地区は165haで昭和59年に始まり平成4年に完了、さらに第3次地区の工事が平成4年から平成16年までの予定で着手された。この第3次地区は、残余の329haが対象地域となった。そこでこれらの工事に伴い破壊される可能性の高い埋蔵文化財について、まず対象地内の分布調査を行うことにより、遺跡の有無・範囲・遭存状況の把握が試みられた。次いでこの分布調査結果に基づき、該当地域の埋蔵文化財の保存措置を講じるための処置が検討・協議され、さらに必要に応じて試掘調査、本格調査へと段階を踏んで進む運びとなった。

##### B 分布調査

分布調査は、婦中町教育委員会と富川県埋蔵文化財センターによって昭和53年から開始された。この調査は、平成5年からはさらに富山大学考古学研究室の協力を得て実施された。調査の結果、1次地区と2次地区では埋蔵文化財包蔵地は確認できなかった。続く3次地区(工期：平成4～16年、工事面積：329ha)、2期地区(上期：平成9～18年、面積：36ha)の調査は、対象地が広範囲であったこともあり、分布調査に6ヶ年を費やすことになった。とくに平成5～9年度の調査において、対象地域内に多数の埋蔵文化財が包蔵されていることが確認された。その実数は埋蔵文化財包蔵地33ヵ所、推定面積で約164.4haに及ぶことが最終的に判明した。

##### C 試掘調査

分布調査で存在が確認された埋蔵文化財包蔵地に対する試掘調査は、婦中町教育委員会と富山県教育委員会が担当した。試掘調査は、地表面を対象とした分布調査だけでは確認し難い遺跡の具体的な様相を把握するために実施する調査である。この試掘調査によって、はじめて地下に眠る遺跡の実態が明らかとなるわけだが、汚染田の復元工事が前提となるこの試掘調査では、とりわけ遭構面の平面的広がりと遭構深度の確認が重要となる。すなわち遭構面が工事施工面の影響深度よりも浅い場合は、客土の上乗せ盛土保存が可能となり、遺跡自体もまた現状のまま保存されることになる。逆に施工影響深度が遭構面よりも深い時や、汚染土を埋め込む深い溝や穴を掘削する時、遺跡は工事により破壊されることになる。この場合記録保存を前提とした緊急発掘調査(本格調査)が必要となる。埋

蔵文化財保護の立場からは、できるだけ現状で遺跡を保存するほうが望ましいが、この保存処置や工事の施工法等の変更や調整によって達成できる場合も多い。それだけに早急な試掘調査による遺跡の実態把握が必要となる。このような観点から、分布調査で確認された遺跡推定地のうち、工事対象となつた32箇所において試掘調査を実施した。

試掘調査は平成5年度から10年度にかけて延べ6ヶ月、7次にわたるものとなった。その結果、古墳時代から近世に至る11箇所の遺跡を確認した。とくに古代から近世にかけて形成された遺跡は、式内社である熊野神社と鞠坂神社周辺に大きく2つの遺跡群に分かれてみられる。このなかで中名V遺跡は平成6・8年度に、中名VI遺跡は平成8・9年度に、砂子田I遺跡は平成10年度に試掘調査を実施し、地下に遺構の存在と広がりを確認している。この試掘調査の結果、中名V遺跡は推定面積86,800m<sup>2</sup>を有する古代～近世に至る集落遺跡、中名VI遺跡は推定面積41,700m<sup>2</sup>を有する古代～近世の集落遺跡、砂子田I遺跡は推定面積147,600m<sup>2</sup>を有する古墳時代～中世の集落遺跡として周知され、次いで汚染田復元事業計画に伴いこれらの遺跡に対する本格調査が計画されることとなった。

## D 本調査

前述のように、汚染田復元工事の工法は、大きく埋め込み客土工法と、上乗せ客土工法があるが、工事による破壊が予想される遺跡については、事前に緊急発掘調査による記録保存が必要となる。このため試掘調査の結果をもとに、富山県耕地課、富山県農地林務事務所、婦中町農地課、婦中町教育委員会、富山県教育委員会文化課（現文化財課）、富山県埋蔵文化財センターからなる事前協議がなされ、計画田面高の調整による遺跡の最大限の保存措置が考慮・検討された。田面調整では、遺構・遺物包含層の高さに保護層10cmを上乗せした数値を工事掘削の限界深度とし、この深さに達しない範囲で施工可能なら現状保存、さらに深く掘削が及ぶものについては記録保存を目的とする緊急発掘調査（本調査）を実施することとなった。

このような経験を経て、平成6年度より巾名II遺跡において遺跡の本調査が開始された。この中で、財團法人富山県文化振興財團埋蔵文化財調査事務所では、平成7年度より県営公害防除特別土地改良事業関連事業として発掘調査を富山農地林務事務所から受託し、本調査を開始した。事業開始年度となる平成7年度には、婦中町エリヤでは清水島II遺跡、中名II遺跡を、平成8年度は中名II・V遺跡、持田I遺跡を、平成8年度～11年度には中名I・V・VI遺跡、道場I・II遺跡の調査を実施した。そして平成12年度の中名V遺跡、砂子田I遺跡の本調査をもって、財團が委託する婦中町内遺跡の本調査は全て終了した。このなかで中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡の本調査は、平成8年度の巾名V遺跡の調査を皮切りに、平成12年度の砂子田I遺跡の調査に至るまで、毎年継続的に発掘調査が実施された。

## （2） 調査経過

### A 調査方法

発掘調査の基準となるグリッドは、中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡とも国家座標を用い設定した。中名V・VI遺跡の場合は70,54067.00、900,00.00をX0Y0の基点とし、南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。砂子田I遺跡の場合は71,270.00、-400.00をX0Y0の基点とし、中名V・VI遺跡と同様に南北方向をX軸、東西方向をY軸とした。グリッドは2×2mの方画を遺物取り上げ等の基本区画とし、グリッド名は北東角のX軸・Y軸の座標名で呼称した。

発掘調査は表土・耕作土を機械で掘削・除去した。次いで遺構面に至る包含層掘削、遺構検出および個別の遺構掘削については、作業員の人力によった。遺構掘削の過程において、または完掘後、必要に応じて適宜遺構断面図、出土状況図などの図化作業、および写真撮影作業などを、調査補助員の協力を得て実施した。また調査区全域にまたがる遺構平面図の作成には、空中写真測量を利用した。

空中写真測量には、広域の対象地についてはヘリコプター実機の使用、小規模な面積での平面測量にはラジコン・ヘリコプターを使用した。その他調査方法の詳細については、すでに報告済みの他財團調査地などと基本的に共通する基準で実施している。

## B 調査の経過

調査は富山農地林務事務所と協議のもとに実施し、発掘調査中も進捗状況等によって、必要に応じて協議を継続した。現地で調査にあたる技術職員は原則2名を一班として班編成を行った。

本書に所収する中名V・VI遺跡、砂子田I遺跡の調査は、平成8年度から12年度（10年度を除く）にかけて実施している。

このうち平成8年度の中名V遺跡の調査（A1地区）は、調査掘削面積845m<sup>2</sup>、延べ面積1,690m<sup>2</sup>、調査期間は平成8年10月14日～12月17日、調査員2名1班の調査体制で実施した。

平成9年度中名V遺跡の調査（B5地区）は、調査掘削面積549m<sup>2</sup>、延べ面積549m<sup>2</sup>、調査期間は平成9年5月12日～7月4日、調査員2名の体制で実施した。

平成11年度調査のうち中名V遺跡の調査（D1～D3地区、E1・E2地区、F1～F3地区）は、調査掘削面積8,037m<sup>2</sup>、延べ面積19,945m<sup>2</sup>、調査期間は平成11年5月21日～12月15日、調査員は3班7人の体制で実施した。中名VI遺跡の調査（A～C地区）は、調査掘削面積4,139m<sup>2</sup>、延べ面積12,122m<sup>2</sup>、調査期間は平成11年6月1日～12月17日、調査員は2班5名の体制で実施した。

平成12年度調査のうち中名V遺跡の調査（D4地区）は、調査面積951m<sup>2</sup>、延べ面積2,853m<sup>2</sup>、調査期間は平成12年6月29日～9月29日、調査員は2名1班の体制で実施した。砂子田I遺跡の調査（A・B・D・E地区）では、調査面積2,965m<sup>2</sup>、延べ面積2,965m<sup>2</sup>、調査期間は平成12年7月17日～12月6日、調査員は2名1班の体制で実施した。

## C 調査体制

### 平成8年度(1997年度)

総括 桃野 真晃 埋蔵文化財調査事務所所長

谷井 保男 埋蔵文化財調査事務所副所長

庶務 宮成 真幸 埋蔵文化財調査事務所主事

岩崎 証意 埋蔵文化財調査事務所主事

調査総括 山本 正敏 埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長

調査員 横山 利美 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

間野 泰一 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

### 平成9年度(1998年度)

総括 桃野 真晃 埋蔵文化財調査事務所所長

谷井 保男 埋蔵文化財調査事務所副所長

庶務 宮成 真幸 埋蔵文化財調査事務所主任  
蒲田 和志 埋蔵文化財調査事務所主事  
調査総括 山本 正敏 埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長  
調査員 武田健次郎 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
吉田 裕子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成11年度(2000年度)

総括 桃野 真晃 埋蔵文化財調査事務所所長  
谷井 保男 埋蔵文化財調査事務所副所長  
上野 章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
庶務 宮成 真幸 埋蔵文化財調査事務所主任  
江本 裕一 埋蔵文化財調査事務所主事  
調査総括 池野 正男 埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長  
調査員 森 隆 埋蔵文化財調査事務所主任  
山元 祐人 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
武田健次郎 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
青山 晃 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
中村 亮仁 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
中野由紀子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
細辻 真澄 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
内田亜紀子 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
上田 尚美 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
新宅 輝久 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
戸谷 邦隆 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

平成12年度(2001年度)

総括 桃野 真晃 埋蔵文化財調査事務所所長  
肥田 啓章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
上野 章 埋蔵文化財調査事務所副所長  
庶務 竹中 慎一 埋蔵文化財調査事務所課長補佐  
江本 裕一 埋蔵文化財調査事務所主事  
調査総括 池野 正男 埋蔵文化財調査事務所調査第一課課長  
調査員 山元 祐人 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事  
青山 晃 埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

## (1) 中名V遺跡

地区	調査期間	日数	調査面積	担当者	検出遺物	出土遺物
A地区 中性上層	H11.10.11~12.6	5日	845m <sup>2</sup>	横山義典・岡野 五一 高木利勝・岡野 五一	縫合状焼物、縫穴焼物、石破片、土坑、 溝、臼洞	土器類、漆器類、青色土器、灰陶、灰燒物陶器、 珠球、八角形中板瓦、油壺、木製品等
	H11.11.9~12.17	7日	845m <sup>2</sup>			
B地区 中性上層	H9.5.12~7.4	34日	548m <sup>2</sup>	武田和次郎・山田裕子	馬頭埴輪、道路大埴輪、溝、柱穴	中性灰瓦、漆器、鐵中板瓦、木製品
C地区 近代地	H11.6.1~7.27	57日	2,262m <sup>2</sup>	武田和次郎・上田内義	獨立柱埴輪、溝、柱穴、方戸、臼洞等	土器類、灰窓器、珠球、鐵中板瓦、木製品
	H11.7.28~9.29	55日	2,262m <sup>2</sup>			
	H11.10.5~11.17	43日	2,262m <sup>2</sup>			
D地区 近代地	H11.6.1~7.27	57日	1,566m <sup>2</sup>	青山島・中野山紀子	立火伴堀、溝、土坑	二重器、灰窓器、B印盒
	H11.7.28~9.29	55日	1,566m <sup>2</sup>			
	H11.10.5~11.17	43日	1,566m <sup>2</sup>			
E地区 近代地	H11.6.23~8.1	45日	921m <sup>2</sup>	小川亮仁・鶴見真理・芦谷77場	獨立柱埴輪、土坑、石破片、縫合開口 溝、小列臼洞等溝、溝	十脚器、須彌足、珠球、八角、底座、灰陶瓦等燒物陶器、 梯形、方戸型、丁字、圓、圓等木製品、ワイヤー 口、被子佈
	H11.8.8~8.7	59日	921m <sup>2</sup>			
	H11.10.21~12.2	42日	921m <sup>2</sup>			
F地区 中性地	H12.6.26~8.2	35日	951m <sup>2</sup>	山元久人・青山周	壁穴石器、縫合性焼物、木棒破片、土 坑、十脚器、柱穴、溝、臼洞等	土器類、灰窓器、青色土器、珠球、八角、底座 等燒物陶器、中性陶器、木製品等
	H12.8.3~9.5	34日	951m <sup>2</sup>			
	H12.9.8~9.29	54日	951m <sup>2</sup>			
G地区 中性地	H11.5.21~8.31	101日	960m <sup>2</sup>	中野山紀・鶴見眞理・芦谷77場	獨立柱埴輪、石破片、土坑、溝	二重器皿、珠球、油中板瓦、方戸型
	H11.5.21~8.3	19日	512m <sup>2</sup>			
	H11.6.10~8.31	85日	512m <sup>2</sup>			
H地区 中性上層	H11.9.24~10.24	36日	816m <sup>2</sup>	鶴山義道	縫合性焼物、獨立柱埴輪、土坑、溝	土器類、十脚器、縫合性燒物陶器、油中板瓦、 伊万里、雄前、樂透等木製品、灰磚等石製品等
	H11.10.25~11.25	26日	816m <sup>2</sup>			
	H11.5.16~10.1	15日	71m <sup>2</sup>			
I地区 中性下層	H11.10.2~10.14	12日	71m <sup>2</sup>	横山義道	獨立柱埴輪、土坑、溝	土器類、珠球
	H11.11.22~12.15	23日	964m <sup>2</sup>			

## (2) 中名VI遺跡

地区	近世地	日数	面積	担当者	検出遺物	出土遺物
A地区 中性地	H11.6.1~7.27	57日	2,029m <sup>2</sup>	西尾・新宅輝久	壁穴焼物、獨立柱埴輪、木棒破片、石 破片、土坑、溝、臼洞等、円筒形土器等	土器類、漆器類、青色土器、中性陶器、 珠球、八角、圓、石器等石製品、木製品
	H11.7.28~9.30	59日	2,029m <sup>2</sup>			
	H11.10.1~12.17	78日	2,029m <sup>2</sup>			
B地区 中性地	H11.6.5~8.11	63日	1,817m <sup>2</sup>	山元久人・内田里子	壁穴石器、獨立性焼物、溝、土坑、臼、 臼、木棒破片、石破片等	土器類、灰窓器、青色土器、八角、底座、灰 燒物陶器、中性陶器、被子狀、灰陶、瓦筒 等、磨器、灰磚等石製品、木製品
	H11.8.19~9.20	43日	1,816m <sup>2</sup>			
	H11.10.1~12.8	69日	1,816m <sup>2</sup>			
C地区 中性上層	H11.6.8~8.31	55日	289m <sup>2</sup>	芦谷和樹	木棒破片、柱穴、溝	上海地區、珠球、八角、中性陶器、方戸型、 圓錐形、瓦質土器、木製品、漆器
	H11.9.1~9.10	10日	289m <sup>2</sup>			

## (3) 砂子田Ⅰ遺跡

地区	古代地	日数	面積	担当者	検出遺物	出土遺物
	H11.9.18~11.16	65日	121m <sup>2</sup>	山元久人・青山原	土坑、溝	漆器類、土器類、土球
	H11.7.17~12.1	138日	7,578m <sup>2</sup>	山元久人・青山原	獨立柱埴輪、土坑、溝	漆器類、土器類、青色土器、土球
	H11.10.3~11.7	39日	87m <sup>2</sup>	山元久人・青山原	土坑、溝、繩石	漆器類、土球類、油中板瓦、青釉土器等

## D 現地説明会

当財団では、発掘調査の成果を地元の方々をはじめ広く一般に周知していただきため、現地説明会を調査期間中に開催している。このうち本報告書に所収した発掘調査の現地説明会は、平成11年度に実施している。この現地説明会は主に中名V・VI遺跡を対象としたもので、開催日時は平成11年10月3日（日）午前10時から12時。当日は調査地区内に順路を設定し、各主要遺構の周辺には説明員を配置し、遺跡見学の際の便宜を図った。当口は、調査現場事務所前での発掘調査概略説明の後、調査現場である中名VI遺跡A地区へ見学者を誘導し、実際の調査現場を見学していただいた。見学順路の各所には説明員を配置し、現在掘削中である遺構や完掘済みの遺構について適宜見学者に説明した。また現場調査事務所においては、各調査地区出土の遺物を中心に、当年度に同時並行で調査中の中名V遺跡や道場I遺跡の出土遺物や、過年度の隣接調査地の出土遺物もあわせて展示した。また遺跡・遺構などの写真パネルの掲示もおこなった。同時に当年度調査地の現地説明会に至るまでの調査過程をスライド化して上映した。遺物展示では調査員による説明の他、ノート・パソコンのプレゼンテーション・ソフトを利用し、出土遺物の凡例解説をおこなった。当日の見学者参加人数は約70名を数えた。これ以外の調査地については、小規模調査地のため主調査地の現地説明会と調査期間が整合しなかったり、単独開催の困難な調査地だったりなどの理由により、特別な現地説明会は開催していない。

## E 整理の経過

現地での発掘調査作業段階から並行して土器・陶磁器等の出土遺物の洗浄・注記等の作業を実施した。現地発掘調査は通常年内（12月頃）までに終了するが、以後年度末にかけて埋蔵文化財調査事務所において当年度調査の基礎的な整理作業をおこなった。これらの諸作業には調査員による遺構カード、写真台帳、木製品・金属器製品・石製品台帳、遺構別出土遺物台帳等の作成がある。同時に概要作成に向けての出土遺物の選別・実測図作成作業や空中測量図面の最終校正もこの時期に実施した。なお当年度調査の一部成果については各年次の概要報告として年度末に刊行している。以上の作業は、後の報告書作成のための本格整理に先立つ基礎整理作業の段階となる。

次いで木製品、金属製品、石製品の遺物写真撮影・実測については業者委託となるため、これに先立ち各出土遺物の法量計測、メモ写真撮影、整理台帳等を整理作業員の補助のもとに作成した。木製品については大型品はコンテナに、小型製品はタッパーにて水没けの状態で、また製品によってはオートシーラーと専用フィルムを用いてパックし、実測や保存処理を委託するまでの仮収納とした。

報告書刊行に向けての本格的な整理は、平成12年3月に開始した。遺物の実測のうち土器・陶磁器については調査員がおこなった。木製品・金属製品・石製品については平成12・13年度は株式会社シン技術コンサルタントに、平成14・15年度は（株）バスコに委託し、校正作業のうち実測図の納品を受けた。遺構の実測図・写真・航空測量図はそれぞれ調査員が台帳を作成・整理し、遺構カードとともにパーソナルコンピューターを使用してデータ入力した。データ入力は人材派遣会社に委託し、これを整理作業員が補足した。遺物の写真撮影は業者委託（「寿福写房」と「楠華堂」の二社）し、4×5インチ判及び5×7インチ判で各々白黒・カラースライドフィルムで撮影し、それぞれ納品を受けた。自然科学分析は①種実遺体同定②骨類同定③昆虫同定④炭化材同定⑤微細物分析の各項目について、平成14・15年度にパリノ・サーベイ株式会社に分析の委託をおこなった。また漆器塗膜分析については漆器文化財科学研究所（平成14・15年度）に、鉄滓分析についてはJFEテクノリサーチ株式会社（平成14・15年度）に、出土木製品の樹種鑑定（主に中名V遺跡）と木製品・金属器製品の保存

処理については財團法人元興寺文化財研究所（平成14～16年度）に、中名VI遺跡・砂子田Ⅰ遺跡の出土木製品の樹種鑑定については株式会社古環境研究所にそれぞれ委託した。

最後に、平成15・16の兩年度に、本報告書の写真図版作成、遺構・遺物図版のレイアウト・トレークス作業、遺物・遺構一覧表の作成、および本文原稿の執筆・編集・校正等など、報告書刊行に向けての本格作業を実施した。これらの報告書作成事業は、中村亮仁を主担当に、整理作業員の協力を得て埋蔵文化財調査事務所において実施した。

## F 整理体制

### 平成12(2000)年度

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田 啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野 章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	竹中 慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	江本 裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	狩野 聰	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	酒井 重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第二課係長
	吉田 裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	野口 雅美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

### 平成13(2001)年度

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田 啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野 章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	竹中 慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	江本 裕一	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	酒井 重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	青山 裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	野口 雅美	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

### 平成14(2002)年度

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	肥田 啓章	埋蔵文化財調査事務所副所長
	上野 章	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	竹中 慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	広田 英貴	埋蔵文化財調査事務所主事
整理総括	酒井 重洋	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	森 隆	埋蔵文化財調査事務所主事主任
	青山 裕子	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

### 平成15(2003)年度

総括	桃野 真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	閑 清	埋蔵文化財調査事務所副所長

庶務	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長
	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	広田英貴	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	宮田進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	森 隆	埋蔵文化財調査事務所主事主任
	中村亮仁	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
平成16(2004)年度		
総括	桃野真晃	埋蔵文化財調査事務所所長
	関 清	埋蔵文化財調査事務所副所長
	盛田世津子	埋蔵文化財調査事務所副所長
庶務	竹中慎一	埋蔵文化財調査事務所課長補佐
	広田英貴	埋蔵文化財調査事務所主任
	岩田扶紀	埋蔵文化財調査事務所主任
整理総括	宮田進一	埋蔵文化財調査事務所調査第二課課長
担当	武田健次郎	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	中村亮仁	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事
	細辻真澄	埋蔵文化財調査事務所文化財保護主事

## 第Ⅱ章 中名V・VI遺跡の調査

### 1 調査地区の設定と基本層序

#### A 調査地区的設定

本書で報告する中名V・VI遺跡の発掘調査とは、平成8年度に調査した中名V遺跡A1地区、平成9年度に調査した中名V遺跡B5地区、平成11年度に調査した中名V遺跡D1地区・D2地区・D3地区・E1地区・E2地区・F1地区・F2地区・F3地区、中名VI遺跡A地区・B地区・C地区、平成12年度に調査した中名V遺跡D4地区の合計2遺跡14地区の発掘調査である。中名V遺跡の県道館・本郷・添島線より南側の地区であるA2（平成8年度調査）・C1・C2・C3地区（平成10年度調査）については既に報告されている。中名V遺跡と中名VI遺跡は互いに接しており、中名V遺跡の北側に中名VI遺跡が位置している。遺跡は神通川・井田川・山田川によって形成された複合局状地上に立地し、地形的みると大きく南東から北西に向かって緩やかに低くなっている。標高約19.0～22.0mを測る。当該地域は古くから幾筋もの旧河道によって、谷状地形が形成されているため、谷と谷の間の微高地に遺跡が営まれている。

今回報告する中名V・VI遺跡の調査は個々の調査区が小規模で、さらに遺跡全体に分散している地区が多い。そのような中で最もまとまりのある地区は道路建設部分に相当する中名V遺跡D1地区・D2地区・D4地区と中名VI遺跡A地区である。道路建設部分は中名V遺跡と中名VI遺跡のほぼ中央に設置された、長さ約380m、幅約20mの南北方向に長い調査地区で、南は県道館・本郷・添島線に接している。平面積は中名V遺跡D1地区が、2,282m<sup>2</sup>、D2地区が1,558m<sup>2</sup>、D4地区が951m<sup>2</sup>で、中名VI遺跡A地区が2,029m<sup>2</sup>で合計6,820m<sup>2</sup>を数える。発掘調査は道路建設部分について、建設された道路が半永久的に存在するという観点から、全面完掘をめざす発掘調査となった。なお、報告するにあたり調査地区が中名V遺跡と中名VI遺跡は互いに接しているものの、遺跡名が異なり、また遺構の中心となる古代面・中世面において、ちょうど両遺跡の境界付近に幅20mほどのある自然流路が流れていることから、遺構の分布も必然的に分かれる様相を呈している。このため、ここでは中名V遺跡D1地区・D2地区・D4地区と中名VI遺跡A地区を分けて報告する。また、中名V遺跡のD1地区・D2地区・D4地区的3地区については一つの地区にまとまるように報告する。

中名V遺跡A1地区は中名V遺跡の東端に位置し、調査区の西は県道井栗谷堀中線に面した地区である、水田復元に伴う面工事部分と、南側に延びる用水路取り付けに伴う細長い部分が調査区となる。平面積は845m<sup>2</sup>となる。

中名V遺跡B5地区は中名V遺跡の南東端に位置し、水田復元に伴う面工事部分に相当する調査区で、南側は現在の熊野神社の鳥居から直線的に延びる幅の狭い道路に接している。平面積は549m<sup>2</sup>である。

中名V遺跡D3地区は用水路取り付け部分で、幅約5m、長さ約200mの細長いトレンチ状の調査区である。南側は県道館・本郷・添島線に接し、北側は中名VI遺跡B地区に続いている。平面積は931m<sup>2</sup>である。

中名V遺跡F1地区は中名V遺跡の西側に位置し、用水路取り付け部分のため「L」字状に幅約2.5～5.5mのトレンチ状に設置された調査区で、平面積は816m<sup>2</sup>である。

中名V遺跡F2・3地区は中名V遺跡の西側に位置している調査区で、F3地区は水田復元に伴う

面工事部分である。F 2 地区はF 3 地区の南側に接する地区で、現況の用水を切り回すために設定された地区である。平面積はF 2 地区で74m<sup>2</sup>、F 3 地区で964m<sup>2</sup>である。調査では便宜的にF 2 地区とF 3 地区を分けて調査を実施したが、ここではまとめて報告する。

中名VI遺跡B・C地区については、B地区が川水路取り付けのために設定された調査区で、幅約5mの細長いトレンチ状の調査区で、C地区は水田復元に伴う面工事部分である。平面積はB地区で1,817m<sup>2</sup>、C地区で293m<sup>2</sup>を数える。B地区とC地区は中名VI遺跡の東端に位置し、互いの調査区は接しているため、一つの地区のように報告する。

## B 基本層序

ここでは層序について若干ふれておくことにするが、分散している調査区が多いことから必然的に層序についても相違が認められる。このため、層序の説明は各遺跡ごと、各地区ごとに記述していくことにする。

中名V遺跡A 1地区：A 1地区の大まかな層序は、I層が現耕作土、II層が暗オリーブ褐色粘土質シルトに灰黄色砂質シルトが混じる、IIIa層が浅黄色粘土質シルト、IIIb層が浅黄色粗砂、IV層が礫層となる。これらのうち、IIIa層・IIIb層・IIIc層は基盤層であり、これらを除くI～II層は、耕作土と遺構形成後の削平により、盛り土されたものである。このため、純粹な一次包含層は残存しておらず、包含層から出土した遺物は全て後世の開墾や掘削に伴うものである。また、盛り土された土層の直下に基盤のIII層があるため、遺構検出面は古代から近世までが同一面で確認されている。

中名V遺跡B 5地区：大きく3層に分層されている。I層が黄褐色粘土質シルト、II層が黄褐色粘土質シルト、III層が灰オリーブ色粘土質土で、I層が表土、II層が中・近世包含層、III層は基盤層で、中・近世の造構は基盤のIII層に掘り込むように形成されている。

中名V遺跡D 1地区・D 2地区・D 4地区：各地区によって若干相違がみられるものの、大きくI層が表土、II層が中世層、III層が古代層となり、他の地区に比べて後世の削平や攪乱などをあまり受けておらず、包含層や遺構面の残りが比較的良好である。詳しくみていくと Ia層は耕作土、Ib層は床土、IIa層が黒褐色砂質土、IIb層がオリーブ褐色砂質土、IIc層が略灰褐色砂質土、IIIa層が黒褐色砂質シルト、IIIb層がオリーブ褐色砂質土、IIIc層が黒褐色砂質シルト、IIId層が灰オリーブ砂質土、IIIe層が灰オリーブ砂質土、IIIf層が灰オリーブ砂、IV層が礫となる。これらのうち、近世造構面はIIa層の上面で検出されている。IIa・IIb層は中世包含層で、造構はIIc層に掘り込むように確認されている。このため、中世の遺構検出をこのIIc層の上面で実施した。ただし、このIIc層中にもわずかながら中世の遺物が含まれている。IIIa・IIIb層は遺物が含まれていない無遺物層であり、IIIc・IIId層が古代の遺物包含層となる。古代の遺構はその下のIIIe層に掘り込まれるように構築されており、遺構の中には基盤の礫層であるIV層にまで達するものもある。IIIe層中にもわずかに古代の遺物が含まれており、IIIf層になると遺物の出土が無くなる。

中名V遺跡D 3地区：南北に細長い調査区のため北端と南端では土質が異なるが、概ねI層がオリーブ黒色砂粘質土、II層が黒褐色砂粘質土、III層が黄灰色砂質土、IV層が黄褐色砂質シルトないしは砂疊となり、それぞれI層が現耕作土、II層が中世包含層、III層が古代包含層、IV層が基盤層となる。中・近世面はI層である現耕作土直下で検出されており、中世面は北側ではIII層が欠落しているため、基盤層であるIV層の黄褐色砂質シルトの上面で、南側は古代の包含層であるIII層上面で検出されている。古代面は基盤のIV層に掘り込むかたちで検出されている。

中名V遺跡E1・2地区：E1地区とE2地区は互いに近接している調査区であり、E1地区が西側、E2地区が東側に位置している。E1地区的層序はI層が現耕作土、II層が黒褐色シルト、IIIa層がオリーブ褐色砂質シルト、IIIb層が礫である。II層が遺物包含層、IIIa・IIIb層が基盤層である。ただし、II層である黒褐色シルト層は残りが良好でないため、調査区中央部から南東方向にかけて基盤の礫層が起伏している部分の遺構検出面については、疊層の上面となり、現耕作土直下で検出されている。E1地区は中・近世面の一面調査である。E2地区は基本的にはE1地区と同じだが、E1地区的I層とII層の間に淘汰の良い黄褐色シルト層が狭在し、約0.05～0.10mの厚さで堆積している。遺物などは含まれていないのだが、洪水によってもたらされた堆積物が、近世から近代にかけてと考えられる耕作関連遺構を被覆している。このため、E2地区では遺構検出面としては中・近世面と近世・近代面の二面である。なお、E2地区の近世の溜池状遺構は中・近世面で検出されているが、遺構の時期がやや新しく、また、切り合いが著しく重複するため、今回は中・近世面から分離して報告する。

中名V遺跡F1地区：F1地区はI層が耕作土、IIa層がオリーブ褐色シルト、IIb層が黄褐色砂質シルト、III層が黄褐色礫となる。IIa層が遺物包含層で、IIb層に遺構が掘り込まれている。調査では遺構検出をIIb層上面と、III層で実施したため、上下2面調査となっているが、下層で検出された遺構は上層遺構の時期とさほど変わらず、周壁断面でも遺構断面の切り込みがIIa層であるため、ここではまとめて報告する。なお、IIb層からもわずかではあるが遺物が出土している。検出された遺構は中世後半が主体である。

中名V遺跡F2・3地区：F2・3地区ではI層が表上、II層が暗灰色砂質土、IIIa層が黄褐色砂質土、IIIb層が砂礫となる。II層が遺物包含層であり、IIIa・IIIb層が基盤層となる。遺構検出は基盤層の違いにより、東側はIIIa層上面で実施されており、対する西側は基盤の砂礫層が起伏し、IIIa層の黄褐色砂質土層の堆積が認められないと、西側の遺構検出はIIIb層である砂礫層上面で実施されている。

中名VI遺跡A地区：大きく4層あり、I層は現耕作土、II層は旧耕作土、III層が遺物包含層、IV層が基盤層となる。詳しくみていくとIa層が現耕作土、Ib層が床土、IIa層が旧耕作土、IIb層が旧床上、IIIa層が灰色粘質シルト、IIIb層が暗オリーブ褐色粘質シルト、IVa層が黒褐色シルト、IVb層が暗灰黄色砂質シルトとなる。このうち、近世面はIIIa層上面で、農耕関連の遺構が検出されている。IIIa・IIIb層が中世・古代包含層で、遺構は中世・古代ともに基盤のIVa・IVb層に掘り込むように構築されている。ただし、IIIa・IIIb層が純粋な中世包含層や古代包含層に呼応するわけではなく、どちらの層からも中世と古代の遺物が混じり合って出土している。遺構検出はIV層上面で行なわれ、特に北側の遺構面は南側に比べて深度が浅いため、中世の遺構と古代の遺構が同一面で検出されている。

中名VI遺跡B・C地区：概ねD3地区の層序に準じているが、中世包含層が暗灰黄色から黒褐色を基調とし、2～3層に分層される。

## 2 中名V遺跡（遺構）

### （1） A1地区

A1地区（平成8年度調査）は中名V遺跡の東端に位置する県道井栗谷婦中線沿いに面した地区で、水田復元に伴ういびつな四角形部分と、南側に延びる用水取り付け部分の細長い部分が調査区となる。大きく古代と中・近世の2時期の集落遺構が検出されている。古代では調査区のやや東寄りから検出

されているが全体的に遺構は希薄である。それに比べ、中・近世になると調査区全域に掘建柱建物や土坑などの遺構が分布するようになる。こうしたことから、以下の遺構記述も中・近世の時期のものが主体となる。

### 1. 古代の遺構

古代の遺構検出面は後世の削平のため、上層の中世面と同一面で古代の遺構が確認された。そのため遺構は浅いものが多く、残りも良好でない。古代の遺構は調査区の東寄りに部分的に分布しており、広がりは判然としない。近隣調査区であるB5地区は、A1地区から30~40mほど真南にある調査区であるが古代の遺構や遺物は確認されていない。また、同じくE1・E2地区はA1地区から30~40mほど離れた南東に位置するのだが、ここでも古代の遺構は検出されていない。堅穴住居が1棟のみ単独で存在することも考え難いことから、集落は北側ないしは東側に広がるか、後世の削平を受けて消滅したなどが考えられる。古代の遺構としては堅穴住居1棟、土坑2基が検出されている。以下に簡単に記述していく。

#### 堅穴住居

SK01(図面004)：平面形態は方形を呈し、一辺2.33~2.97m、深さ0.06mを測る。主軸方位はN84°Eとなる。壁面の立ち上がりは緩やかである。東壁際にはやや窪んだ部分が2か所あり、堅穴住居に関連するものと考えられる。所堅穴の覆土は第1層：灰黄色砂質土層、第2層：浅黄色砂質土層、第3層：浅黄色砂質土層に黄灰色粘土層混入に分層される。カマドおよび付属施設は確認されない。遺物は須恵器(0001)、土師器(0002~0004)が出土している。

#### 土坑

SK01(図面004)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.6m、短径0.49m、深さ0.14mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色粘土層、第2層：黒褐色粘土層となる。出土遺物は土師器(0005~0008)がある。

SK02(図面004)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.51m、深さ0.1mを測る。上坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘土層のみの單層となる。出土遺物は土師器(0009~0011)、須恵器がある。

### 2. 中・近世の遺構

中・近世の遺構は古代に比べて多く、大小の区画溝が南北方向と東西方向に同一軸で切り合いながら走る。その区画溝の間に掘建柱建物4棟や井戸1基、大小の土坑などが構築されている。中世と近世遺構の分離は遺構出土の遺物が少ないため判然としない。遺物が多く出土しているSD02やSD19などの区画溝からは近世陶磁器類が若干混入しているため、おそらく中世から近世にかけて維持されていたとみられる。掘建柱建物については大きく2群あり、SE01を中心とするSB01・SB02と、調査区南東端のSB03・SB04がある。SB03・SB04は立て替えられており、区画溝などからSB03→SB04が考えられる。以下に、簡単ではあるが各遺構の記述をしていく。

#### 掘立柱建物

SB01-SP01~04・18(図面005・006・010)：建物の規模は、栄行1間(2.5m)、桁行2間(4.9m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN 4° Wで床面積は12.3m<sup>2</sup>。柱間距離は桁行2.2~2.7mである。柱穴形態は円~楕円形で径0.42~1.13m、深さ0.13~0.4mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘土層~暗灰黄色粘土層を基調とする。遺物はSP01で須恵器、土師器(0049)、SP02で須

恵器、SP18で土師器が出上している。

**SB02-SP05~09** (図面005・006) : 建物の規模は、梁行1間(2.0m)、桁行2間(4.1m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN12°Wで床面積は8.2m<sup>2</sup>。柱間距離は桁行2.0~2.05mである。柱穴形態は円~不整形で、径0.15m~0.36m、深さ0.05~0.15mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層~浅黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB03-SP10~14** (図面005・006) : 調査区の壁にかかるため、梁行2間以上(3.8m以上)、桁行4間以上(5.2m以上)の部分検出となる。建物の棟方向はN63°E、柱間距離は桁行1.5m以上である。柱穴形態は円~楕円形で径0.18~0.49m、深さ0.09~0.35mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層~黒褐色粘質土層を基調とする。遺物はSP10で土師器(0041~0045)、SP11で土師器、SP13で須恵器、土師器が出土している。

**SB04-SP13・15~17** (図面005・006) : 調査区の壁にかかるため、梁行3間以上(3.5m以上)、桁行2間以上(4.6m以上)の部分検出となる。建物の棟方向はN80°E、柱間距離は梁行1.4~1.7mである。柱穴形態は円~楕円形で、径0.21~0.68m、深さ0.1~0.4mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層~黄灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP13で須恵器、土師器、SP16で中世土師器が出土している。

#### 井戸

**SE01** (図面005・007) : 石組井戸である。井筒部は掘方の中心よりやや片よって設置される。内径は上面で0.5m、底面で0.32mと、やや角度を付けて石組みされているとみられるが、部分的な残存である為全体をうかがい得ない。底面には底抜きの曲物桶を設置する。掘方の平面形態は円形で、径0.84~0.98m、深さ0.64mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は黒褐色粘土層を基調とする6層から構成される。遺物としては土師器、木製品では箸(002~006)、曲物(007)、漆器(001)が出土している。

#### 土坑

**SK03** (図面007) : 平面形態は円形で、SD05・SD24を切り込む。規模は径1.32~1.36m、深さ0.14mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、珠洲がある。

**SK04** (図面007) : 平面形態は不整形で、SD09に切り込まれる。規模は長径0.71m以上、短径0.61m以上、深さ0.08mを測る。覆土は第1層:(2.5Y5/1)黄灰色粘土層、第2層:(2.5Y4/1)黄灰色粘土層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK05** (図面007) : 平面形態は楕円形で、規模は長径0.35m、短径0.32m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK06** (図面007) : 平面形態は円形で、規模は径0.19~0.22m、深さ0.12mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK07** (図面007) : 平面形態は楕円形で、規模は長径0.27m、短径0.17m、深さ0.09mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK08** (図面007) : 平面形態は不整形で、SD05・SK09・SK10・SD23・SD24を切り込む。規模は長径2.31m、短径2.02m、深さ0.32mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層:オーリーブ褐色粘土層、第2層:黒褐色粘土層、第3層:にぶい黄色粘土層に分層される。出土遺物は須恵器、土師器(0038・0039・0047)、珠洲(0160)がある。

**SK09** (図面007) : 平面形態は長楕円形で、SD06・SD23を切り込み、SK08に切り込まれる。規模は長径2.65m以上、短径1.97m、深さ0.4mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色粘土層を

基調とする。出土遺物は土師器、中国製白磁(0164)がある。

**SK10** (図面007)：平面形態は楕円形で、SK08に切り込まれる。規模は長径0.46m以上、短径0.34m、深さ0.39mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色粘土層となる。出土遺物は須恵器が混じり込む。

**SK11** (図面007)：平面形態は円形で、SK12・SK13を切り込む。規模は径1.5～1.56m、深さ0.34mを測る。覆土は第1層：(2.5Y6/1)黄灰色粘土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色粘土層となる。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

**SK12** (図面007)：平面形態は楕円形で、SK13を切り込み、SK11に切り込まれる。規模は長径1.41m、短径0.64m以上、深さ0.29mを測る。覆土は第1層：(2.5Y6/1)黄灰色粘土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色粘土層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中国製青磁がある。

**SK13** (図面007)：平面形態は長楕円形で、SK11・SK12に切り込まれる。規模は長径2.67m、短径0.81m以上、深さ0.39mを測る。覆土は黄灰色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SK14** (図面008)：平面形態は不整形で、SK17・SK18・SD25を切り込む。長径1.21m、短径1.11m、深さ0.23mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色粘土層、第3層：暗オリーブ褐色粘土層に分層される。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK15** (図面008)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.26m、短径0.19m、深さ0.09mを測る。覆土は第1層：灰黄褐色粘土層、第2層：暗灰黄色粘土層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK16** (図面008)：平面形態は隅丸長方形で、SK19・トレンチに切り込まれる。規模は長辺0.33m以上、短辺0.26m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK17** (図面008)：平面形態は不整形で、SK18・SD25を切り込み、SK14に切り込まれる。規模は長径0.9m、短径0.45m以上、深さ0.18mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK18** (図面008)：平面形態は不整形で、SK14・SK17・SK19・トレンチに切り込まれる。規模は長径2.04m以上、短径0.9m以上、深さ0.13mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK19** (図面008)：平面形態は不整形で、SK17・SK18を切り込み、SD25に切り込まれる。規模は長径1.23m以上、短径1.07m以上、深さ0.49mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、八尾がある。

**SK20** (図面008)：平面形態は円形で、SP16を切り込み、南側は調査区外に広がる。規模は径0.18～0.26m以上、深さ0.09mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器が混じり込む。

**SK21** (図面008)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.22m、短径0.16m、深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK22** (図面008)：平面形態は不整形で、SK23を切り込み、南側は調査区外に広がる。規模は長径0.9m、短径0.62m以上、深さ0.16mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は土師器(0037)、土鍤(0056)がある。

**SK23** (図面008)：平面形態は楕円形で、SK22に切り込まれる。規模は長径0.48m以上、短径0.34m

以上、深さ0.08mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色粘土層となる。山土遺物は土師器が混じり込む。

SK24（図面008）：平面形態は円形で、SD07に切り込まれる。規模は径1.14～1.15m、深さ0.34mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK25（図面008）：平面形態は円形で、規模は径0.18m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。山土遺物は土師器が混じり込む。

SK26（図面008）：平面形態は梢円形で、SK24内に位置し、規模は長径0.34m、短径0.26m、深さ0.31mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：灰色砂質土層となる。遺物には中世土師器がある。

SK27（図面008）：平面形態は隅丸長方形で、SP10を切り込み、SD10に切り込まれる。規模は長辺0.94m、短辺0.56m、深さ0.2mを測る。覆土は第1層：黄灰色粘土層、第2層：黒褐色粘土層となる。出土遺物は土鍤(0055)がある。

SK28（図面008）：平面形態は梢円形で、SK30に切られ、南西側は調査区外となる。規模は長径2.23m以上、短径0.77m以上、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

SK29（図面008）：平面形態は円形で、SP11に切り込まれる。規模は径0.21～0.31m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK30（図面008）：平面形態は梢円形で、SK28に切られる。長径0.33m以上、短径0.29m、深さ0.34mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色粘土層、第2層：(2.5Y4/2)暗灰黄色粘土層、第3層：黒褐色粘土層に分層される。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

SK31（図面009）：平面形態は梢円形で、SD10を切り込む。規模は長径2.62m、短径1.44m、深さ0.34mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0023)、珠洲(0165)、木製品では柱根(008)がある。

SK32（図面009）：平面形態は梢円形で、SD14を切り込む。規模は長径1.86m、短径1.49m、深さ0.18mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は灰黄色粘土層のみの単層となる。山土遺物は土師器、珠洲、中世土師器(0206)、越中瀬戸(0207～0210)、伊万里(0211)、近世陶磁器がある。

SK33（図面009）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.47m、短径0.36m、深さ0.07mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

SK34（図面009）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.34m、短径0.17m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK35（図面009）：平面形態は円形とみられ、北側は調査区外に広がる。規模は径0.45m～0.68m以上、深さ0.20mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK36（図面009）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.22m以上、短径0.14m以上、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK37（図面009）：平面形態は梢円形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.25m、短径0.89m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色粘土層、第2層：緑灰色粘土層となる。出土遺物は土師器がある。

SK38（図面009）：平面形態は円形で、SD15を切り込む。規模は径0.57～0.85m、深さ0.16mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘土層、第2層：(2.5Y6/1)黄灰色粘土層となる。出土遺物は土師

器が混じり込む。

SK39（図面009）：平面形態は楕円形で、SD15に切り込まれる。規模は長径0.23m以上、短径0.2m、深さ0.21mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

SK40（図面009）：平面形態は円形でSD15内に位置し、規模は径0.16m～0.17m、深さ0.21mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

SK41（図面009）：平面形態は楕円形で、SD15を切り込み、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.19m、短径0.49m以上、深さ0.51mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

SK42（図面009）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.23m、短径0.89m、深さ0.18mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

SK43（図面010）：平面形態は不整形で、SD17を切り込む。規模は長径1.56m、短径0.84m、深さ0.48mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色粘土層、第2層：黄褐色粘土層となる。出土遺物は越中漸戸（0221）、伊万里（0220）がある。

SK44（図面010）：平面形態は円形で、SD01を切り込む。規模は径1.34～1.55m以上、深さ0.26mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物はない。

SK45（図面010）：平面形態は楕円形で、SP02・SK46を切り込む。規模は長径0.76m以上、短径0.5m以上、深さ0.26mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：（2.5Y5/2）暗灰黄色粘土層、第2層：（2.5Y4/2）暗灰黄色粘土層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器（0149）がある。

SK46（図面010）：平面形態は不整形で、SP02・SK45に切り込まれる。規模は長径1.54m以上、短径1.5m以上、深さ0.22mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

SK47（図面010）：平面形態は楕円形で、SK48を切り込み、SP02に切り込まれる。規模は長径1.02m、短径0.35m以上、深さ0.14mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物はない。

SK48（図面010）：平面形態は楕円形で、SK47に切り込まれる。規模は長径0.58m、短径0.21m以上、深さ0.05mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK49（図面010）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.73m、短径0.32m、深さ0.23mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：オリーブ褐色粘土層、第2層：黒褐色粘土層となる。出土遺物は認められない。

SK50（図面010）：平面形態は隅丸長方形で、SP02に切り込まれる。規模は長辺0.64m以上、短辺0.48m、深さ0.36mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：（2.5Y5/2）：暗灰黄色粘土層、第2層：（2.5Y4/2）：暗灰黄色粘土層となる。出土遺物は認められない。

SK51（図面010）：平面形態は楕円形で、SD17を切り込む。規模は長径1.07m、短径0.62m、深さ0.41mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK52（図面010）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.76m、短径0.43m、深さ0.3mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK53（図面010）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.94m、短径0.44m、深さ0.38mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：（2.5Y4/1）黄灰色粘土層、第2層：（2.5Y5/1）黄灰色粘土層、第3層：黒色粘土層に分層される。出土遺物は須恵器が混じり込む。

- SK54** (図面010) : 平面形態は精円形で、SD19に切り込まれる。規模は長径0.78m以上、短径0.36m、深さ0.04mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。
- SK55** (図面010) : 平面形態は橢円形で、規模は長径0.32m、短径0.23m、深さ0.24mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。
- SK56** (図面010) : 平面形態は円形で、規模は径0.23~0.24m、深さ0.24mを測る。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。
- SK57** (図面010) : 平面形態は橢円形で、SD01を切り込む。規模は長径0.86m、短径0.65m、深さ0.09mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。遺物はない。
- SK58** (図面010) : 平面形態は橢円形で、SD19を切り込む。規模は長径0.7m、短径0.51m、深さ0.26mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色粘土層のみの単層となる。遺物は認められない。
- SK59** (図面010) : 平面形態は橢円形で、規模は長径0.9m、短径0.65m、深さ0.19mを測る。覆土は第1層:(2.5Y3/1)黒褐色粘土層、第2層:(2.5Y3/2)黒褐色粘土層となる。出土遺物は土師器、木製品では柱根(009)がある。
- SK60** (図面011) : 平面形態は隅丸方形で、規模は長辺1.09m、短辺0.87m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は中国製白磁(0162)、唐津、石製品では砥石がある。
- SK61** (図面011) : 平面形態は橢円形で、規模は長径1.24m、短径0.47m、深さ0.36mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は越中瀬戸(0216)がある。
- SK62** (図面011) : 平面形態は橢円形で、規模は長径1.01m、短径0.52m、深さ0.32mを測る。覆土は第1層:(2.5Y3/1)黒褐色粘土層、第2層:(2.5Y3/2)黒褐色粘土層、第3層:黄灰色粘土層に分層される。出土遺物は土師器がある。
- SK63** (図面011) : 平面形態は橢円形で、暗渠に切り込まれる。規模は長径0.55m、短径0.48m以上、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。
- SK64** (図面011) : 平面形態は円形で、SK65を切り込む。規模は径0.22m、深さ0.05mを測る。覆土は第1層:(2.5Y4/2)暗灰黄色粘土層、第2層:(2.5Y5/2)暗灰黄色粘土層となる。出土遺物はない。
- SK65** (図面011) : 平面形態は不整形で、SK64に切り込まれる。規模は長径0.67m以上、短径0.61m以上、深さ0.06mを測る。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。
- SK66** (図面011) : 平面形態は橢円形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径0.49以上、短径0.47m、深さ0.05mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(0050)がある。
- SK67** (図面011) : 平面形態は円形で、SD08を切り込む。規模は径0.63~0.65m、深さ0.04mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。
- SK68** (図面011) : 平面形態は隅丸長方形で、SD08を切り込む。規模は長辺0.78m、短辺0.52m、深さ0.01mを測る。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。
- SK69** (図面011) : 平面形態は不整形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径1.08m、短径0.77m以上、深さ0.44mを測る。覆土は第1層:(2.5Y6/1)黄灰色粘土層、第2層:(2.5Y5/1)黄灰色粘土層、第3層:(2.5Y4/1)黄灰色粘土層に分層される。出土遺物は土師器が混じり込む。
- SK70** (図面011) : 平面形態は不整形で、SD08・SD14に切り込まれる。規模は長径1.19m、短径

0.69m、深さ0.41mを測る。覆土は第1層：(2.5Y7/2)灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y6/2)灰黄色砂質土層となる。出土遺物は十師器(0046・0048)が混じり込む。

**SK71**（図面011）：平面形態は梢円形で、SD03に切り込まれる。規模は長径1.69m以上、短径0.67m以上、深さ0.06mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

**SK72**（図面011）：平面形態は梢円形で、SD22を切り込み、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.55m、短径0.76m、深さ0.32mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰黄色粘土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK73**（図面012）：大型の土坑で平面形態は不整形で、SD04に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。規模は長径6.35m以上、短径6.1m以上、深さ0.51mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰白色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器(0028～0032・0051)、珠洲がある。

## 溝

**SD01**（図面005・012）：調査区東側より調査区外北東側に延びる不整形の溝で一部途切れながら南北に長く延びる。南側用水取り付け部分までの確認できる長さは49.0m、最大幅7.5m、最大深0.97mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする13層から構成される。出土遺物は須恵器(0088・0089)、土師器(0090～0092・0121・0127)、中世土師器(0157・0158)、石製品では地輪(04)が認められる。

**SD02**（図面005・012）：西側調査区外から東西に延びる不整形の溝で東端はSD01に切られる。確認できる長さは26.5m、最大幅2.73m以上、最大深0.45m以上を測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、第1層：暗灰黄色粘土層 第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器(0012～0016・0054・0085・0086)、黒色土器(0017)、土師器(0018～0022・0053・0087・0125・0191)、中世土師器(0192～0196)、八尾(0199～0201)、珠洲(0202・0203)、中国製青磁、中国製白磁(0204)、越中瀬戸(0197・0198・0205)、越中丸山(0212)、唐津(0224)、木製品では折敷(010・011)、板状木製品(012～018・022・023・025～029・033)、櫛(019)、漆器(020)、杓子型木器(021)、角材(024)、石製品では砥石(02)などがある。

**SD03**（図面005・012）：SD02から南に分岐し南側調査区外へ延びる直線の溝で、一部東側に分岐しSD01に切られる。確認できる長さは8.15m、最大幅2.25m、最大深0.27を測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層：黄灰色粘土層、第2層：にぶい黄色砂質土層、第3層：暗灰黄色粘土層に分層される。bセクションでは灰黄色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0025・0026)、土師器(0035・0036)、中国製白磁(0176)、珠洲(0177)、八尾、越中瀬戸、木製品では漆器(030)、杓子型木器(031)、板状木製品(034)、棒状木製品(035)、石製品では砥石がある。

**SD04**（図面005・012）：東調査区外よりSD01に切られ円弧を描きながら南に延び用水取り付け部分でSD22に切られる。確認できる長さは17.2m、最大幅2.33m、最大深0.24mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層を基調とする7層からなる。出土遺物は須恵器(0024・0027)、土師器(0031)、越中瀬戸、近世陶磁器が認められる。

**SD05**（図面005・012）：北端SD12より続き併走するSD24に切られながら調査区外南側に延びる直線の溝である。途中SK08に切られる。確認できる長さは2.9m以上、最大幅2.25m、最大深0.57mを測る。断面形態は逆台形を呈し覆土は暗灰黄色粘土層の単層となる。出土遺物は土師器、黒色土器(0033)、珠洲(0188)、越中瀬戸が認められる。

**SD06** (図面005・012)：北端はSK09に切られ消失し、南側調査区外に延びる。確認できる長さは3.23m以上、最大幅0.77m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色粘土層の単層となる。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

**SD07** (図面005・012)：北端はSD26に切られ、南北にのび南側調査区外に続く直線の溝で、途中SD10・SD12・SD18を切る。確認できる長さは16.5m以上、最大幅は0.35m以上、最大深は0.26mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は第1層：暗オリーブ褐色粘土層、第2層：明緑灰色砂質土層とする。出土遺物は須恵器、土師器、珠洲(0215)、越中瀬戸(0214)、施釉陶器(0213)、近世陶磁器、木製品では漆器(032)が認められる。

**SD08** (図面005・012)：北端はSD02に切られ、南側調査区外へ南北に延びる直線の溝。確認できる長さは6.5m以上、最大幅1.35m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器(0040)、中世土師器、珠洲(0159・0161)が認められる。

**SD09** (図面005・012)：北端はトレンチに切られ消失し、南側調査区外へ南北に延びる直線の溝。確認できる長さは4.1m、最大幅1.51m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層の単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

**SD10** (図面005・013)：東側先端消失し、西側調査区外に延びる直線の溝で途中SD21を切る。確認できる長さは11.0m、最大幅2.56m、最大深0.39mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで黄灰色粘土層を基調とし、bセクションでは暗灰黄色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0093)、土師器(0094)、近世陶磁器が認められる。

**SD11** (図面005・013)：南北に延びる直線の小溝で両端とも消失している。長さは2.15m、最大幅0.45m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色粘土層の単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

**SD12** (図面005・013)：西側調査区外より東にのび南に折れSD14に併走する不整形の溝で途中SD07に南北に切られ、南端はSD02に切られSD05・SD24に続き調査区外に延びる。確認できる長さは13.0m、最大幅3.78m、最大深1.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで暗灰黄色粘土層を基調とし、bセクションでは上層部は暗灰黄色粘土層を基調とし、下層部で暗オリーブ灰色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0057～0063)、土師器(0064～0066)、中世土師器(0167～0171)、中国製青磁(0172)、中国製白磁、珠洲(0173・0174)、八尾(0175)、石製品では加工石(01)、自然石(03)が認められる。

**SD13** (図面005・013)：北側調査区外よりSD26を切りこみながら併走し西側調査区外へ延びる不整形の溝である。確認できる長さは11.0m、最大幅0.69m、最大深0.25mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層：黄灰色粘土層、第2層：黄灰色粘土層とし、bセクションでは黄褐色粘土層の単層とする。出土遺物は須恵器(0083・0084)、土師器、中世土師器(0155)が認められる。

**SD14** (図面005・013)：北端はSD19より分岐し南へのびSD02に切られ消失する。確認できる長さは7.5m、最大幅3.76m、最大深0.41mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層を基調とする。出土遺物は土師器(0098)、土鍤(0146)、中世土師器(0166)、中国製青磁、中国製白磁(0217)、珠洲(0218・0250)、八尾、越中瀬戸、伊万里(0219)、木製品では板状木製品(040・041)、棒状木製品(042)、箸(036～039)が認められる。

**SD15** (図面005・014)：西端はSK38に接合し消失。東西に延びる直線の溝で東端はSK41に切られる。

確認できる長さは3.8m、最大幅0.66m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形で覆土は黄灰色粘土層の単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SD16**（図面005・014）：北東端はSD17に切られ消失し、南西に延びる直線の溝で南西端は消失。確認できる長さは3.9m以上、最大幅0.28m、最大深0.17mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色粘土層の単層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SD17**（図面005・014）：北側調査区外から南に延びて、東側に折れるL字型の溝で東端はSD19に切られながら東側調査区に続く。確認できる長さは15.5m、最大幅2.44m、最大深0.42mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションではにぶい黄色粘土層を基調とし、bセクションでは灰黄色粘土層を基調とする。cセクションでは黄灰色粘土層を基調とし、dセクションでは暗灰黄色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0097)、黒色土器(0096)、土師器、珠洲(0189・0222)、八尾(0190)、唐津(0223)、石製品では石臼(06)が認められる。

**SD18**（図面005・014）：西側調査区外より東西に延びる不整形の溝で、東端はSD17に切られ消失する。途中SD07に切られる。確認できる長さは18.2m、最大幅2.6m、最大深0.59mを測る。断面形態U字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0076～0079)、土師器(0080)、中国製青磁、唐津、木製品では板状木製品(045)、円形板(043・044)が認められる。

**SD19**（図面005・014）：東西に延びる不整形の溝で、東端はSD17を切りながら調査区外に広がり、西側はSD12、SD18に切りこまれながら調査区外へ続く。途中SD14が南側に分岐する。確認できる長さは19.5m、最大幅2.4m、最大深0.43mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは暗灰黄色粘土層を基調とし、bセクションでは緑灰色粘土層を基調とする。cセクションでは黄灰色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0067～0069)、土師器(0070～0075)、中世土師器(0179～0182)、中国製青磁(0178)、珠洲(0183・0186)、八尾(0184・0185)、近世陶磁器、木製品では板状木製品(046～054)が認められる。

**SD20**（図面005・014）：南側用水取り付け部分の小溝で確認できる長さは0.09m以上、最大幅0.38m、最大深0.04mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SD21**（図面005・014）：北端はSD12に切られ、南端はSD10に切られる南北に延びる直線の溝。長さは2.25m以上、最大幅1.0m、最大深0.23mを測る。断面形態はU字形を呈し覆土は暗灰黄色粘土層の単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器(0150)が認められる。

**SD22**（図面005・014）：南側用水取り付け部分調査区に南北に延びる直線の溝で南端はSK72に切られ東西は調査区外に広がる。確認できる長さは18.0m、最大幅1.23m以上、最大深0.23mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器が認められる。

**SD23**（図面005・014）：北端はSD02に切られSD24と併走して南側調査区外に延びる直線の溝。途中SK08・SK09に切られる。確認できる長さは3.7m、最大幅0.53m、最大深0.31mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：黄灰色粘土層、第2層：黄灰色粘土層に浅黄色粘土層が混じる。第3層：灰白色砂質土層に分層される。出土遺物は須恵器、土師器(0095)が認められる。

**SD24**（図面005・014）：SD23に併走して南北に延びる直線の溝で南側調査区外に拡張する。途中SK08・SK09に切られる。確認できる長さは9.3m、最大幅0.86m、最大深0.52mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層の単層となる。出土遺物は須恵器(0081)、土師器、黒色土器(0082)、中世土師器(0156)、珠洲が認められる。

**SD25** (図面005・008)：北端はトレントに切られ南側調査区外に延びる直線の溝である。途中SK17に切られる。確認できる長さは3.85m、最大幅1.2m、最大深0.12mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黄灰色粘土層からなる。出土遺物は土師器(0052)、中世上師器(0151～0154)、珠洲が認められる。

**SD26** (図面005・013)：北側調査区外よりSD13に切られながら併走し、西側調査区外に延びる不整形の溝である。確認できる長さは12.5m、最大幅0.7m、最大深0.29mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは黄褐色粘質土層を基調とする。bセクションでは第1層：黄褐色粘土層、第2層：黄褐色粘土層に浅黄色砂質土層が混じる。出土遺物は須恵器、土師器、中世上師器、中国製白磁(0163)、珠洲(0187)、八尾が認められる。

## (2) B5地区

B5地区（平成9年度調査）は式内社の1つの候補に数えられる熊野神社から東へ約20mに位置する調査区で、中世末から近世にかけての集落を中心とした遺構が検出された。遺構は調査区の北側と南側にやまとままで分布し、掘立柱建物1棟、井戸1基、大小の土坑、溝に加えて、敷石された道路状遺構や鳥居などが確認されている。北側には掘立柱建物、井戸などの居住域が広がり、南側には道路状遺構や鳥居などや特異な遺構がみられる。SX01の道路状遺構は東西に延びており、西側にはちょうど現在の熊野神社があり同一軸である。このためSX01は神社へ続く旧参道で、SX02は鳥居と考えられる。時期はSX01より近世～近代の陶磁器類が出土していることから近世以降の所産である。そのSX01の下からは礎板を伴うSX03（鳥居）が検出されており、SX03は出土遺物から中世末の遺構と考えられる。つまり、神社への参道や鳥居が現位置からさほど変化なく、中世末までさかのばる可能性が指摘できるといえよう。以下に遺構の記述をしていく。

### 掘立柱建物

**SB01～SP01～SP03** (図面015・016)：北側が調査区外になるため建物の規模は不明だが、梁行2間(3.9m)の側柱建物である。建物の棟方向はN85°E、柱間距離は、梁行1.8～2.1mである。柱穴形態は円形で径0.24～0.48m、深さ0.07～0.1mを数える。柱穴内覆土は灰色粘土層を基調とする。遺物は認められない。

### 井戸

**SE01** (図面015・016)：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は0.8mで、ほぼ垂直に石組される。掘方の平面形態は円形で、径1.95～2.1m、深さ0.67mの規模を測る。横断面の形態は橈鉢型である。人頭大の自然石を螺旋状に積み上げ、構築されている。井筒内の覆土は第1層：(5Y4/1)灰色砂粘質土層、第2層：(5Y5/1)灰色砂粘質土層、第3層：オリーブ黒色粘土層に分層され、掘方の覆土は、第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：褐灰色砂質土層、第3層：黒褐色粘土層に分層される。出土遺物は漆器(063・064)がある。

### 土坑

**SK01** (図面016)：平面形態は隅丸長方形で、西側は調査区外に広がる。規模は長辺1.32m以上、短辺1.12m、深さ0.08mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの單層となる。出土遺物は中世上師器がある。

**SK02** (図面016)：平面形態は橈円形で、規模は長辺1.29m、短辺0.67m、深さ0.15mを測る。土坑内は礎が混入している。覆土は第1層：オリーブ黒色粘土層、第2層：灰色粘土層となる。出土遺物は

認められない。

**SK03**（図面016）：平面形態は隅丸方形で、SD04を切り西側は調査区外に広がる。規模は長辺1.04m以上、短辺1.0m、深さ0.48mを測る。土坑内は覆土は大小の礫が散在している。覆土は第1層：灰色粘土層、第2層：灰オリーブ色粘土層となる。出土遺物は板状木製品(067)がある。

**SK04**（図面017）：平面形態が隅丸方形の大型土坑で、SD03に切り込まれる。規模は長辺3.94m、短辺1.43m以上、深さ0.22mを測る。土坑内の中央には大小の礫が散在している。覆土は第1層：(5Y4/1)灰色砂粘質土層、第2層：(5Y5/1)灰色粘土層、第3層：(5Y6/1)灰色粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器がある。

**SK05**（図面017）：平面形態は長方形で、トレチに切り込まれる。規模は長辺1.69m、短辺0.6m以上、深さ0.1mを測る。覆土は灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物はない。

**SK06**（図面017）：平面形態は不整形で、規模は長辺1.54m、短辺1.17m、深さ0.12mを測る。覆土は灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK07**（図面018）：平面形態は円形で、規模は径0.4m、深さ0.3mを測る。覆土は第1層：(5Y4/1)灰色粘土層、第2層：(5Y5/1)灰色粘土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

#### 溝

**SD01**（図面015・017）：調査区北端から調査区外に延びる。確認できる長さは6.9m以上、最大幅0.6m以上、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層からなる。出土遺物は煙管(019)が認められる。

**SD02**（図面015・017）：北側調査区より南北に延びる直線の溝で南端はSX01に切られる。確認できる長さは20.1m以上、最大幅2.1m、最大深0.46mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層：灰色粘土層、第2層：オリーブ黒色粘土層とする。b、cセクションでは第1層：(5Y4/1)灰色粘土層、第2層：オリーブ黒色粘土層、第3層：(5Y5/1)灰色砂粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(0253～0256)、越前(0257)、木製品では木箱(066)、棒状木製品(068)、金属製品では銅錢(001・015・016)、石製品では石鉢(07)が認められる。

**SD03**（図面015・017）：SD02に併走して南北に延びる直線の溝で、北端はSD01に切られる。南端は消失し、途中SK04を切る。確認できる長さは14.0m以上、最大幅0.9m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：灰色砂粘質土層、第2層：灰色粘土層からなる。出土遺物は認められない。

**SD04**（図面015・017）：南西侧調査区に広がり西側調査区外、南側調査区外に延びている。確認できる長さは9.1m以上、最大幅4.1m以上、最大深0.35mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器(0269)、株洲、越中瀬戸(0270)がある。

#### その他の遺構

**SX01**（図面015・018）：参道と推定される道路状遺構である。平面形態は不整形を呈し、東西に調査区外へ続く延長約18m、幅3.53mを測り、深さ約0.4mを溝状に掘り下げた後0.1～0.2cm程の円礫が詰められている。覆土は灰色砂粘質土層を基調とする4層から構成される。遺物は須恵器、土師器、中世土師器(0258・0259)、中国製白磁、中国製青磁、株洲(0268)、八尾、越中瀬戸(0260～0263)、伊万里(0264)、越中丸山(0265・0266)、唐津、土製品五徳(0267)、金属製品では銅錢(012)、石製品では石鉢、炉壁が出土している。

**SX02～SP04～SP05**（図面015・018）：SX02は配置やピットの規模からSX01に伴う鳥居と考えられる遺構である。SP04・SP05は径0.97～1.1m、深さ0.3～0.4mの円形のピットで、ピットの間の距離は4.6mを測る。SP04の覆土は灰色砂粘質土層のみの単層となる。SP05の覆土は第1層：灰色砂粘質土層、第2層：灰色粘土層となる。出土遺物は認められない。

**SX03**（図面015・018）：SX01やSX02より古い時期の鳥居と考えられる遺構である。平面形態は隅丸長方形で、長辺7.65m、短辺2.2m、深さ0.9mを測る。北側端と南側端に円形状の一段深くなる部分があり、礎板が据えられている。又、北側の礎板と南側の礎板を渡すように丸太が配置されている。礎板と礎板の間は、4.8mであり、参道の幅も4.8m以内と考えられる。SX01には伴わないものの、そのSX01より前段階の参道に伴うと考えられる。覆土は灰色砂粘質土層を基調とする6層から構成される。遺物は中世土器(0252)、珠洲、越中瀬戸、土師器、木製品では漆器(061・062)、柱根(065)、角材(069)、礎板(070・071)、板状木製品(072)、柱材が出土している。

### （3）D1・D2・D4地区

D1・D2・D4地区（D1・D2地区は平成11年度、D4地区は平成12年度調査）は中名V遺跡のほぼ中央に位置し、道路取り付け部分のため幅約20m、長さ約290mの南北に細長い調査区である。北はX245で便宜的に中名VI遺跡A地区と接し、南は県道館・本郷・添島線を挟んでB4地区（平成9年度調査）となる。調査はD1・D2地区が平成11年度、D4地区が平成12年度調査と2カ年にわたるが、それぞれの地区が互いに接しているため、道路部分については中名V遺跡の3地区をまとめて記述していく。大きく古代、中世、近世の3時期の遺構が検出されている。ただし、集落として検出された遺構は古代と中世に限られ、近世の遺構はX225～270区（D1地区から中名VI遺跡A地区にかけての範囲）に農業関連の遺構が検出されたにすぎない。古代の遺構はD4地区とD2地区を中心に堅穴住居や掘立柱建物が分布し、中世の遺構はD1地区とD4地区を中心に遺構が検出されている。したがって、以下の遺構の記述は古代と中世が中心となる。

#### 1. 古代の遺構

古代の集落遺構は調査区南側で検出されている。調査区北側には自然流路のSD07（中名VI遺跡A地区的SD02同一）が北流し、中名VI遺跡A地区的古代の集落遺構とはこの自然流路を挟み二分されたかたちで分布している。古代の遺構検出面は黒褐色粘土を基調とする古代包含層の残りが良好であり、遺構自体の遺存も比較的良好であった。検出された遺構には堅穴住居4棟、掘立柱建物3棟、大小の土坑、溝、自然流路などがある。堅穴住居や掘立柱建物については相互に重複や切り合い関係がみられ、数時期に及ぶ遺構変遷が想定される。以下に古代の遺構について記述していく。

##### 堅穴住居

**SI01**（図面022・031）：平面形態は長方形を呈し、長辺4.14m、短辺2.28m、深さ0.16mを測る。床面積は9.4m<sup>2</sup>、主軸方位はN82°Wとなる。壁面の立ち上がりは緩やかな傾斜を持つ。堅穴の覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黒色砂質土層に分層される。カマドは西側のやや南よりの位置に構築されている。カマドの規模は幅0.67mで、主軸長は1.05m、煙道は堅穴外へ1.0m突出し、N56°Wの方向に伸びる。一部に天井部と袖が残存している。柱穴等は確認されていない。カマドの覆土は黒褐色砂質土層を基調とする9層から構成される。遺物は須恵器、土師器(0285～0299・0302～0308)、黒色土器(0300・0301)が出土している。

**SI02** (図面024・031)：掘り込みが浅い為、平面形態は不整形を呈す。長辺4.9m、短辺3.55m、深さ0.11mを測る。床面積15.6m<sup>2</sup>、主軸方位はN82° Eとなる。壁面の立ち上がりは緩やかである。堅穴の覆土は灰色砂質土層を基調とする6層に分層される。床面には焼土や炭化物が見られるが、カマドは確認されておらず、柱穴も伴わない。遺物は須恵器(0309)、土師器(0310～0312)、石製品で磨石(13)がある。

**SI03** (図面024・032)：平面形態は長方形を呈し、長辺4.35m、短辺3.24m、深さ0.2mを測る。床面積は14.3m<sup>2</sup>、主軸方位はN 1° Wとなる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。堅穴の覆土は灰オーリーブ色砂質土層となる。カマドは東壁の南北2カ所に構築されている。南側は比較的残りの良いカマドで袖石と思われる長径0.2mほどの円礫が2個残存する。袖間の距離は0.2m程度である。南カマドの覆土は灰オーリーブ色砂質土層を基調とする4層から構成される。北側のカマドは燃焼部の痕跡と思われる焼土が残るが袖材は確認できない。煙道は堅穴外へ0.5m突出している。北側のカマド→南側のカマドへと造り替えられたと考えられる。北カマドの覆土は第1層：(5Y5/1)灰色砂質土層、第2層：(5Y6/1)灰色砂質土層、第3層：灰オーリーブ色砂質土層に分層される。柱穴は伴わない。遺物は須恵器(0313・0314)、土師器(0315～0318)、土鍤(0319)、石製品では砥石(11)が出土している。

**SI04** (図面024・032)：SI03に切られる。平面形態は長方形を呈し、長辺3.76m、短辺2.95m以上、深さ0.18mを測る。床面積は10.8m<sup>2</sup>、主軸方位はN85° Eとなる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。堅穴の覆土は第1層：灰色砂質土層、第2層：灰黄褐色砂質土層となる。カマドが存在したかは不明だが、床面に焼土や炭化物が確認される。遺物は須恵器、土師器(0320)、棒状石製品(12)が出土している。柱穴であるSP01とSP02を伴う。

#### 据立柱建物

**SB01～SP03～SP09** (図面024・033・034・036)：建物の規模は、梁行1間(5.3m)、桁行3間(6.4m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向は南北棟のN 3° Wで床面積は34.5m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.9～2.15mである。柱穴形態は円～不整形で径0.45～1.08m、深さ0.2～0.35mを数える。柱穴内覆土は灰色砂質土層～灰オーリーブ色砂質土層を基調とする。遺物はSP06・SP09で土師器が、SP09から棒状金属製品(025)がそれぞれ出土している。

**SB02～SP10～SP19** (図面024・033・034)：建物の規模は、梁行2間(4.3m)、桁行3間(6.6m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向は南北棟のN 0° Eで床面積は28.4m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.9～2.7m、桁行1.9～2.6mである。柱穴形態は円～不整形で径0.5～1.55m、深さ0.25～0.57mを数える。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物はSP15から土師器(0372)、SP16から土師器(0370)、SP18から須恵器(0357)、土師器(0358)、SP19から須恵器(0359)、SP12・13・14・17から土師器がそれぞれ出土している。

**SB03～SP10～SP11・SP20～SP26** (図面024・033・034・036)：SB02に先行する据立柱建物で建物の規模は、梁行2間(4.6～4.8m)、桁行3間(6.2～6.5m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向は東西棟のN87° Eで床面積は31.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行2.0～2.2m、桁行2.1～2.6mである。柱穴形態は円～不整形で径0.6～1.09m、深さ0.2～0.35mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～灰色砂質土層を基調とする。遺物はSP21から須恵器(0360)、SP20・22から土師器、SP22・25・26から須恵器がそれぞれ出土している。

#### 土坑

**SK01** (図面035)：平面形態は不整形で、SK02に切られ、東側は上層遺構の溝に切り込まれる。規模

は長径3.01m、短径1.66m、深さ0.14mを測る。土坑の南西壁際に円礎が崩れた状態で出土し、その付近から炭化物や土師器などが出土している。カマドや煙道などが確認されない為、土坑として報告するが堅穴住居の可能性がある。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は土師器(0341～0353)がある。

**SK02**（図面035）：平面形態は不整形で、SK01に切られ、東側は上層遺構の溝に切り込まれる。規模は径0.61m、深さ0.09mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK03**（図面035）：平面形態は円形で、規模は径0.56～0.75m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(0369)がある。

**SK04**（図面035）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.74m、短径0.59m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK05**（図面035）：平面形態は円形で、規模は径0.31～0.33m、深さ0.07mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK06**（図面035）：SK07と接する土坑である。平面形態は不整形で、南側は消失している。規模は長径0.84m以上、短径0.46m、深さ0.09mを測る。覆土は黄褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK07**（図面035）：平面形態は不整形で、南側は消失している。規模は長径0.57m以上、短径0.27m、深さ0.14mを測る。覆土は黄褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK08**（図面035）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.66m、短径0.46m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK09**（図面035）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.5m、短径0.89m、深さ0.15mを測る。土坑内は礎が混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK10**（図面035）：平面形態は楕円形で、SI01を切り込む。規模は長径0.64m、短径0.52m、深さ0.14mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK11**（図面035）：平面形態は円形で、規模は径1.31～1.32m、深さ0.55mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ褐色砂質土層、第2層：灰色砂質土層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK12**（図面035）：平面形態は不整形で、規模は長径3.11m、短径0.32m、深さ0.09mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK13**（図面035）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.69m、短径0.63m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK14**（図面035）：平面形態は円形で、規模は径0.24m、深さ0.03mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK15**（図面036）：平面形態は不整形で、SD05を切り込む。規模は長径4.01m、短径2.79m、深さ0.14mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。深さは深いが出土遺物が多く、土器滴まりと考えられる。出土遺物は須恵器(0335～0340)、土師器(0354)、金属製品では刀子(026)がある。

**SK16**（図面036）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.37m、短径0.27m、深さ0.03mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK17**（図面036）：平面形態は円形で、規模は径0.47m、深さ0.08mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK18** (図面036)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.31m、短径0.22m、深さ0.17mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK19** (図面036)：平面形態は不整形で、規模は長径1.07m、短径0.42m、深さ0.1mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK20** (図面036)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.92m、短径0.66m、深さ0.12mを測る。土坑内は円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK21** (図面036)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.97m、短径0.83m、深さ0.16mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK22** (図面036)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.89m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK23** (図面036)：平面形態は長楕円形で、SP06・SP24に切り込まれる。SI04の西側に沿う様に位置し、関連性がうかがえる。長径4.21m、短径0.81m、深さ0.12mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK24** (図面037)：平面形態は長楕円形で、SK25を切り込む。長径3.25m、短径1.63m、深さ0.43mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、金属製品では刀子(024)がある。

**SK25** (図面037)：平面形態は不整形で、SK24・SK26～SK28・SP11・SP12・SP16・SP19・SP20に切り込まれる。規模は長径6.52m、短径4.56m、深さ0.21mを測る。土坑内は小礫が混入している。堅穴住居の可能性は否定出来ないが、床面は基盤の礫で凹凸が著しく、貼床や硬化面も無い事から、ここでは土坑として報告しておく。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物は東側から多く出土しており、須恵器(0321～0325)、土師器(0326～0334)、石製品では砥石がある。

**SK26** (図面037)：平面形態は楕円形で、SK25を切り規模は長径0.62m、短径0.57m、深さ0.25mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(0355)、土師器(0356)がある。

**SK27** (図面037)：平面形態は楕円形で、SK25を切り規模は長径0.71m、短径0.58m、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK28** (図面037)：平面形態は楕円形で、SK25を切り込む。規模は長径0.87m、短径0.66m、深さ0.13mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK29** (図面038)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.54m、短径0.3m、深さ0.29mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK30** (図面038)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.8m、短径0.42m、深さ0.09mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK31** (図面038)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.06m、短径0.45m、深さ0.2mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(5Y4/1)灰色砂質土層、第2層：(5Y5/1)灰色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK32** (図面038)：平面形態は楕円形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径1.07m以上、短径0.69m、深さ0.3mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK33** (図面038)：平面形態は不整形で、SP14・SK35を切り込む。規模は長径2.17m、短径1.37m、深さ0.05mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK34** (図面038)：平面形態は円形で、規模は径0.38～0.4m、深さ0.12mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK35** (図面038)：平面形態は不整形で、SK33に切り込まれる。規模は長径1.08m、短径0.7m、深さ0.14mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK36** (図面038)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.45m、短径0.88m、深さ0.13mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK37** (図面038)：平面形態は不整形で、規模は長径4.45m、短径1.16m、深さ0.15mを測る。土坑内は小礫が混入している。SI03の南壁に沿う様に位置し、関連性がうかがえる。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK38** (図面038)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.63m、短径0.39m、深さ0.07mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK39** (図面038)：平面形態は不整形で、SK40に接する土坑で南側は調査区外に広がる。規模は長径1.38m、短径0.12m以上、深さ0.03mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする4層からなる。出土遺物には炭化材が認められる。

**SK40** (図面038)：平面形態は不整形で、SK39に接する土坑で南側は調査区外に広がる。規模は長径0.73m、短径0.35m以上、深さ0.03mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質上層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質下層となる。出土遺物は炭化材が認められる。

**SK41** (図面039)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.81m、短径0.47m、深さ0.06mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK42** (図面039)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.58m、短径0.41m、深さ0.11mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK43** (図面039)：平面形態は不整形で、規模は長径0.54m、短径0.48m、深さ0.08mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰オリーブ色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK44** (図面039)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.8m、短径0.44m、深さ0.07mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK98** (図面031)：平面形態は円形で、径0.36～0.42m、深さ0.13mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK99** (図面031)：平面形態は円形で、径0.24～0.3m、深さ0.17mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK100** (図面032)：平面形態は梢円形で、長径0.48m、短径0.35m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK101** (図面032)：平面形態は不整形で、長径0.81m、短径0.53m、深さ0.06mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK102** (図面032)：平面形態は梢円形で、長径0.52m、短径0.2m、深さ0.11mを測る。覆土は灰オリーブ色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK103** (図面032)：平面形態は梢円形で、長径0.45m、短径0.4m、深さ0.06mを測る。覆土は灰オリーブ色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK104** (図面032)：平面形態は円形で、径0.19～0.23m、深さ0.06mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 柱穴等

**SP01** (図面032)：SP01・02はSI04に伴う柱穴である。平面形態は円形で、径0.35～0.38m、深さ0.08mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SP02** (図面032)：平面形態は円形で、径0.38～0.45m、深さ0.05mを測る。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 溝・自然流路

**SD01** (図面020・026・039)：調査区東西に広がり調査区外に延びる古代から中世にかけて流れている自然流路である。確認できる長さは22.0m以上、最大幅26.0m、最大深0.2mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂層を基調とする。出土遺物は須恵器(0395～0397)、中世土師器(0527～0532・0558～0564・0566～0570)、中国製青磁(0557)、中国製白磁(0565)、珠洲(0571～0575)、八尾、唐津、瓦質土器がみられ、木製品では板状木製品(088)、棒状木製品(095)、箸(089～094)が認められる。

**SD02** (図面022・039)：北西端が消失し東側調査区外に直線的に延びる不整形の溝で、長さ4.92m以上、最大幅0.51m、最大深0.04mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD03** (図面024・039)：不整形の溝で西端は開放している。長さ2.7m以上、最大幅0.8m、最大深0.16mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土はa、bセクションとも灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SD04** (図面024・039)：SD03の北側に東西に延びる不整形の溝で西端は開放し東端は消失している。長さ2.22m以上、最大幅0.28m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は灰色砂質土層である。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SD05** (図面024・039)：SD06に先行し、北西から東に広がり調査区外に延びる不整形の溝である。確認できる長さは23.6m以上、最大幅6.4m以上、最大深2.01mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：にぶい黄褐色砂質土層、第2層：にぶい黄褐色砂層からなる。出土遺物は須恵器、土師器(0371)が認められる。

**SD06** (図面024・039)：調査区南隅で東西に広がる自然流路である。北側でSD18に切られる。確認できる長さは19.5m以上、最大幅12.2m以上、最大深1.06mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0361～0363・0365)、土師器(0364)が認められ、木製品では鏹(111)が認められる。

**SD07** (図面025・039)：調査区を南から北に蛇行しながら流れる古代から中世にかけて流れている自然流路（中名VI遺跡A地区SD02と同一）である。確認できる長さは49.7m（中名VI遺跡A地区を含めると80.0m）、最大幅16.3m、最大深0.94mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0374～0398)、土師器(0394)、中世土師器(0533～0546)、中国製青磁(0547・0548)、中国製白磁(0549)、瀬戸美濃(0550・0551・0555)、珠洲(0552・0554)、八尾(0553)、施釉陶器、土製品が認められ、木製品では板状木製品(079・080)、板状木製品(081)、漆器

(082・083)、杓子型木器(084・085)、箸(097・098・101)が認められる。

#### その他の遺構

**SX01** (図面024・039) : SD06内の南東部に位置している。北に向かって地形が緩く下がり、その傾斜部に自然石が東西方向に帶状に分布する。長さ約7.0m、深さ1.13mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黒褐色粘土層に分層される。遺物は須恵器(0366～0368)が出土している。

## 2. 中世の遺構

中世の集落遺構は古代から中世にかけて流れていたSD01を境界として、調査区北側と南側で検出されている。また、中名VI遺跡A地区の中世の集落遺構群とは、古代と同様にSD07（中名VI遺跡A地区のSD02同一）で分離されている。つまり、中世の集落遺構はこれら自然流路に挟まれたやや微高地帯に分布していることになる。中世の遺構検出面は黒褐色～暗灰黄色シルトを基調とする中世包含層を掘削した段階で実施し、古代包含層に掘り込むかたちで構築されている。検出された遺構には掘立柱建物3棟、井戸3基、大小の土坑、溝、自然流路などがある。遺構密度は中名VI遺跡A地区と比べるとさほど高くはないものの、部分的には相互に重複や切り合い関係がみられる。特に掘立柱建物については少なくとも2時期に及ぶ遺構変遷が想定される。以下に中世の遺構について記述していく。

#### 掘立柱建物

**SB04～SP27～SP40** (図面025・040・041) : 建物の規模は、梁行2間(4.8m)、桁行4間(7.8m)の総柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN 9° Eで床面積は37.4m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行2.3～2.5m、桁行1.8～2.05mである。柱穴形態は円～不整形で径0.25～0.51m、深さ0.1～0.33mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘土層を基調とする。遺物はSP34で中世土器(0506)、SP35で中国製白磁(0513)、SP37で瀬戸美濃(0518)、SP30・33・39から中世土器が出土している。

**SB05～SP41～SP45** (図面026・040・041) : 西側が調査区外になるため建物の規模は不明だが、梁行2間以上(2.8m以上)、桁行4間以上(9.5m以上)の側柱建物と推測される。建物の棟方向はN30° E、柱間距離は、桁行2.7～3.3mである。柱穴形態は円～不整形で径0.45～0.75m、深さ0.25～0.43mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物はSP43で須恵器(0373)、中世土器(0508)、珠洲(0504)、八尾が出土している。

**SB06～SP46～SP48** (図面026・040・041) : 建物の規模は、梁行2間以上(3.9m以上)、桁行2間以上(4.0m以上)の側柱建物で、西側が調査区外となる。建物の棟方向はN 2° E。柱穴形態は円～不整形で径0.5～0.93m、深さ0.35～0.5mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

#### 井戸

**SE01** (図面026・041) : 石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.68m、底面で0.38mで、やや角度をつけて石組される。底面には底抜きの曲物を設置する。掘方の平面形態は円形で、径1.08～1.22m、深さ0.82mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒内覆土は黄灰色粘土層を基調とし、掘方の覆土は第1層：黄灰色粘土層、第2層：灰色粘土層となる。遺物としては中世土器、珠洲、木製品では曲物(077・078)が出土している。

**SE02** (図面030・041) : 木枠組井戸である。掘方の平面形態は円形で、径1.99～2.15m、深さ0.97mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.78～0.89m、底面からの残存高は0.43mを測る。木枠のみが遺存している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質

土層、第2層：(5Y3/2)オリーブ黒色砂質土層、第3層：(5Y3/1)オリーブ黒色砂質土層に分層される。遺物は須恵器、土師器、木製品では井戸杵(113～116・118～122)、箸(117)などが出土する。

SE03～SP40～SP52（図面030・042）：木枠組井戸である。井戸枠や縦板が崩れた状態で検出された。掘方の平面形態は不整形で、長径1.61m、短径1.45m、深さ0.95mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の残存高は0.44mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。遺物は土師器、中世土師器、珠洲(0519)、木製品では井戸杵(123～137)が出土する。SP56～SP59は井戸に伴う柱穴である。上屋の存在が推定される。柱穴形態は円～円形で、径0.21～0.38m、深さ0.05～0.14mを測る。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。柱穴からの出土遺物は認められない。

#### 土坑

SK45（図面042）：平面形態は梢円形で、規模は長径1.09m、短径0.64m、深さ0.21mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲が認められる。

SK46（図面042）：平面形態は不整形で、長径0.92m、短径0.67m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘質土層、第2層：黒色炭化物、第3層：(2.5Y4/1)黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、八尾(0515)がある。

SK47（図面042）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.55m、短径0.29m、深さ0.21mを測る。覆土は灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃(0517)が認められる。

SK48（図面042）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.96m、短径0.5m、深さ0.07mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK49（図面042）：平面形態は梢円形で、SP31に切り込まれる。規模は長径0.92m、短径0.74m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色砂層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK50（図面042）：平面形態は円形で、規模は径0.89～0.99m、深さ0.13mを測る。覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：黄灰色砂層となる。出土遺物は中世土師器(0499)、八尾がある。

SK51（図面042）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.61m、短径0.43m、深さ0.07mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK52（図面042）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.78m、短径0.62m、深さ0.2mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK53（図面042）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.87m、短径0.64m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色粘質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK54（図面043）：平面形態は梢円形で、規模は長径1.06m、短径0.77m、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK55（図面043）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.94m、短径0.46m、深さ0.12mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。遺物には中世土師器(0505)がある。

SK56（図面043）：平面形態は不整形で、SK59を切り込む。規模は長径1.2m、短径0.63m、深さ0.2mを測る。覆土は第1層：黄褐色砂層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲(0514)が認められる。

**SK57** (図面043)：平面形態は円形で、西側は調査区外に広がる。規模は径0.48～0.86m、深さ0.35mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂層となる。出土遺物は中世土師器(0502)がある。

**SK58** (図面043)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.25mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。遺物には中世土師器(0516)がある。

**SK59** (図面043)：平面形態は梢円形で、SK50に切り込まれる。規模は長径1.01m、短径0.78m、深さ0.35mを測る。土坑内は礫が散在している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂層となる。出土遺物は珠洲が認められる。

**SK60** (図面043)：平面形態は梢円形で、SK61を切り込む。規模は長径2.49m、短径1.36m、深さ0.19mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(0500・0501)、珠洲がある。

**SK61** (図面043)：平面形態は梢円形で、SK60に切られる。規模は長径1.82m、短径0.82m、深さ0.26mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：(2.5Y4/3)オリーブ褐色砂層、第3層：(2.5Y4/6)オリーブ褐色砂層に分層される。出土遺物は中世土師器がある。

**SK62** (図面043)：平面形態は円形で、規模は径0.43～0.51m、深さ0.12mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂層となる。出土遺物は認められない。

**SK63** (図面043)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.6m、短径0.41m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK64** (図面043)：平面形態は円形で、SK66を切り込む。規模は径0.24～0.3m、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK65** (図面043)：平面形態は不整形で、SP41・SK63に切り込まれる。規模は長径2.01m、短径1.37m、深さ0.07mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK66** (図面043)：平面形態は梢円形で、SP46・SK67を切り込み、SK64に切り込まれる。長径2.41m、短径1.7m、深さ0.27mを測る。覆土は第1層：オリーブ黒色粘質土層、第2層：灰黄色砂層、第3層：灰黄色粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、珠洲がある。

**SK67** (図面043)：平面形態は不整形で、SK66に切り込まれる。規模は長径0.61m、短径は0.39m以上、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK68** (図面044)：平面形態は円形で、規模は径0.45～0.57m、深さ0.21mを測る。土坑内は炭化物が混入している。覆土は黄灰色砂粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK69** (図面044)：平面形態は梢円形で、SD10に切り込まれる。規模は長径0.69m、短径0.39m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘質土層、第2層：(2.5Y6/1)黄灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK70** (図面044)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.56m、短径0.48m、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：オリーブ褐色砂層となる。出土遺物は認められない。

**SK71** (図面044)：平面形態は梢円形で、SD09を切り込む。規模は長径2.62m、短径0.89m、深さ

0.19mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK72（図面044）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.31m、短径1.61m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

SK73（図面044）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.99m、短径0.93m、深さ0.37mを測る。覆土は第1層：(2.5Y3/2)黒褐色砂質土層、第2層：(2.5Y3/1)黒褐色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK74（図面044）：平面形態は円形で、SD17を切り込む。規模は径0.63～0.74m、深さ0.3mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK75（図面044）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.83m、短径0.51m、深さ0.29mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK76（図面044）：平面形態は円形で、規模は径0.52～0.57m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK77（図面044）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.62m、短径0.44m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK78（図面044）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.61m、短径0.42m、深さ0.17mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK79（図面044）：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.75m、短径1.63m、深さ0.17mを測る。土坑内は小礫が多数混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物としては中世土師器(0507)、珠洲が認められる。

SK80（図面044）：平面形態は円形で、規模は径0.61～0.66m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK81（図面044）：平面形態は楕円形で、規模は長径3.83m、短径1.32m、深さ0.31mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする4層からなる。出土遺物は認められない。

SK82（図面045）：平面形態は円形で、規模は径0.39～0.42m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(0508)がある。

SK83（図面045）：平面形態は不整形で、SK82に切り込まれる。規模は長径4.22m、短径3.19m、深さ0.24mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK84（図面045）：平面形態は方形で、SD25を切り込み、北側は調査区外に広がる。規模は長辺1.37m、短辺1.06m、深さ0.16mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK85（図面045）：平面形態は不整形で、規模は長径0.91m、短径0.24m、深さ0.05mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK86（図面045）：平面形態は不整形で、SK97に切り込まれる。規模は長径1.32m以上、短径1.28m、深さ0.08mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK87（図面045）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.5m、短径0.41m以上、深さ0.07mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK88（図面045）：平面形態は楕円形で、SK95を切り込む。規模は長径0.89m、短径0.74m、深さ0.62mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：オリーブ黑色砂質土層、第3層：黄灰色

砂質土層に分層される。出土遺物には中世土師器、珠洲が認められる。

SK89（図面045）：平面形態は楕円形で、SK95を切り込む。規模は長径0.57m、短径0.51m、深さ0.58mを測る。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする4層からなる。出土遺物は中世土師器がある。

SK90（図面045）：平面形態は楕円形で、SK95を切り込む。規模は長径0.62m以上、短径0.61m、深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK91（図面045）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.42m、短径0.31m、深さ0.25mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK92（図面046）：平面形態は楕円形で、SK95を切り込む。長径1.08m、短径0.66m、深さ0.51mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y3/2)黒褐色砂質土層、第3層：(2.5Y3/1)黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物は珠洲(0520)、中世土師器がある。

SK93（図面047）：平面形態は不整形で、南側は調査区外に広がる。長径7.55m、短径1.09m以上、深さ0.2mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物は土師器、中世土師器がある。

SK94（図面048）：平面形態は不整形で、SD20を切り込む。長径6.1m、短径4.5m以上、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層、第3層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、中国製青磁がある。

SK95（図面048）：平面形態は不整形(2段のテラス状の地形)で、SD22・SK88～SK92に切り込まれ、南側はSD22と接合し、北側は調査区外に広がる。長径9.2m以上、短径7.4m以上、深さ0.3mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第3層：黒褐色砂質土層に分層される。出土遺物としては中世土師器(0509～0511)、中国製青磁、珠洲、八尾(0512)が認められる。

SK96（図面048）：平面形態は不整形で、カクラン(水路跡)に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。長径2.73m以上、短径0.79m以上、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK97（図面048）：平面形態は不整形で、SK86を切り込む。規模は長径4.52m、短径1.91m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器、珠洲がある。

#### 溝・自然流路

SD08（図面026・046）：東西に広がる直線の溝で調査区外に延びる。SD01よりやや新しいとみられる。確認できる長さは19.15m、最大幅1.1m、最大深0.2mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層：灰色粘質土層、第2層：灰オリーブ色砂質土層、bセクションで第1層：灰色粘質土層、第2層：灰色砂粘質土層、第3層：灰オリーブ色砂質土層である。出土遺物は中世土師器、珠洲がある。

SD09（図面026・046）：北端は消失し、南端は二股に分かれ、SD10を切り込んで消失する不整形の溝でSK71に切られている。長さ11.9m以上、最大幅1.9m以上、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はa・b・cセクションとも黄灰色粘質土層からなる。出土遺物は認められない。

SD10（図面026・046）：東調査区より延び、軽い円弧を描きながら南北に延び南端は消失する。途中SD11を切りSD09に切られる。長さ15.3m、最大幅0.7m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はa、b、cセクションとも黄灰色粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

SD11（図面026・046）：南北に延びる不整形の溝で北端は消失し、南端はSD01に切られる。途中SD

10に切られる。長さ12.1m、最大幅1.8m、最大深0.22mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層である。出土遺物は認められない。

**SD12**（図面026・046）：両端が消失する直線の小溝である。長さ2.3m、最大幅0.36m、最大深0.08mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD13**（図面028・046）：南北に延びる直線の溝で北端は消失し、南端はSD18に切られる。長さ11.0m以上、最大幅0.6m、最大深0.06mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層の単層である。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD14**（図面028・046）：南北に延びる溝で両端とも消失している。長さ6.0m、最大幅0.7m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は黒色土器（0407）、中世土師器、瓦質土器が認められる。

**SD15**（図面027・046）：北側調査区より南北に延びる自然流路で、SD16に合流している。確認できる長さは17.5m以上、最大幅5.3m以上、最大深0.62mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器、珠洲、八尾、十製品ではフイゴ羽口（0624）が認められる。

**SD16**（図面027・047）：南北に延びる直線の自然流路で、途中SD15と合流し南側でSD17に切り込まれ、SD21を切っている。確認できる長さは23.0m以上、最大幅14.5m以上、最大深0.48mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、十師器（0398～0400）、中世土師器（0608～0612）、中国製白磁、中国製青磁（0614・0615）、珠洲（0617～0620）、八尾（0613）、瀬戸美濃（0616）、越前、木製品では箸（099）、漆、加工材が認められる。

**SD17**（図面028・047）：南北に延びる直線の大溝で北側でSD16を切って開放している。途中SD18・SD23を切り、南側ではSK95を切り込んで開放している。確認できる長さは58.0m以上、最大幅8.5m以上、最大深0.7mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層からなり、bセクションでオリーブ黒色砂質土層を基調とする8層からなる。cセクションで黒褐色砂質土層を基調とし、dセクションでオリーブ黒色粘土層を基調とする6層に分層される。出土遺物は須恵器（0401・0402）、土師器（0403）、中世土師器（0579～0586・0606・0607）、中国製白磁（0587・0588）、中国製青磁（0589～0592）、珠洲（0593～0595）、八尾（0596・0597）、土錐（0404）、木製品では箸（096・100）、漆器（103・104・107）、円形板（109・110）、金属製品ではヤス（023）、右製品では茶臼（08）がある。

**SD18**（図面028・047）：西側調査区外より南東に延びる直線の大溝で東側調査区外に延びている。中央部でSD13を切り、SD17に南北で切られる。確認できる長さは29.0m以上、最大幅6.0m以上、最大深0.62mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はa、bセクションとも暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器（0405）、土師器、中世土師器、瀬戸美濃、珠洲（0598～0605）が認められる。

**SD19**（図面029・047）：調査区南西端で南北に延びる自然流路で調査区外に延びている。SD20・SD22を切る。確認できる長さは13.9m以上、最大幅8.0m、最大深1.65mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器（0625～0630）、中国製青磁、珠洲、八尾、木製品では箸（138）、加工板、加工棒が認められる。

**SD20**（図面023・029・047）：SD19に切り込まれながら併走し、南調査区外に延びている自然流路で、北端はSD22に切り込まれ開放している。確認できる長さは17.9m以上、最大幅7.1m以上、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、

土師器、中世土師器(0636~0638)、珠洲(0639)、木製品では箸(139~146)、折敷(147)、円形板(148)、加工棒があり、その他に骨片が認められる。

SD21 (図面028・047)：調査区を東西に横断する直線の溝で、SD17に切られ、SD24を切って西側調査区外に広がっている。確認できる長さは19.0m、最大幅0.6m、最大深0.32mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は褐色砂質土層である。出土遺物は中世土師器が認められる。

SD22 (図面029・048)：調査区西側から調査区外に広がる不整形の溝で、西側が深く落ち込み、東側が浅い段上の溝である。北側は不明瞭だがSK95に接合しており、南側ではSD19に切られている。確認できる長さは21.6m以上、最大幅1.1m以上、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層、bセクションでは黄灰色砂質土層の単層となる。出土遺物は中世土師器(0634)、中国製白磁(0635)が認められる。

SD23 (図面028・048)：北西端はSD17に切られ、南東に延びる不整形の溝で南端は消失している。長さ11.4m以上、最大幅0.7m、最大深0.18mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はa、b、cセクションとも第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層からなる。出土遺物は認められない。

SD24 (図面028・048)：北端はSD21に切られ南北に延びる不整形の溝で、西側調査区外に延びている。確認できる長さは3.04m以上、最大幅0.62m以上、最大深0.29mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ黒色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0408・0409)、中世土師器(0621・0622)、瀬戸美濃(0623)、珠洲、八尾、越中瀬戸が認められる。

SD25 (図面030・048)：北東調査区外から南西に横断して、調査区外に延びている直線の区画である。確認できる長さは18.5m以上、最大幅1.5m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器皿(0631・0632)、珠洲(0633)が認められる。

SD26 (図面030・048)：SD25に併走して延びる直線の溝で両端とも消失している。長さ7.06m、最大幅1.31m、最大深0.14mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

SD27 (図面030・048)：北西端は消失し、南東端はSD25に切られる直線の小溝である。長さ1.36m以上、最大幅0.33m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は中世土師器が認められる。

SD28 (図面030・048)：東西に延びる直線の溝で東端はSK95に切られ西端は消失している。長さ3.67m以上、最大幅0.21m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物はない。

SD29 (図面030・048)：SD28に併走する直線の小溝で両端とも消失している。長さ1.07m、最大幅0.18m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物はない。

SD30 (図面030・048)：SD29に併走する直線の小溝で両端とも消失している。長さ1.14m、最大幅0.18m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字形で、覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物は認められない。

SD31 (図面030・048)：SD28に併走する直線の小溝で両端とも消失している。長さ1.26m、最大幅0.14m、最大深0.03mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層である。出土遺物は認められない。

### その他の遺構

**SX02** (図面029・030・046) : SX03の近隣で 中世土師器皿(0522～0526)が集中して出土しているもので、土坑などのように掘方などは確認されていない。中世土師器皿は合計5枚出土しており、いずれも正位に近い状態で出土している。したがって、これらの遺物は現地性が高く、配置もあまり乱されていないと判断される。おそらく祭祀関連に伴う遺物群と推定され、SX03付近に位置していることから掘り方が確認されていないものの、土壙墓の可能性が高いと考えられる。

**SX03** (図面029・030・046) : 平面形態は梢円形で、長径1.41m、短径0.51m、深さ0.26mを測る土壙墓である。土坑内の2カ所に焼骨が集中しており、土坑の南側に配石が広がっている。出土した骨の一部を富山医科薬科大学森沢佐歳氏に実見していただきたところ、成人の人骨であることが判明した。遺物は中世土師器(0521)が出土している。

### 3. 近世の遺構

近世の遺構は調査区北側から中名VI遺跡A地区に広がっており、ここでは分けて報告することは避けて、中名VI遺跡A地区に分布している近世の遺構についても一括して報告しておく。遺構はX225～X270区域に集中しており、溝と石列が検出された。溝には区画を意識して巡らされており、網目状に分布している。石列は単に直径0.2～0.3mの円礫を並べた構造のものと、両側に拳大の円礫を並べ更に人頭大の円礫をのせたものがみられる。これらの石列はやはり網目状に巡らされている。これらの遺構は集落に伴う遺構ではなく、田畠を区画する農業関連の遺構と考えられる。なお、石列については溝より後に構築されており、ここでは水田に敷設する暗渠と考えられる。16世紀末から18世紀後半の所産と考えておく。

**SD32** (図面049) : 農耕に関連した網目状に巡る区画溝で東西方向と南北方向にそれぞれ延びている。長さ17.5m、最大幅4.2m、最大深0.05mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は土師器(0406)、中世土師器(0577)、中国製青白磁(0556)、珠洲、八尾(0578)、瀬戸美濃、越中瀬戸(0576)が認められる。

## (4) D3地区

D3地区（平成11年度調査）は中名V遺跡のはば中央に位置し、用水路取り付け部分に伴う調査であるため幅約5m、長さ約200mの南北方向に細長い調査区で、北側は中名VI遺跡B地区と接している。大きく古代、中世、中・近世の3時期の遺構が検出されている。古代の遺構は希薄で、調査区南側に自然流路と土坑が検出されるにとどまり、堅穴住居や大型の方形土坑などの集落遺構は確認されていない。中世になると集落遺構の掘立柱建物や井戸、溝などが調査区全体にみられるようになる。また、中・近世についても集落に関連した遺構が確認されており、遺構の記述も中世から近世の遺構が中心となる。しかし、細長い調査区のため遺構の広がりや性格などで断片的な情報しか得られないという点で、全体的に判然としない。

### 1. 古代の遺構

古代の遺構は主に調査区南側で検出された。古代の遺構は北端で接している中名VI遺跡B地区や西側に50m程度離れている中名V遺跡D1・D2・D4地区で集落遺構が検出されているが、ここでは自然流路と土坑が検出され、直接集落に伴うとみられる遺構は検出されていない。以下遺構について

簡単に記述しておく。

### 土坑

**SK01** (図面062) : 自然流路のSD01内にある土坑である。平面形態は楕円形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径2.28m、短径2.0m以上、深さ0.46mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は土師器(0765)、木製品では板状木製品(186・187)がある。

**SK02** (図面062) : SD01の南側岸付近に位置する土坑である。平面形態は円形で、規模は径1.52~1.6m、深さ0.13mを測る。覆土は灰色砂粘質土層のみの單層となる。

### 溝・自然流路

**SD01** (図面051・062・063) : 古代の自然流路であるが北西方向へ延び、D1・D2・D4地区のSD01へ続くとみられる。調査区内では形態、流れは不明瞭である。断面形態は不整形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は器物(225)が認められる。

**SD02** (図面053・063) : 古代の溝。調査区最南端に存在する溝で、南東から北西方向に広がると思われる。確認できる長さは3.0m以上、最大幅15.0m以上、最大深1.45mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器(0762)、土師器が認められる。

## 2. 中世の遺構

検出された中世の遺構は掘立柱建物や井戸、大小の土坑、区画溝など集落に関連するものが主体である。中世の遺構は調査区全体に分布しているが、大きくSB01・SB02を中心とする調査区北側とSE04と区画溝を中心とする南側とに分かれる。掘立柱建物や井戸は調査区の北側に位置し、掘立柱建物については建物の軸方位や区画溝、井戸の配置などから立て替えが行われたとみられ、SB01→SB02と考えられる。SB01は区画溝のSD05と井戸のSE02を伴い、SB02は井戸のSE01を伴うと考えられる。調査区南側には区画溝と井戸が分布していることから、建物の存在が推定できるが、今回の調査では確認されていない。時期的にみた場合、北側の遺構群は中世でも13~14世紀が主体で、D3地区と接している中名VI遺跡B地区の遺構時期に近い。それに対して南側の遺構群は15世紀代が主体で、北側と南側では若干の時期差が考えられる。以下に遺構の記述をしていく。

### 掘立柱建物

**SB01~SP01~SP05** (図面055・064) : SD05と軸を同じくする掘立柱建物である。建物の北側が調査区外のため規模は不明だが、梁行1間以上(2.9m以上)、桁行3間以上(5.45m以上)の側柱建物で、平面プランは長方形と思われる。建物の棟方向はN81°W、柱間距離は、桁行1.6~1.82mである。柱穴形態は楕円形~不整形で径0.23~0.64m、深さ0.07~0.3mを数える。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物はSP01から鉄滓(082)が出土している。

**SB02~SP06~SP09** (図面055・064) : SD09と軸を同じくする掘立柱建物で、建物の北側が調査区外のため規模は不明だが、梁行3間(4.6m)の側柱建物である。建物の棟方向はN7°E。柱間距離は梁行1.35~1.75mである。柱穴形態は円~楕円形で、径0.25~0.32m、深さ0.07~0.32mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SB03~SP10~SP13** (図面055・064) : SB01より先行する掘立柱建物である。建物の北側は調査区外であるため規模は不明だが、梁行1間(3.1m)、桁行1間以上(2.2m以上)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈すと思われる。建物の棟方向はN7°W、柱穴形態は円~楕円形で径0.28~0.5m、深さ0.04~0.3mを数える。柱穴内覆土は褐灰色砂粘質土層~黒褐色粘質土層を基調とする。遺物はSP

11から柱根(191)が出土している。

#### 井戸

**SE01** (図面054・065) : 石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.93m、底面で0.65mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径1.5~1.67m、深さ0.94mの規模を測る。横断面の形態は底の平坦な鍋底型である。井筒内覆土は第1層：明黄褐色砂層、第2層：灰色砂質土層、第3層：灰色砂層に分層され、掘方の覆土はにぶい黄色疊層となる。遺物としては土製品 フイゴ羽口(0789)、木製品では箸(151・152)、加工木が出土している。

**SE02** (図面055・065) : 石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.8m、底面で0.46mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の一部は調査区外にかかる。掘方の平面形態は円形で、径1.46m以上、深さ1.1mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒内の覆土は第1層：灰色砂粘質土層、第2層：(5Y3/2)オリーブ黒色砂粘質土層、第3層：(5Y3/1)オリーブ黒色砂粘質土層に分層される。遺物としては加工木(150)が出土している。

**SE03** (図面055・065) : 石組井戸である。東側が調査区の壁にかかるが、井筒部は掘方の中心に設置すると思われ、内径は0.4m程度である。底面には底抜きの曲物桶を設置。掘方の平面形態は不整形で、長径1.31m以上、短径1.13m以上、深さ1.4mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒内の覆土は第1層：黄褐色砂粘質土層、第2層：にぶい黄色砂質土層、第3層：明褐色疊層に分層される。遺物としては瀬戸美濃(0775)、曲物(154)が出土している。

**SE04** (図面057・066) : 石組井戸である。掘方の一部は調査区外となる。井筒部内径は上面で0.75m、底面で0.59mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底抜きの曲物桶が設置されている。掘方の平面形態は橢円形で、長径2.16m以上、短径1.55m以上、深さ0.86mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。遺物としては曲物(181)が出土している。

#### 土坑

**SK03** (図面066) : 平面形態は不整形で、SP17に切られる。規模は長径1.18m以上、短径0.5m、深さ0.09mを測る。土坑内は人頭大疊が散在している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK04** (図面066) : 平面形態は橢円形で、規模は長径1.15m以上、短径0.65m、深さ0.05mを測る。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK05** (図面066) : 平面形態は不整形で、SD05を切る。規模は長径1.25m、短径0.52m、深さ0.11mを測る。土坑内は小疊が分布している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器、石製品では凹石(17)がある。

**SK06** (図面066) : 平面形態は橢円形で、規模は長径0.42m、短径0.24m、深さ0.08mを測る。土坑内は疊が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK07** (図面066) : 平面形態は橢円形で、規模は長径0.69m、短径0.36m、深さ0.09mを測る。土坑内は疊が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK08** (図面066) : 平面形態は不整形で、規模は長径0.46m、短径0.32m、深さ0.08mを測る。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK09** (図面066) : 平面形態は不整形で、SD05に切られる。規模は長径0.63m以上、短径0.52m、深さ0.22mを測る。土坑内は拳大~人頭大の円疊が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

- SK10** (図面066)：平面形態は円形で、SD06を切り込む。規模は径0.47～0.5m、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK11** (図面066)：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径0.8m、短径0.44m以上、深さ0.25mを測る。覆土は灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土器(0769・0770)、越中瀬戸がある。
- SK12** (図面066)：平面形態はやや不整形で、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.14m、短径0.63m以上、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は唐津がある。
- SK13** (図面066)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.66m、深さ0.15mを測る。土坑内は拳大～人頭大の円礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物はない。
- SK14** (図面066)：平面形態は楕円形で、SD05を切り込む。規模は長径0.55m、短径0.44m以上、深さ0.12mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK15** (図面067)：平面形態は長楕円形で、SK16・SK17を切り込み、東側は調査区外に広がる。規模は長径2.96m、短径0.67m以上、深さ0.08mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器が混じり込む。
- SK16** (図面067)：平面形態は長楕円形で、SK17を切り込み、SK15に切り込まれる。規模は長径2.32m、短径0.85m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK17** (図面067)：平面形態は楕円形で、SK15・SK16に切り込まれ、東側は調査区外に広がる。規模は長径2.62m以上、短径1.81m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK18** (図面067)：平面形態は円形で、規模は径0.49～0.57m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK19** (図面067)：平面形態は不整形で、SK20を切り込み、西側は調査区外に広がる。規模は長径0.8m以上、短径0.45m、深さ0.13mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲が認められる。
- SK20** (図面067)：平面形態は不整形で、SK21を切り込み、SK19に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長径2.08m以上、短径1.9m、深さ0.2mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK21** (図面067)：平面形態は不整形で、SK20に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.28m以上、短径0.52m以上、深さ0.12mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK22** (図面067)：平面形態は不整形で、SD03に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長径0.96m以上、短径0.85m、深さ0.25mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(190)がある。
- SK23** (図面067)：平面形態は楕円形で、SD25を切り込む。規模は長径0.72m、短径0.55m、深さ0.24mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK24** (図面067)：平面形態は円形で、SD05を切り込む。規模は径0.25m、深さ0.28mを測る。覆土は灰オリーブ色砂礫層のみの単層となる。出土遺物は柱根(194)がある。

**SK25** (図面067)：平面形態は円形で、規模は径0.25m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(189)がある。

**SK26** (図面067)：平面形態は梢円形で、SD21に切り込まれる。規模は長径0.83m、短径0.7m、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK27** (図面068)：平面形態は不整形で、SD03に切り込まれ、南北共に調査区外に広がる。規模は長径4.1m、短径2.78m以上、深さ0.15mを測る。覆土は暗オリーブ色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK28** (図面068)：平面形態は不整形で、SD22を切り込む。長径1.92m、短径0.64m、深さ0.1mを測る。覆土は第1層：橙色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘土層、第3層：黒色粘土層に分層される。出土遺物は中世土師器(0776～0777)、珠洲、木製品では加工木がある。

**SK29** (図面069)：平面形態は不整形で、SE04・SD18・SD19に切り込まれる。規模は長径2.7m以上、短径0.9m以上、深さ0.16mを測る。覆土は灰オリーブ色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(0808)、須恵器、珠洲がある。

**SK30** (図面069)：平面形態は不整形で、SD21・SK26に切り込まれ、北西側は調査区外に広がる。規模は長径5.8m以上、短径1.1m以上、深さ0.12mを測る。覆土は暗オリーブ色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 柱穴

**SP17** (図面066)：平面形態は梢円形で、SK03を切り込む。規模は長径0.43m、短径0.35m以上、深さ0.25m以上を測る。土坑内は疊が混入している。覆土は褐灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(192)がある。

#### 溝

**SD03** (図面057・068・069)：北端は消失し調査区を北東から南西方向に延び、調査区外に広がる直線の溝でSD23と併合する。途中SD21に切られる。確認できる長さは15.0m以上、最大幅1.1m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層、第2層とも灰オリーブ色砂粘質土層、bセクションでは暗オリーブ色砂質土層の単層からなる。出土遺物は中世土師器(0771～0773)、瀬戸美濃(0774)、越中瀬戸、土製品ではフイゴ羽口(0790)があり、石製品では凹石(15)が認められる。

**SD04** (図面054・068)：南北に延びる不整形の溝で北端は中名VI遺跡B地区の溝に切られ、南側は調査区外に広がっている。SD05を南北に切っており、近世のSD26・SD27に切り込まれている。確認できる長さは15.1m以上、最大幅2.5m以上、最大深0.9mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、中世土師器(0783～0785)、珠洲(0788)、八尾、瀬戸美濃、土製品ではフイゴ羽口(0786・0787)が認められる。

**SD05** (図面055・068)：東南側調査区を東西に横断し、調査区外に延び北側調査区を南東から北西に走り、西側調査区を東西に横断する直線の溝とみられる。途中SE01・SD04・SD08に切られる。SB01と主軸が同一である事から、同じ時期に存在したと考えられる。確認できる長さは31.0m以上、最大幅2.5m、最大深0.8mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は、aセクションで黄灰色砂層を基調とし、bセクションで灰オリーブ色砂層を基調とし、cセクションでは黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、中世土師器(0794～0800)、珠洲(0801～0806)、八尾、越中瀬戸、木製品では加工木がある。

- SD06** (図面055・068)：南北に延びる不整形の溝で調査区外に広がる。確認できる長さは4.5m以上、最大幅5.0m、最大深0.35mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は珠洲、八尾、木製品では箸(226)、縦手(227)が認められる。
- SD07** (図面055・068)：北西端はSE03に切られ調査区外に延び、南東側調査区外に広がる不整形の溝である。確認できる長さは3.0m以上、最大幅2.2m、最大深0.35mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は黄褐色砂質土層からなる。出土遺物は八尾(0791)がある。
- SD08** (図面055・068)：北側調査区外より南北に延びる直線の溝で、南端は消失している。途中SD05を切る。確認できる長さは3.2m以上、最大幅0.5m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は褐灰色砂質土層の単層からなる。出土遺物は認められない。
- SD09** (図面055・069)：調査区を東西に横断して調査区外に延びている直線の溝である。SD10に併走している。確認できる長さは4.5m以上、最大幅3.5m、最大深0.25mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。
- SD10** (図面055・069)：調査区を東西に横断して調査区外に延びている直線の溝で、北側にSD09が併走する。長さ4.5m以上、最大幅1.0m、最大深0.25mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。
- SD11** (図面056・069)：SD09・SD10に併走し東西に延びて調査区外に広がっている直線の溝である。SD42に切られる。確認できる長さは4.5m以上、最大幅5.5m、最大深0.63mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は上層部は黄灰色粘質土層～暗灰黄色粘質土層となり、下層部では黄灰色砂粘質土層～黄褐色砂層を基調とする。出土遺物は珠洲が認められる。
- SD12** (図面056・069)：東西に延びる不整形の溝で両端とも消失している。長さ3.2m、最大幅0.8m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器(0781)が認められる。
- SD13** (図面056・069)：調査区を南北に横断する直線の溝で調査区外に延びている。確認できる長さは4.2m、最大幅0.9m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は中世土師器(0782)が認められる。
- SD14** (図面056・069)：東西に延びる不整形の溝で東端は消失しており、南側、西側調査区外に広がる。確認できる長さは13.3m以上、最大幅1.5m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は、aセクションで黒褐色砂粘質土層、bセクションで暗オリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物は唐津、越中丸山、木製品では加工木、石製品では磁石が認められる。
- SD15** (図面056・069)：調査区を南東から北西に横断する直線の溝で調査区外に延びている。確認できる長さは3.5m以上、最大幅5.4m、最大深0.7mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ黒色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は土師器、珠洲(0792・0793)が認められる。
- SD16** (図面057・069)：調査区を南東から北西に横断する直線の溝で、調査区外に延びている。南側のSD17・SD18・SD19とともに4条の溝が併走している。確認できる長さは3.4m以上、最大幅1.2m、最大深0.24mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器、珠洲(0780)、木製品では漆器、石製品ではバンドコが認められる。
- SD17** (図面057・069)：調査区を南東から北西に横断する直線の溝で、調査区外に延びている。確認できる長さは3.2m以上、最大幅1.2m、最大深0.21mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器(0778・0779)、木製品では下駄(228)

が認められる。

**SD18** (図面057・069)：調査区を南東から北西に横断する直線の溝で、調査区外に延びている。SK 29を切り込んでいる。確認できる長さは6.5m以上、最大幅0.7m、最大深0.23mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は第1層：灰オリーブ色砂質土層、第2層：暗オリーブ色粘土層からなる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD19** (図面057・069)：調査区を南東から北西に継続する直線の溝である。南東端はSE04に切られ、北西端はほぼ直角にSD20と合流している。長さ9.8m以上、最大幅0.8m、最大深0.18mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは第1層：灰オリーブ色砂質土層、第2層：暗オリーブ色粘土層からなり、bセクションでは第1層：暗オリーブ色砂質土層、第2層：灰オリーブ色砂質土層からなる。出土遺物は土師器、須恵器、中世土師器が認められる。

**SD20** (図面057・069)：調査区を南北に横断する不整形の溝である。東側でSD19に切り込まれながら合流している。確認できる長さは3.1m以上、最大幅1.6m以上、最大深0.35mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：灰オリーブ色砂質土層、第2層：オリーブ黒色砂粘質土層(疊含む)からなる。出土遺物は須恵器(0761)、土師器、中世土師器、石製品では砥石(19)が認められる。

**SD21** (図面057・069)：調査区を東西に横断する直線の溝で、SD03・SK26・SK30を切る。確認できる長さは3.1m、最大幅0.5m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は明赤褐色砂層の単層で直径2~5mm程度の礫を含む。出土遺物は認められない。

**SD22** (図面057・069)：北西から南東に延びる溝で調査区外に広がっている。SD23をほぼ直角に切っている。確認できる長さは3.65m、最大幅1.9m、最大深0.25mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は第1層：オリーブ黒色砂質土層、第2層：灰オリーブ色砂質土層からなる。出土遺物は中世土師器(0810)、木製品では加工木が認められる。

**SD23** (図面057・069)：北東から南西に延びる直線の溝で北側は調査区外に広がり、南側はSD22に切られる(SD03に併走している同軸である)。確認できる長さは7.3m、最大幅1.2m、最大深0.12mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は第1層：灰オリーブ色砂質土層、第2層：灰オリーブ色砂粘質土層からなる。出土遺物は認められない。

**SD24** (図面057・069)：北西から南東にやや蛇行している溝で調査区を横断して調査区外に広がっている。南側に位置するSD25と併走している。確認できる長さは4.0m、最大幅0.7m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：(5Y5/2)灰オリーブ色砂質土層、第2層：(5Y4/2)灰オリーブ色砂質土層からなる。出土遺物は認められない。

**SD25** (図面057・069)：SD24に併走する溝で北西から南東に延びて調査区外に広がっている。確認できる長さは3.8m、最大幅1.5m、最大深0.4mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は(2.5Y3/2・2.5Y3/1)黒褐色粘土層からなる。出土遺物は須恵器が認められる。

**SD42** (図面056・069)：SD11に併走し東西に延びて調査区外に広がっている直線の溝である。SD 11を切る。確認できる長さは4.5m、最大幅2.7m、最大深0.72mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黒褐色粘質土層を基調とする8層から構成される。出土遺物は種実類がある。

### 3. 中・近世の遺構

中・近世の遺構は主に調査区の中央から北側にかけて分布している。遺構の分布は大きく調査区北側と中央の2グループに分かれ、その間は遺構密度が希薄となっている。遺構には掘立柱建物、井戸、

土坑、溝の他に鉄関連遺構、水周り関連遺構などが検出されている。調査区北側には鍛冶関連の遺構を中心いており、鍛冶を行っていたとみられるSK31や鉄滓などを廃棄したとみられるSK34などがある。時期は中世末から近世全般とやや幅をもたせて考えておく。

#### 掘立柱建物

SB04-SP14～SP16（図面060・070）：SX01より後出する掘立柱建物で、建物の北東部が調査区外のため規模は不明だが、梁行2間以上（6.4m以上）の建物である。建物の棟方向はN84°W、柱間距離は梁行2.35m前後となる。柱穴形態は不整形で、径0.45～1.02m、深さ0.11～0.14mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層である。出土遺物は認められない。

#### 井戸

SE05（図面060・070）：石組井戸である。掘方の一部は調査区外にかかる。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.94m、底面で0.66mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底抜けの曲物桶を設置する。掘方の平面形態は不整形で、長径2.0m、短径1.53m以上、深さ1.25mの規模を測る。横断面の形態は播鉢型である。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。遺物としては曲物（149）、箸（153）が出土している。

#### 土坑

SK31（図面070）：平面形態はやや北側に張り出したいびつな方形で、一段低い部分は長方形を呈している。土坑底面は二段になっており、一段低い部分に鉄滓や炭化物が集中して出土している。特に第2層には炭化物層が挟在し、また鉄を鍛える時に発生する鍛造薄片が多量に出土している。これらのことから、SK31では小鍛冶をしていた土坑と考えられる。長辺2.0m、短辺1.92m、深さ0.22mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層（炭化物層）、第3層：暗オリーブ褐色粘質土層に分層される。出土遺物は上製品タイゴ羽口（0811）、中世土師器、金属製品では多量の鉄滓（029～033・035・037～040・042～051・054～056・093）がある。

SK32（図面070）：平面形態は梢円形で、SD26を切り込み、SK33に切られる。規模は長径1.64m、短径0.62m、深さ0.15mを測る。土坑内は礫や鉄滓が混入している。覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：暗オリーブ褐色砂粘質土層となる。遺物は中国製青磁釉花皿（0809）、土製品、金属製品では鉄滓（034）がある。

SK33（図面070）：平面形態は梢円形で、SD26・SK32を切り込む。規模は長径1.23m、短径0.54m、深さ0.35mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK34（図面071）：平面形態は長梢円形で、SD27を切り込む。規模は長径4.05m、短径0.92m、深さ0.07mを測る。鉄滓や炭化物などが集中して出土している。鉄滓や炭化物の流れ込みも含まれると考えられるが、ここでは遺構の形態や遺物の出土状況などから、鉄滓などを投棄したごみ捨場的な土坑と考えられる。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、土製品、金属製品では鉄滓（041・052・057～081・083～085・087）がある。

SK35（図面071）：平面形態は円形で、SK36を切り込む。規模は径0.63～0.65m、深さ0.2mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、珠球がある。

SK36（図面071）：平面形態は隅丸方形で、SD26を切り込み、SD28・SK35に切り込まれる。規模は長辺2.45m、短辺1.9m以上、深さ0.12mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が混じり込む。

**SK37** (図面071) : 平面形態は円形で、SD26・SD27・SK38を切り込む。規模は径1.21～1.25m、深さ0.1mを測る。土坑内は円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は鉄滓(086)がある。

**SK38** (図面071) : 平面形態は円形で、SD26を切り込み、SK37に切り込まれる。規模は径0.66m以上、深さ0.07mを測る。土坑内は円礫が混入している。覆土は黄灰色砂粘質土層のみ単層となる。出土遺物は認められない。

**SK39** (図面071) : 平面形態は不整形で、南西側は調査区外に広がる。規模は長径1.63m以上、短径1.25m以上、深さ0.11mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、土製品がある。

**SK40** (図面072) : 平面形態は不整形で、SD28を切り込み、SK41に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.93m、短径1.7m以上、深さ0.1mを測る。土坑内は大小の礫が分布している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK41** (図面072) : 平面形態は不整形で、SK40を切り込み、北側は調査区外に広がる。規模は長径2.37m、短径1.13m以上、深さ0.25mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は唐津、伊万里がある。

**SK42** (図面072) : 平面形態は梢円形で、SK43を切り込む。規模は長径0.86m、短径0.35m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、金属製品では鉄滓(053)がある。

**SK43** (図面072) : 平面形態は不整形で、SD29・SK42に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。規模は長径2.67m、短径2.54m、深さ0.28mを測る。上坑内は拳大～人頭大の礫が散在している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層となる。遺物は珠洲(0768)、木製品では加工木が認められる。

**SK44** (図面072) : 平面形態は梢円形で、SD26を切り込む。規模は長径0.98m、短径0.6m、深さ0.13mを測る。土坑内は小礫が分布している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は鉄滓(036)が認められる。

**SK45** (図面072) : 平面形態は円形で、規模は径0.31～0.33m、深さ0.26mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK46** (図面072) : 平面形態は梢円形で、規模は径0.27～0.34m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物は越中丸山、金属製品では鉄滓が認められる。

**SK47** (図面072) : 平面形態は不整形で、北側は調査区外に広がる。規模は長径0.92m以上、短径0.25m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK48** (図面072) : 平面形態は円形で、規模は径0.55～0.67m、深さ0.25mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK49** (図面072) : 平面形態は円形で、規模は径1.05～1.1m、深さ0.81mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK50** (図面072) : 平面形態は円形で、溝を切り込む。規模は径1.05～1.1m、深さ0.29mを測る。覆土は黄褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は桶板(155～179)、円形板(180)、加工木などが

認められる。

SK51（図面073）：平面形態は不整形で、土坑を切り込む。規模は長径2.03m、短径1.21m、深さ0.19mを測る。土坑内は円礫が分布している。覆土は暗オリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK52（図面073）：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.3m、短径0.75m以上、深さ0.21mを測る。土坑内は拳大～人頭大の円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK53（図面073）：平面形態は円形で、規模は径1.03～1.1m、深さ0.26mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK54（図面073）：平面形態は不整形で、旧用水に切り込まれる。規模は長径2.8m、短径1.37m以上、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK55（図面073）：平面形態は円形で、SK56を切り込む。規模は径0.85～0.92m、深さ0.18mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK56（図面073）：平面形態は円形で、SK55に切り込まれる。規模は径0.86～0.9m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK57（図面073）：平面形態は梢円形で、規模は長径1.76m、短径1.0m、深さ0.08mを測る。東壁と西壁には拳大～人頭大の円礫を配置し、中央付近の南北には一個ずつ円礫を据える。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄褐色砂層となる。出土遺物は砥石(18)がある。

SK58（図面073）：平面形態は円形で、規模は径0.42～0.43m、深さ0.08mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は加工木がある。

SK59（図面073）：平面形態は不整形で、南西側は調査区外に広がる。規模は長径2.23m以上、短径0.54m以上、深さ0.43mを測る。土坑内は人頭大の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK60（図面074）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.52m、短径0.39m、深さ0.9mを測る。土坑内は人頭大の円礫が分布している。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK61（図面074）：平面形態は梢円形で、規模は長径1.14m、短径0.62m、深さ0.16mを測る。土坑内は大小の礫が充填している。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK62（図面074）：平面形態は梢円形で、SK85を切り込む。規模は長径0.96m、短径0.5m、深さ0.11mを測る。土坑内は人頭大の円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK63（図面074）：平面形態は円形で、土坑を切り込む。規模は径0.32～0.33m、深さ0.06mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK64（図面074）：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径2.85m、短径0.1m以上、深さ0.2mを測る。土坑内は人頭大の礫が分布している。覆土は黄褐色砂層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、越中瀬戸、金属製品では棒状金属製品(092)、石製品では砥石(16)がある。

SK65（図面074）：平面形態は円形で、規模は径0.19m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は唐津が認められる。

SK66（図面074）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.41m、短径0.32m、深さ0.08mを測る。覆土は

暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は伊万里が認められる。

SK67（図面074）：平面形態は楕円形で、SD34を切り込む。規模は長径1.3m、短径0.85m、深さ0.27mを測る。土坑内は円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK68（図面074）：平面形態は楕円形で、SD34を切り込む。規模は長径1.0m、短径0.78m、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が分布している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK69（図面074）：平面形態は不整形で、SD36に切り込まれ、東側は調査区外に広がる。規模は長径0.6m以上、短径0.4m以上、深さ0.1mを測る。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK70（図面074）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.96m、短径0.48m、深さ0.26mを測る。覆土は暗灰黄色砂層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器がある。

SK71（図面074）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.79m、短径0.5m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器（0807）、珠洲がある。

SK72（図面074）：平面形態は円形で、大礫に切り込まれる。規模は径0.36～0.37m、深さ0.12mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK73（図面074）：平面形態は楕円形で、SD34を切り込む。規模は長径2.02m、短径1.0m、深さ0.13mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：褐灰色砂質土層となる。出土遺物は瀬戸、伊万里が認められる。

SK74（図面074）：平面形態は楕円形で、土坑に切り込まれる。規模は長径1.45m、短径0.43m、深さ0.09mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK75（図面075）：平面形態は楕円形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径2.1m、短径1.18m以上、深さ0.15mを測る。覆土は灰オリーブ色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK76（図面075）：平面形態は不整形で、SK77を切り込み、西側は調査区外に広がる。規模は長径0.47m、短径0.4m以上、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK77（図面075）：平面形態は不整形で、SK76に切り込まれる。規模は長径1.15m以上、短径0.7m以上、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK78（図面075）：平面形態は不整形で、SD29に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径2.2m以上、短径2.0m、深さ0.11mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は越中瀬戸が認められる。

SK79（図面075）：平面形態は橢円長方形で、北東側は調査区外に広がる。規模は長辺3.68m以上、短辺1.41m以上、深さ0.17mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲、唐津、丸山が認められる。

SK80（図面075）：平面形態は不整形で、SD34・SK81を切り込み、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.76m、短径0.68m、深さ0.24mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は綱手(184)、加工木がある。

SK81（図面075）：平面形態は不整形で、SP16・SP19・SD34・SK80に切り込まれ、北東側は調査区外に広がる。規模は長辺3.65m以上、短辺2.99m以上、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土

層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK82 (図面075)：平面形態は楕円形で、SD33を切り込む。規模は長径0.5m、短径0.4m、深さ0.05mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK83 (図面076)：平面形態は不整形で、SD40を切り込み、SK84に切り込まれ東側は調査区外に広がる。規模は長径2.65m以上、短径1.76m以上、深さ0.1mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は明褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK84 (図面076)：平面形態は不整形で、SX03に切り込まれる。規模は長径2.5m以上、短径1.61m、深さ0.07mを測る。覆土は暗オリーブ色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK85 (図面076)：平面形態は不整形で、SP14・SD41・SK62・SK86に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径2.53m以上、短径0.58m、深さ0.28mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃、板状加工木(188)が認められる。

SK86 (図面076)：平面形態は円形で、SK85を切り込む。規模は径0.72～0.86m、深さ0.39mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は伊万里、丸山、木製品では円形板(195～198)、柄杓(199)、桶板(200～223)、籠が認められる。

SK87 (図面076)：平面形態は楕円形で、SD41に切り込まれる。規模は長径0.49m、短径0.42m以上、深さ0.1mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 柱穴

SP18 (図面075)：平面形態は楕円形で、SP15に切られる。規模は長径0.38m、短径0.25m以上、深さ0.12mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(193)がある。

SP19 (図面075)：平面形態は円形で、SK81内に位置する。規模は径0.39～0.43m、深さ0.32mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、木製品では柱根(185)がある。

#### 溝

SD26 (図面058・075)：中名VI遺跡B地区のSD40と同一の溝で、境界付近の西壁には人頭大の礫が並べられている。SD27・SD28と併走して南北に延びる溝で北側はSD04を切り込んでいる。途中SD27を切り込み、SK32・SK33・SK36・SK44に切られ、南側は調査区外に広がっている。確認できる長さは16.0m、最大幅1.9m、最大深0.35mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は、aセクションで黒褐色砂質土層、cセクションで暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は珠洲(0824)、八尾、金属製品では鉄滓(089～091)、石製品では砥石(14)が認められる。

SD27 (図面058・075)：南北に延びる不整形の溝で、北側は中名VI遺跡B地区に続く。西側は調査区外に広がり南端はSK34に切られて消失している。途中東に分岐しておりSD26に切られている。確認できる長さは11.7m、最大幅1.6m、最大深0.3mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は鉄滓が認められる。

SD28 (図面058・071・075)：南北に延びる直線の溝で、東側調査区外に広がっている。途中SK36を切り込み、SK40に切られ途切れ、南端はSK31に切られて消失している。長さ8.0m、最大幅0.9m、最大深0.22mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は、aセクションで黄褐色砂質の単層であり、bセクションでオリーブ黒色砂質土層の単層である。出土遺物は珠洲、金属製品では鉄滓(088)が認め

られる。

**SD29** (図面058・075)：SD30と併走する南北に横断する直線の溝である。北側でSK78を切り込み調査区外に延びており南側はSK43を切り込んで調査区外に延びている。確認できる長さは4.8m、最大幅0.8m、最大深0.13mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層からなる。出土遺物は唐津が認められる。

**SD30** (図面058・075)：南北に横断する直線の溝である。北側で旧貯水槽に切られ調査区外に延びる。確認できる長さは4.6m、最大幅0.55m、最大深0.1mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層の単層からなる。出土遺物は認められない。

**SD31** (図面059・075)：南北に延びる小溝で、北端は旧用水に切られている。確認できる長さは2.1m、最大幅0.6m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD32** (図面059・075)：調査区を南北に横断している不整形の溝で、調査区外に広がっている。確認できる長さは3.9m、最大幅1.65m、最大深0.3mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色粘質土層からなる。出土遺物は青白磁梅瓶(0557)、中世土師器、珠洲、八尾、越中瀬戸が認められる。

**SD33** (図面060・075)：西端は消失して東西に延び東側調査区外に広がる直線の溝である。確認できる長さは4.0m、最大幅0.5m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層である。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD34** (図面060・075)：北側調査区外より南北に延び、東側調査区外にL字型に折れて広がっている。途中SK67、SK68、SK73に切られ、北側でSK81に切られる。確認できる長さは14.5m、最大幅0.8m、最大深0.25mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD35** (図面060・076)：南北に延びる直線の溝で、東側は調査区外に広がっている。確認できる長さ4.3m、最大幅0.3m、最大深0.16mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は褐色砂質土層からなる。出土遺物は珠洲が認められる。

**SD36** (図面060・076)：調査区を東西に横断している直線の溝である。SD37・SK69を切る。確認できる長さは3.3m、最大幅0.3m、最大深0.14mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は灰色砂質土層である。出土遺物は珠洲が認められる。

**SD37** (図面060・076)：北端はSD36に切られ、南北に延びて南側で東に折れるL字形の溝で東端は、SD39に切られる。長さ2.2m、最大幅0.8m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はa、bセクションともオリーブ黒色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD38** (図面060・076)：調査区を東西に横断している直線の溝で、東側でSE05に切り込まれ、調査区外に広がっている。北壁には人頭大の自然石を配置し、列をなす。確認できる長さは3.3m、最大幅0.7m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層からなる。出土遺物は認められない。

**SD39** (図面060・076)：ゆるく蛇行しながら南北に延びる溝で、北端は消失し、南端はSE05に切られている。長さ4.9m、最大幅0.8m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄褐色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD40** (図面061・076)：西側調査区外より東に広がる直線の溝で東側はSK83に切られる。確認でき

る長さは2.3m、最大幅1.0m、最大深0.1mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は灰オリーブ色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD41**（図面060・076）：北側調査区外より南北に延びる直線の溝で、途中SK85・SK87を切り込み南端は消失している。確認できる長さは1.8m、最大幅0.5m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層である。出土遺物は加工木(224)、その他の木製品が認められる。

#### その他の遺構

**SX01**（図面060・076）：平面形態はコの字型の水回り関連遺構である。確認できる長さは6.7m、最大幅1.95m以上を測る。SD41とSK85の突出部には5~6m程度の節を抜いた竹が配され、離手部分で接している。高低関係はSD41の南側の離手を中心に北側とSK86である桶に向かってそれぞれ低くなっている。離手の下には1.0m以上の節を抜いた竹が差し込まれており、竹の周りには粘土がとりまいていた。のことより、おそらく滴水層まで竹が差し込まれ、自噴させていたと考えられ、桶に水が常時流れていたと考えられる。覆土は黒褐色砂粘質土層となる。

**SX02**（図面061・076）：平面形態は一列に並べられた石列である。規模は長径2.56m、短径0.83m、深さ0.18mを測る。石は長径20~25cmで南北に12個並んでいる。覆土はオリーブ黒色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SX03**（図面061・076）：平面形態は一列に並べられた石列である。規模は長径1.6m、短径0.34m、深さ0.23mを測る。石の長径は18~25cmで南北に7個確認できる。覆土はオリーブ黒色粘土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

## （5）E1・E2地区

E1・E2地区（平成11年度調査）は熊野神社の北側で、県道井栗谷婦中線沿いに位置する現況水田区画2枚分の調査地である。西側がE1地区、東側がE2地区として調査が実施された。E1地区とE2地区で検出された遺構の主体は中世末～近世の集落遺構である。同じ時期とみられる集落遺構が検出されている近隣地区にはA1地区・B5地区・D3地区などがあり、中名V遺跡の東側に分布していることがうかがえる。遺構はE1・E2地区全体にやや密に分布し、掘立柱建物、井戸、大小の土坑、区画溝などが検出されている。E2地区については、更に2時期（近世面、近世～近代面）の遺構が検出されているが、いずれも農業に関連すると考えられる遺構が主体となる。したがって、以下の遺構の記述は中世末～近世の集落に関連した遺構が中心となる。

### 1. 中・近世の遺構

中・近世の遺構は調査区全体から検出されており、掘立柱建物7棟、井戸15基、大小の土坑、区画溝、溝群、柱穴などがある。掘立柱建物には軸方位から大きく2時期あり、SD15とSD25などの区画溝と同軸とみられるSB01・SB02・SB06と、やや軸方位が北寄りのSB03・SB04・SB05・SB07があるもののさほど時期差はみられないと考えられる。

#### 掘立柱建物

**SB01～SP09**（図面078・080・083）：SD15と軸を同じくする掘立柱建物である。建物の規模は、梁行2間(4.0m)、桁行2間(4.6~4.7m)の縦柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN 4° Eで床面積は18.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.6~2.4m、桁行1.5~3.2mである。柱穴形態は円

～長楕円形で、径0.22～1.19m、深さ0.06～0.3mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層～黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物はない。

**SB02-SP10～SP19**（図面078・080・083）：SD15と軸を同じくする掘立柱建物で、調査区外に広がる。建物の規模は、梁行1間(3.8m)、桁行2間以上(4.9m以上)の長方形プランである。これに1×1間(2.2×2.5m)の張山が桁行き東側柱列に付設される。床面積は不明だが、張出部は5.6m<sup>2</sup>である。建物の棟方向はN 2° E、柱穴形態は円～楕円形で、径0.19～0.98m、深さ0.09～0.5mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物はSP12から中世土師器が出土している。

**SB03-SP20～SP24**（図面078・081・083）：建物の規模は、梁行1間(2.9m)、桁行2間(5.0m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN16° Eで、床面積は14.5m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.3～2.7mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.26～0.66m、深さ0.12～0.26mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物はない。

**SB04-SP25～SP29**（図面078・081・083）：建物の規模は、梁行1間(3.8m)、桁行2間(8.2m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN79° Wで床面積は31.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行4.0～4.14mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.38～0.74m、深さ0.09～0.33mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂粘質土層を基調とする。遺物はSP25から珠洲、SP27から中世土師器、木製品では加工木が出土している。

**SB05-SP30～SP33**（図面078・081・083）：建物の規模は、梁行1間(4.8m)、桁行1間(5.3m)の側柱建物で、平面プランは方形を呈す。建物の棟方向はN 6° Eで床面積は25.4m<sup>2</sup>。柱穴形態は楕円形～不整形で径0.8～1.2m、深さ0.29m～0.45mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層となる。遺物はSP30から伊万里、SP31から中世土師器、珠洲、木製品では加工木、SP32から中世土師器(0929)が出土している。

**SB06-SP34～SP39**（図面078・082・084）：建物の規模は、梁行1間(5.6m)、桁行2間(7.9m)の側柱建物で、平面プランは長方形である。建物の棟方向はN 5° Eで床面積は44.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行5.5～5.6m、桁行3.5m～4.5m、柱穴形態は楕円形～不整形で、径0.66m～1.12m、深さ0.17m～0.41mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。遺物はSP36から中世土師器、珠洲、石製品では砥石、SP38から中世土師器、瀬戸美濃、近世陶磁器が出土している。

**SB07-SP40～SP42**（図面079・082・084）：建物の北側が調査区外のため規模は不明だが、梁行1間(4.3m)の建物である。建物の棟方向はN15° Wとなる。柱穴形態は円～不整形で、径0.63m～1.08m、深さ0.26m～0.29mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂粘質土層～オリーブ黒色砂礫層を基調とする。遺物はSP41から珠洲(0961)、SP42から中世土師器が出土している。

### 井戸

**SE01**（図面078・084）：石組井戸である。SE02と隣接重複はみられない。内径は上面で0.8m、底面で0.42mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には曲物桶が残る。掘方の平面形態は円形で、径1.23m、深さ0.59mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。遺物としては中世土師器、木製品では箸(271)、曲物(275)、加工木が出土している。

**SE02**（図面078・084）：石組井戸である。内径は上面で0.55m、底面で0.32mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径0.82～0.86m、深さ0.25mの規模を測る。横断面の形態は鍋底型である。覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

**SE03**（図面078・084）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置され、内径は0.7mである。掘

方の平面形態は円形で、径1.67～1.75m、深さ0.81mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする4層から構成されている。出土遺物は中世土師器(0905)、珠洲(0916)、木製品では漆器(231)、加工木がある。

**SE04** (図面078・085)：石組井戸である。内径は0.94mで、ほぼ垂直に石組される。掘方の平面形態は隅丸方形で、一辺1.99～2.39m、深さ0.65mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。覆土は灰色砂粘質土層を基調とする4層から構成される。遺物としては中世土師器、土製品、木製品では漆器(232)、呪符(245)、加工木がある。

**SE05** (図面078・085)：石組井戸である。井筒部は掘方の一方に片寄せて設置される。内径は0.4mであるが、上部数段分のみの残存となる。掘方の平面形態は梢円形で、長径1.12m、短径0.95m、深さ0.75mの規模を測る。横断面の形態は筒型である。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。遺物としては中世土師器、木製品では漆器(291)が出土している。

**SE06** (図面078・085)：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は0.65mで、ほぼ垂直に石組みされる。掘方の平面形態は梢円形で、長径1.83m、短径1.62m、深さ0.74mの規模を測る。横断面の形態は平坦な鍋底型である。遺物としては須恵器(1055)、土師器、中世土師器、瓦質土器(0913)が出土している。

**SE07** (図面078・085)：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で1.05m、底面で0.34mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物桶を設置する。掘方の平面形態は梢円形で、長径2.5m以上、短径2.25m、深さ1.1mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。遺物としては中世土師器、八尾、土製品、木製品では曲物(246)、石製品がある。

**SE08** (図面078・086)：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.75m、底面で0.6mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物桶が残る。掘方の平面形態は円形で、径1.88～2.09m、深さ0.87mの規模を測る。横断面の形態は播鉢型である。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層となる。遺物は須恵器、中世土師器(0909～0911)、珠洲(0912)、唐津、木製品では箸(270)、曲物(247・266)、円形板(267～269)、その他石製品が出土している。

**SE09** (図面078・086)：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.95m、底面で0.49mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径2.69～2.79m、深さ0.81mの規模を測る。横断面の形態は播鉢型。井筒内覆土は暗灰黄色砂粘質土層、掘方の覆土は黒褐色粘質土層となる。遺物は中世土師器(0902・0903)、珠洲(0904)、木製品では漆器(233)、加工木が出土している。

**SE10** (図面078・086)：木枠組か石組かは不明で、掘方のみ残存している井戸である。掘方の平面形態は不整形で、長径3.18m、短径2.05m、深さ0.89mの規模を測る。横断面の形態は鍋底型である。覆土は第1層：(2.5Y3/2)黒褐色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂粘質土層、第3層：(2.5Y3/1)黒褐色砂粘質土層炭混に分層される。井戸内からは中世土師器、珠洲、越中瀬戸が出土している。

**SE11** (図面078・086)：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は0.25mで、下段数段のみが残存する。掘方の平面形態は円形で、径0.89～1.0m、深さ0.39mの規模を測る。横断面の形態は筒型で、覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。遺物としては中世土師器、珠洲、木製品では板状木製品(244)が出土している。

**SE12** (図面078・087) : 石組と木桶を組み合わせた井戸で、上位1/3が石組み、下位2/3が木桶による構築である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.75m、底面で0.54mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物桶を設置している。掘方の平面形態は円形で、径1.86～1.96m、深さ0.86mの規模を測る。横断面の形態は平坦な鍋底型である。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色粘質土層、第3層：暗オリーブ褐色砂粘質土層に分層される。遺物としては中世土師器(0907)、瀬戸美濃(0906・0908)、珠洲(0914・0915)、八尾、越中瀬戸、木製品では漆器(230)、横櫛(262)、角材(264)、桶板(234～243・248～257・259～261)、棒状木製品(258)、石製品では砥石(30・31)が出土している。

**SE13** (図面078・087) : 石組井戸である。東側が調査区の壁にかかるため半裁状態で検出された。内径は上面で0.71m以上、底面で0.5m以上と、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径1.06～2.08m、深さ0.58mの規模と推定される。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。遺物は中世土師器、瀬戸美濃、唐津が出土している。

**SE14** (図面079・087) : 石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面0.8m、底面で0.52m、底面に底板をぬいた曲物桶を設置している。SX03・SD35に切られしており、石組みは下部の一部のみが残存している。掘り方の平面形態は梢円形で、長径1.76m、短径1.35m、深さ0.7mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。遺物は土師器(1058)、中世土師器、珠洲、木製品では漆器(287・290)、曲物(293)などが出土している。

**SE15** (図面079・087) : 石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.9m、底面で0.28mと、やや角度を付けて石組みされる。底面に底板をぬいた曲物桶を設置する。掘り方の平面形態は不整形で、長径2.05m、短径1.75m、深さ1.1mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は第1層：黒褐色砂粘質土層、第2層：暗オリーブ褐色砂粘質土層、第3層：黒色砂粘質土層に分層される。遺物としては須恵器、中世土師器(0917・0918)、瀬戸美濃、珠洲(0919～0921)、越前、木製品では棒状木製品(296)、曲物(297)、漆器、石製品では砥石が出土している。

#### 土坑

**SK01** (図面088) : 平面形態は不整形で、SD18を切り込む。規模は長径2.65m、短径1.29m、深さ0.23mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層、第3層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は珠洲がある。

**SK02** (図面088) : 平面形態は隅丸方形で、SE11に切り込まれる。規模は長辺2.65m、短辺2.43m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層、第3層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、中国製青磁(0925)、瀬戸美濃(0924)がある。

**SK03** (図面088) : 平面形態は梢円形で、SD18を切り込む。規模は長径3.09m、短径2.05m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK04** (図面088) : 平面形態は円形で、SD18を切り込む。規模は径1.56～1.58m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物には中世土師器、近世陶磁器が認められる。

**SK05** (図面088) : 平面形態は隅丸長方形で、SK06・SE09を切り込む。規模は長辺1.76m、短辺1.01m、深さ0.09mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK06** (図面088) : 平面形態は不整形で、SE09を切り込み、SK05に切り込まれ、東側は調査区外に広がる。規模は長辺1.76m以上、短辺1.07m、深さ0.25mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。

覆土は暗オーリープ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は越中瀬戸が認められる。

SK07 (図面089)：平面形態は不整形で、SD20・SD24を切り込む。規模は長径3.15m、短径2.6m、深さ0.26mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土はオーリープ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(0927)、珠洲、越中瀬戸、唐津、木製品では板状木製品(277)がある。

SK08 (図面089)：平面形態は楕円形で、SD24を切り込む。規模は長径0.7m、短径0.52m、深さ0.31mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK09 (図面089)：平面形態は楕円形で、SD35を切り込む。規模は長径1.58m、短径1.51m、深さ0.26mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK10 (図面089)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.81m、短径0.57m、深さ0.16mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は板状鉄製品(098)がある。

SK11 (図面089)：平面形態は楕円形で、SD15に切り込まれる。規模は長径0.59m、短径0.49m、深さ0.22mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲が認められる。

SK12 (図面089)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.58m、短径0.48m、深さ0.25mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK13 (図面089)：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.52m、短径0.55m、深さ0.3mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK14 (図面089)：平面形態は不整形で、SD15に切り込まれる。規模は長径0.59m、短径0.49m以上、深さ0.27mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

SK15 (図面089)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.5m、短径0.24m、深さ0.11mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃がある。

SK16 (図面089)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.26m、短径0.69m、深さ0.27mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は越中瀬戸がある。

SK17 (図面089)：平面形態は楕円形で、SP26に切り込まれる。規模は長径1.11m、短径0.85m、深さ0.36mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK18 (図面089)：平面形態は楕円形で、SD25を切り込み、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.28m、短径0.86m以上、深さ0.3mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は越中丸山(0932)、木製品では漆器破片(272)、木栓(273)がある。

SK19 (図面090)：平面形態は不整形で、SD24に切り込まれる。規模は長径0.96m、短径0.71m以上、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。遺物には珠洲、近世陶磁器がある。

SK20 (図面090)：平面形態は楕円形で、SD24に切り込まれる。規模は長径0.76m以上、短径0.54m、深さ0.45mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK21 (図面090)：平面形態は楕円形で、SE12を切り込む。規模は長径1.49m、短径1.05m、深さ0.41mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、越中瀬戸が認められる。

SK22 (図面090)：平面形態は不整形で、規模は長径0.98m、短径0.85m、深さ0.09mを測る。覆土は

暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK23（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.85m、短径0.67m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲(0922)、近世陶磁器、木製品では加工木が認められる。

SK24（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.27m、短径1.13m、深さ0.31mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲が認められる。

SK25（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.6m、短径1.22m以上、深さ0.51mを測る。土坑内には大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK26（図面090）：平面形態は不整形で、規模は長径0.88m、短径0.63m、深さ0.28mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK27（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.91m、深さ0.4mを測る。土坑内には大小の礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK28（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.07m、短径0.65m、深さ0.25mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

SK29（図面090）：平面形態は不整形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径1.08m以上、短径0.92m、深さ0.13mを測る。土坑内には大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、伊万里(0931)がある。

SK30（図面090）：平面形態は不整形で、規模は長径1.04m、短径0.64m、深さ0.42mを測る。覆土は第1層：(2.5Y3/1)黒褐色砂粘質土層、第2層：(2.5Y3/2)黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器(0928)、珠洲、木製品では加工木がある。

SK31（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.86m、短径0.56m、深さ0.2mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK32（図面090）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.32m、深さ0.25mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK33（図面091）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.75m、短径0.71m、深さ0.18mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK34（図面091）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.1m、短径0.42m、深さ0.13mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK35（図面091）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.77m、短径0.44m、深さ0.24mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK36（図面091）：平面形態は楕円形で、SK37を切り込む。規模は長径1.37m、短径1.12m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂粘質土層、第2層：暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK37（図面091）：平面形態は長楕円形で、SK36に切り込まれる。規模は長径2.63m以上、短径0.89m、深さ0.23mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲(0933)、

越中瀬戸がある。

SK38 (図面091)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.0m、短径0.6m、深さ0.57mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK39 (図面091)：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.7m、短辺1.15m、深さ0.16mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲が認められる。

SK40 (図面091)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.02m、短径0.72m、深さ0.4mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK41 (図面091)：平面形態は楕円形で、SD10・SD13に切り込まれる。規模は長径1.41m以上、短径1.19m、深さ0.3mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲(0934)が認められる。

SK42 (図面091)：平面形態は不整形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径1.54m、短径0.37m以上、深さ0.36mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK43 (図面092)：平面形態は不整形で、規模は長径1.95m、短径1.84m、深さ0.63mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK44 (図面092)：平面形態は不整形で、SD24に切り込まれる。規模は長径1.48m、短径1.19m、深さ0.56mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(0926)、珠洲が認められる。

SK45 (図面092)：平面形態は楕円形で、SD17に切り込まれる。規模は長径0.61m、短径0.43m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は杭(265)、その他木製品がある。

SK46 (図面092)：平面形態は不整形で、SD15に切り込まれる。規模は長径0.75m、短径0.25m以上、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK47 (図面092)：平面形態は楕円形で、SP27に切られる。規模は長径0.71m、短径0.54m、深さ0.21mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK48 (図面093)：平面形態は楕円形で、SD10に切り込まれる。規模は長径0.74m以上、短径0.42m、深さ0.24mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(0935)、中国製青磁、瀬戸美濃が認められる。

SK49 (図面093)：平面形態は長椭円形で、SD10に切り込まれる。規模は長径1.03m以上、短径0.26m、深さ0.2mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃が認められる。

SK50 (図面093)：平面形態は円形で、SK68に切り込まれる。規模は径0.55～0.66m、深さ0.3mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土はオリーブ黒色砂層のみの単層となる。出土遺物は石臼(51)が認められる。

SK51 (図面093)：平面形態は楕円形で、SK65を切り込む。規模は長径0.89m、短径0.67m以上、深さ0.25mを測る。覆土は第1層：オリーブ黒色砂層、第2層：緑灰色砂層となる。出土遺物はない。

SK52 (図面093)：平面形態は楕円形で、SD31・SK63に切り込まれる。規模は長径1.14m、短径0.67m、深さ0.44mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はオリーブ黒色砂粘質土層のみの単層

となる。出土遺物は認められない。

**SK53**（図面093）：平面形態は楕円形で、SK66内に位置する。規模は長径0.68m以上、短径0.64m、深さ0.22mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はオリーブ黒色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK54**（図面093）：平面形態は不整形で、SK62・SK65に切り込まれる。規模は長径1.19m以上、短径0.59m、深さ0.29mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はオリーブ黒色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK55**（図面093）：平面形態は楕円形で、SK68内に位置する。規模は長径0.7m、短径0.54m以上、深さ0.1mを測る。覆土はオリーブ黒色砂層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK56**（図面093）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.27m、短径0.97m、深さ0.44mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK57**（図面093）：平面形態は不整形で、SK66内に位置する。規模は長径0.56m、短径0.33m、深さ0.18mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK58**（図面093）：平面形態は楕円形で、SK65内に位置する。規模は長径0.8m、短径0.55m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK59**（図面093）：平面形態は楕円形で、SK57・SK66に切り込まれる。規模は長径0.75m、短径0.65m、深さ0.47mを測る。覆土は褐灰色砂層のみの単層となる。出土遺物はない。

**SK60**（図面093）：平面形態は楕円形で、SK66内に位置する。規模は長径0.61m、短径0.52m、深さ0.2mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸戸美濃（0944）がある。

**SK61**（図面093）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.7m、短径0.46m、深さ0.18mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲、木製品では加工木がある。

**SK62**（図面093）：平面形態は楕円形で、SK54を切り込む。規模は長径1.02m、短径0.48m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK63**（図面093）：平面形態は不整形で、SK52を切り込み、SD32に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径3.29m以上、短径0.95m、深さ0.07mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は板状木製品（300）が認められる。

**SK64**（図面093）：平面形態は不整形で、SD32・SK65を切り込み、SD10に切り込まれる。規模は長径2.95m、短径2.61m以上、深さ0.12mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK65**（図面093）：平面形態は不整形で、SP42・SK54を切り込み、SK51・SK58・SK64に切り込まれる。規模は長径2.73m以上、短径1.47m、深さ0.34mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲（0958）、木製品では加工木がある。

**SK66**（図面093）：平面形態は不整形で、SP40・SK59を切り込み、SK68に切られ、SK53・SK57・SK60・SK67が土坑内に位置し、北側は調査区外に広がる。規模は長径5.51m、短径1.8m以上、深さ0.38mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(2.5Y3/2)黒褐色砂粘質土層、第2層：

(2.5Y3/1) 黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物は珠洲、木製品では円形板(303)が出土している。

**SK67** (図面093)：平面形態は楕円形で、SK66内に位置し、規模は長径0.74m、短径0.69m、深さ0.36mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

**SK68** (図面093)：平面形態は不整形で、SK50を切り込み、SK55に切り込まれる。規模は長径5.74m以上、短径0.94m以上、深さ0.95mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SK69** (図面094)：平面形態は不整形で、規模は長径1.4m、短径0.64m、深さ0.3mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は板状木製品(298)が認められる。

**SK70** (図面094)：平面形態は隅丸方形で、SD28・SK76を切り込む。規模は長辺1.47m、短辺1.33m、深さ0.42mを測る。土坑内は人頭大～拳大の円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲(0959・0960)、中世土師器(1008)、八尾、瀬戸美濃、越中瀬戸、木製品では板状木製品(305)がある。

**SK71** (図面094)：平面形態は楕円形で、SD29を切り込む。規模は長径0.89m、短径0.79m、深さ0.11mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK72** (図面094)：平面形態は長楕円形で、SK77を切り込み、南側は調査区外に広がる。規模は長径5.12m以上、短径2.62m、深さ0.39mを測る。土坑内は人頭大の円礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器、伊万里、唐津(1035)、木製品では漆器、石製品では鉄石英がある。

**SK73** (図面095)：平面形態は楕円形で、SK74を切り込む。規模は長径0.64m以上、短径0.42m、深さ0.22mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲が認められる。

**SK74** (図面095)：平面形態は楕円形で、SD34を切り込み、SK73に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径4.4m以上、短径2.16m、深さ0.38mを測る。土坑内は人頭大の円礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器(0938)、瀬戸美濃、珠洲、越中瀬戸(0939～0942)、伊万里、瓦質土器(0943)、木製品では円形板(310)、加工木がある。

**SK75** (図面097)：平面形態は不整形で、SD10に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径3.64m、短径0.26m以上、深さ0.2mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK76** (図面098)：平面形態は不整形で、SD28を切り込み、SD10・SK70に切り込まれる。規模は長径3.0m、短径1.3m以上、深さ0.48mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は珠洲、伊万里(1034)、近世陶磁器、木製品では柄杓(329)、板状木製品(338)が認められる。

**SK77** (図面098)：平面形態は不整形で、SD30・SK72に切り込まれる。規模は長径1.26m以上、短径1.41m、深さ0.31mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：オリーブ灰色砂質土層、第2層：オリーブ黄色砂層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

**SK78** (図面098)：平面形態は不整形で、SD10・SD15・SP53に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長径4.48m以上、短径0.39m以上、深さ0.3mを測る。覆土は第1層：オリーブ褐色砂質土

層、第2層：灰色砂層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK79（図面098）：平面形態は隅丸長方形で、SD15に切り込まれる。規模は長辺3.0m、短辺2.1m以上、深さ0.54mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器（0937）、木製品では漆器（306）、棒状木製品（301）がある。

SK81（図面093）：平面形態は梢円形で、SD18・SD19に切り込まれる。規模は長径2.41m、短径1.84m、深さ0.44mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は瀬戸美濃（0923）がある。

SK82（図面094）：平面形態は不整形で、規模は長径0.67m、短径0.38m、深さ0.24mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器（0930）が認められる。

#### 柱穴

SP43（図面095）：平面形態は円形で、規模は径0.35～0.4m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP44（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.26m、短径0.23m、深さ0.05mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SP45（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.34m、短径0.3m、深さ0.24mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲、越中瀬戸、瓦質土器がある。

SP46（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.72m、短径0.58m、深さ0.57mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根がある。

SP47（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.9m、短径0.45m、深さ0.6mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根がある。

SP48（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.69m、短径0.55m、深さ0.56mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根がある。

SP49（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.52m、短径0.36m、深さ0.43mを測る。土坑内には柱根と礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP50（図面095）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.58m、短径0.42m、深さ0.23mを測る。土坑内には柱根と礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は加工木がある。

SP51（図面095）：平面形態は円形で、規模は径0.55～0.56m、深さ0.37mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根がある。

SP52（図面095）：平面形態は円形で、規模は径0.31～0.32m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は板状木製品（263）がある。

SP53（図面095）：平面形態は不整形で、SK78内に位置し、西側は調査区外に広がる。規模は長径3.69m以上、短径0.38m以上、深さ0.32mを測る。土坑内には加工木が見られる。覆土はオリーブ黒色砂層のみの単層となる。出土遺物は棒状木製品（307）がある。

#### 溝

SD01（図面079・096）：SD01からSD09の溝が東西方向に群をして併走している。SD10の南側に帶状に広がる不整形の溝である。先端は消失し、西側でSE15を切る。長さ3.49m、最大幅4.29m、最大深0.5mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。SD01からSD09の溝群は、東西約8.0m、南北約3.6mの範囲内に平行して分布している。又、覆土は人為的に埋められ

ており、人頭人の像も含まれている事から地固めし整地した可能性が考えられる。出土遺物は中世土師器(0936・1032)、珠洲、瀬戸美濃、伊万里、唐津(1033)、木製品では棒状木製品(278)が認められる。

**SD02** (図面079・096) : SD01とSD03に挟まれて南北方向に延びる直線の溝で、両端とも消失している。長さ3.22m、最大幅0.72m、最大深0.35mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

**SD03** (図面079・096) : SD02に併走して南北に延びる不整形の溝である。下層部でSD30に重なっている。長さ3.63m、最大幅1.15m、最大深0.46mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は珠洲、越中瀬戸が認められる。

**SD04** (図面079・096) : 南北に延びる不整形の溝で、両端とも消失している。北東側でSD05と合流している。長さ2.97m、最大幅0.48m、最大深0.26mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物は越中瀬戸(1011)が認められる。

**SD05** (図面079・096) : SD04と北西側で合流し、南北に併走し南東側で東に分岐しSD06に切られている不整形の溝である。両端とも消失する。長さ3.25m、最大幅0.68m、最大深0.23mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

**SD06** (図面079・096) : SD05の東側に南北に延びる直線の溝で両端とも消失している。途中東に併走するSD07と合流する。長さ3.62m、最大幅0.61m、最大深0.25mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は越中瀬戸、木製品では円形板(323)、棒状木製品(339)が認められる。

**SD07** (図面079・096) : 南北に延びる不整形の溝で両端とも消失している。SD06に併走し途中西側で合流している。SD08を切り込んでいる。長さ3.54m、最大幅0.53m、最大深0.22mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は珠洲、施釉陶器が認められる。

**SD08** (図面079・096) : 北端は消失し南西に広がる不整形の溝でSD07に切られている。長さ1.91m、最大幅0.67m以上、最大深0.26mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD09** (図面079・096) : SD07の南東側に併走する直線の小溝で両端とも消失している。長さ1.17m、最大幅0.51m、最大深0.3mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD10** (図面078・079・097・098) : E1地区北東側から東西に延び、E2地区東側で南に折れて調査区外に広がるL字形の溝である。西端は消失し、東側はSE01・SE02を切り、南側は調査区外に広がる。途中SD11・SD13・SK75を切っている。確認できる長さは52.0m、最大幅3.6m、最大深0.41mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はa・bセクションで黄灰色砂粘質土層、cセクションは第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色粘質土層である。出土遺物は須恵器(1051)、土師器、中世土師器(0945)、中国製白磁(0948)、瀬戸美濃、珠洲(0951)、越前、越中瀬戸(0946・0947・0949・0950・0952・0953・1006)、伊万里、唐津(0966)、木製品は棒状木製品(278・324)、漆器(312～317)、櫛(318)、加工木(319)、板状木製品(322・325)、杭(326)、金属製品では銅鏡(008)、包丁(100)、石製品では砥石(47・48)、行灯(49)、火輪(50・51)、石鉢(52)、地輪、めのうが認められる。

**SD11** (図面078・097) : 北端はSD10に切られ、南北に延びる不整形の溝で南端はSD15に切られる。長さ3.9m以上、最大幅1.1m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(0954)、瀬戸美濃、

珠洲、八尾、越中瀬戸、土製品が認められる。

**SD12**（図面078・097）：北端は消失し、南北に延びる不整形の溝で南端はSD15に切られる。長さ2.08m以上、最大幅0.94m、最大深0.2mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層である。出土遺物は中世土師器、珠洲が認められる。

**SD13**（図面078・097）：北端はSD10に切られ、南端は消失している直線の溝である。長さ2.1m以上、最大幅0.8m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD14**（図面078・097）：北側調査区外より南北に延び、西側へ分岐してT字状の溝である。SD15・SD18に切られ、南端は消失している。長さ12.2m以上、最大幅1.4m、最大深0.23mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は須恵器(1049)、土師器、中世土師器、瀬戸美濃(0962)、珠洲、越前(0963)、伊万里が認められる。

**SD15**（図面078・079・097・098）：調査区を東西に横断する直線の溝で、東側調査区外に延び、SD30に切られ、SD11・SD12・SD14・SD17・SD22を切っている。確認できる長さは44.0m、最大幅1.5m、最大深0.28mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は各セクションとも暗灰黄色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(0955・0956)、瀬戸美濃、珠洲(0957)、越中瀬戸、土製品、木製品では加工木(279)、横樋(299)、漆器(321)が認められる。

**SD16**（図面078・097）：北端はSD15に切られ、SD22を切り込みながら南西に延びる直線の溝で、南端は消失している。長さ2.2m以上、最大幅0.5m、最大深0.11mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲が認められる。

**SD17**（図面078・097）：北端はSD15に切られ、南北に蛇行しながら延びており、南端はSD18に切られる。長さ3.0m以上、最大幅0.5m、最大深0.04mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

**SD18**（図面078・097）：東西に延びる不整形の溝で西端は消失し、東端はSK01に切られる。途中SK03・SK04に切られ、西側でSD14を切り込んでいる。長さ15.5m以上、最大幅1.2m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は、a・bセクションとも黒褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器(0967・0968)、中国製白磁(1017)、珠洲(0970)、越中瀬戸(0969)その他木製品が認められる。

**SD19**（図面078・097）：東西に延びる不整形の溝で、両端とも消失している。途中SK81を切り込んでいる。長さ10.9m、最大幅0.9m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲、八尾、瀬戸美濃、越中瀬戸(0964)、唐津、石製品では砥石(32)が認められる。

**SD20**（図面078・089・097）：東側調査区外からSD24を切り込み東西に延びる直線の溝で、西端はSD25を切り込んで消失している。途中SK07・SP30・SP31・SP34・SK37・SP39に切られる。確認できる長さは25.6m、最大幅1.1m、最大深0.03mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層のみとなる。出土遺物は須恵器、中世土師器(0995)、珠洲、越中瀬戸、唐津(0996)、近世陶磁器、木製品では板状木製品(274)がある。

**SD21**（図面078・097）：両端が消失し、東西に延びる直線の小溝である。長さ4.5m、最大幅0.3m、最大深0.03mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層からなる。出土遺物は中世土師器、珠洲が認められる。

**SD22** (図面078・097)：北端はSD15に切られ、南北に広がる不整形の溝である。途中SD16に切られる。長さ4.1m以上、最大幅2.6m、最大深0.23mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：オリーブ褐色砂粘質土層、第3層：黒褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、珠洲(0965)が認められる。

**SD23** (図面078・097)：東端はSE07を切り込んで消失しており、東西に延び、西側で南に折れて調査区外に広がる逆し字形の溝である。途中SP32・SP35に切られる。確認できる長さは21.6m、最大幅0.9m、最大深0.21mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD24** (図面078・097)：東側調査区外から東西南北に不整形に広がる溝である。南側に分岐し南北に延びており、途中SK07・SE08・SE10・SD20に切られ、SK19・SK20を切り込む。確認できる長さは東西が6.0m、南北の長さは10.0m、最大幅2.6m、最大深0.2mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は、aセクションで暗灰黄色砂粘質土層、bセクションで第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層からなる。出土遺物は中世土師器(0971～0977)、中国製青磁(0981)、珠洲(0982)、瀬戸美濃、越中瀬戸(0978・0979)、伊万里(0980)、唐津、木製品では円形板(276)、石製品では砥石(53)が認められる。

**SD25** (図面078・097)：調査区西側で南北に延びる直線の溝で、調査区外に広がる。西側にSD26が併走する。途中SD20に切られる。確認できる長さは22.1m、最大幅3.0m、最大深0.48mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は灰黄褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器(1059)、中世土師器(0983～0987)、中国製青磁、瀬戸美濃(0992・0993)、珠洲(0988・0994)、越中瀬戸(0989)、唐津(0991)、伊万里、施釉陶器(0990)、木製品では曲物(280)、漆器(281)、円形板(282・283)、棒状木製品(288・289)、金属製品では板状鉄製品(099)、石製品では砥石(33)、石臼(34)、火輪(35)が認められる。

**SD26** (図面078・097)：SD25の西側で南北方向に併走する溝であるが調査区外に延びている為、不明瞭である。確認できる長さは14.0m、最大幅2.3以上m、最大深0.29mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は第1層：(5Y4/2)灰オリーブ色粘土層、第2層：(5Y5/2)灰オリーブ色粘土層、第3層：オリーブ黒色粘土層に分層される。出土遺物は土師器(1057)、中世土師器(0997・0998)、瀬戸美濃(1002・1003)、珠洲(1005・1019)、越中瀬戸(1001・1004)、伊万里(0999・1000)、木製品では漆器(284～286)、板状木製品(292)、石製品では石臼(36)、砥石(37)、茶臼(38)が認められる。

**SD28** (図面079・098)：東側に併走するSD29を切り込みながら南北に横断する不整形の溝で、北端はSD34に切り込まれ調査区外に延びており、南側はSD10に切り込まれながら調査区外に延びる。途中SK76に切られる。確認できる長さは21.3m、最大幅2.5m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はa、bセクションとも灰黄褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、中世土師器(1020・1021)、珠洲(1018・1030・1031)、八尾、越中瀬戸(1022～1029)、伊万里、唐津、木製品では漆器(331～333)、板状木製品(327・330・334・336)、柄杓(335)、石製品では凹石(55)、板碑(56)、バンドコ、めのうが認められる。

**SD29** (図面079・098)：SD28に切り込まれながら南北に延びる不整形の溝で、調査区外に延びている。確認できる長さは15.2m、最大幅1.3m以上、最大深0.25mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1050)、土師器、中世土師器(1010)、珠洲、木製品では棒状木製品(337)、金属製品では鉄滓(102)が認められる。

**SD30** (図面079・098)：調査区中央部を南北に走り、西側に折れる逆L字形の区画溝である。SD15に切られ途切れSD35に続く。西壁付近で一部北側に分岐してSD15に切られ、E1地区に延びて消滅している。途中SD03・SD10に切られる。長さ29.0m以上、最大幅1.8m、最大深0.44mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は(2.5Y3/2・2.5Y3/1)黒褐色砂粘質土層からなる。出土遺物は瀬戸美濃(1013)、珠洲(1014)、越中瀬戸(1012・1016)、木製品では漆器(320)が認められる。

**SD31** (図面079・098)：東端は消失し東西に延びる直線の溝で、西端はSD32に切られる。途中SK52を切る。長さ2.8m以上、最大幅0.4m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD32** (図面079・098)：北端は消失し、南北に延びる直線の小溝で、南端はSK64に切られる。長さ1.5m以上、最大幅0.3m、最大深0.14mを測る。断面形態はV字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD33** (図面079・098)：東端は消失し、東西に延びる直線の溝である。西端はSD01に切られ、途中SD30を切っている。長さ6.1m以上、最大幅0.4m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD34** (図面079・098)：北側調査区外より南北に延びる不整形の溝でSD28を切り込んでいる。南端は消失している。確認できる長さは4.2m、最大幅1.1m以上、最大深0.17mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は中世土師器、木製品では柄杓(328)、加工木、金属製品では鉄滓が認められる。

**SD35** (図面079・098)：SD30から続く同一遺構と見られる。東側調査区外に延びている。確認できる長さは5.1m、最大幅2.6m、最大深0.6mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器(1009)、珠洲、越中瀬戸、木製品では板状木製品(340)、棒状木製品(344)、独楽(343)、桶側板(341・342)、石製品では火輪(57)、めのうが認められる。

**SD36** (図面079・098)：調査区北東端で調査区外に広がる不整形の溝である。確認できる長さは6.7m、最大幅1.5m以上、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：灰黄色砂層、第3層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は土師器、中世土師器、珠洲、木製品では棒状木製品(304)が認められる。

**SD37** (図面079・098)：北端はSD15に切られ、南北に延びて南端はSD30に切られる直線の溝である。長さ4.2m以上、最大幅1.4m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ黄色砂層となる。出土遺物は中世土師器(1007)、木製品では曲物(294)、加工木が認められる。

## 2. 近世の遺構

近世面の遺構はE2地区のおよそ1/3の範囲で確認されている。今回の報告書では中・近世面と分けて図示されているが実際の調査では同一面で検出されたものである。しかし、遺構の種類や覆土、切り合い関係、配置などを検討した上で、図上において分離している。近世面で検出された遺構は池状遺構とそれに伴う石列である。SX01は長径約10.0m、短径約7.0mの大きな池状の遺構で、南壁にはSX03の石列が東西に並べられており、北側を意識して配置されている。また、東壁にもやや崩れたような石列がみられる。覆土や規模などから池状遺構と考えられ、SX02の石列の間から水を田畠に供給していた遺構群と考えることができよう。以下、遺構について記述しておく。

**SX01** (図面099)：平面形態は不整形で、長径10.8m以上、短径7.05m、深さ0.5mを測る。覆土はオーリー褐色砂粘質土層を基調とする。堆積物がラミナなどの水成堆積を示しており、又、SX02との関連から池状の造構と考えられ、北側へ水を供給していた可能性が高い。南壁と東壁には石列がみられ、東壁の石列はやや不整形を呈している。遺物は須恵器、中世土師器(1037)、瀬戸美濃(1038)、越中瀬戸(1015・1039～1042・1045・1046)、越中丸山、伊万里(1043)、唐津(1036・1044・1047)、近世陶磁器、木製品では下駄(308・311)、円形板(309)、石製品が出土している。

**SX02** (図面099)：平面形態は不整形で、長径2.48m、短径0.83m、深さ0.72mを測る。30～80cmの隙による石列が左右二列あり、その間の堆積物は水成堆積を呈していた。出水口的な機能を考えられる。覆土は第1層：(2.5Y3/2)黒褐色砂粘質土層、第2層：(2.5Y3/1)黒褐色粘質土層に分層される。遺物は中世土師器、珠洲、伊万里、木製品では箸(302)、加工木(295)が出土している。

**SX03** (図面099)：平面形態は長方形で、長辺11.5m、短辺1.6m、深さ0.54mを測る。SX01に伴う石列と考えられる。覆土は灰黄色砂層の単層となる。遺物は中世土師器、越中瀬戸、石製品では石臼(下)(54)が出土している。

### 3. 近世・近代の造構

近世・近代面ではE2地区全体に造構が分布しているが密度は希薄である。造構には耕作関連のものがほとんどで、畦畔や区画していた石列、溝などが検出されている。切り合いや配置から2時期を考えられる。

#### 土坑

**SK80** (図面100)：平面形態は円形で、SX09を切り込む。規模は径1.4～1.5m、深さ0.1mを測る。覆土はにぶい黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 溝

**SD39** (図面100)：近世の溝。SX08・SX09の間を直角に延びる直線の溝である。両端とも消失している。長さ5.6m、最大幅0.4m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は明黄褐色砂層となる。出土遺物は認められない。

**SD40** (図面100)：近世の溝。北側調査区外より南北に延びる直線の溝で併走するSD41を切り込んでいる。南端は試掘トレンチで切れている。確認できる長さは12.1m、最大幅0.5m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、a・bセクションとも黒褐色砂質土層となる。出土遺物は珠洲、唐津が認められる。

**SD41** (図面100)：近世の溝。SD40に切り込まれながら南北に併走している直線の溝である。北端は調査区外に広がっており、南端は試掘トレンチにより切られる。長さ13.9m、最大幅0.52m、最大深0.14mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、a・bセクションともにぶい黄褐色砂質土層となる。出土遺物は伊万里、唐津(1048)が認められる。

#### その他の造構

**SK04** (図面100)：畦畔。平面形態は拳大～人頭大の石をT字状に並べ、SD40・41を切る。長さ22.0m、最大幅0.9mを測る。石列が東西に9m、南北に13m伸び、SX06に続く。覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK05** (図面100)：畦畔。西側が調査区外となるため平面形態は不明で、長さ1.1m以上、最大幅0.5mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SX06** (図面100) : 畦畔。平面形態は不整形で、SX04に続く。長さ12.5m以上、最大幅0.5m、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SX07** (図面100) : 畦畔。平面形態は直線状で、長さ6.15m以上、最大幅0.6m、深さ0.06mを測る。試掘トレーナーで途切れているが、更に北へ延びていた可能性がある。覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SX08** (図面100) : 畦畔。平面形態はT字状で、長さ18.4m以上、最大幅0.8m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SX09** (図面100) : 畦畔。平面形態はT字状で、長さ13.9m以上、最大幅0.91m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層なる。出土遺物は認められない。

## (6) F1 地区

F1地区は中名V遺跡の西寄りに位置し、用水路取り付け部分に伴う調査のため調査区自体が南北に細長く設定されている。遺構検出面は発掘調査の段階で上層・下層の2面調査が実施されたが、上層と下層の遺構深度はさほどなく、時期的にもあまり差はみられないため、今回の報告書では同一面として図示した。検出された遺構には礎石建物、掘立柱建物、上坑、溝などがあり、集落遺構が主体となっている。遺構密度は低く、F2・F3地区の道路を挟んで反対側付近と礎石建物付近に遺構が密集していることが看取される。近接しているF2・F3地区とは、時期的にもほぼ同じで、中世から近世が主体である。以下に遺構の記述を簡単に行う。

### 礎石建物・掘立柱建物

**SB01～SP01～SP04** (図面107・108) : SB01は礎石建物である。規模は西側が調査区外となるが、梁行3間(5.34m)である。柱間は梁方向1.5m～1.8mで、直径約0.8～1.2mの一亘穴を掘った後に直径0.4m～0.7mの扁平な自然石を配置している。礎石の棟方向はN13°Eである。柱穴形態は円形～楕円形で、規模は径0.65～1.20m、深さ0.14～0.23mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。礎石周辺には0.2m前後の自然石が分布しており、礎石建物に伴うと考えられる。

**SB02～SP05～SP08** (図面104・108) : 建物の東側が調査区外となるが、梁行3間(3.54m)、桁行は不明の側柱建物である。建物の棟方向はN20°W、柱間距離は梁行0.75m～1.7mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.24m～0.52m、深さ0.07m～0.18mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。柱穴内に出土遺物は認められない。

### 土坑

**SK01** (図面108) : 平面形態は梢円形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径0.87m以上、短径0.53m、深さ0.17mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK02** (図面108) : 平面形態は円形で、規模は径0.31m、深さ0.12mを測る。土坑内は礫が分布している。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK03** (図面108) : 平面形態は梢円形で、SK05に切られる。規模は長径1.15m、短径0.63m、深さ0.1mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK04** (図面108) : 平面形態は梢円形で、西側が溝に切られる。規模は長径0.44m以上、短径0.41m、深さ0.14mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1332)が

認められる。

SK05 (図面108)：平面形態は円形で、SK03を切る。規模は径0.43～0.45m、深さ0.23mを測る。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK06 (図面108)：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.1m、短径0.47m以上、深さ0.09mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK07 (図面109)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.51m、短径0.78m、深さ0.09mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK08 (図面109)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.54m、短径0.62m、深さ0.28mを測る。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK09 (図面109)：平面形態は梢円形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径1.07m、短径0.46m以上、深さ0.03mを測る。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK10 (図面109)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.32m、短径0.86m、深さ0.14mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK11 (図面109)：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.44m、短径0.5m以上、深さ0.14mを測る。上坑内は礫が散在している。覆土は褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK12 (図面109)：平面形態は不整形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径1.3m、短径0.86m以上、深さ0.16mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK13 (図面109)：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径3.99m以上、短径2.44m、深さ0.27mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK14 (図面109)：平面形態は不整形で、SK15を切り東側は調査区外に広がる。規模は長径1.17m、短径0.3m以上、深さ0.09mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK15 (図面109)：平面形態は不整形で、SK14に切られ、東側は調査区外に広がる。規模は長径1.66m以上、短径1.49m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK16 (図面110)：平面形態は不整形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径0.61m以上、短径0.56m、深さ0.12mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK17 (図面110)：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径2.5m、短径0.87m以上、深さ0.43mを測る。覆土は第1層：オリーブ褐色砂粘質土層、第2層：黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK18 (図面110)：平面形態は不整形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径3.42m以上、短径0.55m以上、深さ0.11mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1330)、中国製青磁、越前がある。

SK19 (図面110)：平面形態は円形で、規模は径0.42～0.45m、深さ0.1mを測る。覆土はオリーブ褐

色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK20** (図面110)：平面形態は不整形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径2.17m、短径0.41m以上、深さ0.32mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄褐色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK21** (図面110)：平面形態は不整形で、東西共に調査区外に広がる。規模は長径2.29m、短径2.17m以上、深さ0.16mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ褐色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK22** (図面110)：平面形態は不整形で、東西共に調査区外に広がる。規模は長径2.36m、短径1.42m以上、深さ0.54mを測る。覆土はオリーブ褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

#### 溝

**SD01** (図面107・111)：北端は消失し、南北に延びる不整形の溝で東側調査区外に広がる。SD03に東西方向に切られ途切れる。確認できる長さは7.4m、最大幅1.0m、最大深0.17mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SD02** (図面107・111)：南北に延びる溝で西側は調査区外に広がる。途中SD03に切られ途切れる。確認できる長さは9.2m、最大幅1.0m、最大深0.24mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：オリーブ褐色砂質土層、第2層：暗オリーブ褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(1333・1334)、珠洲が認められる。

**SD03** (図面107・111)：調査区を東西に横断し、調査区外に広がる不整形の溝である。SD01・SD02を切る。確認できる長さは2.8m、最大幅0.9m、最大深0.23mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層からなる。出土遺物は中国製青磁がある。

**SD04** (図面107・111)：調査区を東西に横断し、調査区外に広がる直線の溝である。確認できる長さは2.9m、最大幅1.9m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂質土層からなる。出土遺物は認められない。

**SD05** (図面107・111)：北東端は消失し、南西に延びる直線の溝で調査区外に広がっている。確認できる長さは3.4m、最大幅0.5m、最大深0.07mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

**SD06** (図面107・111)：南北に延びる直線の溝で調査区外に広がっている。確認できる長さは2.7m、最大幅0.5m、最大深0.18mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄褐色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SD07** (図面105・111)：SD08に併走して東西に延び、調査区外に広がる直線の溝である。確認できる長さは2.1m、最大幅0.9m、最大深0.29mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SD08** (図面105・111)：SD07に併走して東西に延び、調査区外に広がる直線の溝である。確認できる長さは2.2m、最大幅1.8m、最大深0.31mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黄褐色砂質土層となる。出土遺物は珠洲(1389)、中世土師器が認められる。

**SD09** (図面104・111)：西端は消失し東西に延びる直線の小溝で、東側調査区外に広がる。確認できる長さは1.3m、最大幅0.3m、最大深0.22mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SD10** (図面104・111)：調査区を東西に横断する直線の溝で調査区外に延びている。確認できる長さ

は1.8m、最大幅1.9m、最大深0.31mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は第1層：(2.5Y3/3)オリーブ褐色砂粘質土層、第2層：(2.5Y4/3)オリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SD11（図面103・111）：東端は消失し東西に延びる直線の溝で西側は調査区外に広がっている。確認できる長さは2.4m、最大幅1.7m、最大深0.35mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器、八尾が認められる。

SD12（図面106・111）：調査区を南北に横断する直線の溝で調査区外に広がる。溝内には多数の礫が散在する。確認できる長さは2.6m、最大幅2.9m、最大深0.35mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SD13（図面104・111）：北東端が消失し南東に延びる不整形の溝で、西側調査区外に広がる。確認できる長さは2.9m、最大幅0.5m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層の単層からなる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SD14（図面107・111）：調査区北端付近で東西に横断する不整形の溝で調査区外に広がる。確認できる長さは2.8m、最大幅3.5m、最大深0.5mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗オリーブ褐色粘質土層の単層からなる。出土遺物は中世土師器、中国製青磁(1335・1336)、八尾が認められる。

SD15（図面106・111）：調査区を南北に横断する直線の溝で調査区外に広がる。確認できる長さは2.7m、最大幅0.7m、最大深0.12mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。

SD16（図面104・111）：調査区を東西に横断する不整形の溝で調査区外に延びている。確認できる長さは1.9m、最大幅2.6m、最大深0.5mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1331)が認められる。

SD17（図面106・111）：調査区を南北に横断する不整形の溝で両端とも調査区外に広がる。溝内に多数礫が散在している。確認できる長さは2.7m、最大幅1.3m、最大深0.16mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は褐色砂粘質土層の単層となる。出土遺物は須恵器、珠洲が認められる。

SD18（図面104・111）：調査区を東西に横断し、調査区外に広がる。確認できる長さは1.65m、最大幅2.8m、最大深0.41mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層からなる。出土遺物は土師器が認められる。

SD19（図面104・111）：調査区を東西に横断し、調査区外に広がる。確認できる長さは2.1m、最大幅1.4m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂粘質土層の単層からなる。出土遺物は認められない。

SD20（図面104・111）：調査区を東西に横断し、調査区外に広がる（西側開放）不整形の溝である。確認できる長さは4.15m、最大幅4.4m、最大深0.4mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色粘質土層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

## （7） F2・F3 地区

F2・F3地区は中名V遺跡の西側端に位置する。現在の用水路を切り回すために、調査は便宜的にF2地区とF3地区を分けて実施されたが、今回の報告書では2地区をまとめて報告する。遺構検出を中世包含層である暗灰黄色砂粘質土層直下で行い、遺構は東半分で黄褐色砂粘質土層を西半分で砂礫層を掘り込むように構築されている。遺構には掘立柱建物、井戸、大小の土坑、溝などがある。遺構

の分布は掘立柱建物や井戸などが調査区の北半分と南端にあり、その間を埋めるように大型の土坑群が存在している。大型土坑は周辺に柱を立てたとみられる柱穴があまりみられないものの建物に関連したものと考えられる。遺構の主な時期は、出土遺物から13～16世紀前半が中心と考えられる。

#### 掘立柱建物

**SB01・SP01・SP02**（図面112・113・116）：建物の西側が調査区外のため規模は不明だが、梁行1間（4.06m）の建物である。建物の棟方向はN 7° E。柱穴形態は梢円形～不整形で径0.25～0.7m、深さ0.3～0.5mを数える。柱穴内覆土は灰色粘質土層～黄灰色砂質土層となる。SP01・SP02には柱根が遺存している。

**SB02・SP03～SP10**（図面112・113・116）：建物の西側が調査区外となり、全体の規模は推定だが、梁行4間（5.1m）、桁行3間（6.42m）、床面積32.7m<sup>2</sup>とみられる。長方形プランの側柱建物で、建物の横方向はN84° W。柱間距離は、梁行0.8～1.65m、桁行1.1～3.14mである。柱穴形態は円～不整形で、径0.2～0.7m、深さ0.14～0.24mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～灰黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB03・SP11～SP14**（図面112・113）：北側が調査区外となる総柱建物で、梁行2間（3.3m）、桁行2間以上と推定される。建物の棟方向はN88° W、柱間距離は梁行1.58～1.73mである。柱穴形態は円～梢円形で径0.4～0.6m、深さ0.14～0.28mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～灰黄褐色砂質土層を基調とする。遺物はSP11で中世土師器（1472・1473）が出土している。

**SB04・SP15～SP22**（図面112・113・116）：建物の規模は、梁行2間（2.3m）、桁行2間（3.8m）の総柱建物で、平面プランは長方形である。建物の棟方向はN81° E、床面積は8.7m<sup>2</sup>となる。柱間距離は梁行1.0～1.28m、桁行1.62～2.24m。柱穴形態は円～不整形で、径0.35～0.65m、深さ0.08～0.3mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～灰黄褐色砂質土層を基調とする。遺物はSP16で中世土師器（1470）、石製品では磁石（61）が出土している。

**SB05・SP23～SP29**（図面112・114・116）：建物の規模は、梁行2間（4.1m）、桁行2間（5.6m）の総柱建物で、平面プランは長方形である。建物の棟方向はN 3° Wで、床面積は23.0m<sup>2</sup>。柱間距離は梁行2.0～2.05m、桁行2.6～2.9mとなる。柱穴形態は円～梢円形で、径0.3～1.15m、深さ0.07～0.32mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。遺物はSP23・SP29で中世土師器（1474・1475）が出土している。

**SB06・SP30～SP33**（図面112・115・116）：南側が調査区外のため建物の規模は不明だが、梁行2間（4.1m）、桁行2間以上の側柱建物である。建物の棟方向はN77° E、柱間距離は梁行1.75～2.3mとなる。柱穴形態は円～不整形で、径0.4～1.9m、深さ0.11～0.27mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB07・SP34～SP40**（図面112・114・116）：建物の規模は、梁行2間（4.7m）、桁行2間（6.2m）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN89° Wで床面積は29.1m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行2.3～2.4m、桁行2.9～3.15mである。柱穴形態は円～不整形で径0.2～0.9m、深さ0.06～0.55mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。柱穴内に出土遺物は認められない。

**SB08・SP41～SP49**（図面112・115・116・117）：建物の規模は、梁行2間（3.2m）、桁行2間（4.8m）の側柱建物で、平面プランは長方形である。これに1×1間（1.5×2.5m）の張出部分が桁行北側柱列に付設される。床面積は、この張出部を含めて19.2m<sup>2</sup>である。建物の棟方向はN78° E。柱間距離は、梁行1.5～1.68m、桁行2.24～2.5m。柱穴形態は円～梢円形で、径0.3～0.8m、深さ0.17～0.5mを数え

る。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黒褐色砂質土層を基調とする。遺物はSP43から中世土師器が出土している。

**SB09～SP50～SP53** (図面112・115・117) : 建物の規模は、梁行1間(2.3m)、桁行1間(3.3m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN88° Eで床面積は7.6㎡となる。柱穴形態は円～楕円形で径 0.25～1.0m、深さ0.1～0.3mを数える。柱穴内覆土は灰黄褐色砂質土層～黄灰色砂質土層を基調とする。遺物はSP53で中世土師器(1471)が出土している。

**SB10～SP54～SP59** (図面112・115・117) : 建物の北西部が調査区外となるため規模は不明だが、梁行3間(4.7m)、桁行2間以上の縦柱建物で、建物の棟方向はN38° Wである。柱間距離は、梁行1.55～1.6mとなる。柱穴形態は円～楕円形で径 0.25～0.4m、深さ0.08～0.55mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB11～SP60～SP64** (図面112・115・117) : 建物の規模は、梁行2間(5.3m)、桁行2間以上の縦柱建物で、南側は調査区外となる。建物の棟方向はN81° E、柱間距離は梁行2.65mである。柱穴形態は円～不整形で径0.6～1.55m、深さ0.3～0.42mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物はSP62で珠洲、石製品では磁石(62)が出土している。

#### 柵列

**SA01～SP65～SP67** (図面112・115・117) : SB11の北側に位置し、3基の柱穴が並ぶ柵列である。方位はN75° E、柱間距離は2.4～3.0mである。柱穴形態は楕円～不整形で径0.8～1.65m、深さ0.35～0.7mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物はSP66で瓦質土器、木製品では柱根(356)が出土している。

**SA02～SP68～SP70** (図面112・114・117) : SB05の西側に位置する柵列である。3基の柱穴が確認された。方位はN2° W、柱間距離は2.5mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.3～0.45m、深さ0.12～0.13mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SA03～SP71～SP73** (図面112・114・117) : SB05と重複する位置に確認された。3基の柱穴が2.6～3.3mの間隔で並ぶ。方位はN86° Eである。柱穴形態は円～不整形で径0.25～0.6m、深さ0.1～0.2mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SA04～SP74～SP79** (図面112・114・117) : SA05とはSB07を挟んで平行に位置する。方位はN2° W、9基の柱穴が0.7～1.2mの間隔で並ぶ。柱穴形態は円～楕円形で径0.2～0.4m、深さ0.15～0.3mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SA05～SP80～SP83** (図面112・114・117) : 4基の柱穴が確認される。方位はN2° W、柱間距離は1.2～2.6mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.25～0.4m、深さ0.25～0.55mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

#### 井戸

**SE01** (図面112・118・121) : SK05と関連が高いと考えられる石組井戸である。井筒部は掘方の中心よりやや片寄って設置される。内径は上面で0.8m、底面で0.52mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径1.93～1.95m、深さ0.78mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。覆土は井筒：黒褐色砂質土層、掘方：暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物は中世土師器(1393)、伊万里、木製品では板状木製品(360)が出土している。

**SE02** (図面112・118・121) : SK05内の石列と同時か、先行して作られた石組井戸である。井筒部は

掘方の中心に設置される。内径は上面で0.8m、底面で0.46mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径1.2~1.4m、深さ0.9mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は井筒：暗灰黄色砂質土層、掘方：暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SE03**（図面112・118）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.62m、底面で0.6mと、ほぼ垂直に石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径1.6~1.68m、深さ0.81mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。遺物は中世土師器が出土している。

**SE04**（図面112・119）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で1.05m、底面で1.01mと、ほぼ垂直に石組みされる。掘方の平面形態は不整形で、長径2.5m、短径1.89m、深さ0.98mの規模を測る。横断面の形態は筒型である。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。遺物としては中世土師器（1391・1392）、木製品では曲物が出土している。

**SE05**（図面112・119）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.68m、底面で0.45mと、やや角度を付けて右組みされる。掘方の平面形態は隅丸方形で、長辺1.72m、短辺1.55m、深さ0.97mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒内覆土は黄灰色砂質土層、掘方の覆土は灰黃褐色砂質土層を基調とする2層から構成される。出土遺物は認められない。

**SE06**（図面112・118）：石組井戸である。東側が調査区外となるため半裁状態で検出された。内径は上面で0.95m以上、底面で0.48mと、やや角度を付けて石組みされる。掘方の平面形態は円形で、規模は径2.45m、深さ0.65m程度。横断面の形態は擂鉢型である。井筒内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とし、掘方の覆土は第1層：オリーブ褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

#### 土坑

**SK01**（図面120）：平面形態は不整形でSP01・SP02・SK02～SK04に切り込まれ、西側、北側は調査区外に広がる。規模は長径9.0m、短径7.5m、深さ0.11mを測る。近世以降の建物に伴う上坑とみられるが、残りが良好でなくプランを把握するまでには至っていない。土坑内は部分的に深い掘り込みや石列が見られる。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器（1394・1395・1458）、珠洲（1396・1397）、八尾、瓦質土器、木製品では板状木製品（361）、石製品では砥石（60）が認められる。

**SK02**（図面120）：平面形態は不整形で、SK01を切り込む。規模は長径1.47m、短径1.25m、深さ0.29mを測る。部分的ではあるが縄が残存していることから、桶の存在が考えられる。覆土は第1層：灰色砂質土層、第2層：炭化物層となる。出土遺物には縄（竹）がある。

**SK03**（図面120）：平面形態は橢円形で、SK01を切り込む。規模は長径0.65m、短径0.36m、深さ0.31mを測る。土坑内は縄が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲が認められる。

**SK04**（図面120）：平面形態は円形で、SK01を切り込む。規模は径0.47~0.48m、深さ0.23mを測る。土坑内は縄が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、越中瀬戸がある。

**SK05**（図面121）：平面形態は不整形で、SK10・SP35・SP39・SP41を切り込み、SK06・SK07・SK11に切り込まれる。規模は長径5.1m、短径4.15m、深さ0.11mを測る。土坑内は縄が方形に巡らされ、その内側の底面は硬化している。土坑の北壁と石列の間には長辺0.9m、短辺5.5m、深さ0.1mの水溜

用とみられる木枠が掘えられている。また、土坑内の西壁にSE02が、東壁にSE01が存在しており、2期の井戸がSK05と同時期ないしはSE01→SE02の順に作り替えられたと考えられる。このSK05はSB07に伴う厨房的施設の役割を果たしていたと考えられる。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1398~1402)、瀬戸美濃(1403)、珠洲(1404・1405)、木製品では木枠(362~366)、石製品では砥石(63)がある。

**SK06** (図面121)：平面形態は円形で、SK05を切り込む。規模は径0.9~1.07m、深さ0.12mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK07** (図面121)：平面形態は長梢円形で、SK05を切り込む。規模は長径1.08m、短径0.64m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK08** (図面121)：平面形態は円形で、規模は径0.28m~0.30m、深さ0.21mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK09** (図面121)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.32m、短径0.22m、深さ0.34mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK10** (図面121)：平面形態は円形で、SK05内に位置する上坑で、規模は径0.25~0.26m、深さ0.2mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1419)がある。

**SK11** (図面121)：平面形態は隅丸長方形で、SE02・SK05を切り込む。規模は長辺1.22m、短辺0.59m、深さ0.09mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK12** (図面122)：平面形態は梢円形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径1.8m以上、短径1.6m、深さ0.4mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層、第3層：(2.5Y6/1)黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、中国製青磁(1422)がある。

**SK13** (図面122)：平面形態は梢円形で、SK15・SK16を切り込む。規模は長径0.9m、短径0.77m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK14** (図面122)：平面形態は円形で、SK15を切り込む。規模は径0.27~0.28m、深さ0.34mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK15** (図面122)：平面形態は梢円形で、SK16を切り込み、SK13・SK14に切り込まれ、土坑内にSP46・SP59が位置し、東側は調査区外に広がる。規模は長径6.2m以上、短径4.1m以上、深さ0.09mを測る。土坑の中央部に石列がみられ、石列の南側を意識して最大2段の石積を施し、補強している。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層、第3層：(2.5Y6/1)黄灰色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(1406~1410)、珠洲(1411)、瀬戸美濃、瓦質土器、金属製品では鉄滓(107)が認められる。

**SK16** (図面122)：平面形態は不整形で、SK13・SK15・SK19~SK21に切り込まれる。規模は長径3.75m以上、短径2.35m以上、深さ0.36mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK17** (図面123)：平面形態は梢円形で、SK20を切り込む。規模は長径1.7m、短径1.28m、深さ0.26mを測る。覆土は第1層：オリーブ褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK18** (図面123)：平面形態は楕円形で、SK20を切り込む。規模は長径2.45m、短径1.92m、深さ0.56mを測る。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中国製青磁、越中瀬戸、唐津(1434)がある。

**SK19** (図面123)：平面形態は不整形で、SK16・SK20を切り込む。規模は長径1.55m、短径0.8m、深さ0.08mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世七輪器がある。

**SK20** (図面123)：平面形態は楕円形で、SD03・SK16を切り込み、SK17～SK19に切り込まれる。規模は長径5.7m、短径4.5m、深さ0.49mを測る。土坑内は炭化物層の形成が認められ、炭化物層からは完形の中世土師器皿が出土している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1412～1418)、珠洲、木製品では箸(353・354)などがある。

**SK21** (図面123)：平面形態は不整形で、SD05と接合する。SK16との重複関係は不明である。規模は長径5.95m、短径4.9m、深さ0.21mを測る。土坑内は人頭大～拳大の礫が多量に見られる。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、瀬戸美濃(1423)、珠洲(1424・1425)、越中瀬戸がある。

**SK22** (図面123)：平面形態は楕円形で、SK21内に位置する土坑で、切り合い関係は不明である。規模は長径1.62m、短径0.5m、深さ0.11mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK23** (図面124)：平面形態は楕円形で、SK27を切り込む。規模は長径1.38m、短径0.76m、深さ0.66mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物はない。

**SK24** (図面124)：平面形態は不整形で、SK26を切り込む。規模は長径1.0m、短径0.78m、深さ0.41mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK25** (図面124)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.7m、短径0.85m以上、深さ0.21mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SK26** (図面124)：平面形態は不整形で、SK24に切り込まれ南側は調査区外に広がる。規模は長径5.09m、短径3.9m以上、深さ0.57mを測る。土坑内の西壁中央付近に約1.6m×1.6mの範囲で礫が密集する。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1428～1430)、中国製青磁(1426)、珠洲、八尾(1431)、越中瀬戸(1427)がある。

**SK27** (図面124)：平面形態は不整形で、SD04を切り込み、SK23に切り込まれる。長径6.5m、短径5.25m、深さ0.56mを測る。土坑内は人頭大～拳大の礫が多量に見られる。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、中世土師器、珠洲、越中瀬戸(1432)、伊万里(1433)、木製品では下駄(355)が認められる。

**SK28** (図面124)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.41m、短径0.31m、深さ0.13mを測る。土坑内は礫の石積みが見られる。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK29** (図面124)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.78m、短径0.53m、深さ0.16mを測る。土坑内は人頭大の礫が出土しており、礫石ないしは根石の可能性がある。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK30** (図面125)：平面形態は不整形で、規模は長径3.0m、短径1.65m以上、深さ0.19mを測る。土坑の西壁中央付近がやや突出し、礫が集中する。又、その集石の南辺と西辺は石列状を呈している。な

お、SB11との関連性は低いと考えられる。覆土は第1層：暗オリーブ褐色砂質土層、第2層：黄褐色砂質土層、第3層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK31（図面125）：平面形態は隅丸方形でSK32を切り込む。規模は長辺0.9m、短辺0.85m、深さ0.23mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK32（図面125）：平面形態は隅丸方形で、SD04を切り込み、SK31に切り込まれる。規模は長辺5.5m、短辺4.4m、深さ0.24mを測る。溝との重複した部分は石列により補強を行っている。石積は最大2段積みで、石列より北側の空間を利用したと考えられる。なお、底面は凹凸があり、平坦に整えた形跡が認められない。整地の為の土坑の可能性もある。土坑内は礫詰め状態で石列・石積みがある。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器、中国製青磁(1420)、珠洲、八尾、越中瀬戸(1421)がある。

SK33（図面126）：平面形態は不整形で、SK34を切り込み、SD02に切り込まれる。規模は長径3.15m、短径3.0m、深さ0.45mを測る。土坑内は大小の礫が密集し肩部に最大2段の石積を施した石列が見られる。礫は埋め戻した時に入れられており、又、石積との関連性も考慮すると建物に付随する土坑とも考えられる。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層、第3層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(1435～1441)、珠洲、八尾、瓦質土器(1442)、金属製品では鉄滓(108)がある。

SK34（図面126）：平面形態は不整形で、SK35を切り込み、SK33・SK71に切り込まれる。規模は長径2.13m、短径1.62m、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK35（図面126）：平面形態は梢円形で、SK34に切り込まれる。規模は長径4.2m、短径3.8m、深さ0.31mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

SK36（図面112・126）：平面形態は不整形で、SD05に切られる。規模は長径7.45m、短径5.0m、深さ0.3mを測る。土坑内は人頭大～拳大の礫が投棄されている。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1443)、珠洲、越中瀬戸(1445)、近世陶磁器、瓦質土器(1444)、木製品では櫛(358)が認められる。

SK37（図面127）：平面形態は梢円形で、SK38を切り込む。規模は長径0.51m、短径0.47m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

SK38（図面127）：平面形態は梢円形で、SK37・SK40・SK43に切り込まれる。規模は長径3.42m、短径1.73m、深さ0.19mを測る。土坑内は直径0.5m程度のやや大きめの礫が南側に混入する。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

SK39（図面127）：平面形態は長梢円形で、SK46を切り込み、SK41・SK45に切り込まれる。規模は長径2.94m、短径1.08m、深さ0.15mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1459～1461)がある。

SK40（図面127）：平面形態は不整形で、SK37・SK43・SK45を切り込む。規模は長径1.08m、短径1.04m、深さ0.26mを測る。土坑内は人頭大の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK41（図面127）：平面形態は隅丸方形で、SK39・SK44・SK53・SP80を切り込む。規模は長辺1.7m、短辺1.13m、深さ0.3mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1452)、珠洲、箸がある。

**SK42** (図面127)：平面形態は橢円形で、規模は長径0.5m、短径0.34m、深さ0.38mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK43** (図面127)：平面形態は橢円形で、SK38を切り込み、SK40に切り込まれる。規模は長径0.57m以上、短径0.46m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：黄褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は越中瀬戸がある。

**SK44** (図面127)：平面形態は円形で、規模は径0.24～0.25m、深さ0.33mを測る。土坑内は礫が密集している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：オリーブ褐色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器、中国製天目茶碗(1476)、珠洲がある。

**SK45** (図面127)：平面形態は橢円形で、SK40に切り込まれる。規模は長径0.65m、短径0.5m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

**SK46** (図面127)：平面形態は長橢円形で、SP36・SP41を切り込み、SK39に切り込まれる。規模は長径1.1m、短径0.5m、深さ0.19mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK47** (図面128)：平面形態は橢円形で、規模は長径0.3m、短径0.23m、深さ0.28mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1453)が認められる。

**SK48** (図面128)：平面形態は隅丸長方形で、SK54・SK55を切り込む。規模は長辺1.14m、短辺0.58m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第3層：黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、越中瀬戸が認められる。

**SK49** (図面128)：平面形態は隅丸長方形で、SK51・SK57を切り込む。長辺1.48m、短辺0.84m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫詰め状態である。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK50** (図面128)：平面形態は隅丸方形で、SK51を切り込む。長辺1.78m、短辺1.68m、深さ0.32mを測る。土坑底面に炭化物層が形成されている。土坑内に拳大の礫が分布する。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1448～1450)、中国製青磁、金属製品では釘状(109)がある。

**SK51** (図面128)：平面形態は不整形で、SP43・SK49・SK50に切り込まれる。規模は長径1.66m、短辺1.17m、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層、第3層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK52** (図面128)：平面形態は円形で、規模は径0.3～0.37m、深さ0.45mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1457)が認められる。

**SK53** (図面128)：平面形態は橢円形で、SK41・SK57に切り込まれる。規模は長径0.94m、短径0.68m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK54** (図面128)：平面形態は不整形で、SK48に切り込まれる。規模は長径0.28m、短径0.25m、深さ0.3mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK55** (図面128)：平面形態は橢円形で、SK48に切り込まれる。規模は長径0.72m、短径0.45m、深さ0.21mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物

は認められない。

**SK56** (図面128) : 平面形態は梢円形でSP42・SP54、SK57・SK58を切り込む。規模は長径0.94m、短径0.73m、深さ0.07mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK57** (図面128) : 平面形態は不整形で、SK56に切り込まれる。規模は長径0.94m以上、短径0.73m、深さ0.19mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK58** (図面128) : 平面形態は不整形で、SK53を切り込み、SK49・SK56に切り込まれ、SP81は土坑内に位置する。規模は長径0.82m、短径0.37m以上、深さ0.19mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1451)が認められる。

**SK59** (図面128) : 平面形態は隅丸方形で、東側は調査区外に広がる。木製の繼手が北西端から出土している。繼手から節を抜いた竹管が南東方向に伸び、調査区外へと続く。繼手・竹管を設置するに際して、掘られたものは竹管の方向と土坑の軸が一致しない為、関連性は低いと考えられる。規模は長辺1.16m以上、短辺1.05m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器、木製品では繼手(359)がある。

**SK60** (図面128) : 平面形態は円形で、規模は径0.62~0.7m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が1点出土している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK61** (図面128) : 平面形態は不整形で、規模は長径1.18m、短径0.98m、深さ0.36mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK62** (図面128) : 平面形態は不整形で、SP72を切り込む。長径2.63m、短径1.44m、深さ0.38mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：灰黄褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層、第3層：暗灰黄色砂層に分層される。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK63** (図面129) : 平面形態は不整形で、SP39・SK64を切り込む。規模は長径0.82m、短径0.72m、深さ0.08mを測る。土坑内は人頭大～拳大の礫が充填されている。覆土はオリーブ褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK64** (図面129) : 平面形態は梢円形で、SK63に切り込まれる。規模は長径0.63m、短径0.54m、深さ0.18mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SK65** (図面129) : 平面形態は円形で、規模は径0.27~0.28m、深さ0.17mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK66** (図面129) : 平面形態は梢円形で、SP76に切られる。規模は長径1.03m、短径0.85m、深さ0.18mを測る。土坑内は拳大～人頭大の礫が集中している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK67** (図面129) : 平面形態は不整形で、規模は長径0.96m、短径0.42m、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK68** (図面129) : 平面形態は不整形で、SP05に切られる。SB02の南東端に位置するが、建物に付属するかは不明である。規模は長径1.76m、短径1.1m、深さ0.27mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK69** (図面129) : 平面形態は梢円形で、SP31を切り込む。規模は長径2.23m、短径1.68m、深さ0.34mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：

(2.5Y4/2) 暗灰黄色砂質土層炭混となる。出土遺物は中世土師器(1463～1465)が認められる。

SK70 (図面129)：平面形態は長楕円形で、規模は長径1.44m、短径0.79m、深さ0.16mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は灰黃褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK71 (図面129)：平面形態は不整形で、SK34を切る。規模は長径1.31m、短径0.92m、深さ0.16mを測る。覆土は灰黃褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1462)、唐津がある。

SK72 (図面130)：平面形態は掘方が円形で、SK73を切る。規模は径1.32～1.45m、深さ0.67mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。壁面は砂質土で充填されており、その上部には粘土が巡っている。桶状の木製品を埋設した可能性があるものの、木片や腐食した様な痕跡は確認されていない。出土遺物は中世土師器(1446)、珠洲、土師質土器の羽釜(1447)などがある。

SK73 (図面130)：平面形態は不整形で、SK74を切り込み、SK72に切り込まれる。規模は長径2.03m、短径0.97m、深さ0.4mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：(2.5Y4/2) 暗灰黄色砂質土層、第3層：(2.5Y5/2) 暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器、珠洲がある。

SK74 (図面130)：平面形態は不整形で、SK73に切り込まれ東側は調査区外に広がる。規模は長径0.6m、短径0.27m以上、深さ0.2mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK75 (図面130)：平面形態は不整形で、SP26・SP29を切り込む。規模は長径2.93m、短径2.03m、深さ0.27mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1467)がある。

SK76 (図面130)：平面形態は楕円形で、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.74m以上、短径1.32m、深さ0.49mを測る。覆土は第1層：オリーブ褐色砂質土層、第2層：オリーブ褐色砂層、第3層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は中世土師器がある。

SK77 (図面130)：平面形態は楕円形で、SD02に切り込まれる。規模は長径1.03m、短径0.75m、深さ0.13mを測る。土坑内は拳大の礫が充填されている。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK78 (図面130)：平面形態は不整形で、石列に切り込まれる。この石列は近世ないし現代の用水に付随するものである。規模は長径1.64m、短径1.45m以上、深さ0.3mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は灰オリーブ色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK79 (図面130)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.52m以上、短径0.36m、深さ0.17mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK80 (図面130)：平面形態は円形で、規模は径0.29m、深さ0.13mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は灰黃褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK81 (図面130)：平面形態は円形で、規模は径0.36～0.38m、深さ0.22mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK82 (図面130)：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.87m、短辺1.07m、深さ0.08mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1466)がある。

SK83 (図面131)：平面形態は不整形で、SK84・SK85を切り込む。規模は長径0.96m、短径0.7m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1468)、越中瀬戸(1469)がある。

SK84 (図面131)：平面形態は楕円形で、SK83に切り込まれる。規模は長径0.78m、短径0.55m以上、

深さ0.35mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK85** (図面131)：平面形態は不整形で、SK83に切り込まれる。規模は長径3.39m、短径1.0m以上、深さ0.13mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1454・1455)、珠洲(1456)、伊万里がある。

**SK86** (図面131)：平面形態は円形で、規模は径0.26～0.3m、深さ0.15mを測る。土坑内は人頭大の扁平な礫が平坦面を上に向けて出土している。礫石ないしは根石の可能性がある。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK87** (図面131)：平面形態は椭円形で、規模は長径1.53m、短径0.73m、深さ0.24mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK88** (図面131)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.42m、短径0.85m、深さ0.5mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層、第3層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

**SK89** (図面131)：平面形態は不整形で、規模は長径1.5m、短径1.35m、深さ0.64mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層、第3層：オリーブ褐色砂層に分層される。出土遺物は認められない。

**SK90** (図面131)：平面形態は不整形で、規模は長径1.24m、短径1.06m、深さ0.5mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第3層：黄褐色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

#### 溝

**SD01** (図面112・132)：南北に延びる直線の溝である。北端、南端とも消失している。長さ3.5m、最大幅0.65m、最大深0.19mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は中世土師器(1478)が認められる。

**SD02** (図面112・132)：西端は消失し南東方向に軽い円弧を描いて延び、南端はSD05に切られている。途中SD03を切る。長さ9.7m以上、最大幅1.0m、最大深0.22mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、a・bセクションとも黒褐色砂質土層である。出土遺物は中世土師器(1479・1480)、珠洲、八尾、越中瀬戸、近世陶磁器が認められる。

**SD03** (図面112・132)：南北に延びる直線の溝で北端は消失し、南端はSD02に切られる。長さ2.8m以上、最大幅0.5m、最大深0.26mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物は認められない。

**SD04** (図面112・132)：東西に広がる直線の溝である。SK27、SK32に切られている。長さ30.0m、最大幅2.7m、最大深0.6mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションでは黒褐色砂質土層、bセクションでは暗灰黄色砂質土層を基調とし、cセクションでは黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1477)、珠洲が認められる。

**SD05** (図面112・132)：近代以降の水路跡と思われる。東西に拡がる不整形の溝で西端、東端とも消失している。一部北側に延びSK21に接合している。下層のSK36を切っている。長さ25.3m、最大幅5.7m、最大深0.2mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は、aセクションで黒褐色砂質土層を基調とし、bセクションで第1層：黒褐色砂質土層、第2層：黄灰色砂粘質土層である。出土遺物は中世土師器、瀬戸美濃、珠洲、越中瀬戸、伊万里、唐津、近世陶磁器が認められる。

### 3 中名VI遺跡（遺構）

#### （1） A地区

A地区（平成11年度調査）は中名VI遺跡のほぼ中央に位置し、道路の建設部分のため幅約20m、長さ約120mの南北に細長い調査区で、南側はX245で中名V遺跡のD1地区と接している。A地区は大きく古代、中世、近世の3時期の遺構が検出されている。古代と中世は調査区全体から集落遺構が検出されており、近世は集落遺構が確認されず、わずかに農業関連遺構が検出されたにすぎない。農業関連遺構は南側で接する中名V遺跡D1地区にまたがっており、中名V遺跡の記述の中でふれられているためここでは取り上げない。したがって、記述の中心は必然的に古代と中世となる。

##### 1. 古代の遺構

古代の集落遺構は調査区の北側に分布し、南側は自然流路であるSD02が北流している。中名V遺跡D1・D2・D4の古代集落とはこのSD02（中名V遺跡D1・D2・D4地区SD07と同一遺構）を挟んで対岸に立地している様相がうかがえる。検出された遺構は堅穴住居6棟、土坑、溝などがある。最も古い堅穴住居（SI01・SI06）は7世紀代にさかのぼるものがあり、それ以降、奈良・平安時代をとおして集落が営まれていたと考えられる。堅穴住居の配置や相互の重複関係から数時期の遺構変遷が推定される。

###### 堅穴住居

SI01（図面134・140）：平面形態は方形を呈し、一辺3.08～3.21m、深さ0.14mを測る。主軸方位はN76°E、床面積は8.7m<sup>2</sup>となる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。壁際には幅約0.2m、深さ約0.1mの壁溝がめぐる。堅穴の覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする5層からなる。カマドは東壁のやや北寄りの位置に構築されている。カマドの規模は幅0.68mで、主軸長は1.1m、堅穴外へ伸びる煙道は0.43m突出している。袖間の幅は0.36mと推定され、右袖に1個、左袖に1個の直径0.25mほどの自然縫を袖補強材としている。袖の構築には主に暗灰黄色砂粘質土層を用いている。カマド内には高杯の脚部が据えてあり、当初、カマドの支脚としての使用が考えられていた。しかし、表面には被熱痕がみられないため、支脚としての可能性は低く、おそらく住居廃絶時にカマドに遭棄されたものと考えられよう。このように、高杯がカマド内から出土する例は、本書の砂子田I遺跡のSI02でもみられる。カマドの覆土は褐灰色砂粘質土層を基調とする5層で構成される。堅穴住居の南西隅には平面が隅丸方形の貯蔵穴（SP001）が配置されており、直径0.52m、短径4.3m、深さ0.2mを測る。遺物は堅穴内のSP001から須恵器（1535）、燃焼部内・カマド周辺から土師器（1536・1537）が出土している。

SI02（図面134・140）：平面形態はやや台形を呈し、長辺3.35m、短辺2.53m以上、深さ0.14mを測る。主軸方位はN26°E、床面積は8.0m<sup>2</sup>となる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。堅穴の覆土は浅黄色砂粘質土層となる。カマドは北西側のほぼ中央に構築されている。カマドの規模は幅0.85mで、堅穴外へ伸びる煙道は0.77m突出している。袖石は残存しない。カマドの覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：にぶい黄色砂粘質土層となる。遺物は黒色土器（1538）、土師器（1539）が出土している。

SI03（図面134・141）：SI04を切り込む形で検出された。平面形態は方形を呈し、一辺2.14～2.77m、深さ0.24mを測る。主軸方位はN33°E、床面積は4.6m<sup>2</sup>となる。壁面の立ち上がりは緩やかである。堅穴の覆土は灰オーリーブ色砂粘質土層となる。カマドは一度作り替えられており、北東側のほぼ中央

にあったものを北方向へ移動させて、再度構築されている。カマドの規模は幅0.7m程度で、主軸長は1.35m、竪穴外へ伸びる煙道は0.9m突出している。カマドの覆土は暗灰黄色砂粘質土層を基調とする5層から構成される。袖石は残存しない。古いかまどの規模は幅0.8m程度、主軸長は1.4m、竪穴外へのびる煙道は0.6m突出し、黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SI04**（図面134・141）：平面形態は方形を呈し、一辺2.66～3.2m、深さ0.12mを測る。主軸方位はN33°E、床面積は6.9m<sup>2</sup>となる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。壁際には幅0.15m、深さ0.05～0.1m程度の壁溝が巡る。竪穴の覆土は灰オリーブ色砂粘質土層となる。カマドは北側の中心に構築されている。カマドの規模は幅0.6mで、主軸長は0.84m以上、竪穴外へ伸びる煙道は0.45m以上突出している。カマドの覆土は灰色砂粘質土層を基調とする4層から構成される。袖石は残存していない。出土遺物は認められない。

**SI05**（図面135・141）：平面形態は方形を呈するとみられ、長辺3.96m、短辺0.79m以上、深さ0.3mを測る。主軸方位はN77°Eとなる。壁面の立ち上がりは北側は傾斜を持つが、南側はほぼ垂直である。壁際には幅0.2m、深さ0.05m程度の壁溝が巡る。竪穴の覆土は第1層：灰色砂粘質土層、第2層：黒色粘質土層となる。カマドは東壁のやや北寄り位置に構築されている。カマドの規模は幅0.75mで、竪穴外へ伸びる煙道は0.72m突出している。燃焼部での袖間の幅は0.18mで、左袖に1個、右袖に2個の直径0.3mほどの自然縫を袖補強材としている。カマド内部には拳大の石が据えられており、支脚としての機能が考えられる。煙道から焚き口まで若干天井部が残存している。カマドの覆土は灰色粘質土層を基調とする9層から構成される。カマド右横には平面形が隅丸方形を呈する貯蔵穴とみられる穴を有している。長辺0.36m、短辺2.2m、深さ0.12mを測る。遺物は須恵器(1554～1558)、土師器(1553)、製塙土器が出土している。

**SI06**（図面135・142）：東側が調査区の壁にかかるため規模は不明だが、平面形態は長方形を呈し、長辺4.74m、短辺1.8m以上、深さ0.28mを測る。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。北壁と東壁の一部に幅0.1～0.2m、深さ0.05～0.1m程の壁溝が巡る。竪穴の覆土は淡黄色砂粘質土層を基調とする4層に分層される。カマドは東壁の南側にやや片寄った位置に構築されている。主軸方位はN88°Eとなる。石組みの残りは良好で、袖間の幅は0.25m、左袖に3個、右袖に4個の直径0.3mほどの自然縫を袖補強材としている。天井材に使われたと見られる石も重なった状態で出土している。カマド内には高杯を逆に据えられていた状態で出土しており支脚に転用されたと考えられる。カマドの覆土は第1層：(7.5YR5/2)灰褐色粘質土層、第2層：(7.5YR6/2)灰褐色粘質土層、第3層：灰白色粘質土層に分層される。遺物は須恵器(1542)、土師器(1540・1541・1543～1552)が出土している。

### 土坑

**SK001**（図面142）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺2.7m、短辺1.9m、深さ0.27mを測る。北壁はやや東寄りの位置には人頭大の縫と共に土師器甕や須恵器蓋などが出土した。床面には炭化物層の分布が確認されている事から、付近で火を使用した行為が想定される。しかし、カマドの様な煙道や煙出し口などの付属施設は確認されていない。この為、竪穴住居とするには躊躇せざるをおえず、ここでは掘立柱建物に付属する施設と考えておく。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器(1597・1605・1608・1618・1630)、黒色土器(1694)、土師器(1754・1798)がある。

**SK002**（図面142）：平面形態は不整形で、北側は調査区外に広がる。規模は長辺2.36m、短辺1.19m以上、深さ0.28mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、黒色土器(1702・1707)、土師器がある。このSK002もSK001と同様に、掘立柱建物に付属する施設と考えられ

る。

**SK003** (図面143)：平面形態は隅丸方形の大型土坑で、上層遺構に切られる。規模は長辺3.54m以上、短辺2.92m、深さ0.26mを測る。覆土は黄灰色砂粘質土層を基調とする。出土遺物は土師器(1775・1777・1785・1788)がある。

**SK004** (図面143)：平面形態は不整形で、上層遺構に切られる。規模は長径は不明、短径0.91m、深さ0.32mを測る。覆土は第1層：浅黄色砂粘質土層、第2層：黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は土師器(1559～1562)がある。

**SK005** (図面143)：平面形態は不整形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径1.22m、短径0.78m、深さ0.29mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(1563)がある。

**SK006** (図面143)：平面形態は円形で、規模は径0.5m、深さ0.25mを測る。土坑内は疊が混入している。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK007** (図面143)：平面形態は格円形で、規模は長径0.79m、短径0.55m、深さ0.27mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK008** (図面143)：平面形態は円形で、規模は径0.35～0.36m、深さ0.17mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK009** (図面143)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.28m、短径0.23m、深さ0.26mを測る。覆土はにぶい黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

#### 溝・自然流路

**SD01** (図面135・143)：南北に延びる直線の溝である。北端は調査区外に広がり、南端はSD02に切られる。確認できる長さは11.0m、最大幅2.6m、最大深0.25mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：にぶい黄色砂層である。出土遺物は柱根(706)がある。

**SD02** (図面136・139・144)：調査区を南から北に蛇行している古代から中世まで流れる自然流路で、中名V遺跡D1・D2・D4地区のSD07と同一の自然流路である。SD01を切り込み、SD03・SD12に切られる。確認できる長さは約80.0m、最大幅14.5m、最大深1.2mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は褐灰色粘質土層を基調とする。古代の出土遺物としては須恵器(1564～1572・1574・1579～1586・1588～1593)、土師器(1595・1596)、中世の出土遺物には中世上師器(1594・1841～1856)、珠洲(1857～1859・1864～1867)、中国製青磁(1860・1861)、中国製白磁(1862・1863)がある。また、木製品では箸(601～607)、漆器(608～610)、板状木製品(611～615・618)、棒状木製品(617)が出土している。

## 2. 中世の遺構

今回の報告書で、最も中世遺構の密度が高いのがこのA地区である。遺構の広がりは調査区のほぼ全体に及んでおり、南側は自然流路であるSD02（中名V遺跡D1地区のSD07と同一遺構）を境に途切れている。検出された遺構は掘立柱建物35棟、木枠組・石組などの井戸13基、大型方形土坑、土坑、治水関連遺構、区画溝、自然流路など多様な内容となっている。遺構は相互に重複や切り合い関係がみられ、数時期の変遷が推定される。特に掘立柱建物については、SD12などの区画と方位が一致する建物群と、やや西方向に傾く建物群とに大きく2つに分かれる。これらのうち、やや西方向に傾く建物群はSD12と方位が一致する建物群に比べて切り合いなどから古い時期に構築されたとみなされる。集落の存続期間は出土遺物や遺構変遷などから13世紀中頃～15世紀末まで、近世になると集落

は移動ないしは解体し、当該地の耕地化が進んだと考えられる。以下にこれらの遺構について記述していく。

#### 掘立柱建物

**SB01～SP003～SP009** (図面137・145・155)：建物の規模は、梁行1間(3.2～3.5m)、東側桁行3間、西側桁行間(5.5～5.8m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN11°Wで床面積は20.3m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.78～2.7mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.22～0.45m、深さ0.12～0.22mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～黄灰色砂質土層を基調とする。遺物はSP006・SP008で土師器が出土している。

**SB02～SP005～SP010～SP012** (図面137・145・155)：建物の規模は、梁行2間(3.9m以上)、桁行2間(6.4m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN47°Wで床面積は25.0m<sup>2</sup>程度の建物と思われる。柱間距離は、梁行1.9m以上、桁行3.2m以上、柱穴形態は円～楕円形で径0.22～0.65m、深さ0.15～0.21mを数える。柱穴内覆土は褐灰色粘質土層～浅黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB03～SP013～SP017** (図面137・145・155)：建物の規模は、梁行1間(2.3m)、桁行2間(5.1m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN23°Wで床面積は11.5m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.3～2.7mである。柱穴形態は楕円形で径0.08～0.41m、深さ0.11～0.3mを数える。柱穴内覆土は灰色粘質土層～オリーブ黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB04～SP016～SP018～SP022** (図面137・145・155)：建物の規模は、梁行2間(3.1～3.2m)、桁行2間(5.7m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN63°Wで床面積は17.7m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.2～1.9m、桁行2.6～3.2mである。柱穴形態は楕円形で径0.17～0.41m、深さ0.04～0.22mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黒色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SB05～SP023～SP027** (図面137・146・155)：建物の規模は、梁行1間(4.5m)、桁行2間(7.6m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN32°Wで床面積は34.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.0～3.0mである。柱穴形態は円～隅丸方形で径0.19～0.41m、深さ0.13～0.35mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～褐灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP023から土師器、SP025から柱根(585)が出土している。

**SB06～SP028～SP035** (図面137・146・155)：建物の規模は、梁行2間(4.1m)、桁行3間(8.1m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN47°Wで床面積は33.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.9～2.1m、桁行2.2～3.5mである。柱穴形態は円～不整形で径0.09～0.43m、深さ0.1～0.3mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～灰色粘質土層を基調とする。出土遺物はSP035から柱根(586)が出土している。

**SB07～SP036～SP039** (図面137・146・155)：建物の規模は、梁行1間(3.9m)、桁行2間(5.9m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN52°Wで床面積は23.0m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.6～3.2mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.16～0.38m、深さ0.12～0.25mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB08～SP040～SP045** (図面137・146・155)：梁行1間(1.6m)、桁行2間(2.5m)で、長方形プランの小規模な側柱建物。建物の棟方向はN8°Wで床面積は4.0m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行0.7～1.8mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.17～0.4m、深さ0.1～0.18mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層となる。遺物はSP040から礎板(591)が出土している。

**SB09～SP046～SP052** (図面137・147・156)：建物の規模は、梁行1間(3.1m)、桁行3間(7.5～7.6m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN11°Wで床面積は23.6m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.9～3.1mである。柱穴形態は楕円形で径0.1～0.31m、深さ0.1～0.15mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層を基調とする。SA01を伴う。出土遺物は認められない。

**SB10～SP057～SP061** (図面137・147・156)：建物の規模は、梁行1間(4.0m)、桁行2間(7.7m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN13°Wで床面積は30.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行3.7～4.0mである。柱穴形態は楕円形で径0.17～0.42m、深さ0.12～0.18mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層となる。遺物はSP060で砥石(76)が出土している。

**SB11～SP062～SP072** (図面137・148・156)：建物の規模は、梁行2間(3.8m)、桁行3間(6.7m)の総柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN11°Wで床面積は25.5m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.8～2.0m、桁行1.9～2.5mである。柱穴形態は楕円形～不整形で、径0.2～0.55m、深さ0.1～0.3mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層を基調とする。遺物はSP072で土師器(1795)が出土している。

**SB12～SP073～SP079** (図面137・148・156)：建物の規模は、梁行2間(2.4m)、桁行3間(4.2m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN9°Wで床面積は10.1m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.0～1.2m、桁行1.3～1.6mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.21～0.46m、深さ0.1～0.2mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層となる。遺物はSP078で土師器、用途不明の土製品(1793)が出土している。

**SB13～SP080～SP084** (図面137・148・156)：建物の規模は、梁行1間(2.9m)、桁行2間(6.3～6.4m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN4°Wで床面積は19.4m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.9～3.3mである。柱穴形態は楕円形で径0.2～0.4m、深さ0.08～0.25mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SB14～SP085～SP093** (図面137・149・157)：建物の規模は、梁行2間(3.5～3.7m)、桁行3間(6.8m)の総柱建物で、平面プランは長方形である。床面積は25.2m<sup>2</sup>、建物の棟方向はN6°W。柱間距離は、梁行1.8m、桁行2.0～2.5m、柱穴形態は円～不整形で、径0.21～0.35m、深さ0.15～0.25mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～褐灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP089から木柵が出土している。

**SB15～SP094～SP100** (図面137・149・157)：東側が調査区外となるため建物の規模は不明だが、梁行3間(6.2m)、桁行2間以上(4.0m以上)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN10°W、柱間距離は梁行1.8m～2.7mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.17～0.5m、深さ0.06～0.22mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB16～SP047・SP075・SP101～SP103** (図面137・149・157)：建物の規模は、梁行2間(3.7m)、桁行2間(6.8m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN53°Wで床面積は25.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.6～2.1m、桁行2.9～3.9mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.17～0.48m、深さ0.1～0.18mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB17～SP076・SP104～SP109** (図面137・150・157)：建物の規模は、梁行2間(3.5～3.6m)、桁行2間(4.9～5.0m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN39°Eで床面積は18.0m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.5～2.05m、桁行2.0～3.0mである。柱穴形態は楕円形で径0.22～0.9m、深さ

0.05～0.2mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP104・SP105から土師器、SP106で中世土師器が出土している。

**SB18～SP110～SP115**（図面137・150・157）：建物の規模は、梁行1間(2.2m)、桁行2間(3.1m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN39°Wで床面積は6.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.15～2.0mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.19～0.4m、深さ0.1～0.2mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP113・SP115から土師器が出土している。

**SB19～SP109・SP116～SP118**（図面137・150・157）：建物の規模は、梁行1間(2.4m)、桁行1間(3.7m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN49°Wで床面積は8.9m<sup>2</sup>。柱穴形態は円～楕円形で径0.29～0.76m、深さ0.1～0.2mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～オリーブ黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB20～SP119～SP123**（図面137・150・157）：建物の規模は、梁行2間(3.5～3.6m)、桁行1間(5.1m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN55°Wで床面積は18.4m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.3～2.2mである。柱穴形態は楕円形で径0.18～0.5m、深さ0.12～0.3mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB21～SP088・SP124～SP126**（図面137・151・158）：建物の規模は、梁行1間(2.8～3.0m)、桁行1間(3.2m)の小規模な側柱建物で、平面プランは方形を呈す。建物の棟方向はN35°Wで床面積は9.6m<sup>2</sup>。柱穴形態は楕円形で径0.29～0.5m、深さ0.1～0.25mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～オリーブ黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB22～SP127～SP131**（図面138・151・158）：建物の規模は、梁行1間(3.8m)、桁行2間(7.5m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN8°Wで床面積は28.5m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行3.2m～4.1mである。柱穴形態は楕円形～不整形で径0.27～1.0m、深さ0.18～0.33mを数える。柱穴内覆土は灰色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP130から土師器(1710・1712)、SP128から柱根(575)が出土している。

**SB23～SP132～SP136・SP208**（図面138・151・158）：建物の規模は、梁行3間(7.9m)、桁行2間以上(4.6m以上)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN3°Wで東側が調査区外となる。柱間距離は、梁行2.2～3.2m、柱穴形態は楕円形～不整形で径0.3～0.88m、深さ0.1～0.27mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～褐灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP133・SP134から須恵器が出土している。

**SB24～SP137～SP142**（図面138・152・158）：建物の規模は、梁行1間(4.1～4.2m)、桁行2間(6.8m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN9°Wで床面積は28.6m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.1～2.6mである。柱穴形態は楕円形～不整形で径0.22～0.54m、深さ0.05～0.23mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP141で柱根(582)がある。

**SB25～SP135・SP143～SP147**（図面138・152・158）：建物の規模は、梁行1間(4.0m)、桁行2間(4.5m)の側柱建物で、平面プランは方形を呈す。建物の棟方向はN79°Eで床面積は18.0m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.0～2.3mである。柱穴形態は楕円形で径0.19～0.58m、深さ0.12～0.35mを数える。柱穴内覆土は灰色砂質土層～褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB26～SP145・SP148～SP150**（図面138・152・158）：建物の規模は、梁行2間(4.1m)、桁行2間(6.5m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN58°Wで床面積は27.3m<sup>2</sup>。柱間

距離は、梁行2.0m以上、桁行3.2～3.4mである。柱穴形態は楕円形で径0.19～0.4m、深さ0.08～0.3mを数える。柱穴内覆土は灰色粘質土層～褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物はない。

**SB27・SP128・SP129・SP140・SP151～SP154**（図面138・153・158）：建物の規模は、梁行2間（5.2m）、桁行3間（8.8m）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN63°Wで床面積は45.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行2.4～2.9m、桁行1.7～3.6mである。柱穴形態は楕円形～不整形で径0.23～0.42m、深さ0.13～0.33mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP28から柱根が、SP152から須恵器が出土している。

**SB28・SP129・SP137・SP141・SP155～SP159**（図面138・153・159）：建物の規模は、梁行2間（4.5m）、桁行3間（8.6m）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN57°Wで床面積は38.7m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.9～2.8m、桁行1.9～4.5mである。柱穴形態は楕円形で径0.22～0.58m、深さ0.12～0.35mを数える。柱穴内覆土は黒褐色粘質土層～黄灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP141から柱根（582）が出土している。

**SB29・SP160～SP164**（図面138・152・159）：建物の規模は、梁行2間（2.9m）、桁行2間以上（5.4m以上）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN55°Wで北東側の一部が調査区外となる。柱間距離は、梁行1.3～1.6m、柱穴形態は楕円形～不整形で径0.25～0.61m、深さ0.07～0.28mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP161から須恵器（1621・1643）、土師器、SP163から柱根（578）が出土している。

**SB30・SP165～SP171**（図面138・153・159）：建物の規模は、梁行2間（3.0m）、桁行2間（4.6m）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN8°Wで床面積は13.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.2～1.6m、桁行2.1～2.5mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.17～0.32m、深さ0.07～0.25mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SB31・SP161・SP172～SP177**（図面138・154・159）：建物の規模は、梁行1間（2.8m）、桁行3間（5.0m）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN12°Wで床面積は14.0m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.2～2.2mである。柱穴形態は円～楕円形で径0.2～0.61m、深さ0.08～0.38mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～灰色粘質土層を基調とする。出土遺物はSP174から須恵器（1599・他）、土師器（1705・1747）、SP175からは珠洲（1881）が認められる。

**SB32・SP178～SP181**（図面138・154・159）：建物の東側が調査区外となるため規模は不明だが、梁行2間（5.1m）、桁行2間以上（3.05m以上）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈すと思われる。建物の棟方向はN14°W、柱間距離は、梁行2.5～2.6mである。柱穴形態は円～不整形で径0.2～0.49m、深さ0.05～0.2mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～砂粘質土層を基調とする。遺物はSP178から柱根が出土している。

**SB33・SP182～SP185**（図面138・154・159）：北西側が一部調査区外となる側柱建物で、規模は、梁行1間（3.5m）、桁行2間以上（3.55m以上）の長方形プランを呈すと推定される。建物の棟方向はN33°E。柱穴形態は、楕円形～不整形で径0.19～0.43m、深さ0.2～0.25mを数える。柱穴内覆土は褐灰色粘質土層～灰色粘質土層を基調とする。遺物はSP183で須恵器が出土している。

**SB34・SP186～SP190**（図面138・154・159）：建物の規模は、梁行1間（4.2m）、桁行2間（5.9m）の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN52°Eで床面積は21.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行2.3～3.3mである。柱穴形態は楕円形で径0.28～0.54m、深さ0.04～0.2mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SB35～SP191～SP195** (図面138・154・159)：建物の規模は、梁行1間(3.0m)、桁行3間(6.4m)の側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN23°Eで床面積は19.2m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.5～2.8mである。柱穴形態は梢円形で径0.22～0.35m、深さ0.12～0.22mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

#### 柵列

**SA01～SP51～SP53～SP56** (図面137・147・156)：SB09に伴う柵列である。方位はN80°E、柱間距離は0.4～1.5mとなる。柱穴形態は円～梢円形で径0.17～0.34m、深さ0.1～0.22mを数える。柱穴内覆土はオリーブ黄色粘質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

#### 井戸

**SE01** (図面137・160)：SE01～SE03は3基が近接して検出され、構築された順は切り合いや、構造、出土遺物などからSE03～SE02～SE01と考えられる。SE01はSE03を切り込む石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.82m、底面で0.43mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物を設置する。掘方の平面形態は円形で、径1.78～1.96m、深さ1.04mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒内の覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層、掘方の覆土は黄灰色粘質土層となる。遺物としては中世土師器(1802・1803)、珠洲(1804)、木製品では曲物(397)が出土している。

**SE02** (図面137・160)：木枠組井戸でSE03を切り込んでいる。掘方の平面形態は梢円形で、長径2.13m、短径1.69m、深さ1.11mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.75m、底面からの残存高は1.05mを測る。井筒内の覆土は第1層：褐灰色粘質土層、第2層：灰色粘質土層、第3層：黄灰色粘質上層からなり、掘方の覆土は第1層：(5Y5/1)灰色砂粘質土層、第2層：(5Y4/1)灰色砂粘質土層、第3層：灰色粘質土層に分層される。遺物は須恵器(1631)、黒色土器(1704)、中世土師器(1807～1809・1811・1812)、中国製青磁(1813)、八尾(1810)が、木製品では井戸枠(400～419・422～454・459～469・471)、板状木製品(420・455～458)、円形板(421)、棒状木製品(473)、折敷(480)、箸(532～535・537～546・559・564)が、金属製品では鉄津(113)が、石製品では砾石(75)がそれぞれ出土している。

**SE03** (図面137・160)：木枠組井戸である。SE01・SE02に切り込まれる。掘方の平面形態は梢円形で、長径1.88m、短径1.52m、深さ0.52mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.48～0.65m、底面からの残存高は0.65mを測る。覆土は井筒内の第1層：灰色粘質土層、第2層：暗オリーブ灰色粘質上層となり、掘方の覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。遺物は中世土師器(1814)、木製品では箸(536・547～558・560)、曲物(470)、棒状木製品(475)、井戸枠(476～479・481～501・503～521・523～527)、板状木製品(502・522・528～531)が出土している。

**SE04** (図面137・160)：木枠組か石組かは不明で、掘方のみ残存している井戸である。掘方の平面形態は不整形で、長径1.88m、短径1.47m、深さ0.52mの規模を測る。横断面の形態は底の平坦な鍋底型である。覆土は第1層：(5Y4/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第3層：灰オリーブ色粘質上層に分層される。井戸内からは曲物(399)、箸(561～563・565)が出土している。

**SE05** (図面137・161)：石組井戸である。井筒部は掘方のほぼ中心に設置される。内径は上面で0.92m、底面で0.42mと、やや角度を付けて石組みされる。底面に底板を抜いた曲物を設置する。掘方の平面形態は不整形で、長径2.05m、短径1.98m、深さ1.1mの規模を測る。横断面の形態は掘鉢型

である。井筒内覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層、第3層：黄灰色粘質土層となり、掘方の覆土は第1層：にぶい黄橙色粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層に分層される。遺物には土師器(1715)、木製品では箸(370～379)、漆器(387・390・391)、棒状木製品(392)、曲物(396)がある。

**SE06**（図面137・161）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で1.1m、底面で0.5mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物桶を設置する。掘方の平面形態は円形で、径1.91m、深さ1.06mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒内覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層、第3層：黄灰色粘質土層に分層され、掘方の覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。遺物には珠洲(1805)、木製品では箸(380～383)、曲物（398）がある。

**SE07**（図面137・161）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.68m、底面で0.45mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物桶を設置する。掘方の平面形態は円形で、径1.66m、深さ1.14mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒内の覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層に分層され、掘方の覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。遺物としては中世土師器(1801)、木製品では曲物(395)がある。

**SE08**（図面137・161）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.6m、底面で0.32mと、やや角度を付けて石組みされる。底面には底板を抜いた曲物桶を設置する。掘方の平面形態は円形で、径1.62～1.71m、深さ0.84mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井筒内覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層に分層され、掘方の覆土は第1層：黄灰色砂粘質土層、第2層：黄灰色粘質土層に分層される。遺物としては中世土師器(1800)、木製品では漆器(389)、曲物(394)が出土している。

**SE09**（図面137・162）：石組井戸である。西側が調査区の壁に掛かるため半裁状態で検出された。内径は上面で0.84m、底面で0.23mと、角度を付けて石組みされる。底面には設置されていたと思われる曲物の破片が残る。掘方の平面形態は円形で、径1.51m、深さ0.85m程度の規模と推定される。横断面の形態は擂鉢型である。井筒内覆土は第1層：灰オリーブ色砂粘質土層、第2層：灰色粘質土層に分層され、掘方の覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。遺物には中世土師器(1806)、木製品では漆器(388)が出土している。

**SE10**（図面137・162）：石組井戸である。井筒部は掘方の中心に設置される。内径は上面で0.83m、底面で0.26mと、やや角度を付けて石組みされる。底面に底抜きの曲物桶を一段設置する。掘方の平面形態は円形で、径1.54～1.67m、深さ0.87mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。井筒内覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：灰黄色粘質土層に分層され、掘方の覆土は灰オリーブ色粘質土層のみの単層となる。遺物としては須恵器(1670・1674・1679・1684)、中国製青磁(1799)、木製品では箸(367～369)、曲物(393)がそれぞれ出土している。

**SE11**（図面137・162）：木枠組か石組かは不明で、掘方のみ残存している井戸である。掘方の平面形態は円形で、径1.75m、深さ0.61mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。覆土は灰色粘質土層を基調とする4層から構成される。井戸内からは箸(384～386)、折敷(474)が出土している。

**SE12**（図面137・162）：木枠組か石組かは不明で、掘方のみ残存している井戸である。掘方の平面形態は不整形で、長径1.79m、短径1.18m、深さ0.52mの規模を測る。横断面の形態は底の平坦な鍋底型である。覆土は灰色粘質土層を基調とする4層から構成される。井戸内からの出土遺物は認められ

ない。

**SE13** (図面137・162) : 東側が調査区の壁にかかる。木枠組か石組かは不明、掘方のみ残存している井戸である。掘方の平面形態は不整形で、長径1.94m、短径0.84m以上、深さ0.56mの規模を測る。横断面の形態は掘底の平坦な鍋底型である。覆土は第1層：オリーブ黒色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層、第3層：灰白色粘質土層に分層される。井戸内からの出土遺物は認められない。

#### 土坑

**SK010** (図面163) : 平面形態は不整形で、SD09・SK011・SK048・SP036に切り込まれ、SP025・SP035が土坑内に位置し、東側は調査区外に広がる。規模は長径4.65m、短径2.5m以上、深さ0.43mを測る。覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。長さ200.6cm、幅11.2cm、厚さ1.6cmと、長さ111.0cm、幅14.3cm、厚さ1.4cmの2枚の板状木製品が南北方向に一部重なって出土し、さらに北側の板状木製品には直交する形で3枚の板状木製品が出土している。これら5枚の板状木製品は水平な状態で底面から約0.25m浮いた状態で出土している。これらの板状木製品はSK010に伴う建物の建築部材の一部と考えられる。出土遺物は須恵器(1610・1677)、中世土師器(1829)、珠洲、木製品では柱根(585・586)、箸(588・589)、板状木製品(592～598)がある。

**SK011** (図面163) : 平面形態は不整形で、SK010を切り、東側は調査区外に広がる。規模は長径0.56m、短径0.5m以上、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：(7.5Y6/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y5/1)灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK012** (図面163) : 平面形態は梢円形で、SK013・SK014を切り込む。規模は長径3.46m、短径2.17m以上、深さ0.21mを測る。土坑内は人頭大の礫が分布する。覆土は第1層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y6/1)灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器、珠洲(1826)がある。

**SK013** (図面163) : 平面形態は不整形で、規模は長径2.69m、短径0.89m、深さ0.24mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は第1層：オリーブ黒色粘質土層、第2層：浅黄色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK014** (図面163) : 平面形態はやや不整形を呈するとみられる。SK012に切り込まれ、東側は調査区外に広がる。規模は長径3.6m、短径1.91m、深さ0.1mを測る。土坑内は大小の礫の石列が見られる。覆土は第1層：灰オリーブ色砂粘質土層、第2層：(5Y6/1)灰色粘質土層、第3層：(5Y5/1)灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

**SK015** (図面164・165) : 平面形態は不整形で、SK016を切り込み、SK108に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長径4.52m、短径2.42m以上、深さ0.58mを測る。土坑の東壁には石が積まれており、壁の崩落を防ぐ補強と考えられる。覆土は褐灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1821)、木製品では角材(569)、金属製品では銅錢(006)がある。

**SK016** (図面164・165) : 平面形態は不整形で、SK015に切り込まれる。規模は長径3.9m、短径0.85m以上、深さ0.49mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は第1層：黄褐色粘質土層、第2層：黄灰色粘質土層、第3層：黒色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器、木製品では箸(590)が認められる。

**SK017** (図面165) : 平面形態は隅丸長方形で、SK018を切り込む。規模は長辺2.23m、短辺1.08m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：(10YR6/1)褐灰色粘質土層、第2層：(10YR5/1)褐灰色粘質土層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK018** (図面165) : 平面形態は不整形で、SK019を切り込み、SK017に切り込まれる。規模は長辺

1.8m、短径0.43m以上、深さ0.21mを測る。土坑内は石列が見られSK017を構築する際に壁を補強したと考えられる。覆土は褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK019** (図面165)：平面形態は不整形で、SK020・SK022を切り込み、SK018に切り込まれる。規模は長径1.87m、短径0.57m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：褐色粘質土層、第2層：灰色粘質土層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK020** (図面165)：平面形態は不整形で、SK022を切り込み、SK019に切り込まれる。規模は長径4.74m以上、短径0.82m、深さ0.27mを測る。覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：黒色粘質土層、第3層：灰色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

**SK021** (図面165)：平面形態は不整形で、SK022・SK143を切り込む。規模は長径2.44m、短径0.55m、深さ0.13mを測る。覆土は第1層：(7.5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：(7.5Y4/1)灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK022** (図面165)：平面形態は不整形で、SK019～SK021に切り込まれる。土坑内は礫が混入する。規模は長径2.42m、短径1.4m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：黒色粘質土層、第2層：浅黄色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK023** (図面166)：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺1.64m、短辺1.51m、深さ0.08mを測る。覆土は淡黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、土鍤(1761)が混じり込む。

**SK024** (図面166)：平面形態は不整形で、規模は長径2.8m、短径2.67m、深さ0.2mを測る。SP055～SP057が土坑内に位置する。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器がある。

**SK025** (図面166)：平面形態は円形で、規模は径0.51～0.53m、深さ0.17mを測る。覆土は灰白色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は黒色土器(1708)、土師器がある。

**SK026** (図面166)：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径0.9m、短径0.5m以上、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：(5Y6/2)灰オリーブ色粘質土層、第2層：(5Y5/2)灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK027** (図面166)：平面形態は梢円形で、SD06を切り込む。規模は長径0.84m、短径0.7m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK028** (図面166)：平面形態は円形で、規模は径0.24～0.25m、深さ0.19mを測る。覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：オリーブ褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK029** (図面166)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.36m、短径0.31m、深さ0.12mを測る。覆土は緑灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK030** (図面166)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.09m、短径0.65m、深さ0.38mを測る。覆土は第1層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層、第3層：(7.5Y4/1)灰色粘質土層に分層される。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK031** (図面166)：平面形態は円形で、規模は径0.44m、深さ0.22mを測る。覆土は第1層：オリーブ黒色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は土師器が混じり込む。

**SK032** (図面166)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.93m、短径0.59m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘質土層となる。遺物は認められない。

**SK033** (図面166)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.65m、短径0.42m、深さ0.25mを測る。覆土は

オリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK034（図面166）：平面形態は橢円形で、規模は長径0.22m、短径0.17m、深さ0.07mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK035（図面166）：平面形態は不整形で、西側は調査区外に広がる。規模は長径1.21m以上、短径0.47m、深さ0.16mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1646)、土師器が混じり込む。

SK036（図面166）：平面形態は不整形で、規模は長径1.29m、短径0.72m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

SK037（図面166）：平面形態は橢円形で、規模は長径1.3m、短径1.02m、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK038（図面167）：平面形態は不整形で、SD10を切り込み、SK044が土坑内に位置する。規模は長径2.55m、短径2.15m、深さ0.1mを測る。土坑内は大小の礫が散在する。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、八尾(1833)がある。

SK039（図面167）：平面形態は橢円形で、規模は長径0.34m、短径0.28m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK040（図面167）：平面形態は隅丸方形で、SP091を切り込む。規模は長辺1.11m、短辺0.97m、深さ0.24mを測る。覆土は第1層：褐灰色粘質炭混土層、第2層：褐灰色粘質土層、第3層：灰色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

SK041（図面167）：平面形態は橢円形で、規模は長径0.32m、短径0.22m、深さ0.14mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1598)がある。

SK042（図面167）：平面形態は橢円形で、SP114に切り込まれる。規模は長径0.21m以上、短径0.14m、深さ0.18mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

SK043（図面167）：平面形態は橢円形で、規模は長径0.3m、短径0.27m、深さ0.19mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK044（図面167）：平面形態は橢円形で、SD08を切り込み、SK038内に位置する。規模は長径0.8m、短径0.58m、深さ0.39mを測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

SK045（図面167）：平面形態は円形で、SD13を切り込む。規模は径0.27～0.29m、深さ0.2mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK046（図面167）：平面形態は円形で、SD12に切り込まれる。規模は径0.35m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：オリーブ黄色粘質土層、第2層：にぶい黄色粘質土層となる。出土遺物は土師器(1734)が認められる。

SK047（図面167）：平面形態は不整形で、SD12に切り込まれる。規模は長径0.68m、短径0.48m以上、深さ0.14mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色粘質土層、第2層：(2.5Y6/1)黄灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1673・1681・1692)が混じり込む。

SK048（図面168）：平面形態は橢円形で、SE04・SK010・SK049を切り込む。規模は長径1.53m、短径1.33m、深さ0.17mを測る。土坑内は人頭大の礫が含まれる。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK049** (図面168)：平面形態は不整形で、SE04を切り込み、SK048に切り込まれる。規模は長径1.2m、短径0.77m、深さ0.11mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

**SK050** (図面168)：平面形態は不整形でSE04を切り込み、SK049に切り込まれる。規模は長径1.22m以上、短径0.4m、深さ0.06mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物はない。

**SK051** (図面168)：平面形態は楕円形で、土坑内にはSP033が位置する。規模は長径0.84m、短径0.71m、深さ0.08mを測る。覆土は褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

**SK052** (図面168)：平面形態は円形で、規模は径0.87～0.95m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y6/1)灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器が混じり込む。

**SK053** (図面168)：平面形態は円形で、規模は径0.36m、深さ0.14mを測る。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：(10YR5/1)褐色粘質土層、第3層：(10YR6/1)褐色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器がある。

**SK054** (図面168)：平面形態は円形で、規模は径0.21～0.25m、深さ0.06mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(1776)が混じり込む。

**SK055** (図面168)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.28m、短径0.56m、深さ0.09mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK056** (図面168)：平面形態は円形で、規模は径0.19～0.2m、深さ0.09mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK057** (図面168)：平面形態は楕円形で、SP015を切り込む。規模は長径0.31m、短径0.24m、深さ0.15mを測る。覆土は灰オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK058** (図面168)：平面形態は不整形で、SE02に切り込まれる。規模は長径1.23m、短径0.97m以上、深さ0.32mを測る。覆土はオリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK059** (図面168)：平面形態は円形で、SK060を切り込む。規模は径0.57m、深さ0.14mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は須恵器、珠洲(1827)がある。

**SK060** (図面168)：平面形態は不整形で、SE02・SK059に切り込まれる。規模は長径2.21m、短径1.56m、深さ0.15mを測る。覆土は第1層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y4/1)灰色粘質土層、第3層：オリーブ黒色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器、土師器が混じり込む。

**SK061** (図面169)：平面形態は隅丸長方形で、SK064を切り込む。規模は長辺2.97m、短辺1.39m、深さ0.14mを測る。覆土は褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK062** (図面169)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.04m、短径0.6m、深さ0.25mを測る。覆土は第1層：明褐色粘質土層、第2層：褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK063** (図面169)：平面形態は隅丸長方形で、SP037・SP045を切り込み、SK064に切り込まれる。規模は長辺3.18m、短辺2.76m、深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は黒色土器(1703)、土師器、中世土師器、木製品では漆器(567)がある。

**SK064** (図面169)：平面形態は不整形で、SK063を切り込み、SK061に切り込まれる。規模は長径2.81m、短径0.6m、深さ0.19mを測る。覆土は第1層：(10YR4/1)褐色粘質土層、第2層：(10YR5/1)褐色粘質土層、第3層：(10YR6/1)褐色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器(1624)、土師器、中國製青磁(1824)、中世土師器(1825)がある。

- SK065** (図面169)：平面形態は楕円形で、SK071に切り込まれる。規模は長径0.3m、短径0.25m以上、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK066** (図面169)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.88m、短径0.42m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：灰オリーブ色粘質土層、第2層：にぶい黄橙色粘質土層となる。出土遺物は土師器がある。
- SK067** (図面169)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.71m、短径0.67m、深さ0.17mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：(2.5Y5/2)黄灰色粘質土層、第3層：(2.5Y4/1)黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物は珠洲(1828)がある。
- SK068** (図面169)：平面形態は円形で、規模は径0.31～0.34m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は磚板(577)がある。
- SK069** (図面169)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.47m、短径0.32m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK070** (図面169)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.36m、短径0.29m、深さ0.11mを測る。覆土は浅黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は磚板(584)、板状木製品(592)がある。
- SK071** (図面169)：平面形態は楕円形で、SK065を切り込む。規模は長径0.42m、短径0.36m、深さ0.09mを測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1615)がある。
- SK072** (図面170)：平面形態は楕円形で、SK073を切り込む。規模は長径0.47m、短径0.37m、深さ0.2mを測る。覆土は第1層：褐灰色粘質土層、第2層：明黄褐色粘質土層、第3層：灰白色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器、中世土師器がある。
- SK073** (図面170)：平面形態は不整形で、SK072に切り込まれる。規模は長径2.11m、短径0.57m、深さ0.14mを測る。覆土は第1層：オリーブ黄色粘質土層、第2層：にぶい黄色粘質土層となる。出土遺物は土師器(1752・1780・1784)が混じり込む。
- SK074** (図面170)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.56m、短径0.45m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。
- SK075** (図面170)：平面形態は不整形で、SD11に切り込まれる。規模は長径2.34m、短径2.06m以上、深さ0.2mを測る。土坑内は人頭大の礫が混入する。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、珠洲(1882)がある。
- SK076** (図面170)：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.08m、短辺0.73m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK077** (図面170)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.21m、短径0.17m、深さ0.18mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK078** (図面170)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.55m、短径0.44m、深さ0.15mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK079** (図面170)：平面形態は楕円形で、SK082・SP155を切り込む。規模は長径1.31m、短径1.09m、深さ0.27mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘質土層、第3層：黒色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。
- SK080** (図面170)：平面形態は楕円形で、SK082を切り込む。規模は長径1.85m、短径0.65m、深さ0.1mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1687)、土師器(1718)が混じり込む。
- SK081** (図面170)：平面形態は楕円形で、SK082を切る。規模は長径0.35m、短径0.28m、深さ0.13m

を測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は下駄(566)がある。

SK082 (図面170)：平面形態は楕円形で、SP134を切り込み、SK079・SK080・SK081に切り込まれ、土坑内にSP149が位置する。規模は長径3.31m、短径1.79m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK083 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.43m、短径0.39m、深さ0.13mを測る。覆土は第1層：(5Y4/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y6/1)灰色粘質土層となる。出土遺物は土師器がある。

SK084 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径1.12m、短径0.83m、深さ0.35mを測る。土坑内には礫が混入している。覆土は第1層：(10YR6/3)にぶい黄橙色粘質土層、第2層：褐灰色粘質土層、第3層：(10YR7/3)にぶい黄橙色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器がある。

SK085 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.81m、短径0.6m、深さ0.22mを測る。覆土は第1層：(2.5Y6/1)黄灰色粘質土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色粘質土層、第3層：灰オリーブ色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

SK086 (図面171)：平面形態は不整形で、SP104を切り込まれる。規模は長径0.24m、短径0.1m以上、深さ0.27mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK087 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.32m、短径0.22m、深さ0.15mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

SK088 (図面171)：平面形態は円形で、規模は径0.22～0.23m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：にぶい黄色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK089 (図面171)：平面形態は長楕円形で、SP112を切る。規模は長径1.36m、短径0.54m、深さ0.1mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK090 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.74m、短径0.51m、深さ0.07mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器がある。

SK091 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.26m、短径0.21m、深さ0.12mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK092 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.58m、短径0.32m、深さ0.09mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK093 (図面171)：平面形態は楕円形で、SP077を切り込む。規模は長径0.28m、短径0.25m、深さ0.15mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器がある。

SK094 (図面171)：平面形態は不整形で、規模は長径0.96m、短径0.71m、深さ0.24mを測る。覆土は第1層：(5Y5/2)灰オリーブ色粘質土層、第2層：(5Y6/2)灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1612)、土師器(1750・1751・1753・1787)が混じり込む。

SK095 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.9m、短径0.4m、深さ0.1mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色粘質土層、第2層：灰黄色粘質土層となる。出土遺物は土師器(1791)が混じり込む。

SK096 (図面171)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.7m、短径0.35m、深さ0.9mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土はオリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(1749)が認められる。

SK097 (図面171)：平面形態は円形で、規模は径0.22m、深さ0.15mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

- SK098** (図面171)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.29m、短径0.24m、深さ0.25mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK099** (図面171)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.38m、短径0.35m、深さ0.28mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK100** (図面171)：平面形態は不整形で、東側は消失する。規模は長径0.88m以上、短径0.75m、深さ0.05mを測る。覆土は第1層：褐灰色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘質土層となる。出土遺物は認められない。
- SK101** (図面171)：平面形態は梢円形で、SD10を切り込む。規模は長径2.16m、短径1.21m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：灰オリーブ色粘質土層、第2層：灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。
- SK102** (図面172)：平面形態は不整形で、SP130を切り込む。規模は長径0.71m、短径0.61m、深さ0.19mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(1739)がある。
- SK103** (図面172)：平面形態は不整形で、SD14を切り込み、SP185が土坑内に位置する。規模は長径1.11m、短径0.81m、深さ0.11mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。
- SK104** (図面172)：平面形態は円形で、規模は径0.2m、深さ0.21mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。
- SK105** (図面172)：平面形態は円形で、規模は径0.22m、深さ0.09mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。
- SK106** (図面172)：平面形態は梢円形で、SD13に切り込まれる。規模は長径0.31m、短径0.27m以上、深さ0.22mを測る。覆土は褐灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器が認められる。
- SK107** (図面172)：平面形態は不整形で、SD14に切り込まれる。規模は長径2.11m、短径1.2m、深さ0.32mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(10YR6/1)褐灰色粘質土層、第2層：(10YR5/1)褐灰色粘質土層、第3層：灰オリーブ色粘質土層に分層される。出土遺物は須恵器が認められる。
- SK108** (図面172)：平面形態は不整形で、SD15・SK015・SK109を切り込む。規模は長径2.47m、短径1.88m以上、深さ0.43mを測る。土坑内は拳大～人頭大の礫が混入している。覆土は第1層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y4/1)灰色粘質土層、第3層：灰オリーブ色粘質土層に分層される。出土遺物は土師器、中世土師器がある。
- SK109** (図面172)：平面形態は不整形で、SD15・SD19・SK108に切り込まれる。規模は長径2.14m以上、短径1.86m、深さ0.17mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1680)が混じり込む。
- SK110** (図面172)：平面形態は隅丸長方形で、SK111を切り込み、SD21に切り込まれる。規模は長辺1.35m、短辺0.49m、深さ0.23mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。
- SK111** (図面172)：平面形態は隅丸長方形で、SD21・SK110に切り込まれる。規模は長辺1.61m、短辺0.74m、深さ0.23mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

**SK112** (図面172)：平面形態は梢円形で、SK113を切り込む。規模は長径0.74m、短径0.56m、深さ0.18mを測る。覆土は褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK113** (図面172)：平面形態は隅丸長方形で、SK114・SP163を切り込み、SK112に切り込まれる。規模は長辺2.04m、短辺0.62m、深さ0.1mを測る。覆土は褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK114** (図面172)：平面形態は梢円形で、SK113に切られる。規模は長径0.46m、短径0.38m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物は中国製青磁(1815)、木製品がある。

**SK115** (図面172)：平面形態は梢円形で、SP173を切り込み、SD21に切り込まれる。規模は長径0.38m、短径0.25m、深さ0.11mを測る。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：灰黄色粘質土層、第3層：浅黄色砂粘質土層に分層される。出土遺物は柱根(583)がある。

**SK116** (図面172)：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺1.39m、短辺1.35m、深さ0.31mを測る。覆土は第1層：(7.5Y6/1)灰色粘質土層、第2層：(7.5Y5/1)灰色粘質土層となる。出土遺物はない。

**SK117** (図面173)：平面形態は不整形で、SK119・SK120を切り込み、SD21に切られる。規模は長径1.89m、短径1.44m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：灰オリーブ色粘質土層、第2層：オリーブ黒色粘質土層となる。出土遺物は須恵器、中国製青磁(1830)がある。

**SK118** (図面173)：平面形態は不整形で、SD18・SK119を切り込み、SD12・SD21に切られる。規模は長径2.99m、短径2.17m、深さ0.36mを測る。覆土は第1層：浅黄色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1634)、中世士師器(1831・1832)がある。

**SK119** (図面173)：平面形態は不整形で、SK120を切り込み、SD21・SK117・SK118に切り込まれる。規模は長径1.99m、短径0.59m以上、深さ0.1mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK120** (図面173)：平面形態は不整形で、SK117・SK119に切り込まれる。規模は長径1.75m、短径1.1m以上、深さ0.1mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK121** (図面173)：平面形態は梢円形で、規模は長径1.0m、短径0.6m、深さ0.36mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は下駄(572)がある。

**SK122** (図面173)：平面形態は円形で、規模は径0.42～0.43m、深さ0.1mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は株洲(1823)がある。

**SK123** (図面173)：平面形態は不整形で、溝を切り込み、SD12に切り込まれる。規模は長径1.47m、短径1.0m以上、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：褐色粘質土層、第2層：灰黄褐色粘質土層、第3層：黒褐色粘質土層に分層される。出土遺物は認められない。

**SK124** (図面173)：平面形態は梢円形で、SD18を切り込み、SP166に切られる。規模は長径1.1m、短径0.5m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：灰褐色粘質土層、第2層：灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK125** (図面173)：平面形態は長梢円形で、SK126を切り込む。規模は長径1.77m、短径0.61m、深さ0.17mを測る。覆土は灰オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世上師器がある。

**SK126** (図面173)：平面形態は不整形で、SK125に切り込まれる。規模は長径0.49m以上、短径0.42m以上、深さ0.11mを測る。覆土は灰オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認めら

れない。

SK127（図面174）：平面形態は不整形で、SD17・SK128を切り込む。規模は長径1.13m、短径0.82m、深さ0.19mを測る。覆土は第1層：黄灰色粘質土層、第2層：黒褐色粘質土層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK128（図面174）：平面形態は隅丸方形で、SK127に切り込まれる。規模は長辺1.36m、短辺0.93m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK129（図面174）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.4m、短辺0.58m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：(7.5Y6/2)灰オリーブ色粘質土層、第2層：(7.5Y5/3)灰オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK130（図面174）：平面形態は隅丸長方形で、規模は長辺1.62m、短辺0.96m、深さ0.15mを測る。覆土は第1層：明オリーブ灰色粘質土層、第2層：灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK131（図面174）：平面形態は不整形で、規模は長径1.18m、短辺1.08m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：(5Y5/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y4/1)灰色粘質土層、第3層：灰オリーブ色粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(1820)がある。

SK132（図面174）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.94m、短径0.49m、深さ0.27mを測る。土坑内は礫が混入する。覆土は第1層：灰色粘質土層、第2層：灰黄褐色粘質土層となる。出土遺物は円形板(568)がある。

SK133（図面174）：平面形態は円形で、SD17を切り込む。規模は径1.65m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：灰オリーブ色砂屑、第2層：黄灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器、木製品では下駄(570・571)がある。

SK134（図面174）：平面形態は梢円形で、SK135を切り込み、SD20に切り込まれる。規模は長径2.07m、短径1.57m、深さ0.37mを測る。土坑内は拳大～人頭大の礫が混入している。覆土は第1層：(5Y4/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y6/1)灰色粘質土層、第3層：緑灰色粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器(1819)、株洲(1822)、木製品では棒状木製品(599)、板状木製品(600)がある。

SK135（図面174）：平面形態は不整形で、SK134に切り込まれる。規模は長径3.42m、短径2.02m、深さ0.16mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(1816～1819)、株洲(1822)がある。

SK136（図面174）：平面形態は梢円形で、土坑内にSP194が位置する。規模は長径2.45m、短径2.09m、深さ0.72mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は砥石(77)がある。

SK137（図面175）：SK137～SK142は、ほぼ同一軸に並ぶ土坑群で、長軸の規模は統一的ではない。深さは0.09～0.17mと浅く、覆土も均一的である為、整地跡というよりは、耕作痕と考えた方が妥当とみられる。平面形態は長梢円形で、規模は長径2.81m、短径0.53m、深さ0.09mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK138（図面175）：平面形態は長梢円形で、規模は長径3.15m、短径0.53m、深さ0.12mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK139（図面175）：平面形態は長梢円形で、規模は長径4.51m、短径0.59m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：暗オリーブ色粘質土層、第2層：暗灰色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK140（図面175）：平面形態は長梢円形で、規模は長径4.27m、短径0.51m、深さ0.14mを測る。覆土

は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK141 (図面175)：平面形態は長楕円形で、規模は長径4.11m、短径0.5m、深さ0.15mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK142 (図面175)：平面形態は長楕円形で、規模は長径2.22m、短径0.74m、深さ0.16mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK143 (図面165)：平面形態は不整形で、SK021に切り込まれる。規模は長径0.25m、短径0.09m以上、深さ0.12mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 柱穴

SP196 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.3m、短径0.21m、深さ0.12mを測る。覆土は暗オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP197 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.22m、短径0.18m、深さ0.17mを測る。覆土は浅黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は板状木製品(705)がある。

SP198 (図面175)：平面形態は円形で、SK079に切られる。規模は径0.28～0.29m、深さ0.44mを測る。覆土は第1層：黒褐色粘質土層、第2層：暗灰黄色粘質土層、第3層：黄灰色粘質土層に分層される。出土遺物は柱根(579)がある。

SP199 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.28m、短径0.26m、深さ0.18mを測る。覆土は灰オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(573)がある。

SP200 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.26m、短径0.19m、深さ0.22mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP201 (図面175)：平面形態は円形で、SD16内に位置し、規模は径0.4～0.45m、深さ0.32mを測る。覆土はオリーブ黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(587)がある。

SP202 (図面175)：平面形態は円形で、規模は径0.22～0.23m、深さ0.26mを測る。覆土は暗オリーブ褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は柱根(574)がある。

SP203 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.72m、短径0.63m、深さ0.27mを測る。覆土は灰オリーブ色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、柱根(576)がある。

SP204 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.53m、短径0.44m、深さ0.66mを測る。覆土は第1層：黄褐色粘質土層、第2層：暗オリーブ灰色粘質土層となる。出土遺物は角材(581)がある。

SP205 (図面175)：平面形態は不整形で、SD16に切り込まれる。規模は長径は不明、短径0.42m、深さ0.28mを測る。覆土は第1層：灰黄色粘質土層、第2層：黄灰色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1693)、土師器、柱根(580)がある。

SP206 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.7m、短径0.55m、深さ0.11mを測る。覆土はオリーブ黒色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SP207 (図面175)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.73m、短径0.55m、深さ0.37mを測る。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

#### 溝・自然流路

SD03 (図面139・144・176)：北東から南西方向に延びる不整形の溝で、調査区外に広がっている。SD02を切り込んでいる。確認できる長さは21.0m、最大幅6.0m、最大深0.59mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1835・1836)、中国製青磁(1837)、珠洲(1868)、越中瀬戸、木製品では棒状木製品(616)、石製品では石硯(82)が認められる。

- SD04** (図面137・176) : SD04からSD07は長軸が同一方向に並ぶ小溝群で、規模や配置、覆土などを考慮すると耕作痕の可能性が高いと考えられる。北西端は消失し南東方向に軽い円弧を描いて延び、SD05を切り込んでいる。南東端は土坑に切られる。長さ2.5m、最大幅0.42m、最大深0.1mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は浅黄色粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器がある。
- SD05** (図面137・176) : 南北に延びる直線の小溝である。北端は消失し、南端は土坑に切られる。長さ2.5m、最大幅0.35m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は浅黄色粘質土層の単層である。出土遺物は土師器が認められる。
- SD06** (図面137・176) : 北西から南東方向に延びる直線の溝である。両端とも消失している。途中SK027に切られる。長さ10.3m、最大幅0.43m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は浅黄色粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器(1619)が認められる。
- SD07** (図面137・176) : SD06に併走して北西から南東に延びる直線の溝である。両端とも消失している。長さ5.8m、最大幅0.42m、最大深0.1mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は浅黄色粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器(1632)、土師器が認められる。
- SD08** (図面137・176) : 北側調査区外より蛇行しながら南北に延びて東側調査区外に続く。確認できる長さは8.5m、最大幅2.4m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土はオリーブ黄色粘質土層を基準とする。出土遺物は須恵器、土師器(1768・1769)が認められる。
- SD09** (図面137・176) : SK010を東西に切り込む直線の小溝である。両端とも消失している。長さ2.05m、最大幅0.4m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は褐色粘質土層の単層となる。出土遺物は認められない。
- SD10** (図面137・176) : 北東から南西方向に調査区を斜めに渡り、調査区外に延びる溝である。SK038・SK101、西側でSD24に切られる。長さ16.8m、最大幅2.0m、最大深0.17mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は第1層：灰オリーブ褐色粘質土層、第2層：灰色粘質土層、第3層：オリーブ色粘質土層である。出土遺物は土師器が認められる。
- SD11** (図面137・176) : SD12より分岐して東方向に延び、調査区外に続く溝である。途中SK075を切り込む。確認できる長さは10.3m、最大幅1.7m、最大深0.41mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：(5Y6/1)灰色粘質土層、第2層：(5Y5/1)灰色粘質土層からなる。出土遺物は認められない。
- SD12** (図面138・176) : 西側調査区外よりやや軽い円弧を描きながら南に長く延びて、西側調査区外へ続く区画溝である。北側でSD11・SD24が分岐している。途中SD16～SD18を南北に切り、南側ではSD02を切っている。確認できる長さは56.0m、最大幅3.4m、最大深0.72mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで黄灰色粘質土層を基準とし、bセクションで第1層：褐色粘質土層、第2層：暗赤褐色粘質土層からなる。出土遺物は須恵器(1636・1637)、中世土師器(1869～1872)、瀬戸美濃(1873)、珠洲(1874～1877)、石製品では磁石(78・79)が認められる。
- SD13** (図面138・176) : SD16より分岐して北方向にのび、軽い円弧を描きながら西側調査区外に広がる。確認できる長さは7.5m、最大幅0.65m、最大深0.2mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、灰オリーブ色粘質土層の単層である。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。
- SD14** (図面138・176) : 南北にのびる直線の溝で南端は消失し、北端は調査区外に広がる。途中SD16に切られる。確認できる長さは8.3m、最大幅0.5m、最大深0.16mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は、aセクションで第1層：灰オリーブ色粘質土層、第2層：暗オリーブ色粘質土層からな

り、bセクションで第1層：黄灰色粘質土層、第2層：黒色粘質土層からなる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

**SD15**（図面138・176）：南北に延びる溝である。西側でSK108に切られて開放しており、SK109を切り込んでいる。途中SD16に切られ途切れるが、北側調査区外に広がっている。確認できる長さは11.5m、最大幅0.1m、最大深0.16mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、a・bセクションとも灰色粘質土層からなる。出土遺物は認められない。

**SD16**（図面138・176）：調査区を東西に蛇行しながら横断する区画溝である。SD13が北側に分岐している。SD14・SD15・SD18を切り込み、SD12・SD19に切られている。確認できる長さは16.8m、最大幅1.45m、最大深0.31mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで第1層：褐灰色粘質土層、第2層：浅黄色粘質土層からなり、bセクションで第1層：灰オリーブ色粘質土層、第2層：暗オリーブ色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1628・1648)、土師器(1771・1772)、珠洲(1838～1840)が認められる。

**SD17**（図面138・176）：調査区を北東から南西方向に延びる不整形の溝である。途中SK133に切られるが、延びて南西端はSD20に切られ、東側は調査区外へ続く。確認できる長さは8.4m、最大幅0.9m、最大深0.16mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、第1層：灰色砂層、第2層：黒褐色粘質土層からなる。出土遺物は中世製青磁(1878)が認められる。

**SD18**（図面138・176）：調査区を北西から南東方向に斜めに横断する溝である。途中SK118に切り込まれ、SD12～SD16・SD21に切られる。確認できる長さは23.0m、最大幅2.2m、最大深0.3mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、第1層：黄灰色粘質土層、第2層：黒褐色粘質土層、第3層：灰黄色粘質土層からなる。出土遺物は須恵器、土師器(1724)が認められる。

**SD19**（図面138・176）：南北に延びる直線の溝で、北端、南端とも消失している。SD16・SD18・SK109を切りこんでいる。長さ8.2m、最大幅0.4m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器が認められる。

**SD20**（図面138・176）：南北に延びる直線の溝で、北端、南端とも消失している。SD17・SK134を切り込んでいる。長さ10.35m、最大幅0.75m、最大深0.09mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗オリーブ色粘質土層の単層である。出土遺物は中世土師器(1834)が認められる。

**SD21**（図面138・176）：東西に蛇行しながら延びており、西端はSD12に切られ、東側は調査区外へ続く。SK111・SK117・SK118を切り込んでいる。確認できる長さは9.0m、最大幅0.95m、最大深0.11mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層の単層からなる。出土遺物はない。

**SD22**（図面138・176）：南北に延びる直線の溝である。北端は溝に切れられ、南端は消失している。長さ7.5m、最大幅0.65m、最大深0.13mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗オリーブ色粘質土層の単層からなる。出土遺物は須恵器(1653)、土師器、木製品では棒状木製品(472)が認められる。

**SD23**（図面139・176）：西側調査区外から東に延びる直線の溝である。東端は消失している。長さ6.05m、最大幅0.25m、最大深0.08mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は暗オリーブ色粘質土層の単層である。出土遺物は煙管(116)がある。

**SD24**（図面137・176）：SD12より分岐して北西方向に延びる直線の溝である。北西端は消失している。途中SD10を切る。長さ11.0m、最大幅0.68m、最大深0.36mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は灰黄褐色粘質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器(1800・1879)、珠洲(1880)がある。

#### その他の遺構

**SX01**（図面138・177・178）：SX01は治水関連遺構である。南北に流れるSD02が北西側に大きく進路を変える場所に位置する。縦杭および横板が出土し、0.4mほどの大礫をSDの右岸沿いに並べ土台とし、SD02の反対側にあたる土台の東側部分を谷底よりも深く掘下げ、樹皮や枝で構成された補強材で土台の東側斜面の表面を覆っている。南北14.9m、東西4.2mの規模を有し、土台部の高さは1.58mを測る。SX01は調査区東側の縁辺部にあたり、それより東側の詳細は不明である。土台は南北方向に調査区北側微高地の岸まで達しており、土台の中央部分は南北両端よりも0.6m低くなる。その低くなっている中央部の東側に全長約150cm幅約10cmの先端を尖らせた杭が南北方向に0.3～0.4m間隔で列状に打ち込まれており、各々の杭が先端から約50cmのところで折れ曲がって西側に倒れ込んでいた。このことから、杭は急激な水流、またはそれに類するもので倒れたのではなく、緩やかな圧力のかかる状態で崩壊したことが考えられる。杭の上面には全長約200cm、幅30cm、厚さ約1cmの板が杭と直交する形で南北方向に3～4列並んで倒れていた。杭に利用された木材は角材に加工されたものと、樹皮の付いた自然木で先端だけ尖らせたものとが混在する。板材については全て丁寧に加工されていた。出土状況から横板は杭に沿うように上に3～4段で積み上げられていたと考えられる。杭と板には結合痕跡が窺えないことから結合方法は不明である。一方、板材が配置されていた両脇部分は土台状に高くなっている、その土台部東側の壁際には木の枝を縦に並べ、その表面を樹皮で被った護岸用の補強材が配置してあった。補強材と大礫の土台の間に幅0.5mほどの硬く締まった平坦な犬走り状の部分があり、上台の横断面を観察した結果、東側に土を斜めに入れて上手状にし、その表面に補強材を敷設していることが確認できた。補強材は恐らく、土台東側の護岸として機能していたものと見なされる。なお、中世面の遺構全体図ではSD17の延長線上に位置し、相互に関連しているようにみえるが、SD17の切り込み面は、SX01よりはるかに上位となり、相互に関連していたわけではない。遺物は構築部分である板状木製品(619～650・653・659・660・671・672・674・678・683・684・695・699・700)、棒状木製品(651・652・654～658・662～668・670・673・675～677・679～682・685～694・696～698・701～704)、杭(661・669)がなどの木製品が多量に出土している。

## （2）B・C地区

B・C地区（平成11年度調査）は中名VI遺跡のやや東寄りに位置している。用水路取り付け部分の細長い地区がB地区、水田復元に伴う面工事部分がC地区である。B地区とC地区はX235付近で接しており、更にB地区は中名V遺跡D3地区とX190で接している。検出された遺構は古代、中世、近世の大きく3時期があり、いずれも集落遺構が検出されている。しかし、調査区が長さ約300m、幅5m程度と細長いため、遺構の広がりや性格について得られる知見についてはおのずと限界がある。

### 1. 古代の遺構

古代の遺構はB地区で確認されており、大きく調査区の北側と南側に分かれて分布している。調査区中央部は中世の自然流路で削平されており、古代の遺構はみられない。検出された遺構には堅穴住居6棟、十坑、溝などがある。調査区北側では堅穴住居2棟、方形の十坑などが検出されており、調査区南側では切り合い関係にある堅穴住居4棟、土坑などが検出されている。これらの遺構の時期は概ね8世紀代におさまり、比較的短期間に存続していたと推定される。以下に遺構の記述をしていく。

#### 堅穴住居

**SI01**（図面185・195）：北側が調査区外となる比較的大型の堅穴住居である。平面形態は方形を呈し、

一辺5.3m、掘方までの深さ0.32mを測る。主軸方位はN70° E、床面積は15.4m<sup>2</sup>以上となる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。竪穴の覆土はぶい黄橙色砂質土層を基調に4層から構成される。カマドは西壁の中央付近に構築されていると考えられ、1.05×1.65mの範囲で焼土と炭が分布する。袖材は残存しない。覆土は黒褐色砂質土層となる。遺物は須恵器(1962～1965)、土師器(1966～1969・1976～1980)が出土している。

SI02 (図面185・196)：南側が調査区外となる。平面形態は隅丸方形を呈し、一辺2.5m以上、深さ0.25mを測る。床面積は5.5m<sup>2</sup>以上、主軸方位はN11° Eとなる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。竪穴の覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする9層から構成される。カマド等の付属施設は確認されないが、中央南寄り付近に炭の広がりが確認されている。遺物は土師器(1954～1961)、石製品では石鍤(85)が出土している。

SI03 (図面185・196)：平面形態は隅丸方形を呈し、一辺2.38～2.5m、深さ0.11mを測る。床面積は5.95m<sup>2</sup>、主軸方位はN15° Wとなる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。竪穴の覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする4層から構成される。カマドは北側のやや西寄りの位置に構築されている。主軸方位はN24° Wとなる。カマドは補強材である自然石が3個原位置を保っており規模は幅約1.5mで、主軸長は1.4m以上となる。覆土は灰オリーブ色砂質土層を基調とする7層から構成される。燃焼部での袖石は西側に3個残存する。遺物は土師器(1970～1975)が出土している。

SI04 (図面180・197)：東西の壁に切られているため、全体の規模や形態は不明である。検出面からの深さは0.06mを測り、壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。竪穴の覆土は暗灰黄色砂質土層となる。カマドは北辺に構築されており、主軸方位はN 1° Wとなる。カマドの規模は幅1.5m以上で、深さ0.06mを測る。主軸長は1.65m、竪穴外へ伸びる煙道は0.75mほど突出する。燃焼部での袖間の幅は0.38～0.5mで、左袖に5個、右袖に3個の長径15～25cmほどの自然隕を袖補強材とし、( )状に組まれているカマドの南西部分には東西0.3m、南北0.4mの範囲で炭と黒褐色粘土の広がりが確認され、カマドから掻き出された炭を溜めておくような構造であったと推定される。遺物は須恵器(1944・1945)、土師器(1946～1951)が出土している。

SI05 (図面180・197)：西側は調査区外、東側は中世の造構により破壊されているため全容は不明である。残存部分の規格は、長辺2.3m、短辺1.5m以上、深さ0.1mを測る。壁面の立ち上がりは不明瞭である。南東隅に東西1.3m、南北1.3mで、焼土および炭化物の集中がみられるが、カマドは確認されない。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする4層から構成される。遺物は焼土に混じって、土師器(1952・1953)、須恵器(1994)が出土している。

SI06 (図面185・198)：北側・東側が調査区外となる。平面形態は隅丸長方形を呈し、長辺4.3m以上、短辺2.45m以上、深さ0.05mを測る。現存する床面積は9.3m<sup>2</sup>、主軸方位はN 6° Eとなる。壁面の立ち上がりはやや傾斜を持つ。竪穴の覆土は暗灰黄色砂質土層となる。カマドは北側に構築されている。カマドの規模は北壁に切られるため詳細は不明。覆土は第1層：(10YR3/1)黒褐色砂質土層、第2層：暗褐色砂質土層、第3層：(10YR3/2)黒褐色砂質土層からなる。遺物は須恵器(1981)、土師器(1982～1985・1987～1989)、石製品が出土している。

### 土坑

SK001 (図面198)：平面形態は不整形を呈し、SI06に切り込まれる。北側は調査区外に広がる。規模は長径1.76m以上、短径1.45m以上、深さ0.12mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器(1986)がある。

**SK002** (図面198)：平面形態は隅丸方形で、SK003を切り込み、北側は調査区外に広がる。規模は長辺1.84m以上、短辺1.78m、深さ0.15mを測る。東部分で焼土と炭化物の広がりが認められた。覆土は第1層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK003** (図面198)：平面形態は隅丸方形で、SK002に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長辺1.85m以上、短辺1.05m以上、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK004** (図面199)：平面形態は隅丸方形で、北側は調査区外に広がる。堅穴住居の可能性もあるが、カマドや焼土・炭化物が集中する地点など確認されなかった為、土坑とした。規模は長辺2.18m、短辺1.5m以上、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK005** (図面199)：平面形態は不整形で、北側は調査区外に広がる。規模は長辺1.37m、短辺1.25m、深さ0.13mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK006** (図面199)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.8m、短径0.56m、深さ0.16mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK007** (図面199)：平面形態は円形で、規模は径0.36～0.42m、深さ0.05mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK008** (図面199)：平面形態は楕円形で、SK009を切り込む。規模は長径1.25m、短径0.7m、深さ0.08mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK009** (図面199)：平面形態は楕円形で、SD05・SK008に切り込まれる。規模は長辺1.68m、短径1.36m、深さ0.06mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂質土層、第2層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK010** (図面199)：平面形態は不整形で、SK011に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.7m、短径1.49m、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK011** (図面199)：平面形態は円形で、SK010を切り込む。規模は径0.15～0.18m、深さ0.13mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK012** (図面199)：平面形態は円形で、SK013・SK014を切り込み、南側は調査区外に広がる。規模は径0.32～0.56m、深さ0.06mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK013** (図面199)：平面形態は円形で、SK014を切り込み、SK012に切り込まれる。規模は径0.52～0.57m、深さ0.13mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK014** (図面199)：平面形態は不整形で、SK012・SK013に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。規模は長径1.46m以上、短径1.27m以上、深さ0.08mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK015** (図面200)：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺1.16m、短辺0.71m、深さ0.18mを測る。土坑内には大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1999)、土師器がある。

**SK016** (図面200)：平面形態は不整形で、規模は長径0.9m、短径0.62m、深さ0.17mを測る。土坑内には焼土と炭化物が分布し、更に大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK017** (図面200)：平面形態は楕円形で、SK021に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径1.24m、短径1.2m、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：(2.5Y6/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器(1995・1996)、土師器がある。

**SK018** (図面200)：平面形態は円形で、規模は径0.34～0.35m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK019** (図面200)：平面形態は円形で、規模は径0.28～0.3m、深さ0.09mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK020** (図面200)：平面形態は円形で、規模は径0.42～0.45m、深さ0.1mを測る。覆土はにぶい黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器がある。

**SK021** (図面200)：平面形態は円形で、SK017を切り込む。規模は径0.49～0.51m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1998)、土師器がある。

**SK022** (図面200)：平面形態は円形で、規模は径0.3m、深さ0.04mを測る。覆土はにぶい黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK023** (図面200)：平面形態は楕円形で、規模は長辺0.66m、短辺0.46m、深さ0.04mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK024** (図面200)：平面形態は楕円形で、SK025を切り込む。規模は長径0.9m、短径0.47m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

**SK025** (図面200)：平面形態は楕円形で、SK024に切り込まれる。規模は長径1.05m、短径0.55m、深さ0.08mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK026** (図面200)：平面形態は円形で、北側は調査区外に広がる。規模は径0.29～0.86m以上、深さ0.05mを測る。覆土はにぶい黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK027** (図面200)：平面形態は円形で、SK028を切り込む。規模は径0.4～0.47m、深さ0.06mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はにぶい黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器が認められる。

**SK028** (図面200)：平面形態は円形で、SK027に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。規模は径0.44～0.54m以上、深さ0.03mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土はにぶい黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK029** (図面200)：平面形態は円形で、規模は径0.34～0.48m、深さ0.05mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK030** (図面200)：平面形態は円形で、規模は径0.2～0.22m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK031** (図面200)：平面形態は円形で、SK032を切り込む。規模は径0.52～0.62m、深さ0.04mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器が

認められる。

SK032（図面200）：平面形態は橢円形で、SK031に切り込まれる。規模は長径0.38m、短径0.3m以上、深さ0.03mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK033（図面200）：平面形態は隅丸方形で、土坑を切り込む。規模は長辺0.82m、短辺0.69m以上、深さ0.04mを測る。覆土は暗灰黄色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK034（図面200）：平面形態は円形で、規模は径0.42m、深さ0.2mを測る。覆土はぶい黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器（2000）がある。

SK035（図面200）：平面形態は円形で、東側は調査区外に広がる。規模は径0.31～0.5m、深さ0.09mを測る。覆土は黄褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK036（図面201）：平面形態は不整形で、SI03を切り込む。規模は長径1.4m、短径1.38m、深さ0.37mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は土師器がある。

SK037（図面201）：平面形態は橢円形で、SI03・SK038を切り込む。規模は長径1.1m以上、短径0.95m、深さ0.33mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK038（図面201）：平面形態は円形で、SI03を切り込み、SK037に切り込まれる。規模は径0.87～0.92m、深さ0.05mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK039（図面201）：平面形態は橢円形で、土坑に切り込まれる。規模は長径1.23m、短径0.98m、深さ0.13mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

SK040（図面201）：平面形態は円形で、土坑に切り込まれる。規模は径0.9～1.0m、深さ0.17mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/2)暗灰黄色砂粘質土層、第2層：(2.5Y4/2)暗灰黄色砂粘質土層となる。出土遺物は土師器がある。

SK041（図面201）：平面形態は円形で、規模は径0.25～0.27m、深さ0.12mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK042（図面201）：平面形態は円形で、規模は径0.25～0.35m、深さ0.1mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK043（図面201）：平面形態は円形で、規模は径0.2～0.25m、深さ0.07mを測る。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK143（図面195）：南側は調査区外となり、また、SI02に切られているため、全体の規模や形態は不明である。深さ0.26m、覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層、第3層：灰色砂質土層に分層される。遺物は土師器が出土している。

#### 溝・自然流路

SD01（図面180・201）：古代の溝。調査区北端部分で南北に延びる不整形の溝である。南端は消失し、北端はSD02に切り込まれ調査区外に広がる。確認できる長さは11.0m、最大幅1.72m、最大深0.08mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は第1層：灰色砂質土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第3層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器、土師器、木製品では下駄(764)が認められる。

SD02（図面180・201）：SD01の西側に南北に延びる直線の溝で調査区外に広がっている。北側でSD

01を切り込む。確認できる長さは8.5m、最大幅0.7m、最大深0.05mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層である。出土遺物は鉄滓が認められる。

**SD03**（図面180・201）：北端は消失し南北にのびる直線の溝で南端はSD02に切り込まれている。確認できる長さは4.9m、最大幅0.8m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は灰色粘質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD04**（図面180・201）：調査区を南北に横断する直線の溝で、調査区外に延びている。確認できる長さは3.0m、最大幅2.4m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は土師器が認められる。

**SD05**（図面180・201）：SD04に併走して南北に横断する直線の溝である。確認できる長さは3.4m、最大幅2.1m、最大深0.02mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は土師器が認められる。

**SD06**（図面184・202）：調査区を南北に横断する直線の溝で、調査区外に広がっている。SD07を切っている。確認できる長さは4.7m、最大幅1.2m、最大深0.21mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層と暗灰黄色粘土層の混土からなる。出土遺物は土師器が認められる。

**SD07**（図面184・185・202）：調査区を南北に横断する直線の溝で、調査区外に広がっており、SD08を切り込んでいる。SD06に切られる。確認できる長さは4.5m、最大幅19.5m、最大深0.38mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SD08**（図面184・202）：調査区を南北に横断する自然流路で調査区外に広がっている。SD07に切り込まれている。確認できる長さは4.3m、最大幅3.7m、最大深0.16mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：黒褐色砂質土層 第2層：暗灰黄色粘土層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SD09**（図面183・203）：調査区を東西に横断し、調査区外に広がる自然流路である。確認できる長さは4.5m、最大幅9.3m、最大深0.35mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：にぶい黄色粘土層、第2層：暗灰黄色砂質土層、第3層：にぶい黄色粘土層である。出土遺物は土師器がある。

**SD10**（図面183・203）：SD09の南側に広がる流路である。確認できる長さは3.5m、最大幅18.0m、最大深1.0mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は灰色粘土層を基調とする。出土遺物は認められない。

## 2. 中世の遺構

中世の遺構はB・C地区全体で確認されており、そのなかでもC地区の中央部から南側で遺構密度が高い。B地区の中央から北側にかけては自然流路が流れおり、集落遺構の広がりはこの自然流路で途切れる様相が看取できる。中世の遺構は中世包含層が暗灰黄色を基調とする砂質土層であるため遺構の覆土も同様に暗灰黄色砂質土から黒褐色砂質土を基調としている。検出された遺構には掘立柱建物8棟、柵列、井戸3基、大小の土坑、溝、噴砂などの集落に関連する遺構で主体を占められている。調査区南部のX198～203区の範囲では掘立柱建物や土坑などが密に分布している。掘立柱建物は主軸方位などからSB05・SB06・SA01のグループと、SB07・SB08・SA02のグループに分けられ、前者が後者より古いと考えられる。これらの建物遺構は13世紀後半～14世紀を中心とする時期におさまると考えられる。

### 掘立柱建物

**SB01～SP34～SP42** (図面190・204・208) : 建物の東側が調査区外となるため規模は不明だが、梁行3間(5.3m)、桁行3間以上(3.1m以上)の総柱建物である。建物の棟方向はN23° E、柱間距離は、梁行1.0～1.5m、桁行1.2～2.0mである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.23～0.42m、深さ0.08～0.23mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層～黄褐色砂質土層を基調とする。出土遺物はSP34、SP37から土師器が認められる。

**SB02～SP36～SP43～SP49** (図面190・204・208) : 建物の規模は、梁行2間(3.9m)、桁行3間(5.6m以上)の総柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN40° Eで床面積は21.8m<sup>2</sup>。柱間距離は、梁行1.9～2.0m、桁行1.9～3.0mである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.25～0.48m、深さ0.12～0.25mを数える。柱穴内覆土は暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は認められない。

**SB03～SP50～SP59** (図面190・205・208) : 建物の両側が調査区外となるため規模は不明だが、梁行4間(7.4m)、桁行4間以上(4.5m以上)の総柱建物である。建物の棟方向はN32° W、柱間距離は、梁行2.1～2.4m、桁行2.3～2.5mである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.2～0.43m、深さ0.06～0.24mを数える。柱穴内覆土は黄灰色粘質土層～黒褐色粘質土層を基調とする。遺物はSP53から中世土師器、SP56、SP58で柱根(758・759)が認められる。

**SB04～SP01～SP60～SP64** (図面193・205・208) : 梁行1間(2.2～2.4m)、桁行2間(2.7m)の小規模な側柱建物で、平面プランは長方形を呈す。建物の棟方向はN48° Wで床面積は6.5m<sup>2</sup>。柱間距離は、桁行1.3～1.4mである。柱穴形態は円～隅丸方形で径0.28～0.41m、深さ0.13～0.23mを数える。柱穴内覆土は灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物はSP01から中世土師器が認められる。

**SB05～SP01～SP06** (図面193・206・207) : 南側が調査区外のため建物の規模は不明だが、梁行3間(1.4m)、桁行2間以上(2.3m以上)の総柱建物と推測される。建物の棟方向はN74° W、柱間距離は、梁行1.9～2.2mである。柱穴形態は円形で、径0.15～0.33m、深さ0.05～0.34mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物はSP01・SP02・SP04で中世土師器、SP06で柱根(763)が認められる。

**SB06～SP07～SP10** (図面193・206・207) : 建物の北側が調査区外のため規模は不明だが、梁行3間(4.6m)の建物である。建物の棟方向はN79° W、柱間距離は、梁行1.2～2.0m。柱穴形態は円形で、径0.19～0.47m、深さ0.21～0.29mを数える。柱穴内覆土は黒褐色砂質土層～黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物はSP07・SP09から中世土師器が認められる。

**SB07～SP16～SP23** (図面193・206・207) : 南側が調査区外のため建物の規模は不明だが、梁行4間(6.4m)、桁行1間以上(2.1m以上)の総柱建物と推定される。建物の棟方向はN82° W、柱間距離は、梁行0.8～1.8m。柱穴形態は円～楕円形で、径0.18～0.68m、深さ0.15～0.49mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物はSP18から十師器、SP19から土師器、中世土師器、金属製品では鉄淬、SP20から土師器、SP27から土師器、中世土師器、SP21から中世土師器(2088)がそれぞれ出土している。

**SB08～SP24～SP28** (図面193・206・207) : 梁行4間(5.7m)、桁行1間以上(0.5m以上)の建物だが北側が調査区外となるため規模は不明である。建物の棟方向はN86° W、柱間距離は、梁行1.2～1.6mである。柱穴形態は円～楕円形で、径0.21～0.46m、深さ0.05～0.5mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層～暗灰黄色砂質土層を基調とする。遺物はSP24から木製品、SP25で土師器、柱根(762)が認められる。

## 柵列

**SA01～SP11～SP15**（図面193・206・207）：SB06とほぼ平行に、5基の柱穴が並ぶ柵列である。方位はN79°W、柱間距離は1.1～1.5mである。柱穴形態は円～梢円形で径0.22～0.73m、深さ0.11～0.37mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物はSP11で土師器、中世土師器、SP14で土師器、SP15から土師器、中世土師器が認められる。

**SA02～SP29～SP33**（図面193・206・207）：SB07とSB08の中間に位置する柵列で、5基の柱穴が並ぶ。方位はN87°W、柱間距離は1.2～1.4mである。柱穴形態は円～不整形で径0.12～0.8m、深さ0.07～0.43mを数える。柱穴内覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物はSP29で木製品、SP31から中世土師器、SP33から鉄滓(115)が認められる。

## 井戸

**SE01**（図面185・209）：木枠組井戸である。掘方の平面形態は円形で、一辺1.85～2.03m、深さ0.95mの規模を測る。横断面の形態は擂鉢型である。井戸側は縦板組横材留で現在も水が湧出する為、湧水天より下に位置する部位は良好に残存する。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.54～0.59m、底面からの残存高は0.61mを測る。木枠は支柱を持たず横木の組み合わせのみでつくられており、短形三枚相接と呼ばれる角材の接合法が確認される。底面には木枠の南西隅に曲物を据える。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする4層から構成される。遺物は中世土師器皿(2050)、土師器、木製品では曲物(708・710)、下駄(709)、升(711)、井戸枠(712～754)が出土する。下層埋土中から下駄、升、モモの核が出土していることから、井戸が使用されなくなった後、下駄や升などの井戸内落物が消掃されないまま埋め戻しと井戸祭祀が行われ、その後、若干窪地となった部分に土が自然堆積したと考えられる。

**SE02**（図面190・209）：石組井戸である。井筒部は掘方の北西側にやや片寄って設置される。内径は上面で0.43m、底面で0.25mと、やや角度を付けて右回りの螺旋状に石組みされる。掘方の平面形態は円形で、径1.29～1.34m、深さ0.73mの規模を測る。横断面の形態は漏斗型である。底面には水溜に曲物を据えるが遺存状態は良くない。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黒褐色粘質土層、第3層：黄灰色砂層に分層される。遺物としては中世土師器、木製品では山物、加工木が出土している。

**SE03**（図面191・209）：木枠組井戸である。4つに四角く組まれた木枠が残存し、側板は遺存していない。掘方の平面形態は円形で、一辺1.79～2.0m、深さ1.0mの規模を測る。横断面の形態は底が平坦な鍋底型である。井筒本体の平面形態は方形で、一辺0.94～0.98m、底面からの残存高は0.35mを測る。覆土は暗オリーブ褐色砂粘質土層を基調とする。遺物は須恵器、土師器、中世土師器(2156～2158)、珠洲、越前、木製品では井戸枠(818～825)が出土している。

## 土坑

**SK044**（図面210）：平面形態は円形で、SD14に切り込まれる。規模は径1.05～1.2m以上、深さ0.18mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK045**（図面210）：平面形態は梢円形で、規模は長径0.96m、短径0.76m、深さ0.07mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK046**（図面210）：平面形態は不整形で、SD14に切り込まれる。規模は長径0.71m、短径0.23m以上、深さ0.09mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK047** (図面210)：平面形態は円形で、SD14を切り込む。規模は径2.16～2.36m、深さ0.17mを測る。土坑内は円礫が密集している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：灰オリーブ色砂粘質土層からなる。出土遺物は珠洲がある。

**SK048** (図面210)：平面形態は隅丸方形で、西側は調査区外に広がる。規模は長辺2.9m、短辺1.86m、深さ0.09mを測る。土坑内は大小の礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層だが部分的ではあるが、炭化物層が分布する。出土遺物は中世土師器(2051)がある。

**SK049** (図面210)：平面形態は隅丸方形で、南側はSD17が分岐し、西側は調査区外に広がる。規模は長辺3.15m、短辺1.63m、深さ0.27mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は黄灰色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、中世土師器(2052)がある。

**SK050** (図面210)：平面形態は梢円形で、SD26・SD27を切り込む。西側は調査区外に広がる。規模は長径1.82m以上、短径1.63m、深さ0.15mを測る。土坑内は円礫を多く含む。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1993)、土師器がある。

**SK051** (図面211)：平面形態は円形で、規模は径0.75m以上、深さ0.18mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲(2057)、木製品では下駄(765)がある。

**SK052** (図面211)：平面形態は円形で、SD13を切り込む。規模は径0.57～0.62m、深さ0.17mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は褐灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK053** (図面211)：平面形態は円形で、規模は径0.35～0.38m、深さ0.18mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は珠洲がある。

**SK054** (図面211)：平面形態は円形で、規模は径0.29～0.31m、深さ0.19mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK055** (図面211)：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺0.7m、短辺0.5m、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

**SK056** (図面211)：平面形態は円形で、SD13を切り込む。規模は径0.21～0.4m、深さ0.11mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK057** (図面211)：平面形態は円形で、規模は径0.2～0.23m、深さ0.17mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK058** (図面211)：平面形態は円形で、規模は径0.24～0.34m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK059** (図面211)：平面形態は梢円形で、東側は調査区外に広がる。規模は長径0.67m以上、短径0.52m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は灰色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK060** (図面211)：平面形態は梢円形で、SK061を切り込む。規模は長径0.48m、短径0.44m、深さ0.09mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK061** (図面211)：平面形態は梢円形で、SK060に切り込まれる。規模は長径0.4m、短径0.32m、深さ0.07mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK062** (図面211)：平面形態は橢円形で、規模は長径1.43m、短径0.62m、深さ0.44mを測る。土坑内は礫が分布している。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は中世土師器がある。

**SK063** (図面211)：平面形態は橢円形で、SD35を切り込み、東側は調査区外に広がる。規模は長径1.38m、短径0.29m以上、深さ0.09mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：灰色砂質土層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK064** (図面211)：平面形態は隅丸方形で、西側は調査区外に広がる。規模は長辺1.2m、短辺0.64m以上、深さ0.06mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

**SK065** (図面211)：平面形態は橢円形で、SP04・SK066を切り込む。規模は長径0.65m、短径0.4m、深さ0.16mを測る。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK066** (図面211)：平面形態は円形で、SK065に切り込まれる。規模は径0.36～0.57m、深さ0.13mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK067** (図面211)：平面形態は隅丸方形で、SP63に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長辺1.19m、短辺0.75m以上、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は認められない。

**SK068** (図面211)：平面形態は隅丸方形で、上坑に切り込まれ、西側は調査区外に広がる。規模は長辺0.87m、短辺0.7m以上、深さ0.02mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK069** (図面211)：平面形態は隅丸方形で、南西側は調査区外に広がる。規模は長辺1.77m、短辺1.39m以上、深さ0.31mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SK070** (図面212)：平面形態は隅丸方形で、SK072・SK074・SK096を切り込む。規模は長辺1.42m、短辺0.85m、深さ0.19mを測る。覆土は全体的に炭化物を多く含んでおり、第1層：(2.5Y3/2)黒褐色砂質土層、第2層：(2.5Y3/1)黒褐色粘質土層となる。出土遺物は中世土師器、木製品がある。

**SK071** (図面212)：大型土坑で平面形態は隅丸方形でSK072などを切り込み、SK073・SK081に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。規模は長辺2.4m、短辺2.0m、深さ0.24mを測る。土坑内には東西方向に人頭大の円礫を並べた石列を有する。石列は底面から離れており、性格は不明である。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黒褐色粘質土層となる。出土遺物は須恵器(1990・1991)、土師器(1992)、中世土師器、中国製白磁、中国製青磁、越中瀬戸、木製品がある。

**SK072** (図面212)：大型上坑で平面形態は隅丸長方形で、SD36・SK078・SK080・SK087を切り込み、SK070・SK071などに切り込まれる。規模は長辺2.5m、短辺1.85m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は上師器、中世土師器、須恵器がある。

**SK073** (図面212)：平面形態は橢円形でSK071・SK075を切り込む。規模は長径1.65m、短径0.99m以上、深さ0.37mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は土師器、中世土師器、木製品では柱根(761)、箸、その他木製品がある。

**SK074** (図面212)：平面形態は不整形でSK070に切り込まれる。規模は長径0.65m、短径0.45m以上、深さ0.32mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は土師器がある。

**SK075** (図面212)：平面形態は不整形で、SK076を切り込み、SK073に切り込まれ南側は調査区外に広がる。規模は長径0.94m以上、短径0.64m以上、深さ0.15mを測る。土坑内は小礫が混入している。

覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器、近世陶磁器がある。

**SK076** (図面212)：平面形態は不整形で、SK075に切り込まれ南側は調査区外に広がる。規模は長径0.38m、短径0.32m、深さ0.16mを測る。覆土は黒褐色粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK077** (図面212)：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺0.62m、短辺0.43m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK078** (図面212)：平面形態は円形で、SK072に切り込まれる。規模は径0.43～0.45m、深さ0.25mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(2090)、土師器がある。

**SK079** (図面212)：平面形態は円形で、南側は調査区外に広がる。規模は径0.31m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK080** (図面212)：平面形態は梢円形で、SP23・SK071・SK072に切り込まれ、南側は調査区外に広がる。規模は長径0.96m、短径0.44m、深さ0.29mを測る。上坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器(2054)がある。

**SK081** (図面212)：平面形態は不整形で、SK071・SK072を切り込む。規模は長径0.76m、短径0.57m、深さ0.25mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：灰黄色砂質土層となる。出土遺物は土師器、中世土師器がある。

**SK082** (図面212)：平面形態は円形で、SK072を切り込む。規模は径0.3～0.48m、深さ0.25mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK083** (図面212)：平面形態は隅丸方形で、SK070に切り込まれる。規模は長辺0.62m、短辺0.53m、深さ0.25mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰色砂層となる。出土遺物は木製品がある。

**SK084** (図面212)：平面形態は梢円形で、SP14に切り込まれる。規模は長径0.5m、短径0.35m、深さ0.13mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK085** (図面212)：平面形態は円形で、SP15・SP33に切り込まれる。規模は径0.25m、深さ0.24mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK086** (図面212)：平面形態は梢円形で、SP15・SP33に切り込まれる。規模は長径0.25m、短径0.2m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK087** (図面212)：平面形態は梢円形で、SK072に切り込まれる。規模は長径0.89m、短径0.48m、深さ0.22mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK088** (図面212)：平面形態は梢円形で、SK072を切り込む。規模は長径0.35m、短径0.2m、深さ0.04mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK089** (図面212)：平面形態は円形で、SK071に切り込まれる。規模は径0.26～0.36m、深さ0.09mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK090** (図面212)：平面形態は梢円形で、規模は長径0.23m、短径0.15m、深さ0.08mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK091** (図面212)：平面形態は円形で、SK071・SK084に切り込まれる。規模は径0.21～0.22m、深さ0.05mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK092** (図面213)：平面形態は円形で、SP21に切り込まれる。規模は径0.3～0.36m、深さ0.05mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器がある。

**SK093** (図面213)：平面形態は楕円形で、SK095を切り込む。規模は長径0.56m、短径0.45m、深さ0.37mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK094** (図面213)：平面形態は楕円形で、SK096を切り込み、SP11・SP17・SP29に切り込まれる。規模は長径0.85m以上、短径0.9m、深さ0.3mを測る。覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器(2055・2056)、金属製品では鉄滓(118)がある。

**SK095** (図面213)：平面形態は円形で、SP16・SK093に切り込まれる。規模は径0.25～0.3m、深さ0.2mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK096** (図面213)：平面形態は不整形で、SK070・SK094に切り込まれる。規模は長径0.49m以上、短径0.5m、深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK097** (図面213)：平面形態は円形で、南側は調査区外に広がる。規模は径0.55m、深さ0.15mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK098** (図面213)：平面形態は円形で、SK102を切り込む。規模は径0.24～0.4m、深さ0.32mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK099** (図面213)：平面形態は円形で、規模は径0.34～0.42m、深さ0.06mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK100** (図面213)：平面形態は円形で、規模は径0.32m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

**SK101** (図面213)：平面形態は楕円形で、SK102を切り込む。規模は長径1.2m、短径0.5m、深さ0.13mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は第1層：(2.5Y3/1)黒褐色砂質土層、第2層：(2.5Y3/2)黒褐色粘質土層、第3層：(2.5Y3/1)黒褐色砂粘質土層に分層される。出土遺物は中世土師器がある。

**SK102** (図面213)：大型土坑で平面形態は隅丸方形で、SD36を切り込み、SP27・SP28・SK098・SK101・SK103に切り込まれる。規模は長辺2.9m、短辺2.59m、深さ0.06mを測る。土坑内は大小の円礫が散在し北壁には、直徑0.4m程の細長い石を5個並べられる。SK71と同様に底面から離れており、性格は不明である。覆土は灰黄色砂層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器、中国製青磁香炉(2087)、珠洲、石製品では玉軸、金属製品では鉄滓がある。

**SK103** (図面213)：平面形態は隅丸方形で、SE01・SK102を切り込む。規模は長辺2.3m、短辺1.65m以上、深さ0.32mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(1997)、土師器、中世土師器、珠洲がある。

**SK104** (図面214)：平面形態は楕円形で、SD36を切り込み、SP24に切り込まれる。規模は長径0.47m、短径0.3m、深さ0.19mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

**SK105** (図面214)：平面形態は円形で、SK106を切り込み、北側は調査区外に広がる。規模は径0.45～0.55m、深さ0.26mを測る。土坑内は小礫が混入している。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器、木製品では柱根(760)がある。

**SK106** (図面214)：平面形態は楕円形で、SP25・SP26・SD36・SK105に切り込まれ、北側は調査区外に広がる。規模は長径2.41m、短径0.55m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層、第3層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層

からなる。出土遺物は土師器がある。

SK107（図面214）：平面形態は円形で、SD13に切り込まれる。規模は径0.32～0.36m、深さ0.07mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：褐灰色砂質土層となる。出土遺物は土師器がある。

SK108（図面214）：平面形態は楕円形で、SK109に切り込まれる。規模は長径0.55m、短径0.33m、深さ0.08mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：黒褐色粘土層となる。出土遺物は土師器がある。

SK109（図面214）：平面形態は円形で、SK108を切り込む。規模は径0.32～0.38m、深さ0.28mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK110（図面214）：平面形態は円形で、規模は径0.4～0.46m、深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器、木製品がある。

SK111（図面214）：平面形態は楕円形で、規模は長径0.49m、短径0.37m、深さ0.17mを測る。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK112（図面214）：平面形態は楕円形で、SD37を切り込む。規模は長径2.95m、短径1.2m、深さ0.24mを測る。土坑内は小砾が散在している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器(2053)、珠洲、石製品では砥石がある。

SK113（図面214）：平面形態は円形で、SK114を切り込む。規模は径0.38～0.42m、深さ0.16mを測る。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK114（図面214）：平面形態は楕円形で、SK113に切り込まれる。規模は長径1.34m、短径0.92m、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層となる。出土遺物は土師器がある。

SK115（図面214）：平面形態は不整形で、規模は長径1.25m、短径0.94m、深さ0.21mを測る。覆土は第1層：(2.5Y4/1)黄灰色砂質土層、第2層：(2.5Y5/1)黄灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

SK116（図面215）：平面形態は隅丸方形で、SD36を切り込み、東側は調査区外に広がる。規模は長辺2.95m、短辺1.13m以上、深さ0.37mを測る。土坑内は、大小の砾が散在する。覆土は第1層：黄灰色砂質土層、第2層：黒褐色粘質土層に炭化物が混じる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK117（図面215）：平面形態は隅丸方形で、SD29を切り込み、南側は調査区外に広がる。規模は長辺1.65m、短辺0.5m以上、深さ0.12mを測る。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK118（図面215）：平面形態は不整形で、SD18に切り込まれ西側は調査区外に広がる。規模は長径1.71m以上、短径0.6m以上、深さ0.18mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色粘質土層となる。出土遺物は認められない。

SK119（図面215）：平面形態は楕円形で、南側は調査区外に広がる。規模は長径2.85m、短径0.32m以上、深さ0.12mを測る。覆土は第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄褐色砂質土層となる。出土遺物は中世土師器、珠洲がある。

SK120（図面215）：平面形態は隅丸方形で、南東側は調査区外に広がる。規模は長辺2.65m、短辺2.06m、深さ0.19mを測る。覆土は第1層：(2.5Y5/1)黄灰色砂粘質土層、第2層：(2.5Y4/1)黄灰色粘質土層で一部炭化物が層をなしている。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

SK121（図面216）：平面形態は円形で、規模は径0.28～0.34m、深さ0.15mを測る。覆土は黄灰色砂質

土層のみの単層となる。出土遺物は砥石(87)がある。

SK122 (図面216)：平面形態は円形で、規模は径0.22～0.26m、深さ0.07mを測る。土坑内は、礫が混入する。覆土は黄灰色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK123 (図面216)：平面形態は楕円形で、SD26に切り込まれる。規模は長径0.68m、短径0.55m、深さ0.14mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は認められない。

SK124 (図面216)：平面形態は円形で、規模は径0.32～0.33m、深さ0.09mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK125 (図面216)：平面形態は円形で、規模は径0.2m、深さ0.08mを測る。土坑内は、礫詰め状態である。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK126 (図面216)：平面形態は隅丸方形で、SD19を切り込み、東側は調査区外に広がる。規模は長辺1.29m、短辺1.21m以上、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は暗灰黄色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は木栓(817)、加工木がある。

SK127 (図面216)：平面形態は不整形で、規模は長径1.5m、短径1.13m、深さ0.15mを測る。土坑内は礫が混入している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(2159)が認められる。

SK128 (図面216)：平面形態は楕円形で、SD24を切り込む。規模は長径1.52m、短径1.17m、深さ0.32mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(2161)がある。

SK129 (図面216)：平面形態は円形で、規模は径0.3～0.31m、深さ0.07mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK130 (図面216)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.46m、短径0.43m、深さ0.15mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK131 (図面216)：平面形態は楕円形で、規模は長径0.45m、短径0.3m、深さ0.11mを測る。覆土は黒褐色砂粘質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器がある。

SK142 (図面223)：平面形態は不整形で、規模は長径2.05m、短径1.1m、深さ0.05mを測る。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層に分層される。出土遺物は認められない。

#### 溝・自然流路

SD11 (図面186・217)：調査区北側で南北に延びる直線の溝である。重なり合うSD12を切り込んで東側調査区外に広がっている。確認できる長さは7.7m、最大幅0.4m、最大深0.26mを測る。断面形態は逆台形を呈し、覆土は黄灰色砂層を基調とする。出土遺物は土師器、中世土師器、瀬戸美濃が認められる。

SD12 (図面186・217)：南北に延びる不整形の溝で、調査区外に広がる。東側でSD11に切り込まれている。確認できる長さは20.0m、最大幅6.2m、最大深0.23mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで灰色粘土層を基調とし、bセクションで灰色砂質土層を基調とし、cセクションで第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：灰色砂質土層となる。出土遺物は須恵器(2015・2020・2029・2033・2047)、土師器、中世土師器、中国製青磁(1923・2095)、珠洲(2096)、八尾、木製品では漆器が認められる。

SD13 (図面188・189・190・217)：中世から近世にかけての溝で、SD14と併走し、重なりあいなが

ら調査区中央部分（調査区外推定）全体を南北に蛇行している。推定される長さは95.0m、最大幅4.3m、最大深0.29mを測る。断面形態は不整形を呈し、覆土は灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器（2048）、土師器、中世土師器、瀬戸美濃（2059）、珠洲（2060・2061）、八尾、越中瀬戸（2058・2062・2063）、唐津、伊万里、木製品では漆器（769～773）、棒状木製品（790・798～800）、円形板（801・802・809）、板状木製品（792）、その他木製品が認められる。なお、遺物には近世陶磁器類も若干出土しているが、出土層位は上位であり、また数量的にも少層である。このため、溝の主体となる時期は中世としておく。

**SD14**（図面188・189・190・217）：SD13と併走、重なりあって調査区中央部分（調査区外推定）全体を南北に蛇行している。推定される長さは96.5m、最大幅5.8m、最大深0.35mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで暗灰黄色粘質土層の単層であり、bセクションで灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、珠洲が認められる。

**SD15**（図面191・218）：東西に延びる直線の溝で北側、両端とも調査区外に広がっている。SD21（中世下層）の上層に重なっている。途中SD19に南北に切られる。確認できる長さは29.0m、最大幅4.0m、最大深0.32mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は各セクションとともに暗灰黄色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、中世土師器、珠洲が認められる。

**SD16**（図面190・218）：SD13より分岐して調査区を南西方向に横断し調査区外に延びている直線の溝である。確認できる長さは5.1m、最大幅0.5m、最大深1.0mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。掘立柱建物のSB02と主軸で同一方向に延びることから、SB02と同時期に伴っていたと考えられる。出土遺物は土師器がある。

**SD17**（図面190・218）：SK049から分岐し北東に延びる直線の溝である。北東端は消失している。長さ4.65m、最大幅0.45m、最大深0.11mを測る。断面形態は台形を呈し、覆土は黄灰色粘質土層の単層である。出土遺物は中国製白磁が認められる。

**SD18**（図面190・218）：調査区を南北に横断する溝である。確認できる長さは7.2m、最大幅1.5m、最大深0.13mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器が認められる。

**SD19**（図面191・218）：北側調査区外より南北に長く続く直線の溝である。途中SD23、SK126に切られ、SD15（SD21）を切る。確認できる長さは36.5m、最大幅1.7m、最大深0.2mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色粘土層、第3層：暗灰黄色砂質土層となり、bセクションで黒褐色砂質土層の単層である。出土遺物は土師器、中世土師器（2164～2166）、中国製青磁、珠洲、八尾、瓦質上器の火鉢（2168）が認められ、木製品では下駄（816）、漆器（814・815）がみられる。

**SD20**（図面191・218）：北側はSD21に切られ、南東に延びる直線の溝で南端はSD25に切られ、北側はSD21（SD15）に切られる。長さ4.2m、最大幅1.3m、最大深0.26mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで第1層：黒褐色砂質土層、第2層：暗褐色砂層となり、bセクションで第1層：黒褐色砂質土層、第2層：黒褐色砂質土層となる。出土遺物は土師器、中世土師器が認められる。

**SD21**（図面191・218）：SD15の下層に重なる直線の溝である。SD22を切り込みながら東西に延び、両端と北側は調査区外に広がる。SD19に切られ、SD20を切っている。確認できる長さは29.0m、最大幅3.6m、最大深0.13mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、a・b・cセクション共に黑色粘土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器（2049）、中世土師器（2097～2100）、中国製青磁（2101）、

珠洲(2102)、八尾がみられ、木製品では板状木製品(755~757・他)、下駄(766・767)、漆器(768)、棒状木製品(787~789・他)、円形板(804)、呪符(805・806)、折敷(808)、箸(779・780・783~786)、加工木(811)、その他木製品が認められる。

**SD22** (図面191・218)：調査区外の北西から南東に広がると推測される自然流路で、東西方向にSD21に切り込まれており、北側ではSD18に切られている。確認できる長さは6.0m、最大幅15.0m、最大深0.4mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、aセクションで灰黄色砂質土層を基調とし、bセクションで灰黄褐色砂質土層の単層である。出土遺物は認められない。

**SD23** (図面191・219)：SD25の上層に重なり、東西に延びる直線の溝である。SD19を切る。確認できる長さは9.5m、最大幅3.5m、最大深0.38mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：暗灰黄色砂粘質土層、第2層：黒褐色砂粘質土層、第3層：黒褐色粘質土層からなる。出土遺物は須恵器、中世土師器2162・2163)、中国製青白磁(2167)、中国製青磁、珠洲が認められる。

**SD24** (図面191・219)：南北にのびる直線の溝で両端とも調査区外に広がる。途中SE03・SK128に切られる。確認できる長さは17.4m、最大幅1.1m、最大深0.07mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土はオリーブ褐色砂質土層の単層である。出土遺物は中世土師器(2160)が認められる。

**SD25** (図面191・219)：SD23の下層に広がる不整形の溝でSD20を切っている。確認できる長さは10.5m、最大幅5.2m、最大深0.08mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂粘質土層の単層である。出土遺物は中世土師器が認められる。

**SD26** (図面192・219)：調査区を東西に縦断し調査区外に延びている。途中SD28・SD29に切られSD27、SD30を切り込む。確認できる長さは28.0m、最大幅1.6m、最大深0.37mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、a・bセクションで第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂質土層、第3層：灰色砂層となる。cセクションで第1層：暗灰黄色砂質土層、第2層：黄灰色砂粘質土層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器(2064・2065)、珠洲(2066)が認められる。

**SD27** (図面192・219)：北西から南東に調査区を横断して延びる溝である。北側でSD26に切られ、SD30に南北方向に切られる。確認できる長さは5.0m、最大幅6.4m、最大深0.32mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は、第1層：黄灰色砂質土層、第2層：暗灰黄色砂質土層からなる。出土遺物は須恵器、土師器(2046)、珠洲(2086)が認められる。

**SD28** (図面192・219)：調査区を南北に横断する直線の溝である。東のSD29、西のSD30と同方位に並び、SD26を切る。確認された長さは4.6m、最大幅1.3m、最大深0.27mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は中世土師器(2067~2084)、珠洲(2085)、八尾が認められる。

**SD29** (図面192・219)：調査区を南北に横断する直線の溝であり南側でSK117に切られ、北側はSD26を切りこみ開放している。確認できる長さは4.1m、最大幅1.0m、最大深1.0mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は珠洲が認められる。

**SD30** (図面192・219)：調査区を南北に横断する直線の溝でSD27を切る。北端はSD26に切られる。確認できる長さは5.0m、最大幅1.8m、最大深0.22mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は第1層：灰色砂質土層、第2層：黄灰色粘土層である。出土遺物は須恵器、中世土師器、珠洲がある。

**SD31** (図面192・219)：調査区を東西に横断する直線の溝である。確認できる長さは3.8m、最大幅0.6m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層の単層である。出土遺物は土師器が認められる。

**SD32** (図面192・219) : SD31の南側を東西に併走する直線の溝で、東側でSD35を切っている。確認できる長さは3.8m、最大幅0.6m、最大深0.12mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層の単層である。出土遺物は土師器が認められる。

**SD33** (図面192・219) : SD32の南側を東西に併走する直線の溝で、SD35を切っている。確認できる長さは3.8m、最大幅0.5m、最大深0.12mを測る。断面形態は台形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層の単層である。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SD34** (図面192・219) : SD33の南側を東西に併走する直線の溝で、SD35を切っている。確認できる長さは3.9m、最大幅1.6m、最大深0.15mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層である。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SD35** (図面192・219) : 南北に延びる直線の溝で東側は調査区外に広がり、北端はSD32に切れ、それに併走するSD33・SD34にも切られている。確認された長さは9.3m、最大幅1.05m、最大深0.06mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は暗灰黄色砂質土層の単層である。出土遺物は須恵器、土師器が認められる。

**SD36** (図面193・219) : 東西に広がる不整形の溝である。東側でSK116に切れられ、途中SE01・SK072・SK102・SK106に切り込まれている。確認できる長さは14.0m、最大幅3.0m、最大深0.16mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は灰色砂粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器、中国製白磁(2091)、中国製青磁(2092)が認められる。

**SD37** (図面193・219) : 南北に延びる不整形の溝で南側はSK112に切り込まれて消失し北側は開放している。確認できる長さ4.0m、最大幅1.5m、最大深0.23mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色砂質土層を基調とする。出土遺物は土師器が認められる。

**SD38** (図面193・219) : 調査区を東西に横断する直線の溝である。確認できる長さは5.0m、最大幅4.8m、最大深0.17mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黄灰色砂質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、中世土師器、珠洲、土製品が認められる。

**SD39** (図面187・188・220～223) : 調査区北側一帯を流れる中世から近世の自然流路である。形態、長さは不明瞭である。覆土は黒褐色粘土層～灰色粘質土層を基調とする。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器、珠洲、瀬戸美濃、越中瀬戸(2094)、伊万里、唐津(2093)、近世陶磁器、土製品が認められ、木製品では下駄(774)、箸(775・776・781)、円形板(803)、その他木製品、金属製品で馬糞(119)が認められる。

#### その他の遺構

**噴砂A** (図面193・233) : 調査区南側に位置する、南北方向に走る砂脈で、南北2.5m、東西1.0mの範囲に分布している。最大幅は0.03mで、Ⅲ層である粘質土層とその下の粘土層を貫いて上昇している。

**噴砂B** (図面191・233) : 今回確認された噴砂の中で最も規模の大きいものである。調査区を東西方向に横断する砂脈で、両端は調査区外へと続く。最大幅0.15mを測る。噴砂Aと同様に粘質土層とその下の粘土層を貫いて上昇し、中世の遺構であるSK142を切っているため、遺構構築後の地震に起因する噴砂である。噴砂が生じる地震は一般に震度5以上とされている。

**噴砂C** (図面193・233) : 調査区南側に位置する、南北方向に走る砂脈で、南北2.5m東西2.5mの範囲に分布している。最大幅は0.05mで、噴砂Aと同様に粘質土層とその下の粘土層を貫いて上昇している。

### 3. 近世の遺構

近世の遺構はB地区の南端に限り分布し、中名V遺跡D3地区へと広がりをみせている。遺構検出面は中世末～近世の包含層である褐灰色砂質シルト層直下である。遺構の種類としては土坑、溝があり、土坑の多くが拳大から人頭大の円礫が充填されている。

#### 土坑

SK132（図面224）：平面形態は楕円形で、SK133に切り込まれる。規模は長径1.5m、短径0.4m、深さ0.2m以上を測る。土坑内は拳大の円礫を敷き詰める。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は中世土師器(2089)がある。

SK133（図面224）：平面形態は楕円形で、SK132を切り込む。規模は長径1.77m、短径1.4m、深さ0.13mを測る。土坑内は人頭人の礫が散在している。覆土は第1層：黒褐色砂質土層、第2層：黒色砂質土層となる。出土遺物は土師器、珠洲がある。

SK134（図面224）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.52m、短径0.87m、深さ0.16mを測る。土坑内は円礫が散在している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器がある。

SK135（図面224）：平面形態は楕円形で、SK138を切り込む。規模は長径0.92m、短径0.88m、深さ0.17mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は炭混じりの黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器(2001)、土師器がある。

SK136（図面224）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.0m、短径0.73m、深さ0.11mを測る。土坑内は大小の円礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器、珠洲がある。

SK137（図面224）：平面形態は楕円形で、規模は長径1.5m、短径0.56m、深さ0.11mを測る。土坑内は大小の礫が多数散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は土師器、中世土師器がある。

SK138（図面224）：平面形態は楕円形で、SK139を切り込み、SK135に切り込まれる。規模は長径1.25m、短径0.76m、深さ0.1mを測る。土坑内は大小の礫が散在している。覆土は暗灰黄色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器がある。

SK139（図面224）：平面形態は不整形で、SK135・SK138に切り込まれる。規模は長径2.0m、短径1.32m、深さ0.13mを測る。土坑内は人頭大の円礫が混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

SK140（図面224）：平面形態は楕円形で、規模は長径2.52m、短径0.83m、深さ0.13mを測る。土坑内は大小の円礫が散在する。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

SK141（図面224）：平面形態は隅丸方形で、規模は長辺2.7m、短辺1.93m、深さ0.16mを測る。土坑内は大小の礫が多數混入している。覆土は黒褐色砂質土層のみの単層となる。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器がある。

#### 溝

SD40（図面194・224）：南北に延びる直線の溝で北側、東側は調査区外に広がり、南端は消失している。南側にD3地区が続く。確認できる長さは14.9m、最大幅1.3m、最大深0.47mを測る。断面形態はU字形を呈し、覆土は黒褐色粘質土層の単層である。出土遺物は須恵器、土師器、中世土師器、中国

製白磁、珠洲、越中瀬戸、唐津、近世陶磁器が認められる。

#### 4 出土遺物

遺物の記載については、中名V遺跡と中名VI遺跡を通して記述していく。記述の順序は、まず上器・陶磁器類を中名V遺跡A1地区、B5地区、D1・2・4地区、D3地区、F1地区、F2・3地区、中名VI遺跡A地区、B・C地区の各地区ごとで行う。次に、木製品、金属製品、石製品の順に各地区ごとに記述していく。

今回の調査では古代・中世の遺物が多く出土している。中名V遺跡A1・D1・D2・D4地区、中名VI遺跡A・B地区出土の古代の遺物では、8世紀から10世紀代のものが主体で、若干7世紀代に遡るものも見受けられる。これらは中名VI遺跡A地区の竪穴住居などに伴って出土している。次いで中世の遺物は中名VI遺跡A地区などを中心に、13世紀以降中世を通じて遺物が出土する。その後近世に入ると出土量が著しく減少していく。中名V遺跡D3・E・F地区、中名VI遺跡C地区については古代の遺物は希薄である。

出土遺物の種類別で見ると土器・陶磁器類が最も多く、次いで木製品、石製品、金属製品がつづく。このため記述は土器・陶磁器や木製品というように遺物の種別ごとにおこなう。個々の遺物の記述は、各地区毎で遺構出土と包含層出土に分けておこなう。

##### A 土器・陶磁器（図面243～282）

出土遺物は遺跡の各地区で検出された遺構の時期にもよるが、遺跡全体でとらえた場合に須恵器、土師器などの古代の遺物で多く占められている。中名V遺跡A1・D1・D2・D4地区、中名VI遺跡A・B地区については、古代の遺物が多く、中名V遺跡D3・E・F地区、中名VI遺跡C地区については中世の遺物と近世の遺物が多く出土している。

古代の出土遺物については須恵器の杯では、無高台のものを杯A、有高台のものを杯Bとする。土師器については、奈良時代は煮炊器が主体となるが、平安時代以降になると供膳形態のものが増加する。分類名称は須恵器杯・皿に準拠する。赤彩土師器や黒色土器は記述のなかで言及し、実測図ではスクリーン・トーンなどで特に表示していない。

中世の出土遺物については、土師器皿、瀬戸美濃施釉陶器、中国陶磁、珠洲、八尾などの土器・陶磁器類がある。これら中世の土器・陶磁器類はこれまでいろいろと研究が進められてきており、各々の型式分類と編年が明らかにされているものも多い。本書でもこれらの研究成果を準用しながら記述していく。記述に際して用いた分類・編年研究としては、まず土師器皿では、森分類・編年案を準用した。瀬戸美濃施釉陶器については藤澤分類・編年案に基づいた。中国陶磁全般については主に山本による大宰府分類・編年案を、さらに中世後期の中国青磁については上田分類・編年案を、白磁については森田分類・編年案をそれぞれ用いた。珠洲については吉岡分類・編年案を基準とした。八尾については「道場I・II遺跡発掘調査報告」で示した森の分類案を用いた。

###### （1） A1地区：（図面243～248-0001～0251）

古代の遺物が多いが遺構自体は少なく、遺構に伴わないような、例えば中世遺構から出土した古代の遺物については包含層扱いとし、遺構時期を決定する遺物とは区別して記述していく。

## 古代（図面243～245-0001～0148）

### 〈窓穴住居〉

S101（図面243-0001～0004）：0001は須恵器蓋の破片である。復元口径は15.8cm。0002は土師器杯の破片で、表面に赤彩が施されている。復元口径は14.0cmである。0003・0004は土師器の壺である。0003は底部が完存している個体で、底部外面はヘラ削りで、外面はススが付着している。0004は口縁部の破片であり、口縁を外側に折り返し玉縁状とする。復元口径は13.4cmを測る。

### 〈土坑〉

SK01（図面243-0005～0008）：0005・0006は土師器杯の破片で、いずれも表面に赤彩が施されている。0005は外面にススが付着している。復元口径は0005で13.0cm、0006で14.0cmである。0007・0008は土師器壺で、0007は肥厚した端部が丸みを持って内屈し、内側に段が付く小型の壺である。0008は肥厚した端部が内に折り返され、丸く成形されたタイプで、外面にはススが付着している。

SK02（図面243-0009～0011）：0009は土師器壺の口縁部の破片で、肥厚した端部が丸みを持って内屈するタイプである。復元口径は11.0cmで、内外面はススが付着する。0010・0011は底部を回転糸切りによる切り離しの土師器杯である。0010は底部が約1/3が残存している個体で、外面にはススが付着している。0011は赤彩されている底部完存のもの。底径4.3cmを測る。

### 〈包含層〉（図面243～244-0012～0120・0125～0131・0133～0148）

0012～0098は中・近世の遺構から混入として出土した古代の遺物であるため、ここでは包含層として一括して記述を進める。0012～0014須恵器蓋の破片で、0012は天井部は丸味を持ち、口縁端部は折り曲げず、丸く肥厚させている。天井部は欠失しているがつまみが付く。復元口径11.7cm。0013は天井部が回転ヘラ削りで、口縁端部を丸く肥厚させている。復元口径12.7cm。0014は天井部が回転ヘラ削り、口縁端部は下方に垂下させた、やや器高の低いものである。0015・0026は須恵器杯で有高台をもつ杯Bである。0015は平坦な底部から体部が屈曲して外傾し、逆「ハ」字状を呈する。法量は口径9.8cm、器高4.2cmである。0026は底部が1/3残存している個体である。0016・0024・0025は須恵器杯Aで無高台のもの。0016は表面が著しく摩滅しており調整不明瞭の個体である。0024はややとがる底端部から緩やかに屈曲し立ち上がるものである。底部は回転ヘラキリ後無調整。0025は平坦な底部から体部が屈曲して坂く外傾する。底部は回転ヘラキリ後ナデを施す。0023は体部が逆「ハ」字状に開く須恵器の杯である。0027は須恵器の壺の底部破片である。体部外面は斜方向に手持ちヘラ削りが施されている。0028～0053は土師器で、0028～0031は杯である。0028は体部の破片で、0029～0031は底部の破片で回転糸切りによる切り離しである。0017・0032・0033は黒色土器碗で、0017は平底で内面はヘラ磨きを施し、底部は回転糸切りによる切り離しである。0032・0033は内面ヘラ磨きである。0018・0020・0021は赤彩土師器杯で体部は内外面ロクロナデで、底部は回転糸切りである。0019・0022・0034・0035・0037は杯で、0019・0022・0035・0038は平底の底部で、0019・0022はやや内湾気味に立ち上がる。0034・0037は口縁部の破片で、復元口径は0034で13.1cm、0037で11.9cmを測る。内外面ロクロナデを施す。0036・0039・0040は小型壺の底部で、回転糸切り後無調整の0036、底部がヘラ削り調整の0039・0040がある。0041～0045は杯で平底の底部から内湾気味に開く体部を有する。法量は0041で口径13.0cm、器高4.1cm、0043で口径15.4cm、器高5.0cm、0044で口径15.6cm、器高4.7cmである。0043・0044の外面にはススが付着している。0046～0053は壺の口縁部である。0046・0047は破片で、端部を面取し方形に仕上げる。0048は「く」の字状の口縁部に、端部が丸みを持って屈曲する。復元口径は14.0cmである。0049は口縁部の破片で寸胴状とみられる体部に向かって直線的

に伸びる。復元口径は20.0cmで、外面には一部スヌが付着する。0050～0052は端部が内側に折り返され、丸く成形される。0053は肥厚した端部が丸みを持って内屈し、内側に段が付くタイプである。復元口径は27.6cmで、外面にスヌが付着する。0054は須恵器壺で口縁部の上端部がわずかに引き上げられる。復元口径は32.0cm。0055・0056はほぼ完形の土錐で、形態は樽型を呈する。表面は著しく摩滅しており、使用痕跡としてみなすことができる。法量は0055が長さ5.15cm、幅4.5cm、重量86.0gであり、0056が長さ5.5cm、幅2.9cm、重量39.76gである。0057～0063は須恵器で、0057～0059は杯蓋の破片である。0057は口縁端部は折り曲げず、丸く肥厚させる。復元口径14.8cm。0058は口縁端部を下方に垂下させている。0059は天井部は丸味を持つタイプと推定され、口縁端部は折り曲げず、丸く肥厚させている。0060・0061は杯Bで、0060は高台部分が消失しているが、平坦な底部から緩やかに屈曲し立ち上がる。0061は平坦な底部に「ハ」字状の高台を有する。0062は約1/3残存の小型の壺で、平坦な底部に「ハ」字状の高台を有する。体部下位は横方向のヘラ削り調整である。0063は広口壺の口縁部の破片で、胎土は精良で焼成も良好である。復元口径は27.6cm。0064～0066は土師器壺の破片である。0064は底部の破片で、外面をヘラ削りを施す。0065・0066は端部が内側に折り返され、丸く成形されている。0067～0069は須恵器で、0067・0068は蓋である。0067は口縁端部を丸く肥厚させている。0068は天井部が回転ヘラ削りで、中央に擬宝珠状のつまみを有する。0069は杯Bで、表面には胎土中に含まれていた鉱物による直径2～3mmほどの黒斑がみられる。0070～0074は上師器杯で、0071～0073は赤彩土師器である。0070～0072は内湾気味に開く体部を有し、0073・0074は底部回転糸切りによる切り離しである。0075は土師器壺の口縁部破片である。端部が内側に折り返され、端部内面にカキメが施されている。0076は須恵器蓋の破片で、口縁端部はやや下方に折り曲げ垂下させている。復元口径13.1cm。0077は須恵器壺の底部破片で、角高台を有する。内面は著しく剥離している。0078は平坦な底部から緩やかに屈曲し、短く外傾する須恵器杯Aである。復元口径は11.9cm。0079は須恵器杯で体部は逆「ハ」字状に大きく開く。復元口径11.7cm。0080は土師器壺で、端部が内側に折り返され、丸く成形される。復元口径19.2cm。0081は須恵器蓋で、天井部が回転ヘラ削りである。擬宝珠状のつまみを有する。0082は黒色土器碗の口縁部破片である。内面はヘラ磨き調整ある。0083～0086は須恵器杯で、0083・0084は平坦な底部から体部が屈曲する無高台の杯A、0085・0086は「ハ」字状に開く高台を有する杯Bである。0087は赤彩土師器皿の口縁部破片で、復元口径は14.0cmを測る。0088は須恵器広口壺の口縁部の破片である。復元口径は22.9cmである。0089は須恵器杯Bの底部破片で、高台は「ハ」字状にやや踏ん張る。0090は赤彩土器杯の口縁部で、やや内湾気味に立ち上がる体部を有する。0091・0092は土師器壺で、端部が内側に折り返され、丸く成形される。0093は須恵器杯で、体部は逆「ハ」字状に大きく開く。0094は土師器杯で赤彩されている杯で底部外面は回転糸切り痕がみられる。0095は土師器杯で、復元口径は14.0cmである。0096は黒色土器碗の底部である。0097は須恵器杯Bで、「ハ」字状に広がる高台を有する。0098は土師器壺の口縁部で、端部を面取し方形に仕上げる。0099・0100は須恵器蓋の破片で、0099は擬宝珠状のつまみを有し、0100は口縁端部を折り曲げず、やや丸く肥厚させる。0101～0116は須恵器杯である。0101～0105は口縁部破片で、0101・0104は浅く斜め外方に体部を開き、0102・0103・0105は逆「ハ」字状に大きく体部を開く。0106～0108は杯Aの底部破片で、平坦に近い形態である。底部回転ヘラキリ後ナデ調整である。0109～0116は杯Bで、0109～0111・0113・0115・0116は平坦な底部から体部が屈曲して外傾する。高台は底端部の内側に貼り付けられているものが多い。0112の高台は底端部に貼り付けられている。0114はややとがりぎみの底部を有する。0117は須恵器壺の底部破片である。体部はロクロナデを施す。

0132は須恵器壺の口縁部破片で、復元口径は19.9cmである。0118～0120・0125～0127は土師器杯の口縁部破片で、やや内湾気味の体部を有する。0120・0126は赤彩されている。復元口径は0118で10.7cm、0120で12.9cm、0125で12.0cm、0126で12.7cm、0127で14.0cmをそれぞれ測る。0119の外面には一部ススが付着している。0121～0123・0131は土師器杯の底部破片で、回転糸切りによる切り離しである。0121・0131は赤彩土師器である。0124は土師器杯Bで、断面三角形の高台を有するとみられる。0128～0130は黒色土器碗で、ロクロナデ後内面ヘラ磨きを施す。0133は赤彩土師器皿で、内外面ロクロナデを施す。0138は赤彩土師器の皿の口縁部破片で、復元口径14.7cmである。0134・0135・0137・0139・0140は土師器甕である。0134・0135は口縁端部が内側に折り返され、丸く成形される。0137は甕の底部で外面にヘラ削りを施す。0139はロクロ成形で、赤彩されている。0140は口縁端部が引き上げられ、端部が丸みを持ち、外面に沈線が入る。0136は土師器鍋の把手と考えられる。先端は欠失している。0141・0142は土師器瓶で、0141は口縁端部がわずかに引き上げられる。外面部上位はカキメ、中位はヘラ削り調整である。0142は口縁端部が内側に丸みを持って内折される。0143～0148は土師質土甕で、概ね樽型を呈する。0146・0147は約1/2型を欠失している。法量は0143で61.0g、0144で73.0g、0145で24.41g、0146で29.2g、0147で48.2g、0148で117.0gである。

#### 中・近世（図面245～247-0149～0251）

中・近世の遺物には中世土師器皿、株洲、八尾、中国製青磁・白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、唐津などが出土している。

##### 〈土坑〉

SK08（図面245-0160）：0160は株洲の擂鉢で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く。内端をややつまみ上げ、外端はやや突出する。擂目は15条一単位である。

SK09（図面245-0164）：0164は白磁皿の破片で、底部付近は露胎である。森田分類D群に相当する。

SK31（図面245-0165）：0165は株洲の鉢で、直線的に開く体部に口縁端面が外傾し、端面の両端が角を落としたように丸みをもつもの。復元口径22.3cmである。直径5mmの石英含む。

SK32（図面247-0206～0211）：0206は土師器小皿で、森分類・編年K類、前Ⅳ期に比定される。いわゆる「ロクロ土師器」で、出土量はきわめて少ない。底部は回転糸切りによる切り離しである。外面にススが付着する。法量は口径8.8cm、器高は2.2cm、底径は4.1cmである。0207は越中瀬戸の小杯で、平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がる。底部には回転糸切り痕がみられる。内面と外面体部中位まで鉄釉を施す。復元口径は6.6cmである。0208は越中瀬戸の向付で、底部は削り出し高台を有する。体部内外面に鉄釉を施し、内面見込みと高台は無釉である。0209は越中瀬戸の碗で、内外面に鉄釉がかかる。復元口径は10.0cmで、胎土は粗い。0210は越中瀬戸の鉄釉碗で、削り出し高台は露胎である。0211は伊万里瓶の頭部破片で、外面には網目模様が描かれている。

SK43（図面247-0220・0221）：0220は伊万里碗の口縁部破片で、外面には網目模様が描かれている。0221は越中瀬戸擂鉢で、口縁部の断面は方形を呈する。内外面に鉄釉を施す。復元口径は30.6cmである。

SK45（図面245-0149）：0149は上師器の小皿で、森分類・編年B1類、前VI～VII期に比定される。丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。

SK60（図面245-0162）：0162は白磁の皿で外面をやや面取る。復元口径13.9cmである。近世の所産と考えられる。

**SK61** (図面247-0216) : 0216は越中瀬戸鉄釉碗の口縁部破片で、復元口径10.0cmである。

〈溝〉

**SD01** (図面245-0157・0158) : 0157・0158は土師器の中皿で、森分類のZ5類に相当する。底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。0157は後I期、0158は前IX～後I期に比定される。

**SD02** (図面246・247-0191～0205・0212・0224) : 0191～0196は土師器の小皿で、0191のみクロ成形である。0191の底部は回転糸切りによる切り離しである。森分類・編年K類、前VI～VII期に比定される。0192は器高は浅く、やや平坦な底部から口縁部が直接外反・側方へ突出し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年Z8類、後I～II期。0193は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明瞭である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年B1類、前VI期。0194は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く形態。端部は鋭く仕上げるものが多い。森分類・編年B3類、前IV期。0195は器高が低く扁平である。平底の底部で体部はなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年Z1類、前IV期。0196は器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。森分類・編年A2類、前IV期。0197・0198は越中瀬戸の灰釉丸皿である。0197は削り出し高台から体部はやや内湾気味に立ち上がる。内面見込みには菊が押印される。0198は削り出し高台から体部は直線的に立ち上がる。復元口径10.8cmを測る。0199は八尾甕の口縁部破片で、口縁部外面の頸部が下方へ拡張し、N字状を呈する。口縁帯の上端と下端は、それぞれ丸くおさめる。森分類のIIIc類にあたる。0200は口縁部が受け口状に屈曲し頸部が「く」の字状を呈する。森分類のIIa類。0201は八尾の擂鉢。口縁直下が最大肥厚部となり、先端内側をつまみ上げ、口縁端部で面を持つ。擂目は直線的であり、器壁はやや発砲気味である。復元口径は30.85cm。森分類のII類に相当する。0202は珠洲甕の口縁部小破片で、長頸で「く」の字状を呈する。口縁端部は短く垂下する。吉岡編年のII期に相当する。0203は珠洲擂鉢の底部破片で、底部は静止糸切り痕がみられる。内面の擂目は9条一単位である。0204は白磁碗の口縁部破片で、口縁端部が露胎となる、いわゆる口禿げ白磁である。大宰府分類のIX類に相当する。0205は越中瀬戸の鉄釉碗で、復元口径11.6cmである。

**SD03** (図面246-0176・0177) : 0176は白磁皿の底部で、大宰府分類のIX-2類に相当する。0177は珠洲擂鉢の底部破片で、底部は回転糸切りによる切り離し。内面は摩滅が著しい。

**SD05** (図面246-0188) : 0188は珠洲擂鉢で、体部から口縁部が直線的に開き、口縁部の端面は内端が上方に軽く摘み上げ、外端は側方に鋭く突出する。擂目は14条一単位。復元口径は30.0cmである。吉岡編年のIII期に相当する。

**SD07** (図面247-0213～0215) : 0213は施釉陶器の小杯で、内面に灰釉が施される。口径7.6cmで、底面は回転糸切りによる切り離し。0214は越中瀬戸で、筒状を呈する壺とみられる。復元口径は8.9cmで、内外面に鉄釉を施す。0215は珠洲甕で、長い頸部に、口縁部は短く嘴頭を呈する。復元口径39.8cmである。吉岡編年のII期に相当する。

**SD08** (図面245-0159・0161) : 0159・0161は珠洲の擂鉢である。0159は体部から口縁部にかけて直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く。内端をやつまみ上げ、外端はやや突出する。擂目は14条一単位で、内面には部分的にススが付着する。胎土に骨針が多く含まれる。復元口径34.2cmである。吉岡編年のIII期に相当する。0161は口縁部破片で、体部から口縁部にかけて、わずかに内湾気

味に立ち上がる。口縁部は方頭を呈する。吉岡編年のⅡ期に相当する。

**SD12** (図面246-0167~0175) : 0167~0171は土師器の小皿である。0167は器高は低く扁平で、平底の底部で体部ではなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部は鋭く仕上げる。0168は扁平だが、丸底ないしは丸底に近い底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。0169は口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸く納める。復元口径8.3cmである。0170は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。0171は平坦な底部から、体部が屈曲して開く。焼成後に直径3mmほどの穿孔痕がみられる。0167は森分類・編年のZ1類、前VI期に、0168はB2類、前VI期に、0169はB4類、前V~VI期に、0170はB1類、前VI期にそれぞれ比定される。0172は同安系青磁の皿で、口縁部に向かって反る。大宰府分類のI類に相当する。0173・0174は珠洲で、0173は鉢で、平坦な底部からやや内湾気味に立ち上がる体部を持つ。底部は底面には静止糸切り痕がみられる。0174は甕ないしは擂鉢で、底部は静止糸切りによる切り離しである。内面は著しく剥離している。0175は八尾の擂鉢で平坦な底部から、やや内湾気味に立ち上がる。外面には縱方向のケズリで、内面には直線的な擂目がみられる。

**SD13** (図面245-0155) : 0155は完形の土師器小皿である。丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。法量は口径9.1cm、器高2.1cmを有する。森分類・編年のB1類、後II~IIIに相当する。

**SD14** (図面246・247-0217~0219・0250) : 0217は白磁?の碗で、中国製白磁の場合、大宰府分類の碗V-2・VI・VII類か碗II-3・4類に比定される。復元口径18.0cmである。0218は珠洲窯の口縁部破片で、長頸で口縁端部は円頭を呈する。吉岡編年のI 3期に相当する。0219は伊万里碗で、外面に網目模様が描かれている。復元口径10.4cmである。0250は珠洲擂鉢で、直線的に開く体部に、外端がやや水平に突き出し気味の口縁部を有する。内面の擂目は15条--単位で、復元口径35.6cmである。吉岡編年のIV 1期に相当する。

**SD17** (図面246・247-0189・0190・0222・0223) : 0189は珠洲擂鉢の破片で、直線的な体部に水平な口縁部端面を有し、僅かに外端が側方へ突出する。吉岡編年のIV 2期に相当する。0190は八尾甕で、口縁部が受け口状に屈曲するが、受け口部は低く未発達である。外面の頸部も丸みを帯びてゆるやかに屈曲している。森分類のIIIc類に相当する。0222は珠洲甕の口縁部破片で、「く」字状を呈し、先端はやや方頭である。吉岡編年のII期に相当する。0223は唐津鉄輪軸で、高台部分は削り出し高台で、露胎である。

**SD19** (図面246-0178~0186) : 0178は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、外面に鏽斑弁を有する。復元口径14.9cmである。大宰府分類のII-b類(旧I-5-b類)に相当する。0179~0182は土師器の皿である。0179は森編年のA3類で、平坦気味の底部から、体部・口縁部が屈曲・外反し、口縁端部は押しナデされて面を有する。前V期に相当する。0180・0181は森編年のA2類で、器高が低く、平坦気味の底部から、口縁部が直接浅い角度で短く開く。口縁端部は押しナデされて面を有する。0180で前V~VI期、0181で前VI期に相当する。0182は森編年のA1類で、典型的な京都系土師器模倣と考えられる。平坦な底部から、体部が外傾気味に深く立ち上がり、口縁部は軽く内湾する。口縁端部は押しナデによって面を有する。前VI~VII期に相当する。

0183は珠洲の擂鉢で、体部から口縁部にかけて内湾気味に開く。口縁端部は口縁端部に面を有し、内端を内側につまみ上げる。底部は静止糸切りによる切り離しで、復元口径15.3cmである。吉岡編年の

II期に相当する。0184・0185は八尾壺の底部破片で、外面はヘラ削り調整である。0186は珠洲壺の底部破片で、直線的な体部に、外面タタキ調整である。

SD21（図面245-0150）：0150は土師器の小皿で、完形品である。丸底の底部から体部が屈曲して開くものの、底部と体部の境界は不明瞭である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。法量は口径7.7cm、器高は1.5cmである。森分類・編年のB1類、前VI～VII期に相当する。

SD24（図面245-0156）：0156は土師器の皿で、森分類のC3類に比定される。浅身で器高が低く、丸底気味の底部を有する。口縁端部は鋭く仕上げる。後I～II期に相当する。

SD25（図面245-0151～0154）：0151～0154は土師器の小皿である。0151は扁平だが、丸底気味の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾し、端部は鋭く仕上げる。法量は復元8.8口径cmである。0152は器高は低く扁平である。平底の底部で体部はなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。法量は復元口径7.4cmである。0153・0154は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。0153の法量は口径8.0cm、器高は1.25cmである。0154は復元口径10.0cmである。0151は森分類・編年のB2類、前VI～VII期、0152でZ1類、前VII期、0153でB1類、前V期、0154でB1類、後I～II期にそれぞれ相当する。

SD26（図面245・246-0163・0187）：0163は白磁皿の口縁部破片で、森田分類のD群に相当する。0187は珠洲壺の口縁部破片である。長頸で端部は短く挽き出し、方頭を呈する。復元口径は30.0cmである。古岡編年のII期に相当する。

#### 〈包含層〉（図面247-0225～0249・0251）

0225～0227は土師器の皿で、0225は扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部はやや丸く納める。0226は器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。0227はいわゆる「ロクロ土師器」の皿で、底部は回転糸切り痕による切り離し。0225は森分類・編年のB4類、前VI期、0226はA2類、前V～VI期、0227はK類、前VI～VII期にそれぞれ相当する。0228は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、内面縦方向に白堆があり、横方向に片彫りを施す。人宰府分類のI-4～c類に相当する。0229は越中瀬戸鉄釉天目茶碗の底部で、約1/2残存している。底部は削り込み高台で鉛釉がかかる。0230は瀬戸美濃の灰釉皿で、底部高台内に目あとが残る。藤澤編年の大窯期IもしくはII期に相当する。0231は瀬戸美濃の灰釉卸皿である。0232～0236は越中瀬戸である。0232・0233は鉄釉天目茶碗で、0232は削り出し輪高台から直線的に体部が開き、口縁部は「S」字状を呈する。高台は鉛釉がかかる。法量は口径11.1cm、器高6.1cm、底径4.4cmである。破片断面には漆繕ぎ痕がみられる。0233は底部が削り出し高台で露胎である。0234は鉄釉碗で、底部削り出し輪高台を有する。0235は鉄釉皿か杯の底部破片である。回転糸切りの底面からやや直線的に体部が開く。底部は露胎である。0236は鉛釉匣钵の底部破片で、底部が回転糸切りによる切り離しである。0237・0238は唐津で、0237は陶胎染付の碗で、白化粧土を施す。高台には砂目が残る。0238は三島手の皿か鉢の底部破片で、内面には刷毛目模様がみられる。0239～0249は珠洲で、0239～0242は壺類である。0239は壺R種で、頸部は外傾し、口縁端部は嘴頭を呈する。0240は頸部を緩やかに外傾し、口縁端部は方頭ないしは外端がやや突出する。吉岡編年のIV2期に相当する。0241は壺R種の底部破片で、底部は静止糸切りによる切り離しである。0242は壺R種の破片で、体部の肩が張り、外面には2条の沈線が巡る。0243は壺の口縁部破片で、短頸の「く」字状口縁を有する。口縁端部は方頭を呈する。吉岡編年のV期に相当する。0244～0249は

播鉢で、0244・0247・0248は直線的ないしはわずかに内湾する体部から、外端がやや水平に突き出す口縁部を有する。吉岡編年のIV 2期に相当する。0245は直線的な体部で、方頭の口縁部がやや外傾する。吉岡編年のIV 1期に相当する。0246は口縁部の文様帶が消失し単に口縁の先端を丸めた形態で、口縁部内面に波状文のみを巡らせている。吉岡編年のVI期に相当する。0249は体部から口縁部が、わずかに内湾気味に開く。口縁端部は方頭を呈する。吉岡編年のIII期に相当する。0251は京都信楽系とみられる灰釉皿で、約1/2程度残存している。内面に三点トチンがみられ、外面にススが付着している。法量は口径11.0cm、器高2.2cmである。

## (2) B5 地区：(図面248-0252~0284)

土器・陶磁器類の出土は少量で、の中でも遺構出土のものは更に少ない。中・近世の遺物が主体である。遺物には中世土師器皿、珠洲、八尾、越中瀬戸、伊万里、唐津などが出土している。

### 〈溝〉

**SD02** (図面248-0253~0257) : 0253~0256は土師器の皿類で、0253・0254は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開き、口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。底部と体部の境界は明確でない。0254は口縁部内外にススが付着する。0253は森分類・編年のB1類、後II~III期、0254はB1類、前IX~後I期に相当する。0255は大皿で、器壁がやや厚めで、丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。復元口径16.0cmである。0256はやや丸みを持った平底の底部から体部が浅く直線的に開き、その先端部分を狭い幅の口縁部とする。端部は鋭くおさめる。法量は口径14.3cm、器高は2.25cmである。口縁部内外面にススが付着する。0255は森分類・編年のZ9類、後III期、0256はZ11類は後III期に相当する。0257は越前播鉢の底部破片で、外面は縦方向のヘラ削りで、内面は著しく摩滅している。

**SD04** (図面248-0269・0270) : 0269は土師器の皿で、体部が屈曲して開き、口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。底部と体部の境界は明確でない。森分類・編年のB1類、前VII期に相当する。0270は越中瀬戸の播鉢で、底部は回転糸切り痕が残る。内外面は緒輪で、内面には播日があり11条一単位である。

### 〈その他の遺構〉

**SX01** (図面248-0258~0268) : 0258・0259は土師器の小皿で、0258はいわゆる「ロクロ土師器」の皿で、底部は回転糸切り痕が残る。森分類・編年のK類、後III期以降の新段階のものに相当する。0259は平坦な底部から体部・口縁部が「S」字状にゆるく屈曲する。口縁端部は小さくつまみ上げる。復元口径11.5cmである。外面にススが付着する。D3類、後III期。0260~0262は越中瀬戸の丸皿で、削り出し高台を有する。0260・0262は灰釉がかかる。0263は越中瀬戸の片口で、鉄釉がかかる。0264は伊万里皿で、内面に草花が描かれている。0265・0266は越中丸山の楕で、内外面は白化粧土の上から施釉されている。0267は土製品の五徳で、垂直方向に足が伸びる。おそらくは三カ所に足が付くと考えられる。0268は珠洲播鉢の底部破片で、内面の播日は11条一単位である。

**SX03** (図面248-0252) : 0252は土師器の皿で、森編年のB2類である。丸底の底部から体部が内湾気味に開き、口縁部は軽く外反させる。端部は鋭く仕上げるものが多い。前VI~VII期に相当する。

### 〈包含層〉 (図面248-0271~0284)

0271~0275は土師器の小皿で、0271はいわゆる「ロクロ土師器」の皿で、やや直線的な体部から口縁端部を面取る。底部は回転糸切り痕が残る。森分類・編年のK類、後III期以降の新段階のもの。

0272・0273は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開き、口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。底部と体部の境界は明確でない。森分類・編年のB1類で、0272が前Ⅶ期、0273が前VI～Ⅷ期である。0274は平坦な底部から体部・口縁部が「S」字状にゆるく屈曲する。口縁端部は小さくつまみ上げる。外面にススが付着する。D3類で、後Ⅲ期に相当する。0275はやや丸みを持った平底の底部から、体部が内湾気味に浅く屈曲し、口縁部は強く横ナデして外反させる。端部を鋭く仕上げる。Z10類、後Ⅲ～Ⅳ期である。0276は伊万里皿で、内面は蛇の目釉剥ぎを施す。0277は唐津の内野山皿で、銅緑釉がかかる。底部は削り出し高台であり、高台は露胎である。内面には蛇の目釉剥ぎを施す。0278・0281は珠洲窯の口縁部小破片で、0278は短頸で「く」字状であり、口縁部は方頭を呈する。0281は短頸で「く」字状を呈する。0278・0281ともに吉岡編年のV期に相当する。0279は土製品のバンドコで、胎土は精良である。0280は泡入形で、頭部の破片である。型打による成形である。0282は越中丸山の鉢で、内面には白化粧土に鉄絵が描かれている。復元口径20.1cmである。0283は越中瀬戸檜鉢の底部破片で、内面の檜目は一単位が9条以上である。0284は須恵器杯で、平坦気味の底部から、体部が直線的に傾きをもって開く。底部は回転ヘラ削り無調整である。

### (3) D1・D2・D4 地区：(図面248～259-0285～0498)

古代 (図面248～254-0285～0498)

古代の遺物には須恵器、土師器、黒色上器、赤彩土器などが出土している。

〈堅穴住居〉

SI01 (図面248・249-0285～0308) : SI01出土遺物はほとんどが土師器であり、須恵器については図示できるものがない状況である。0285～0299は土師器の杯で、概ね回転糸切り痕の残る平坦な底部から体部はやや内湾気味に開く。口縁部は直線的かやや外反気味におさめる。0285・0286はやや器高のあるもので、法量は口径約14.8cm、器高約5.5cmである。0300・0301は黒色土器碗で、0300は口縁部破片で内面は粗いヘラ磨き調整で、外面には墨書きが施される。復元口径16.0cmである。0301は底部破片で有高台のもの。内面は粗いヘラ磨き調整である。0302・0303は土師器の小型甕で、0302は口縁端部が内側に折り返され、丸く成形し、0303は肩部との境で稜を持って外傾し、端部を丸くおさめる。復元口径は約12.0cm程度である。0304～0308は土師器甕で、0304・0306・0307は肥厚した端部が丸みを持って内屈し、内側に段が付くものである。0305・0308は肥厚した端部を内側に折り返し丸くおさめるものである。0307・0308は体部外面にヘラ削り、底部付近をタタキ調整が施されている。法量は残存状態の良好な0308で口径36.5cm、器高14.6cmである。

SI02 (図面249-0309～0312) : 0309は須恵器の蓋である。扁平だが丸みを持つ天井部に、内側に丸め込むような口縁端部を有する。復元口径13.3cmである。内面には墨痕がみられることから硯として転用されたと考えられる。0310は土師器甕の底部で、丸底を呈する。外面はヘラ削り、内面はハケメ調整である。0311・0312は土師器甕であり、0311は底部破片、0312は口縁部破片である。0312は端部を而取して方形に仕上げている。復元口径23.7cmである。

SI03 (図面249-0313～0319) : 0313は須恵器の蓋である。扁平で、天井部の外面を回転ヘラ削りを施す。口縁端部は短く下方に折り曲げる。復元口径12.0cmである。0314は須恵器の杯Aで、平坦な底部から屈曲し、休部は逆「ハ」字状に開く。内面には一部ススが付着する。復元口径13.0cmである。0315・0316・0318は土師器の甕で、0315は口縁部の上端をわずかに引き上げる。0316・0318は口縁端部を而取して方形に仕上げる。0318は体部外面中位にタタキ後ヘラ削りが施され、内面は放射状の当

具痕がみられる。0317は土師器の鍋で、口縁部の小破片である。端部は肥厚して上端部がわずかに引き上げられる。復元口径38.2cmである。0319は土錐で、形態は樽型を呈する。重量は42.9gを量る。

**SI04** (図面249-0320) : 0320は土師器の壺で、肩部との境で稜を持って外傾し、端部がやや肥厚し上下に拡張する。体部外面はカキメ調整である。復元口径19.1cmである。

#### 〈土坑〉

**SK01** (図面250-0341～0353) : 0341～0351は土師器の杯である。概ね、回転糸切りの平坦な底部からやや内湾気味に聞く体部を有する。法量はおよそ口径13.0cm、器高3.5～4.0cmであるが、0342のみ口径17.0cm、器高5.1cmと大きい。0342・0343・0345・0348・0350にはスヌが付着する。0352・0353は小型壺の口縁部破片で、0352は緩く外反させて丸くおさめる口縁部を有し、0353は口縁部の上端部を引き上げる形態である。復元口径は0352で12.6cm、0353で16.0cmである。

**SK03** (図面251-0369) : 0369は土師器の小型壺で、口縁部は「く」字状に弱く屈曲し、口縁端部は丸く仕上げる。内外面にスヌが付着する。復元口径11.3cmである。

**SK15** (図面250-0335～0340・0354) : 0335・0336は須恵器の蓋で、0335は扁平な天井部から短く垂下させる口縁端部を有し、0336はやや丸みをおびた天井部に、口縁端部は内側に丸め込むように仕上げている。0337～0340は須恵器の杯で、0338は無高台の杯A、0340は有高台の杯Bである。0337・0339は体部が浅く聞く形態で、復元口径は約12.0cmである。0338は底部から強く屈曲して直線的に聞く体部を有する。0340は低い角高台を有し、やや外反気味に立ち上がる体部を有する。法量は口径11.8cm、器高4.4cmである。0354は土師器壺の口縁部破片で、口縁部を緩やかに外反させる。復元口径29.7cmである。

**SK25** (図面250-0321～0334) : 0321～0323は須恵器の蓋で、0321・0322は扁平な天井部に擬宝珠状のつまみを有する。口縁端部は短く下方に折り曲げる。天井部外面の1/2程度を回転ヘラ削りを施す。0323も形態は同じだが紐の有無は不明である。法量は0321で口径14.0cm、器高2.8cm、0322で口径14.3cm、器高2.4cmである。0324は須恵器の杯Aで、やや尖りぎみの平坦な底部から体部が強く屈曲し、浅く外方へ聞く。0325は須恵器の杯Bで、平坦な底部から体部が強く屈曲し、外方へ聞く。口縁端部は外反する。0326・0327・0330～0333は土師器の壺である。口縁端部を面取して方形に仕上げる形態の0331・0333、方形の端部でわずかに上端部を引き上げる0326、更に端部が引き上げられ屈曲する0327・0332がある。また、0330は底部破片で、やや平坦気味に仕上げ、外面がヘラ削りである。法量はおよそ口径21.0～22.0cmである。0328・0329・0334は土師器の鍋で、口縁端部を方形に仕上げ、0328と0334は上端をわずかに引き上げている。

**SK26** (図面251-0355・0356) : 0355は須恵器の蓋で、口縁端部は短く垂下させる。0356は土師器の鍋で、口縁端部はやや面取りし、方形を呈する。復元口径43.8cmである。

#### 〈柱穴〉

**SP15** (図面251-0372) : 0372は土師器の壺で、口縁部は「く」字状に屈曲させ、口縁端部を面取して方形に仕上げる形態で、方形の端部にわずかに上端部を引き上げる。復元口径24.0cmである。

**SP16** (図面251-0370) : 0370は土師器鍋の口縁部破片である。口縁端部を方形に仕上げ、上端と下端を引き出して拡張している。復元口径は42.9cmである。

**SP18** (図面251-0357・0358) : 0357は須恵器の杯Aで、平坦気味の底部から短く直線的に聞く体部を有する。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整である。0358は土師器の壺で、口縁部は「く」字状に屈曲し、端部を方形に仕上げる。外面に一部スヌが付着する。

**SP19** (図面251-0359) : 0359は須恵器の杯Aで、平坦な底部から直線的に外傾する体部を有する。法量は口径12.2cm、器高3.1cmである。

**SP21** (図面251-0360) : 0360は須恵器の杯Aで、底部から強く屈曲し、直線的に外傾する体部を有する。

**SP43** (図面251-0373) : 0373は須恵器の杯Bで、平坦な底部から浅く外方に開く体部を有する。高台内にはヘラ状工具による「×」の線刻が施されている。法量は口径14.0cm、器高3.5cmである。

#### 〈溝〉

**SD01** (図面252-0395～0397) : 0395・0396は須恵器の蓋で、0395は扁平な天井部に口縁部を短く下方に折り曲げるタイプと考えられる。0396は天井部外面は回転ヘラ削りで、擬宝珠状のつまみを有する。0397は須恵器の杯Bで、体部がやや外傾しながら立ち上がる。高台は角高台を有する。法量は口径13.8cm、器高4.2cmである。

**SD05** (図面251-0371) : 0371は土師器の壺で、丸底気味の底部から口径よりわずかに胴径が上回る体部をもつ。口縁部は短く外反する。内外面はハケメ調整である。法量は口径14.6cmである。

**SD06** (図面251-0361～0365) : 0361・0362は須恵器の蓋で、0361は扁平な天井部に口縁部を短く下方に折り曲げる。0362は天井部が回転ヘラ削りで、擬宝珠状のつまみを有する。0363は須恵器の杯Bで、平坦な底部に外傾する体部を有する。「ハ」字状の貼り付け高台である。0364は土師器の壺で、丸底気味の底部から口径とほぼ同じの胴径を有する体部をもち、口縁部はやや外反気味に立ち上がる。内外面はハケメ調整で、外面にはススや吹きこぼれ痕がみられる。法量は口径15.0cm、器高17.8cmである。0365は須恵器の壺で、有高台である。球洞状の体部を有し、体部外面はタキ、内面は同心円状の当具痕がみられる。

**SD07** (図面251・252-0374～0394) : 0374～0379は須恵器の蓋で、0375～0378は概ね、扁平な天井部に口縁部は短く下方に折り曲げる。天井部外面には回転ヘラ削りを施す。0374・0378は天井部外面は回転ヘラ削りで、擬宝珠状のつまみを有する。0379はやや丸みをおびた天井部に、口縁部は短く下方に折り曲げる。0380は須恵器の小型壺で、頸部が乍まり、肩部が張らない形態と考えておく。0381～0384は須恵器の杯Bで、概ね平坦な底部から、体部が外方に開く形態を有する。高台は「ハ」字状に踏ん張る形態である。0385～0389は須恵器の杯Aで、平坦な底部から屈曲し、やや開きながら立ち上がる体部を有する。底部は回転ヘラ切り痕が残るものが多い。0385の底部外面には「十」字状のヘラ記号が施される。法量は残存の良好な0386で口径11.7cm、器高3.2cmである。0390は須恵器の皿Bで、角状の高台を有する。0391は須恵器の横瓶の小破片と考えられるもので、別個体の器壁が溶着している。0392・0393は須恵器の壺で、0392は広口壺で、口縁部外面に波状文を施す。復元口径34.3cmである。0393は肩部の破片で、頸部は沈線が巡る。0394は土師器の杯で、底部は回転糸切りによる切り離しである。

**SD14** (図面252-0407) : 0407は黒色土器塊の口縁部小破片で、内面はヘラ磨き調整である。

**SD16** (図面252-0398～0400) : 0398は土師器の壺で、底部は回転糸切り痕が残る平底で、体部付近の外面は回転ヘラ削りを施す。0399・0400は土師器杯の底部破片で、回転糸切り痕が残る。0399は外面がヘラ削り調整を施す。

**SD17** (図面252-0401～0404) : 0401・0402は須恵器の杯で、0401は直線的な体部が外傾し、端部を丸くおさめる。0402は角高台を有する杯Bである。0403は土師器杯の底部破片で、外面は摩滅が著しい。0404は約1/3残存している土錐で、形態は樽型を呈する。残存重量は42.0gを量る。

**SD18** (図面252-0405) : 0405は須恵器壺の口縁部破片で、広口壺の形態をもつ。復元口径22.8cmである。

SD24（図面252-0408・0409）：0408は須恵器広口壺の口縁部破片で、復元口径20.5cmである。0409は須恵器の杯で、復元口径12.9cmである。

SD32（図面252-0406）：0406は土師器の杯で、底部は回転糸切りによる切り離しである。

#### 〈その他の遺構〉

SX01（図面251-0366～0368）：0366は須恵器杯で、口縁部破片である。復元口径13.8cmである。0367は須恵器の盃で、欠尖しているが高台を有する。平坦な底部から屈曲し直線的にのびる体部を有する。0368は須恵器の平瓶で、体部破片である。肩部に沈線が一条巡る。体部外面はロクロナデ、底部付近は回転ヘラ削り調整である。

#### 〈包含層〉（図面252～254-0410～0460・0462～0465・0467～0498）

0410～0423は須恵器の蓋である。0410・0416・0419・0420は扁平な天井部に、口縁端部を下方に折り曲げる。天井部外面は約1/2程度が回転ヘラ削である。0411・0417・0418・0421～0423は概ね扁平だが丸味のある天井部に、口縁端部は下方に短く折り曲げるか、内側に丸め込む。0410～0415は天井部に擬宝珠状のつまみを有する。0424～0441は須恵器の杯Aである。平坦ないしは平坦気味の底部から、稜をもって屈曲し、体部が外方に浅く開く形態を有する。法量は口径12.0～14.0cm、器高は3.0～4.5cmである。0424はやや尖り気味の底部をもつ。0442～0455は須恵器の杯Bで、0442～0451は平坦な底部に、外方に浅く開く体部を有する。貼り付け高台は角状のものが多いが、0451の高台はやや丸味を帯びている。0451の高台内には「×」とみられるヘラ記号が線刻されている。0452・0453は体部が深く外傾するタイプ。0454・0455は高台が「ハ」字状を呈する。0456～0460・0462～0465は須恵器の壺である。0457は長頸で、0458・0459は短頸をそれぞれ有する。0460は小さい耳を有する双耳壺で、体部は球洞状を呈する。外面はタタキ後カキメ調整、内面には同心円状の当具痕が残る。0456・0462・0463は底部破片であり、0464は無高台で外面はヘラ削り調整、0456・0462・0463は「ハ」字状の角状高台を有する。0465は広口壺の口縁部破片で、外面に波状文を施す。0467～0471・0473～0475・0482～0487は土師器の杯である。概ね回転糸切りによる切り離しされた平坦な底部にわずかに内湾気味に開く体部を有する。法量は0467と0469がやや大きくなり16.0cm前後であり、0473・0474は復元口径13.0cm程度である。0472・0477・0478・0480は高杯である。0472は杯部が内湾気味に立ち上がる体部に口縁端部はわずかに外反する。内外面にヘラ磨きを施す。内面は酸化焰焼成し黒色処理を施し、外面は赤彩を施す。0477・0478は脚部が「ハ」字状に開き、端部を丸くおさめ、内外面をヨコナデし、外面に赤彩を施す。0479は黒色土器碗の口縁部破片で内面はヘラ磨き調整である。0476は土師器の壺で、口縁部は方形で、端部はわずかに上下方向に拡張する。0481は土師器の皿の底部破片で、底部には回転糸切り痕が残り、貼り付け高台を有する。0488～0497は土師器の壺である。0488～0491は小型壺である。口縁部の形態は0488・0490で「く」字状に屈曲し、端部を丸くおさめ、0489で「く」字状に屈曲し、口縁端部の上端部を引き上げる。0491は平坦な底部で、外面をヘラ削り調整である。0492～0495は口径20.0cm前後の中型壺で、0492・0493は口縁部を緩やかに外反させる形態で、内外面はハケメ調整である。0494は「く」字状に屈曲し、端部を丸くおさめ、0495は端部を方形に仕上げる。0496・0497は土師器の鍋で、口縁部は肥厚した端部が丸味を持って内屈し、内側に段を有する。0498は須恵器広口壺の口縁部破片で、口縁部は「く」字状に屈曲する。

#### 中・近世（図面254～259-0499～0760）

中・近世の遺物については、主に中世のものが出土している。中世土師器皿、株洲、八尾、中国製

青磁・白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、唐津など多様な構成を呈している。

#### 〈井戸〉

SE03 (図面254-0519) : 0519は珠洲壺の体部破片である。直線的な体部を有するR種の壺で、外面にはクシ状工具による加飾が施される。

#### 〈土坑〉

SK46 (図面254-0515) : 0515は八尾甕の口縁部破片で、口縁部は受け口状に屈曲するが、口縁端部に内傾する端面が牛じ、断面が角状を呈する。森分類のIIc類に相当する。

SK47 (図面254-0517) : 0517は瀬戸美濃灰釉盤類で、底部付近外面は回転ヘラ削り調整である。底部にはススが付着する。藤澤編年の後期I～IIに相当する。

SK50 (図面254-0499) : 0499は土師器の小皿で、森分類のZ1類である。器高は低く扁平で、平底の底部で体部ではなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部はやや鋭く仕上げる。森編年の前V期に相当する。法量は口径8.2cm、器高1.1cmである。

SK55 (図面254-0505) : 0505は土師器の小皿で、森分類のB5類である。やや平坦な平底の底部から口縁部が強く内湾して立ち上がる。口縁端部は丸くおさめる。復元口径7.0cmである。森編年の前VII～VIII期に相当する。

SK56 (図面254-0514) : 0514は珠洲片口擂鉢の口縁部破片で、体部から口縁部が直線的に開き、口縁の端面に丸味を持たせる。器壁は薄く、指一本分の片口を有する。

SK57 (図面254-0502) : 0502は土師器の小皿で、扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部はやや丸く納める。森分類・編年のB4類、前VII～VIII期に相当する。

SK58 (図面254-0516) : 0516は土師器の大皿で、やや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する形態である。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。森分類・編年のZ2類、前VII～VIII期に相当する。

SK60 (図面254-0500・0501) : 0500・0501は土師器の小皿で、0500は底部から体部が内湾気味に開き、口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB2類、前VI～VII期に相当する。0501は深みのある体部から強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味につまみあげ、端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のC2類、前VII～VII期に相当する。

SK79 (図面254-0507) : 0507は土師器の小皿で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後I～II期に相当する。復元口径7.0cmである。

SK82 (図面254-0508) : 0508は土師器の小皿で、底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ5類、前IX期に相当する。復元口径8.9cm、器高1.8cmである。

SK92 (図面254-0520) : 0520は珠洲擂鉢で、幅の広い水平ないしは水平気味な口縁部端面を有し、僅かに外端が側方へ突出するものが多い。内面には直線的な擂目が施される。復元口径23.5cmである。古岡編年のIV3期に相当する。

SK95 (図面254-0509～0512) : 0509～0511は土師器の小皿で、0509は扁平だが、丸底気味の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB2類、前VI～VII期に相当する。0510は底部がや

や扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 5類、前IX期に相当する。0511は器高が低く扁平で、丸底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。とくに口縁端部は鋭くつまみあげるように仕上げる。森分類・編年のC 5類、後II期に相当する。0512は八尾播鉢の口縁部破片で、体部から口縁部が直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く。口縁端部は方頭を呈する。内面の擗目は波状を呈するとみられる。復元口径19.8cmである。森分類のII類に相当する。

#### 〈柱穴〉

SP34（図面254-0506）：0506は土師器の皿で、やや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する形態である。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。森分類・編年のZ 2類、前V～VI期に相当する。

SP35（図面254-0513）：0513は白磁皿で、口縁端部はいわゆる口禿げ口縁を呈する。大宰府分類のIX-2類に相当する。

SP37（図面254-0518）：0518は瀬戸美濃灰釉折縁深皿の口縁部破片である。藤澤編年の後期Iに相当する。

SP43（図面254-0503・0504）：0503は土師器の小皿で、扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部はやや丸く納める。復元口径9.4cmである。森分類・編年のB 4類、前VII～VIII期に相当する。0504は珠洲播鉢の底部破片で、内面には直線的な擗目を施す。

#### 〈溝〉

SD01（図面254・255-0527～0532・0557～0575）：0527～0532・0558～0564・0566～0570は土師器の皿である。0527・0529・0567は底部と体部との境界は明瞭でなく、体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。0527は法量が大きく口径17.6cm、器高2.8cmである。森分類・編年のZ 5類に相当し、0527・0529で前VII期、0567で前VI～VII期にそれぞれ比定される。0528・0530・0531・0563は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類であり、0528・0530・0531は前VII～VIII期、0563は前VI～VII期に相当する。0532・0568は扁平だが、丸底気味の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB 2類であり、0532は前VII～VIII期、0568は前VI～VII期に相当する。0558～0560は器高は低く扁平である。平底の底部で体部はなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部はやや鋭く仕上げる。法量は0558で口径8.0cm、器高0.9cmである。森分類・編年のZ 1類、前VI期に相当する。0561はやや平坦な平底から口縁部が強く内湾して立ち上がる形態。口縁端部は丸くおさめる。森分類・編年のB 5類、前VII期に相当する。0562・0566は扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸くおさめるものが多い。森分類・編年のB 4類、前V～VI期に相当する。0564は体部が不明瞭で、丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB 3類、前VI期に相当する。0569は体部は緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 6類、前VII期に相当する。0570はいわゆる「ロクロ上師器」であり、平坦な底部から屈曲し、体部が直線的で、口縁端部をやや鋭く仕上げる。森分類・編年のK類、後II～III期に相当すると考えられる。復元口径は12.1cmである。0557は龍泉窯系青磁碗の底部破片で、高台断面は四角形を呈し、高台内は無釉である。

る。大宰府分類のⅠかⅡ類に相当する。0565は白磁皿の底部破片である。大宰府分類のIX-1類に相当する。0571～0575は珠洲である。0571～0573は擂鉢で、体部から口縁部が直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く。口縁端部に面を有し、内端を内側につまみ上げる。0571は内面の擂目は8条一単位で、破片断面には漆絞ぎを施した痕跡がみられる。法量は口径31.4cm、器高13.4cmである。いずれも吉岡編年のⅡ期に相当し、0573のみやや古い様相を呈する。0574・0575は甕の口縁部破片で、口縁形態はやや長頭で、端部は尖り気味に拡張させる。吉岡編年のⅢ期に相当する。

**SD07** (図面255-0533～0555) : 0533～0546は土師器の皿である。0533は「ロクロ土師器」の小皿で、底部に回転糸切り痕が残る。森分類のK類に相当する。0534～0536は扁平な丸底気味の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部はやや丸く納める。復元口径はおよそ8.0cm程度の法量である。森分類・編年B4類、前VI期に相当する。0537は器高は低く扁平である。平底の底部で体部ではなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部は鋭く仕上げる。法量は口径8.5cm、器高1.5cmである。森分類・編年Z1類、前VI～VII期に相当する。

0538は底部から体部が内湾気味に開き、口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げるものが多い。復元口径12.0cmである。森分類・編年のB2類、前VI期に相当する。0539は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く形態。端部はやや鋭く仕上げる。復元口径12.0cmである。森分類・編年B3類、前VI期に相当する。0540～0546は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部をやや鋭く仕上げる。0545・0546の法量は口径で11.0cm前後、器高で3.0cm前後である。森分類・編年B1類で、0540～0544は前VI～VII期、0545・0546は前V期に相当する。0547・0548は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、0547は外面に蓮弁文が巡り、0548は内面にヘラ状工具による文様が施される。0547は大宰府分類II-b類(旧I-5-b類)であり、0548は大宰府分類I-2ないしは3類である。0549は白磁四耳壺の肩部(耳部)破片で、大宰府分類のⅢ類に相当する。0550・0551は瀬戸美濃の製品である。0550は灰釉印皿で、直線的に開く体部を有し、口縁部は内側に短く折り返される。復元口径14.2cmである。藤澤編年の後期IIに相当する。0551は縁釉小皿で、底部は回転糸切りによる切り離しで、体部はやや内湾気味に立ち上がるが、丸味は少ない。底部付近は露胎となる。法量は口径10.3cm、器高2.5cmである。藤澤編年の後期IIに相当する。0552・0554は珠洲で、0552は擂鉢の口縁部破片で、直線的な体部から、口縁端部は水平で外側にやや拡張する。器壁は薄い。復元口径31.0cmである。吉岡編年のⅡ期に相当する。0554は壺の底部で、タキキ成形による壺T種に分類される。外面にはヘラ状工具による加飾が施される。0553は八尾擂鉢の口縁部破片で、口縁直下1～2cmが最大肥厚部となり、先端がこれより先細りとなり、口縁端部が面を持つ。体部外面はケズリを施す。森分類のII類に相当する。0555は越中瀬戸の擂鉢で、口縁端部は肥厚し、水平でやや外側に拡張する。擂目は6条一単位である。復元口径は34.0cmである。

**SD15** (図面257-0624) : 0624はフイゴ羽口の先端部破片である。

**SD16** (図面257-0608～0620) : 0608～0612は土師器の皿で、0608・0609で小皿、0610～0612で中・大皿である。0608～0611は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年B1類、0608は前IX～後I期、0609～0611は後I～II期に相当する。0612は扁平な丸底気味の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸く納める。復元口径13.4cmである。森分類・編年B4類、後V期

に相当する。0613は八尾瀧の口縁部破片で、口縁部外面の頸部が下方へ拡張し、「N」字状を呈する。口縁端部の角状部分が丸みを帯び、端部が外傾せず上方へ摘み出されて立ち上がる。復元口径25.6cmである。森分類のIV類に比定される。0614・0615は龍泉窯系青磁である。0614は碗の底部で、高台断面は角状を呈し、外側を面取する。大宰府分類のIV類以降（IV'類？）または上田分類のD・E類に相当する。0615は盤で、輪花口縁を呈し、内面にヘラ文様が施される。大宰府分類のIV類以降に相当する。0616は瀬戸美濃灰釉卸目付大皿で、口縁部内面に小突起を有する。藤澤編年の後期IV（新）に相当する。0617～0620は珠洲で、0617～0619は擂鉢、0620は壺である。0617は体部から口縁部が直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く。口縁端部に面を有し、内端を内側につまみ上げる。内面には丁寧な直線的な擂目と、印花文が刻印される。復元口径23.4cmである。内外面にススが付着する。吉岡編年のII期に相当する。0618は口縁部の端面が大きく幅広に内傾し、端面には波状文を施している。吉岡編年のVI期に相当する。0619は底部破片で、静止糸切り痕が残る。内面の擂目は10条一単位目である。0620は短頸で、「く」字状に屈曲し口縁端部は方頭を呈する。吉岡編年のIV期に相当する。

**SD17** (図面256・257-0579～0597・0606・0607) : 0579～0586・0606・0607は上師器の皿で、0579・0580・0606・0607は小皿、0580～0586は中・大皿である。0579・0580・0586・0607は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、0579・0580は前I～II期、0586は前IV期、0607は前IX～後I期に相当する。0581は丸底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は内側に軽く肥厚させるようつまみ上げ、外端側は面を有する。法量は口径12.1cm、器高は3.1cmである。森分類・編年のC4類、後I期に相当する。0582は器高は低く扁平で、丸底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。とくに口縁端部は鋭くつまみあげるように仕上げる。法量は口径11.1cm、器高2.7cmである。森分類・編年のC5類、後I期に相当する。0583は扁平だが、丸底に近い底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB2類、前VI期に相当する。0584は体部が外傾気味に深く立ち上がり、口縁部は軽く外傾するか内湾する。端部は押しナデにより面を有する。京都系模倣と考えられる特徴を有すものである。森分類・編年のA1類、前VII期に相当する。0585は体部が明確でなく、口縁部が外傾気味に短く直線的に開く。端部はやや鋭く仕上げるものが多い。森分類・編年のB3類、前IV期に相当する。0606はいわゆるロクロ土師器で、径の小さな平底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。内底面の見込み外縁に沿って、圍線上の凹線が巡るものがみられる。口縁端部は軽くつまみあげ鋭く仕上げる。森分類・編年のC6a類、後I期に相当する。復元口径8.0cmである。0587・0588は白磁碗で、0587は口縁端部がつぶれて面取るタイプ。大宰府分類V-4類かVII-1・3類に相当する。0588は細く高く直立した高台を有すると考えられ、内面見込みの釉を輪状にカキ取る。大宰府分類VII類に相当する。0589～0592は龍泉窯系青磁で、0589～0591は碗、0592は盤である。0589は外面に蓮弁文を施し、0590は口縁が外反する。0591は底部破片で、釉は厚く、高台内の釉を削る。胎土は精良である。0592は口縁部の破片で、内面に幅の広い凹弁を施す。復元口径は24.2cmである。胎土は精良で、灰白色を呈する。山土例は全国的にみても少なく、一般集落からの出土は珍しい。大宰府分類で、0589はII-b類（旧I-5-b類）、0590はIV類（上田D1類）～上田D II類、0591はIV類以降、0592はIII類にそれぞれ相当する。0593・0594は珠洲擂鉢の底部破片で、いずれも静止糸切りによる切り離してある。0593は厚みのある器壁で、内面が著しく摩滅し、0594は器壁が薄く、内面の擂目は6条一単位である。0595は珠洲瀧の口縁部破片で、短頸で「く」字状に屈曲し、

端部は方頭を呈する。吉岡編年のⅤ期に相当する。0596・0597は八尾で、0596は壺の底部破片、0597は壺の底部で、いずれも外面を上下方向に削る。

**SD18** (図面256-0598～0605) : 0598～0605は珠洲である。0598・0599は擂鉢で、0598は底部に糸切り痕が残り、内面の描目は波状を呈する。0599は体部から口縁部がわずかに内湾気味に開き、口縁端部は方形を呈する。内面の描目は波状に施し、5条一単位程度である。復元口径31.0cmである。吉岡編年のⅡ期に相当する。0600～0605は壺である。0600は肩部破片、0601・0605は体部から底部にいたる破片でいずれもタキによる成形である壺T種とみなされる。0605は肩が張り、体部外面にはヘラ状T具による加飾が施される。0602～0604は口縁部破片で、やや短頸で、弧を描きながら立ち上がり、口縁端部は円頭気味である。0602は吉岡編年のIV 2期に、0603はⅡ期に、0604はⅤ期にそれぞれ相当する。

**SD19** (図面257-0625～0630) : 0625～0630は上師器の皿である。0625は底部がやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部はやや鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 5類、前IX～後I期に相当する。0626・0629・0630は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部をやや鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類で、0626は前IX～後I期、0629・0630は後I～II期に相当する。0627は体部が緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 6類、前VIII～IX期に相当する。0628は丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 9類、後III期に相当する。

**SD20** (図面257-0636～0639) : 0636～0638は土師器の皿で、0636は小皿、0637・0638は大皿である。0636は平底の底部から口縁部が強く内湾して立ち上がる形態。口縁端部は丸くおさめる。法量は口径7.8cm、器高1.5cmである。森分類・編年のB 5類、前VI～VII期に相当する。0637は体部が斜外方へ開き、口縁部は短く「S」字状に屈曲させる。復元口径13.6cmである。森分類・編年のZ 3類、前VI期に相当する。0638は口縁部は短く内湾した後、端部をやや鋭く仕上げる。森分類のB 1類に相当する。0639は珠洲擂鉢で、内湾気味の体部からやや平坦な口縁部で、端部は外方へ拡張する。器壁は薄く0.6cm程度である。吉岡編年のII期に相当する。

**SD22** (図面257-0634・0635) : 0634は土師器の小皿で、平坦気味の平底底部から口縁部が強く内湾して立ち上がる形態。口縁端部は丸くおさめる。復元口径8.2cmである。森分類・編年のB 5類、前V～VI期に相当する。0635は白磁碗の口縁部破片で、口縁形態は玉縁状を呈する。大宰府分類のIV類に相当する。

**SD24** (図面257-0621～0623) : 0621・0622は上師器の皿で、0621は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明瞭でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類、後I～II期に相当する。0622は大皿で、体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。復元口径13.1cmである。森分類・編年のC 6 c類、後I期に相当する。0623は瀬戸美濃鉄釉天目茶碗で、体部から口唇部にかけて丸味を持って立ち上がる。口唇部はやや外反気味である。復元口径12.6cmである。藤澤編年の後期IV(新)に相当する。

**SD25** (図面257-0631～0633) : 0631・0632は土師器の人皿である。0631は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く形態。端部は鋭く仕上げるも

のが多い。法量は口径13.8cm、器高2.3cmである。森分類・編年のB3類、前VI期に相当する。0632はいわゆる「ロクロ土師器」で、回転糸切り痕が残る平坦な底部から、やや内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁端部はやや内湾気味に仕上げる。法量は口径13.4cm、器高3.6cmである。森分類・編年のK類、前VI～VII期に相当する。0633は珠洲壺の口縁部破片で、弧状を呈する長頸の頸部に、口縁端部はやや肥厚し、外端を拡張する。復元口径10.2cmである。吉岡編年のI3期に相当する。

**SD32** (図面255-0556・0576～0578) : 0556は青白磁の壺ないしは瓶である。体部破片で外面にクシ状工具による文様が描かれている。0576は越中瀬戸の灰釉丸皿である。0577は土師器の小皿で、丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部をやや鋭く仕上げる。法量は口径7.0cm、器高2.0cmである。森分類・編年のB1類、前V期に相当する。0578は八尾の甕で、口縁部破片である。口縁端部の角状部分が丸みを帯び、端部が外傾せず上方へ摘み出されて立ち上がる。これに頸部の張出しと相まって、幅広の口縁帯を形成していく森分類のIIIa類に相当する。

#### 〈その他の遺構〉

**SX02** (図面254-0522～0526) : 0522～0526は土師器の皿で、0522・0524・0525は丸底ないしは丸底に近い底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明確である。口縁部は短く内湾し、端部をやや鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、前IV期に相当する。口径は約8.4cmの法量である。0523・0526は扁平だが、丸底気味の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部はやや鋭く仕上げる。0526はやや大きく法量は口径12.2cm、器高2.2cmである。森分類・編年のB2類、前IV期に相当する。

**SX03** (図面254-0521) : 0521は土師器の小皿で、丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。法量は口径7.3cm、器高1.6cmである。森分類・編年のB1類、前IV～V期に相当する。

#### 〈包含層〉 (図面257～259-0461・0466・0640～0757・0759・0760)

0640～0683は土師器の皿である。0640・0641はいわゆる「ロクロ土師器」で、回転糸切り痕が残る平坦な底部から、やや内湾気味に立ち上がる体部を有する。口縁端部は丸くおさめる。森分類・編年のK類で、0640は前VI～VII期に相当する。0640は法量が口径10.3cmである。0642は大皿で、体部が外傾気味に深く立ち上がり、口縁部は軽く外傾するか内湾する。端部は押しナデにより面を有する。京都系模倣と考えられる特徴を有す。森分類・編年のA1類、前V期に相当する。0643・0647は大皿で体部が明確でなく、口縁部が外傾気味に短く直線的に開く。端部はやや鋭く仕上げる。森分類・編年のB3類、前VI期に相当する。0644・0650は森分類・編年のZ2類、0644で前V期、0650で前V～VIにそれぞれ相当する。0645・0646・0662は中・大皿で、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。森分類・編年のB2類、前VI期に相当する。0648・0657～0660・0665・0666・0672～0678・0682・0683は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類で、0648・0665・0672～0674・0682は前VI期、0657・0676～0678は後I～II期、0658～0660・0683は前VII～VIII期、0666・0675は前IV～V期にそれぞれ相当する。0683は底部外面に墨書きが施されているが、小破片のため判読不可能である。0649・0656は大皿で、底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ9類、後III期に相当する。0649の復元口径は14.0cmである。0651は丸底で深みのある底部から体部が内湾しながら立ち

上がり、口縁部は幅広で屈曲しながら軽く外反する。体部の立ち上がり部分から口縁端部までが大きく緩やかなS字状を描く。森分類・編年のC 1類、前VII期に相当する。0652・0681は器高は低く扁平で、丸底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。とくに口縁端部は鋭くつまみあげるように仕上げる。森分類・編年のC 5類で、0652は後I期、0681は前IX期に相当する。0653は径の小さな平底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。口縁端部は軽くつまみあげ鋭く仕上げる。いわゆる「へそ皿」の横倣と考えられる器形だが回転台成形である点が異なる。復元口径8.0cmである。森分類・編年のC 6-a類、後I期に相当する。0654・0655は底部がやや扁平な丸底で、体部との境界は不明瞭である。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 5類で、0654は前IX～後I期、0655は後II期に相当する。0661は器高は浅く、平坦な底部から口縁部が直接外反・側方へ突出し、口縁部は鋭く仕上げる。復元口径11.7cmである。森分類・編年のZ 8類、後III期に相当する。0663・0664は体部が緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 6類、前VII～VIII期に相当する。0667は器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。復元口径8.0cmである。森分類・編年のA 2類、前V～VI期に相当する。0668～0671は小皿で、扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸くおさめる。森分類・編年のB 4類、前VI期に相当する。0679・0680は丸底気味で、体部は緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 6類、前VII～VIII期に相当する。0684～0691・0693～0697は龍泉窯系青磁である。0684～0691・0693は確で、0684は外面に蓮弁文が施される。0688は外面にクシ状とヘラ状施文具による文様が施される。北陸では出土例が少ない。0689は内面にヘラ彫りを、0690は内面見込みに花の幾何学文様を、0691は外面に雷文帯をそれぞれ有する。0694～0696は皿で、0696は稜花皿で、内面にクシ日文を施す。0697は小型の香炉で、三カ所に足を有する。0684は大宰府分類のII-b類（旧I-5-b類）に、0685～0687は大宰府分類のIV類（上田D-I類）もしくは上田分類D-II類に、0688は大宰府分類のI-6-a類に、0689は大宰府分類のI-4類に、0690は大宰府分類のII-c類？に、0691は上田分類C-II類に、0693は大宰府分類IV類以降（IVイ類）もしくは上田分類のD・E類に、0694～0697は大宰府分類IV類以降にそれぞれ相当する。0698は青磁瓶類で、近世のものか。0692と0699は白磁である。0692は皿もしくは壺の底部破片、0699は杯の口縁部破片で、どちらも森田分類D群に相当する。0700～0715は瀬戸美濃である。0700・0701は灰釉平碗で、0700は体部がやや丸みをもびて、口縁端部は尖る。0702・0703・0704は鉄釉天目茶碗で、0702は体部が直線的で、口唇部との境で屈曲し、口唇部は直立する。0703は削り出し高台を有する底部で、露胎である。0704は小天目茶碗の底部で、高台には墨書が施される。0705は端反皿ないしは丸皿の底部破片で、灰釉がかかる。0706は直線大皿の口縁部破片で、灰釉がかかる。0707は灰釉卸皿で、やや内湾気味に立ち上がる体部に口縁端部は面取する。復元口径14.0cmである。0708は鉢で、口縁端部は内側に折り返される。内外面に灰釉がかかる。復元口径14.3cmである。0709・0710は灰釉卸皿の口縁部破片である。0709は口縁端部を内側に折り返し、小突起を有する。0710は口縁端部の小突起が形骸化し、外端部を丸くおさめる。0711・0712は卸目付大皿である。底部付近の外面にヘラ削り調整が施され、露胎となる。体部内面には卸目が施される。0713は盤類の底部破片で、三カ所に足が付く。0714は灰釉盤の底部破片で、外面は回転ヘラ削りを施す。破片断面に漆塗りの痕跡がみられる。0715は梅瓶の底部破片である。これら瀬戸美濃の時期については、0707で中期I、

0715で中期、0700で後期Ⅰ、0704・0708・0714で後期Ⅰ～Ⅱ、0703・0709で後期Ⅱ、0710で後期Ⅳ（古）、0701・0702・0706・0711～0713で後期Ⅳ、0705で大窓期Ⅰ～Ⅱにそれぞれ相当する。0716～0720は八尾で、0716のみ擂鉢で、他は甕である。0716は口縁直下1～2cmが最大肥厚部となり、先端がこれより先細りとなり、口縁端部が面を持つ。端部はさらに内端をつまみ上げる。内面には擂目が10条認められる。復元口径29.6cmである。森分類のⅡ類に相当する。0717・0718は口縁部破片で、口縁部が受け口状に屈曲し頸部が「く」の字状を呈するが、受け口部は低く未発達である。外面の頸部も丸みを帯びてゆるやかに屈曲している。森分類のⅡa類に相当する。0719・0720は底部破片で、外面は上下方向のケズリが施される。0721～0741は珠洲である。0721～0731は擂鉢で、0721・0724は体部から口縁部が直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開き、口縁端部を面取る。吉岡編年のⅡ期に相当する。0722は体部から口縁部が直線的に外傾し、口縁端部は内端を上方に揃めだす。吉岡編年のⅡ期に相当する。0723は幅のやや広い水平な口縁部端面を有し、わずかに外端が側方へ突出する。吉岡編年のⅣ2期に相当する。0725はわずかに内湾気味に開く体部に、口縁部は端部から1cmほど下で窄まり、端部はやや肥厚する。復元口径31.8cmである。吉岡編年のⅡ期に相当する。0726は体部から口縁部が直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開き、方頭を呈し、口縁端部は面をもつ。吉岡編年のⅡ期に相当する。0727は口縁端部は外方へ突き出るように先端を細く・やや鋭く仕上げる。端面は内傾し、波状文を有する。器壁は薄く仕上げる。吉岡編年のV期に相当する。0728～0731は底部破片で、0729・0731は鉗目が直線的で、0730は波状を呈する。0732～0735は壺で、0732は頸部が長く、弧状に立ち上がり、口縁端部は方頭でやや内端をつまみ上げる。端部には波状のクシ目文を施す。吉岡編年のⅡ期に相当する。0733は長頸で、直線的に立ち上がり、端部は方頭を呈し外方にやや肥厚する。0734は口縁部破片で、端部は円頭を呈す。0733・0734は吉岡編年のV期に相当する。0735は底部破片で、静止糸切りによる切り難いである。0736～0741は甕で、0736～0739・0741は口縁部破片である。0736・0737・0739は、長頸で、0739は端部を鋭く挽きだし嘴状とし、0736・0727も緩やかな嘴頭を呈する。0736は吉岡編年のⅢ期に、0737はⅡ期に、0739はⅠ3期にそれぞれ相当する。0741はやや短頸で「く」字状に強く屈曲する。法量は復元口径が57.8cmである。吉岡編年のⅡ期に相当する。0738は短頸で、方頭を呈す。吉岡編年のIV2期に相当する。0740底部破片で外面は底面付近までタタキを施す。0742～0750は越中瀬戸の皿である。0743～0746・0748・0749・0750は灰釉が、0742・0747には鉄釉がそれぞれ施される。0742は内面に菊の印花文、高台内に墨書が描かれている。0751は越中瀬戸鉄釉椀の底部破片で、底部は削り出し高台で露胎である。0752～0755は伊万里である。0752・0753・0755は染付の皿で、0752は内外面に草花文とみられる文様が、0753は内面に二重斜格子文が、0755の内面には草花文がそれぞれ描かれている。0754は蓋で、内外面に草花文が施されている。0756・0757は白化粧土にハケ目文様を施された唐津で、0756は椀の口縁部破片、0757は瓶類の底部破片である。0759・0760は唐津の鉄釉擂鉢である。口縁形態は0759で外側に折り返し玉縁状にしたものであり、0760で肥厚させ、やや外反させたものである。復元口径は約34.0cmである。0461は珠洲壺の口縁部破片で、吉岡編年のIV2期に相当する。0466は珠洲擂鉢で、わずかに内湾気味の体部を有する。復元口径16.3cmである。吉岡編年のⅡ期に相当する。

#### (4) D3地区：(図面260～264-0761～0901)

古代 (図面260-0761～0767)

古代の遺物は少なく、須恵器、土師器がわずかに出土している。

### 〈溝〉

SD02（図面260-0762）：0762は須恵器の杯Aで、平坦に近い底部から体部が緩やかに屈曲し、体部が短く外傾する。底部は回転ヘラ削り調整である。復元口径13.0cm、器高3.3cmである。

### 〈包含層〉（図面260-0761・0763～0767）

0761は須恵器の杯蓋破片である。口縁内端にはかえりを有する。復元口径13.8cmである。0763は須恵器杯Aで平坦な底部から体部が緩やかに屈曲し、体部が「S」字状に短く外傾する。底部は回転ヘラキリによる切り離しである。復元口径13.5cm、器高3.6cmである。0764は須恵器壺の底部破片で、外面はヘラ削り調整である。0765は土師器杯の底部破片で、底部は回転糸切り痕が残る。0766は須恵器広口壺の頸部で、復元口径24.7cmである。0767は土製品上鍤で、約1/3残存である。樽型を呈し、重量24.0gである。

### 中・近世（図面260～264-0769～0901）

中・近世の遺物としては、中世土器皿、珠洲、八尾、中国製青磁・白磁、瀬戸美濃施釉陶器、越中瀬戸、伊万里、唐津などがみられる。

### 〈井戸〉

SE01（図面260-0789）：0789はフイゴ羽口破片で、断面形は隅丸方形を呈する。法量は外径で8.5cm、内径で2.3cmである。先端は著しく被熱している。

SE03（図面260-0775）：0775は瀬戸美濃の小鉢で、内面から外面体部中位まで灰釉を施す。底部は回転糸切り痕が残る。法量は復元口径9.9cmである。藤澤編年の後期I～II期に相当する。

### 〈土坑〉

SK11（図面260-0769・0770）：0769・0770は土師器の小皿で、0769はいわゆる「ロクロ土師器」である。底部は回転糸切りで、やや直線的に開く体部から口縁部で丸くおさめる。森分類・編年のK類、前VII～VIII期に相当する。0770は平坦で平底の底部から口縁部が強く内湾して立ち上がる形態。口縁端部は丸くおさめる。森分類・編年のB5類、前VI～VII期。

SK28（図面260-0776・0777）：0776・0777は土師器の小皿で、0776は体部が内湾しながら開き、端部は肥厚気味に丸くおさめる。森分類・編年のZ1類、前VII期に相当する。0777は、器高は低く扁平である。平底の底部で体部ではなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ1類、前V期に相当する。

SK29（図面261-0808）：0808は土師器の小皿で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、前IX～後I期に相当する。

SK31（図面261-0811）：0811は土製品フイゴ羽口破片で、先端は著しく被熱している。

SK32（図面261-0809）：0809は龍泉窯系青磁の稜花皿の破片で、14世紀以降の所産である。

SK43（図面260-0768）：0768は珠洲播鉢の口縁部破片で、体部から内湾しながら立ち上がり、口縁部は幅の狭い面を持つ。吉岡編年のI3期に相当する。

SK71（図面261-0807）：0807は土師器の小皿で、底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。内外面にススが付着する。法量は復元口径8.8cmである。森分類・編年のZ5類、前IX期に相当する。

### 〈溝〉

**SD03** (図面260-0771～0774・0790) : 0771～0773は土師器の小皿で、いずれも口縁端部をつまみ上げるタイプである。0771・0773は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。0773の内面には刷毛目状の調整痕が残る。0772も基本的には同じだが、0771・0773に比べて屈曲の度合いが弱く直線的で、端部のつまみあげも弱い。0771は森分類・編年のD1類、後I期、0772はD2類、後I期、0773はD1類、後III期にそれぞれ相当する。0774は瀬戸美濃鉄釉天目茶碗で、体部から口縁部にかけて丸みを持って立ち上がる。復元口径10.8cmである。藤澤編年の後期IV（新）に相当する。0790は土製品フイゴ羽口破片で、先端は著しく被熱している。

**SD04** (図面260-0783～0788) : 0783～0785は土師器の小皿で、0783は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD2類、後II～III期に相当する。0784は体部は内湾気味に浅く屈曲し、口縁部は強くヨコナデして外反させる。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ10類、後III～IV期。0785は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後II～III期に相当する。0786・0787は土製品フイゴ羽口の破片で、先端は著しく被熱している。0788は珠洲甌の口縁部破片で、口縁部は嘴状を呈し、端部は屈曲し垂下する。吉岡編年のII期に相当する。

**SD05** (図面261-0794～0806) : 0794～0800は土師器の皿類で、0794・0795は大皿、0796・0797は中皿、残りは小皿である。0794は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く形態。端部は鋭く仕上げる。0795は扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸く納めるものが多い。0796は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。0797は扁平で、体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。0798・0799は器高は低く扁平である。平底の底部で体部はなく、底端部から口縁部を短く折り曲げ上方につまみ上げる。端部は鋭く仕上げる。0800は丸みを帯びた底部から、体部が斜外方へ開く。0794は森分類・編年のB3類、前VI期、0795はB4類、前V期、0796はB1類、前VII～VIII期、0797はB2類、前V期、0798はZ1類、前IV期、0799はZ1類、前IV～V期、0800はZ3類、前VI期にそれぞれ相当する。0801～0806は珠洲で、0801・0804～0806は擂鉢で、0802・0803は甌である。0801は底部の破片で、擂目は4条が確認できる。0804は体部から口縁部にかけて直線的に開き、口縁部の端面は上端が上方に軽く摘み上げ、下端は側方に鋭く突出する。擂目は9条一単位で、復元口径32.0cmである。吉岡編年のII期に相当する。0805は底部破片で、底面には静止系切り痕がみられる。波状の擂目で4条一単位である。0806は体部が内湾気味に立ち上がり、口縁部はほぼ水平に幅の狭い面を持つ小型の擂鉢で、内面には一部ススが付着する。復元口径19.1cmである。吉岡編年のII期に相当する。0802は口縁部破片で、口縁部は嘴状を呈し、端部は屈曲し垂下する。吉岡編年のII期に相当する。0803は狭い底部からやや屈曲しながら立ち上がる体部を持つ。外面タキ、内面縱方向のナデ調整を施す。

**SD07** (図面260-0791) : 0791は八尾甌の口縁部破片で、口縁部は受け口状に屈曲する。口縁端部に内傾する端面が生じ、断面が角状を呈する。復元口径20.0cmである。森分類IIc類に相当する。

**SD12** (図面260-0781) : 0781は土師器の中皿で、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する形態である。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。復元口径11.7cmである。森

分類・編年のZ 2類、前Ⅶ期に相当する。

SD13 (図面260-0782) : 0782は土師器の小皿で、体部が内湾しながら開き、端部は肥厚気味に丸くおさめる。森分類・編年のZ 1類、前Ⅶ期に相当する。

SD15 (図面260・261-0792・0793) : 0792・0793は珠洲甌で、0792は口縁部が「く」字状に屈曲し、円頭状を呈する。復元口径52.0cmである。吉岡編年のV期に相当する。0793は頸部が長く、口縁部が「く」字状に屈曲するタイプである。端部は方頭状を呈する。復元口径51.5cmである。吉岡編年のIV期に相当する。

SD16 (図面260-0780) : 0780は珠洲搔鉢の底部破片で、内面の搔目は11条一単位である。

SD17 (図面260-0778・0779) : 0778は土師器の小皿で、器高が低く、丸みを帯びる底部から口縁部にかけての屈曲は弱く、浅い角度で側方に大きく開く。端部のつまみあげは弱い。口縁部内外にスグが付着する。森分類・編年のD 4類、後IV～V期に相当する。0779は土師器の小皿で、径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD 1類、後III期に相当する。

SD22 (図面261-0810) : 0810は土師器の小皿で、いわゆる「ヘソ皿」と呼ばれているもの。法量は口径8.8cm、器高2.3cmの完形品である。内外面にスグが付着する。15世紀代のもので、搬入品か。

SD26 (図面261-0824) : 0824は珠洲甌の底部破片で、底部からやや内湾しながら立ち上がる体部を有する。

#### 〈包含層〉 (図面261～264-0812～0823・0825～0901)

0812は白磁碗の口縁部小破片で、口縁形態は玉縁状を呈する。大宰府分類のIV類に相当する。0813～0817は土師器の小皿で、0813は丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。0814は器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。0815は扁平だが、丸底気味の底部から体部が内湾しながら開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。0816は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。内外面にスグが付着する。0817は底部がやや扁平な丸底で、体部との境界は不明瞭である。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。0813は森分類・編年のB 1類、前VII～VIII期に相当する。0814はA 2類、前IV期、0815はB 2類、前VI期、0816はD 1類、後IV～V期、0817はZ 5類、後II期にそれぞれ相当する。0818・0819は白磁碗の口縁部破片で、口縁部を外反させ端部を水平にする。0818は内面に櫛目文を有する。0818は大宰府分類のV-4-c類、0819はV-4類ないしはV-1・3類に相当する。0820は龍泉窯系青磁の皿で、底部破片である。内外面の見込みは輪状に釉カキを施す。大宰府分類のIV類以降に相当する。0821・0822は瀬戸美濃の製品で、0821は灰釉の腰折皿で、復元口径11.3cmである。0822は灰釉丸椀で、外面に連弁文が押印されている。復元口径13.2cmである。0821は藤澤編年の後期IV(新)、0822は大宰期Iに相当する。0823・0825～0829は珠洲で、0823・0827～0829は搔鉢、0825・0826は甌である。0823は珠洲搔鉢の口縁部で、体部から口縁部にかけて直線的に外傾するか、わずかに内湾気味に開く。口縁端部は方頭を呈する。復元口径は30.2cmである。0828は口縁端面が外傾し、端面の両端が角を落としたように丸みをもつ。0829はやや内湾気味の体部で、口縁端部外端が側方につまみ出す片口搔鉢である。片口部分は指2木分で成形され、内面の搔目は8条一単位である。復元口径35.6cmである。0823は吉岡編年のII期に、0828はV期に、0829はIV 1

期にそれぞれ相当する。0825は直線的な体部から口縁部にかけては、短頭で「く」字状に屈曲し、口縁端部は方頭を呈する。0826はやや長頸で、口縁部は水平に伸び方頭を呈する。0825は吉岡編年のⅤ期に、0826はⅢ期に相当する。0830は八尾甕の口縁部破片で、口縁部が受け口状に屈曲するが、受け口部は低く未発達である。外面の頸部も丸みを帯びてゆるやかに屈曲している。森分類のⅡa類に相当する。0831～0837は越中瀬戸である。0831は灰釉丸皿で、内面に釉止めの段がある。底部は削り込み高台を有する。法量は口径10.3cm、器高2.2cmである。0832は火入れとみられる器種で、口縁端部の内端が肥厚する。内外面に鉄釉を施し、底部は露胎となる。内面に3点トチンが残る。法量は口径13.4cm、器高は7.2cmである。0833は火入れで、内外面灰釉が施す。底部は削り出し高台で露胎である。0834は香炉で、内外面に鉄釉を施す。底部は回転糸切り痕が残る。0835は鉄釉壺で、口縁部は「く」字状に緩く屈曲する。0836は秉燭で、鉄釉を施す。火芯を立てる芯立部分に最もスヌが付着している。0837は小壺状の水注とみられるもので、一ヵ所に注口を有する。外面に鉄釉が施される。0838は施釉陶器碗で、外面には植物文が描かれている。高台見込みには朱書きで5文字確認でき、「中茶口 四口」と読める。0839は美濃の柳茶碗で、高台は露胎である。法量は口径12.3cm、器高5.7cmである。0840～0858は伊万里である。0840・0841はいわゆる広東碗で、0840の外面にはよろけ繪文が、0841の外面と内面見込みには草花文がそれぞれ描かれている。0842は碗で、外面によろけ繪文が描かれている。0843・0844は猪口で、0843は蛇の目凹高台で、外面に植物文、内面に四方桿文が巡る。0844は二次被焼のため、文様が消滅している。0845は白磁の皿で、内面見込みは蛇の目釉剥ぎを施す。0846は仏飯器で、外面に蛸唐草文が描かれている。0847～0852は皿類で、0847は内面に風景文、外面に唐草文、0848・0849は内面に草花文、外面にくずし唐草文、0850は内面に二方花文、外面にくずし唐草文、見込みに五弁花文、0851は内面に草花文、0852は見込みにあやめ文がそれぞれ描かれている。また、高台見込みに朱書きされているものとして、0847の「中ノ名 □□」、0852の「中名高木」がある。0853は鉢とみられる底部破片で、内面見込みに樓閣山水文が、高台見込みには変形字が描かれている。高台内には朱書きで2文字書かれているが判読不明である。0854～0858は鉢で、0854は内面に山水文、外面に草花文が描かれている。また、高台見込みには朱書きで「中ノ名□□」とある。0855は六角鉢で、内面見込みに松竹梅と内面体部に植物文、外面には唐草文が描かれている。高台見込みには朱書きで「中名□□」と書かれている。0856は八角鉢で、蛇の目凹高台を有する。内面見込みに草花文、内面体部にあやめ文と葡萄文を交互に配する。0857・0858は八角鉢の口縁部破片で、0858は内面体部に竹文が描かれている。0859～0862は唐津碗の破片である。0859・0860は陶胎染付で、外面に鉄絵が描かれている。0861・0862は京焼風唐津碗の底部破片で、褐釉がかかる。0863～0866は鉄釉がかかる唐津擂鉢で、擂目は直線的で0863で18条一単位、0864で11条一単位、0866で18条一単位である。0865・0866の高台には砂目が残る。0867・0868は銅綠釉がかかる内野山で、0867は鉢の口縁部破片、0868は椀の底部である。0868は内面見込みに蛇の目釉剥ぎ、底部は削り出し高台である。0869・0870はいわゆる三島手と呼ばれるもので、0869は椀で、外面に刷毛目状の文様である。0870は皿で、口縁部は波状を呈する。0871～0881は越中丸山で、0871～0880は碗で、碗は削り出し高台を有する。底部の器壁は薄く仕上げる。0871・0873・0880は白化粧土に施釉を施し、0873の外面上には蝶が描かれている。0872・0874・0875・0877～0879は鉄釉が施され、高台は露胎である。0881は口縁部が波状を呈する皿で、内外面には刷毛目文様を有する。0882～0891は產地不明の施釉磁器で、0882は碗で、体部外面に山水とみられる文様が描かれ、高台には朱書きで2～3文字書かれているが判読不明である。破片断面には鉛ガラスによる焼き継ぎ痕が残る。0883～0890は碗で、0883・0884・0885・

0886・0887・0890の外面には植物文が描かれている。0888の外面には変形字を有し、0889は無文である。0891は白磁の仏壇器で、底部は露胎である。0892・0893は京都信楽系とみられるもので、0892は灯明皿、0893は灯明受皿である。外面に施釉されて、底部はいずれも回転糸切りである。0894は產地不明の壺で、外面に鉄種がかかる。体部外面には2条の沈線が巡る。復元口径32.9cmである。0895～0897は瓦質土器で、0895・0896は火入れの口縁部破片、0897は火鉢の底部破片である。0898は土師質土器で焼塩壺とみられるもの。体部外面はハケ目調整で、焼成後に「十」字状の線刻が施されている。0899は上師質土器の壺で、外面面ロクロナデ調整である。0900は泥人形で、型打成形である。0901は土師質の壺で、口縁部は外端を肥厚させている。復元口径26.7cmである。

#### (5) E 1・E 2 地区：(図面265～278-0902～0129)

##### 中・近世 (図面265～278-0902～0129)

出土遺物には古代の土師器、須恵器も微量に混じるが、主体となるのは中近世のものである。中世土師器皿、珠洲、八尾、中国製青磁・白磁、瀬戸美濃、越前、越中瀬戸、伊万里、唐津、瓦質土器など多様な器種が出上している。

##### 〈井戸〉

SE03 (図面265-0905・0916) : 0905は土師器の皿で底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、端部は鋭く仕上げる。森分類・編年Z5類、後II期に相当する。0916は珠洲播鉢の底部破片で、底部は静止糸切り痕が残る。播目は11条一単位である。

SE06 (図面265-0913) : 0913は瓦質土器の播鉢で、約1/8程度残存している。直線的な体部から口縁部を方形におさめる。内面には播目はみられず、口縁部と体部との境は一条の沈線が巡る。内外面はヨコナデ調整である。復元口径27.6cmである。

SE08 (図面265-0909～0912) : 0909～0911は土師器の小皿で、丸底ないしは丸底に近い底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年B1類で、0909は後IV～V期、0910・0911は後II～III期にそれぞれ相当する。0912は珠洲窯の底部破片で、外面にタタキが施される壺T種である。

SE09 (図面265-0902～0904) : 0902・0903は土師器の小皿で、0902は丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年B1類、後I～II期に相当する。0903は底部と体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年Z5類、後II期に相当する。0904は珠洲播鉢の口縁部破片で、口縁部直下が肥厚し、端面向かって窄まる。

SE12 (図面265-0906～0908・0914・0915) : 0906は越中瀬戸の向付で、口縁部内外面に灰釉がかかる。復元口径10.1cmである。0907は土師器の小皿で、丸底に近い底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年B1類、後I～II期に相当する。0908は瀬戸美濃灰釉釦皿で、片口を有する。底部は回転糸切りによる切り離しで、法量は復元口径14.7cm、器高4.2cmである。藤澤編年の後期Iに相当する。0914・0915は珠洲で、0914は壺、0915は播鉢である。0914は口縁部が方頭を呈し、体部外面にはヘラ状工具による線刻が施されている。吉岡編年のIV1期に相当する。0915の底部は静止糸切りが残る。

SE15 (図面265-0917～0921) : 0917・0918は土師器の小皿で、0917は丸底に近い底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森

分類・編年のB1類、後I～II期。0918は底部は丸底で、体部から口縁部にかけて軽く「S」字状に屈曲する。口縁端部のつまみだしはほとんどみられない。法量は復元口径9.0cm、器高は1.7cmである。森分類・編年のD5類、後VI期に相当する。0919は珠洲壺の口縁部破片で、口縁部の外端は張り出さず、逆に内端側が突き出る形態で、幅の広い端面はやや内傾する。口縁の端面に波状文を施す。0920・0921は珠洲壺の底部破片で、体部は直線的に伸びる。

#### 〈土坑〉

SK02（図面265-0924・0925）：0924は瀬戸美濃鉄釉天目茶碗で、底部は輪高台でその周辺は露胎である。藤澤編年の大窯III期に相当する。0925は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、口縁部が外反する。上田分類のD1類ないしはD2類に相当する。

SK07（図面265-0927）：0927は土師器の小皿で体部から口縁部にかけて軽く「S」字状に屈曲する。口縁端部のつまみだしはほとんどみられない。森分類・編年のD5類、後VI期に相当する。

SK18（図面265-0932）：0932は越中丸山の碗の口縁部破片である。

SK23（図面265-0922）：0922は珠洲壺の口縁部破片で、頸部は「く」字状に外反しながら立ち上がり、口縁部は方頭を呈する。外面に線刻されているが、下端が欠火しているため全体は不明である。法量は復元口径42.4cmである。吉岡編年のIII期に相当する。

SK29（図面265-0931）：0931は伊万里の瓶で、外面には文様が描かれている。

SK30（図面265-0928）：0928は土師器の小皿で、丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後III～IV期に相当する。

SK37（図面265-0933）：0933は珠洲片口播鉢の口縁部破片で、口縁部の端面が大きく幅広に内傾する。播口は直線的で、11条以上確認できる。口縁部には一部ススが付着する。復元口径33.9cmである。吉岡編年のVI期に相当する。

SK41（図面265-0934）：0934は珠洲壺T種の体部破片で、肩は丸みがあり球洞状を呈する形態とみられる。吉岡編年のV期に相当する。

SK44（図面265-0926）：0926は十石器の小皿で、体部から口縁部にかけて軽く「S」字状に屈曲する。口縁端部のつまみだしはほとんどみられない。森分類・編年のD5類、後VI期に相当する。

SK48（図面266-0935）：0935は土師器の小皿で、丸底の底部から体部が内湾気味に立ち上がり、口縁端部は鋭くおさめる。D類の口縁部（受け口部分）の省略形か。後IV～VI期に相当する。

SK60（図面266-0944）：0944は瀬戸美濃の卸皿で、底部に回転糸切り痕が残る。外面にススが付着する。藤澤編年の後期に相当する。

SK85（図面266-0958）：0958は珠洲壺の口縁部破片である。長頸で、口縁部は嘴頭を呈し、端部を垂下させる。吉岡編年のII期に相当する。

SK70（図面266・268-0959・0960・1008）：0959・0960は珠洲壺の口縁部破片である。0959は長頸で、端部は方頭を呈し、やや垂下させる。吉岡編年のII期に相当する。0960は頸部を「く」字状に屈曲させ、端部は方頭を呈する。吉岡編年のIV 3期に相当する。1008は土師器の小皿で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後I～II期に相当する。

SK72（図面269-1035）：1035は唐津大皿の底部で、高台は四角形で露胎である。内面は白化粧土に灰釉がかかり、全体として刷毛目模様が描かれる。内面には砂目が残る。

**SK74** (図面266-0938～0943) : 0938は土師器の皿で平坦気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明瞭である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後Ⅲ～IV期に相当する。0939～0942は越中瀬戸で、0939は匣鉢の底部破片で、底部は回転糸切り痕が残る。内外面に鉄輪を施す。0940は灰釉丸皿で、端部は方形を呈する。0941は灰釉丸皿で、削り込み高台を有する底部から、口縁端部は方形を呈する。内面見込みには菊が押印されている。高台内には花押とみられる記号が墨書きされている。法量は口径13.8cm、器高は3.2cmである。0942は鉄輪碗で、削り出し高台は露胎である。0943は瓦質土器の香炉で、約1/3呈残存している。球胴状の体部から、直立する頸部へとつづき、口縁部は水平に外反させる。体部外面には1段目と2段目に雷文が、3段目に半花菱文が巡る。口縁部外面にはスヌが付着する。法量は口径9.5cmである。

**SK76** (図面269-1034) : 1034は伊万里の皿で、完形品である。底部は削り出し高台で、断面が三角形を呈する。内面には植物文が描かれている。法量は口径12.9cm、器高3.8cmである。

**SK79** (図面266-0937) : 0937は土師器の小皿で、丸底に近い底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明瞭。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、前IX～後I期に相当する。

**SK81** (図面265-0923) : 0923は瀬戸美濃灰釉平碗で、復元口径15.2cmである。藤澤編年の後期IV(古)に相当する。

**SK82** (図面265-0930) : 0930は土師器の大皿で、やや丸みを持った平底の底部から、体部が内湾気味に浅く屈曲し、口縁部は強くヨコナデして外反させる。復元口径14.0cm。森分類・編年のZ10類、後VI期に相当する。

#### 〈溝〉

**SD01** (図面266・269-0936・1032・1033) : 0936・1032は土師器の小皿で、0936はやや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する形態である。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。森分類・編年のZ2類、後II期に相当する。1032は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。内外面にスヌが付着する。森分類・編年のB1類、後III期に相当する。1033は唐津大鉢で、口縁部は折線状を呈す。内面には文様が描かれている。内面見込みには目跡が残る。法量は口径41.1cm、器高11.8cmである。

**SD04** (図面268-1011) : 1011は越中瀬戸鉄釉丸皿で、底部は削り出し高台である。口縁端部は方形を呈し、高台見込みには墨書きで花押とみられる記号が書かれている。法量は口径10.3cm、器高2.6cmを測る。

**SD10** (図面266・267-0945～0953・0966・1006) : 0945は土師器の小皿で、丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、前VII～VIII期に相当する。0946・0947・0949・0950・0952・0953は越中瀬戸で、0946・0947・0950は灰釉丸皿である。0946は高台見込みに花押とみられる記号が墨書きされている。法量は口径10.7cm、器高2.3cmである。0947は内面見込みに菊が押印され、高台見込みには判読できないが墨書きがみられる。0950は口縁端部が方形を呈する形態で、内面には菊が2押印されている。高台見込みには花押とみられる記号が墨書きされている。法量は口径13.6cm、器高は2.7cmである。0949は擂鉢の底部破片で、底部回転糸切り痕が残り、内面の擂目は7条一単位である。内外面には錆軸がかかる。0952は灰釉向付で、内面見込みには印花文が施される。0953は鉄釉小杯で、底部は回転糸切り痕がある。

による切り離しである。法量は口径6.1cm、器高は3.0cmである。0948は白磁碗で、外面に草花が線刻されている。復元口径10.2cmである。近世のものか。0951は珠洲播鉢の底部破片で、底部は静止糸切り痕が残る。内面の擂目は9条一単位である。0966は唐津壺で、鋸軸の上から鉄軸を体部下位まで施す。底径8.1cmを測る。1006は越中瀬戸播鉢の底部破片で、底部は回転糸切りによる切り離しである。内面の擂目は9条一単位で、内外面に鋸軸を施す。

**SD11** (図面266-0954) : 0954は土師器の小皿で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋸く仕上げる。森分類・編年のB1類、後IV～V期に相当する。

**SD14** (図面266-0962・0963) : 0962は瀬戸美濃鉄釉大口茶碗で、直線的な体部から口唇部は「S」字状にやや外反する。復元口径11.6cmである。藤澤編年の大窯I期に相当する。0963は越前の播鉢で、内面の擂目は8条一単位である。破片断面には漆錆び痕が残る。内面にはススが付着する。復元口径31.8cmである。

**SD15** (図面266-0955～0957) : 0955・0956は土師器の小皿で、0955は丸底から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明瞭である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋸く仕上げる。森分類・編年のB1類、後III～IV期に相当する。0956はやや内湾気味に立ち上がるが、底部と体部の境界は不明瞭である。口縁端部は外反気味に端部を鋸く仕上げる。D類の口縁部（受け口部分）の省略形かとみられる。後IV～VI期に相当する。0957は珠洲播鉢の底部破片で、内面は摩滅している。

**SD18** (図面267・268-0967～0970・1017) : 0967・0968は十師器の中～大皿で、0967は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD1類、後IV期に相当する。0968はやや丸みを持った平底な底部から、体部が内湾気味に浅く屈曲し、口縁部は強くヨコナデして外反させる。復元口径13.1cmである。森分類・編年のZ10類、後VI期に相当する。0969は越中瀬戸の向付で、口縁部から体部まで灰釉がかかる。復元口径10.5cmである。0970は珠洲播鉢の底部破片で、内面の擂目は7条確認されている。1017は白磁皿の口縁部破片で、口縁端部が露胎となるいわゆる口禿げ白磁である。大宰府分類のIX類に相当する。

**SD19** (図面266-0964) : 0964は越中瀬戸皿の底部破片で、高台見込みには花押が墨書きされている。

**SD20** (図面267-0995・0996) : 0995は土師器の中皿で、径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD1類、後V期に相当する。0996は京焼風唐津の碗で、内外面にわずかに黄褐色をおびた透明釉がかかる。

**SD22** (図面266-0965) : 0965は珠洲播鉢の口縁部破片で、体部から口縁部が直線的に開き、口縁部の端面が大きく幅広に内傾する。端面には波状文が施されている。吉岡編年のVI期に相当する。

**SD24** (図面267-0971～0982) : 0971～0977は土師器の小皿で、0971は丸底の底部から深みのある体部強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味につまみあげ、端部は鋸く仕上げる。森分類・編年のC2類、後I期に相当する。0972はやや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。森分類・編年のZ9類、後II期。0973～0977は森分類・編年のB1類で、丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋸く仕上げるタイプ。時期は0973～0975・0977で後II～III期、0976で後III期にそれぞれ比定される。0978・0979は越中瀬戸で、0978は向

付の破片で、底部は削り出し高台である。口縁部から体部の外面に灰釉がかかる。高台内には墨書きされているが判読できない。復元口径10.8cmである。0979は皿の底部で、内面見込みに菊の印花文がある。高台内には墨書きされており「八」と読める。0980は伊万里の皿で、底部は削り出し高台、内面には蛇の目釉剥ぎされている。復元口径14.4cmである。0981は龍泉窯系青磁碗の底部破片で、高台が断面四角形を呈する。大宰府分類のI類ないしはII類に相当する。0982は珠洲擂鉢の口縁部で、外端は張り出さず、内端側が突き出る形態で、幅の広い端面は内傾する。端面には波状文を施す。吉岡編年のV期に相当する。

**SD25** (図面267-0983～0994) : 0983～0987は土師器の皿で、0983は丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後II～III期に相当する。0984～0986は森分類・編年のZ5類で、底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。時期は0984で後III期、0985・0986で後II期に比定される。0987はやや丸みを持った平底から体部が浅く開き、さらに端部付近を強く屈曲させて、先端が短い階段状の「S」字状を呈する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ1類、後III～IV期に相当する。0988は珠洲擂鉢の底部破片で、やや器壁に厚みを有する。0989は越中瀬戸壺の底部で、回転糸切り痕が残る。内面は鉛釉で、外面は露胎となる。0990は床地不明の施釉陶器の椀で、底部は削り出し高台を有する。0991は唐津の擂鉢で、口縁部の内外面に鉄釉がかかる。0992は瀬戸美濃鉄釉天目茶碗の体部破片で、高台付近は鉛釉を施す。藤澤編年の後期IV(新)に相当する。0993は瀬戸美濃の灰釉端反皿で、藤澤編年の大窯期Iに相当する。0994は珠洲壺の口縁部破片である。短頭で口縁端部は円頭を呈する。吉岡編年のV期に相当する。

**SD26** (図面267・268-0997～1005・1019) : 0997・0998は土師器の小皿で、0997は径の平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD1類、後V期に相当する。復元口径9.6cmである。0998は丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後II～III期に相当する。法量は口径8.2cm、器高1.7cmである。0999・1000は伊万里で、0999は皿の底部である。内面見込みには山水文とみられる文様が描かれている。1000は碗で高台は断面四角形を呈し、砂目が残る。1001は越中瀬戸片口擂鉢の口縁部破片で、口縁部の内側に突起が形成される。外面に鉛釉を施す。1002・1003は瀬戸美濃の製品である。1002は鉄釉天目茶碗で、高台付近は鉄釉が施される。復元口径12.3cmである。藤澤編年の大窯期に相当する。1003は鉄釉天目茶碗で、復元口径11.0cmである。藤澤編年の大窯I期。1004は越中瀬戸擂鉢の底部で、内面の播目は11条一単位である。1005・1019は珠洲で、1005は甕の口縁部で、「く」字状に屈曲した頸部に、端部が水平に伸び方頭を呈する。吉岡編年のIV1期に相当する。1019は肩の張り出しが弱く、胴径と口径がほぼ同じになる。頸部は短頸で、「く」字状に屈曲し、口縁端部は円頭を呈する。頸部付近は上下方向のケズリ調整が施される。復元口径49.2cmである。吉岡編年のV期に相当する。

**SD28** (図面268・269-1018・1020～1031) : 1018は珠洲壺の口縁部破片である。頸部は短頸で「く」字状に屈曲し、口縁端部は円頭を呈する。体部外面はタタキ後一部上下方向のナデ調整が施される。復元口径44.0cmである。吉岡編年のV期に相当する。1020・1021は土師器の小皿で、1020は器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。森分類・編年のA2類、前V～VI期に相当する。1021は丸底の底部から体部が屈曲して開く

が、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後I～II期。1022～1024は越中瀬戸の丸皿で、1023は鉄釉が、1022・1024は灰釉が施される。1022の法量は口径10.7cm、器高2.5cmである。1024は内面見込みに菊が押印されている。法量は口径10.2cm、器高2.1cmである。1025は越中瀬戸の灰釉向付で、底部は削り出し高台で断面三角形を呈する。法量は口径11.0cm、器高3.4cmである。1026は越中瀬戸の鉄釉碗で、高台付近は露胎である。1027は越中瀬戸の鉄釉火入れで、高台は露胎となる。1028・1029は越中瀬戸の擂鉢であり、1028は底部、1029は口縁部である。1028は外側に鉄釉を施す。1029は口縁端部が方頭を呈し、外側に鉄釉が施されている。擂目は9条一単位である。復元口径29.4cmである。1030は珠洲甕の底部破片で、底部は回転糸切り痕が残る。内面はやや摩滅している。1031は珠洲甕の底部で、底径15.2cmである。内面はやや摩滅している。

SD29（図面268-1010）：1010は土師器の皿で、扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸く納めるものが多い。法量は口径8.8cm、器高1.3cmである。森分類・編年のB4類、前V期に相当する。

SD30（図面268-1012～1014・1016）：1012・1016は越中瀬戸で、1012は灰釉丸皿、1016は擂鉢である。1012は底部が削り出し高台で、内面には印花文が施される。法量は口径10.4cm、器高2.5cmである。1016は直線的な体部から、口縁部外側に縁帯が形成され、端部はやや肥厚する。内面の擂目はどちらも10条一単位で、外側に鉄釉が施される。1016の復元口径は34.3cmである。1013は瀬戸美濃鉄釉天日茶碗で、破片断面には漆締ぎ痕が残る。復元口径11.2cmである。藤澤編年の後期IV（新）に相当する。1014は珠洲擂鉢の口縁部で、幅の広い水平に近い口縁部端面を有し、僅かに外端が側方へ突出する。口縁部端面に波状文を施す。擂目は10条一単位である。吉岡編年のV期に相当する。

SD35（図面268-1009）：1009は土師器の小皿で、丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明瞭である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。法量は口径9.1cm、器高1.7cmである。森分類・編年のB1類、後I～II期に相当する。

SD37（図面268-1007）：1007は土師器の大皿で、丸底の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。法量は口径13.2cm、器高2.9cmである。森分類・編年のB1類、前V期に相当する。

SD41（図面270-1048）：1048は唐津皿の口縁部破片で、内面には白化粧土に灰釉が施され、刷毛目文様が描かれている。

#### 〈柱穴〉

SP32（図面265-0929）：0929は土師器の皿で、底部は丸底で、体部から口縁部にかけて軽く「S」字状に屈曲する。口縁端部のつまみだしはほとんどみられない。森分類・編年のD5類、後VI期に相当する。

SP41（図面266-0961）：0961は珠洲擂鉢の底部破片で、底部は静止糸切りによる切り離しである。内面には直線的な擂目があり、擂目は12条確認できる。

#### 〈その他の遺構〉

SX01（図面269・270-1015・1036～1047）：1036は唐津擂鉢の底部で、底部は回転糸切りによる切り離しである。内面の擂目は17条一単位で、底径8.8cmである。1037は土師器の小皿で、狭い丸底基調の底部と体部を有するが、器高が低く扁平である。口縁部も浅く斜外方へ大きく開く。口縁部は端部に向かい鋭く仕上げる。復元口径9.8cmである。森分類・編年のC3類、前Ⅳ～後Ⅰ期に相当する。

1038は瀬戸美濃鉄釉天目茶碗で、口縁端部は一旦立ち上がり口縁が短く外反する。復元口径11.4cmである。藤澤編年の大窯期Ⅱに相当する。1039～1042は越中瀬戸で、1039・1040は皿で鉄釉が施される。1039の内面にはススが付着している。1041は鉄釉小杯で、底部は回転糸切り痕が残る。法量は口径5.6cm、器高2.1cmである。1042は腰折形とみられる椀で、底部は削り出し輪高台を有する。外面には灰釉がかかり、高台付近は露胎である。1043は伊万里の輪花皿で、型打成形である。内面見込みに花鳥文が描かれている。高台には砂目が残る。法量は復元口径14.4cmで、器高3.0cmである。1044は京焼風唐津の椀で、黄褐色を帯びる釉薬が施される。法量は底径で4.9cmを測る。1015・1045・1046は越中瀬戸擂鉢で、1015の底部は回転糸切りによる切り離しで、法量は口径31.0cm、器高は12.2cmである。1045は口縁部破片で、口縁部の内側に弱い突起が形成される。内外面に錆釉を施す。1046は底部の破片で、内外面には錆釉が施される。内面の擂目は10条一単位である。内外面にはススが付着する。1047は唐津擂鉢で、底部は回転糸切り痕が残る。擂目は14条一単位である。

#### 〈包含層〉（図版270～278-1049～1314・1316～1329）

1049～1059は古代の遺物であるが、E地区では古代の遺構ではなく、したがって遺構出土のものも包含層で一括して記述していく。1049～1056は須恵器で、1057～1059は土師器である。1049は杯蓋で、扁平な天井部を有し、口縁端部は下方に垂下する。天井部外面には回転ヘラ切りの痕跡が残り、つまみは欠失しているが、擬宝珠状のつまみを有すると考えられる。法量は口径15.4cmである。1050～1053・1055は杯Bで、1050～1053は概ね平坦な底部で、底端部に「ハ」字状に開く高台を有する。1054は有高台の盃で、底径5.2cmである。1055は底部に断面三角形の高台を有し、高台内には回転糸切り痕が残る。1056は無高台の杯Aで、底部は回転ヘラ削りである。法量は口径13.2cm、器高3.2cmである。1057は杯Aで平坦な底部から、体部は浅くやや外反気味に開く。底部回転ヘラ削り調整である。法量は口径14.2cm、器高3.1cmである。1058・1059は土師器杯で、回転糸切りの底部から体部が外方に開きながら立ち上がる。1060～1086は土師器の皿で、1060～1066・1069～1079・1081～1085は小皿、1080・1086は中皿、1067・1068は大皿である。1060・1062はいわゆる「ロクロ十土師器」の皿である。1060は柱状高台で、法量は口径8.2cm、器高は2.3cmである。1062は平坦気味の底部から、やや「S」字状に立ち上がる体部を有する。森分類・編年のK類で、1060は前VI～VII期、1062は後II～III期に相当する。1061はいわゆる「へそ皿」の模倣と考えられる器形だが、回転台成形である。径の小さな平底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。内底面の見込み外縁に沿って、圓線上の凹線が巡る。口縁端部は軽くつまみあげ鋭く仕上げる。森分類・編年のC 6a類で、後I期に相当する。1063・1081は扁平だが、丸底ないしは丸底気味の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB 2類で、1063は前VI～VII期、1081は前V期に相当する。1064～1067は扁平な丸底の底部から、口縁部を短くつまむように内側に屈曲させる。口縁端部は丸く納める。森分類・編年のB 4類で、1064は前V～VI期、1065・1066は前VI期、1067は前V期に相当する。1068は径の小さな平底の底部から体部が斜外方へ開き、口縁部は短くS字状に屈曲させる。森分類・編年のZ 3類で、前V期に相当する。1069・1070・1072・1073・1075～1077・1080は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類で、1069は後II～III期、1070・1072・1073は前IX～後I期、1075～1077・1080は後I～II期に相当する。1074は狭い丸底基調の底部と体部を有するが、器高が低く扁平である。口縁部も浅く斜外方へ大きく開く。森分類・編年のC 3類、前IX期に相当する。口縁部は端部に向か

い銳く仕上げる。1071・1078・1079・1085は底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は銳く仕上げる。森分類・編年のZ5類で、1071は前Ⅸ～後Ⅰ期、1078・1079は後Ⅱ期、1085は後Ⅰ期に相当する。1082・1083は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD1類、後V期に相当する。1084は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部はつまみあげはほとんどみられない。森分類・編年のD3類、後Ⅲ期に相当する。1086は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く形態。端部は銳く仕上げるものが多い。森分類・編年のB3類、前VI期に相当する。1087～1090は龍泉窯系青磁である。1087・1088は碗の口縁部破片で、1087は外面に連弁文をもつ。1090は碗の底部で、内面見込みには草花文が凹印されている。1089は环か皿の底部の破片で、断面四角形の高台を有する。1087は上田分類Ⅲ類もしくはIV類、1088・1089・1090は大宰府分類のIV類以降に相当する。1091～1093は白磁で、1091は皿の底部で、抉り高台を有し、内面には重ね焼き跡がみられる。1092は碗の底部破片で、胎土はやや灰色を帯び、白化粧土を薄くかけている。高台は露胎である。1093は杯の口縁部破片で、体部は面取されている。1091・1093は森田分類D群に、1092は大宰府分類のII類にそれぞれ相当する。1094～1099は瀬戸美濃で、このうち1094～1096は鉄釉人目茶碗である。1094・1095は口縁部破片で、1094は直線的な体部に、口唇部はほぼ直立する。破片断面に漆継ぎ痕がみられる。復元口径11.6cmである。1095は体部から口唇部にかけて丸みをもって立ち上がり、口唇部はくびれは強く、やや外反する。破片断面に漆継ぎ痕が残る。復元口径12.0cmである。1096は底部、高台は鉄釉。1097・1098は灰釉平碗で、1097は輪高台の底部である。1099は梅瓶の底部破片で、外面に灰釉が施される。1094は藤澤編年後の後期II、1095は後期IV（新）、1096は大窯期I、1097は後期III、1098は後期IV（古）、1099は前期IIかIIIにそれぞれ相当する。1100は美濃灰釉盤で、外面に文様が線刻されている。復元口径11.7cmである。17世紀後半の所産である。1101～1136は越中瀬戸の皿類で、概ね底部は削り出し高台を有する。釉薬については1101～1115・1118～1131・1133・1134・1136は灰釉が、1117・1132・1135は鉄釉がそれぞれ施される。内面の印化については1101・1103～1109が菊、1102は二重菊がそれぞれ押印されている。また、1107の内面体部に4条一単位の丸彫りが施される。1109～1116の底部高台見込みには墨書が描かれている。法量は口径11cm前後のものが多い。1137～1143は越中瀬戸の向付で、概ね底部は削り出し高台を有し、内面は釉剥ぎを施す。釉薬については1137・1139・1140は灰釉が、1138・1141～1143は鉄釉がそれぞれ施される。内面見込みには1137と1138に印花文があり、1137は菊である。高台内に墨書きされているものとして1139と1140があるが、判読できない。1144・1145は越中瀬戸鉄釉天目茶碗の底部で、高台付近は露胎である。1146～1151は越中瀬戸碗である。1146～1151は鉄釉を施し、底部は削り出し輪高台で、露胎となる。1147の法量は口径10.2cm、器高6.3cmである。1152～1156は越中瀬戸鉄釉火入れで、1152～1155は底部は削り出し高台で、露胎である。1155の法量は口径14.1cm、器高6.2cmである。1157・1158は越中瀬戸の小杯である。1157は底部で、回転糸切り痕が残り、露胎となる。1158は回転糸切りの底部から体部は「S」字状に立ち上がる。内面と口縁部外面には鉄釉がかかる。法量は口径5.8cm、器高は2.0cmである。1159は施釉陶器の香炉で、外面に灰釉がかかる。底部はヘラ状工具によるケズリ調整である。1160・1161は越中瀬戸鉄釉壺で、口縁部は弱く屈曲する。1162は越中瀬戸鉄釉香炉で、球胴状の体部から頸部は直立し、口縁部外端は肥厚する。頸部に小孔がある。復元口径12.2cmである。1163～1168は越中瀬戸匣鉢である。1163～1165は底部が回転糸切りに

より切り離しで、直立気味に立ち上がる体部を有する。内外面には鉄釉ないしは錫釉がかかる。1168は平坦な底部から体部が丸みを持って立ち上がる。底部付近をケズリ調整で、底面は露胎である。ここでは匣鉢として器種分類しておくが他の器種の可能性もある。1169～1188は越中瀬戸攝鉢であり、概ね底部は回転糸切り痕が残り、全体に錫釉がかかる。口縁形態は大きく3タイプあり、直線的な体部から、口縁部外側に縁帯が形成され、端部はやや肥厚する形態(1173・1174・1182～1184)、口縁部の内側に突起が形成される形態(1169～1174)、口縁が内側に折り返される形態(1176)がある。また、1172・1183は片口口縁を有するものである。1175は鉢と考えられるもので、やや内湾気味に立ち上がり、端部は方頭を呈するものである。1189～1191は越中瀬戸鉄釉瓶である。1189は体部破片で、体部上位の外面には刷毛目状の横線が巡る。体部上位の一ヵ所は欠失しているが、粘土を貼り付けていた跡がみられる。1190は底部にトチソ跡が3点あり、1191の底部は回転糸切りによる切り離しである。1192～1194は越中瀬戸鉄釉秉燭で、底部は回転糸切り痕が残る。1192・1193は火芯を立てる芯立部分が欠失している。1195は仏花瓶の体部破片で、外面に鉄釉が施される。体部外面には粘土を貼り付けている。1196は越中瀬戸の灯明受皿で、内面に環状の仕切りを有する。内外面は鉄釉が施され、底部付近は露胎である。1197～1227は珠洲である。1197～1215は攝鉢で、1197はやや内湾気味に立ち上がる体部から、口縁部は方頭を呈し、端部は水平となる。法量は口径18.0cm、器高8.6cmである。1198は体部から口縁部にかけて稜を持って、やや開き気味に立ち上がる。口縁部は方頭を呈し、外端部はやや外傾する。体部内面には「王」と線刻されている。復元口径15.1cmである。1199は底部破片で、内面は摩滅している。1200は口縁部破片で、直線的に開く体部に口縁端面が外傾し、端面の両端が角を落としたように丸みをもつ。攝目は13条確認される。1201は口縁部破片で、やや内湾気味の体部に、口縁端部外端が側方にやや突出する。1202～1204は口縁部破片で、直線的ないしはわずかに内湾する体部から、外端がやや水平に突き出す口縁部をもつ。1203は攝目は12条一単位で、1204は片口口縁を有する。1205は器壁がやや厚手で口縁端部の端面が水平な三角頭の角を落として丸めたような口縁形態を有する。端面には波状文を巡らす。攝目は12条一単位である。1206は口縁部が直線的に開き、口縁部の端面が大きく幅広に内傾するもの。端面には波状文を施文されている。1207・1208は口縁部破片で、直線的な体部から口縁部は方頭を呈し、外端部はやや外傾する。1209～1215は底部破片で、底部を回転糸切りするもの(1209・1211)、静止糸切りするもの(1212・1213・1215)がある。攝目は約10条前後で一単位のものが多いようである。1217は陶製加工円盤で、壺の体部を加工している。1216は壺の口縁部破片で、頸部は緩やかに外傾し、口縁端部は方頭で、やや丸みを持たせ面取る。口縁部内面にはススが付着する。復元口径16.0cmである。1218～1225は壺の口縁部である。1220は長頸で口縁部が嘴頭を呈する。1218は長頸で口縁端部は円頭を呈する。1221・1222は短頸で「く」字状を呈する。1224・1225は口縁端部は円頭の、短頸で「く」字状を呈し、口縁端部は円頭で、体部は口径を少し上回る程度である。復元口径は約40cmである。1223は頸部が「く」字状で、口縁端部は円頭を呈する。体部は口径を上回る。1219は短頸で「く」字状を呈し、口縁端部は方頭である。1226・1227は底部破片で、1226は器壁に厚みがあり、底径の小さいもので、外面のタキキは底面に近い位置にまで施される。1227は底部が静止糸切りによる切り離しである。1197・1198・1218～1220は吉岡編年のII期に、1201・1204・1207・1208はIV2期に、1200・1221はIV3期に、1206はIV期に、1202・1203・1205・1216・1222～1225はV期にそれぞれ相当する。1228は越前攝鉢の底部破片で、底部は回転糸切りによる切り離しで、内面の攝目は13条一単位である。1229～1271は唐津である。1229～1235は陶胎染付の碗で、外面には鉄絵が描かれている。1236・1237は灰釉碗で、底部付近は無釉である。

る。1238は鉄釉天目茶碗の底部破片であり、削り出し輪高台を有し、露胎となる。1239・1240は壺で、1239は頸部が直立し、口縁端部は内屈させる。復元口径21.6cmである。1240は丸みを持つ体部から口縁部は直立し、口縁部は水平に屈曲させる。内外面に鉄釉が施される。復元口径20.9cmである。1241～1250は擂鉢である。口縁形態は3タイプに大別され、口縁部が肥厚し外反させるタイプ（1241・1242）、器壁は薄く、口縁部内面が幅広に肥厚するタイプ（1243）、口縁外端部を丸く肥厚させ、玉縁状を呈するタイプ（1244～1248）がある。これらは概ね、口縁部に鉄釉がかかり、擂目はシャープで12～14条一単位のものが多い。1249・1250は唐津擂鉢の底部破片である。高台には1249については砂目が、1250については胎土目が残る。1251～1260は表面に白化粧土による綱状の文様を施す。1251は碗で、復元口径10.4cmである。1252～1255は鉢で、口縁部は外端を折り返し玉縁状を呈する。1256～1260は皿であり、高台については断面四角形を呈するもの（1256・1257・1259）、高く削り出しているもの（1258・1260）がある。1256・1257・1259は内面に砂目が残り、1258は内面に蛇の目釉剥ぎが施される。1261～1271は内野川の皿である。1261・1266・1267・1270・1271は内外面に透明釉が施されるもので、内面に蛇の目釉剥ぎを施す。高台付近は露胎である。1271は高い高台に、内面に鉄絵が施される。1262～1265・1268・1269は内面に銅緑釉が施されるもので、見込みは蛇の目釉剥ぎである。1272～1315は伊万里である。1272～1280は染付の碗で、外面には1272で植物文、1273・1274・1275で草花文、1276はコンニャク印判で松と団鶴、1279で暦文、1280で格子文がそれぞれ描かれている。1281～1285は半筒形碗で、1281は外面に草花文、内面に四方襷文が、1282・1284は外面には矢羽文、1283は外面に菊花文、内面に四方襷文、1285は内面見込みに五弁花文がそれぞれ描かれている。1286は染付の猪口で、体部は開き気味に直線的にのびる。外面には網干文、底部見込みに「大明年製」の文字が入る。1287～1307は伊万里の皿で、1287～1290・1292・1293は削り出し高台あり、内外面に透明釉を施釉する。内面は蛇の目釉剥ぎを有する。1291・1294～1307は内外面に染付が施されるもの。1291の内面に圓線が巡り、1294～1298は内面に二重格子文を有する。1299の内面見込みには五弁花がみられ、1300は内面草花文、外面にはくずし唐草文が描かれている。1301は体部内面には二方花文、体部外面には唐草文、内面見込みには五弁花文が描かれている。高台見込みには渦福のくずした銘を配する。1302は内面に草花文と見込みに五弁花文を配し、外面には唐草文が描かれている。高台見込みには渦福のくずした銘がみられる。1303・1305は内面見込みに五弁花文を配し、1304は底部が蛇の目凹高台で、内面には山水文とみられる文様を有する。1307は口縁端部を折縁状にし、水平にさせる。内面には波状の文様が巡る。1308は内面に墨彈の手法による文様が描かれている。1309は染付の手塙皿で、型打成形である。復元口径8.4cmである。1310は鉢で、口縁部内面に植物文が、体部外面には唐草文が描かれている。1311～1314は白磁の紅皿で、いずれも型打成形である。1314は外面に螭唐草文が陰刻されている。1316・1318はいわゆる拳骨茶碗で、内外面に鉄釉がかかる。1316は輪高台の底部、1318は体部に指押さえて窪みを有する。1317・1319は施釉陶器の碗で、内外面にやや黄褐色を帯びた釉がかかる。1320～1323は施釉磁器で、透明釉がかかる。1324は灰釉植木鉢で、桶状を呈する。有高台で、体部はやや外傾しながら立ち上がり、口縁部は外側に緩く屈曲する。底部には直径14mmの穿孔を有する。瀬戸美濃の可能性がある。1325は壺の口縁部破片で、端部を外側に折り返す。外面には灰釉がかかる。1326は壺の口縁部で、口縁端部はやや肥厚させる。体部には沈線が一条巡り、粘土を貼り付けた装飾を有する。1327は鉢で、内湾気味の体部から口縁部は外側へ折り返し玉縁状を呈する。1328は土製品のおはじきで、断面は両凸レンズ形を呈する。直径2.2cmである。1329は瓦質土器の香炉で、底部破片である。体部外面には菊花文が施され、内面はケズリ調整である。

## (6) F1 地区：(図面279-1330～1390)

### 中・近世 (図面279-1330～1390)

出土遺物は主に中世のものが出土している。中世上器皿、珠洲、八尾、中国製青磁・白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、唐津など多様な器種構成となっている。

#### 〈土坑〉

SK04 (図面279-1332) : 1332は土師器の小皿で、体部が内湾気味に浅く屈曲し、口縁部は強くヨコナデして外反させる。端部はやや鋭く仕上げる。森分類・編年のZ10類、後III期以降か。

SK18 (図面279-1330) : 1330は土師器の小皿で、口縁部を強くヨコナデして外反させる。端部はやや鋭く仕上げる。森分類・編年のZ10類、後III～IV期に相当する。

#### 溝

SD02 (図面279-1333・1334) : 1333・1334は土師器の大皿で、1333は体部・口縁部が「S」字状に屈曲するが、屈曲の度合いは弱く直線的で、端部のつまみあげも弱い。森分類・編年のD1類、後III期に相当する。1334は体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後I～II期に相当する。

SD14 (図面279-1335・1336) : 1335・1336は龍泉窯系青磁碗の口縁部破片で、外反する口縁を有する。上田分類D-I・II類に相当する。

SD16 (図面279-1331) : 1331は土師器の小皿で、底部は丸底風で、体部は緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ6類、前VII～VIII期に相当する。

#### 〈包含層〉 (図面279-1337～1390)

1337～1367は土師器の皿類である。1337は体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。内底面の見込み外縁に沿って、圓線上の凹線が巡る。口縁端部は軽くつまみあげ鋭く仕上げる。いわゆる「へそ皿」の模倣と考えられる器形だが、成形手法は手捏ねではなく、回転台成形である点が大きく異なる。復元口径は8.0cmである。森分類・編年のC6a類、後I期か。1338は体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部はつまみあげはほとんどみられない。復元口径は11.8cmである。森分類・編年のD3類、後III期に相当する。1339は器高が低く、口縁部は直接浅い角度で短く内湾し、口縁端部は押しナデされ面を有する。森分類・編年のA2類、前V～VI期に相当する。1340～1350・1352～1357は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類で、1340で前V期、1341・1342で前VI～VII期、1343～1348で前VII～VIII期、1349・1350・1352・1354・1356・1357は前IX～後I期、1353・1355は後I～II期に相当する。1358～1364はやや丸みを持った平底の底部から、体部が内湾気味に浅く屈曲し、口縁部は強くヨコナデして外反させる。森分類・編年のZ10類で、1358～1361は後VII期、1362～1364は後VII期以降で、近世に下るとみられる。1365はロクロ成形の皿で、底部は小さく回転糸切りによる切り離しを施し、体部は直線的に浅く開き、口縁端部はややつまみ上げる。内外面には墨書きされている。近世の藏骨器の蓋に使用されたと考えられる。1366・1367は径の小さな平坦な底部の底端を強く折り曲げ、体部から口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。端部は上方に丸くつまみあげる。森分類・編年のD1類で、1366は後VII期、1367で後VII期以降にそれぞれ相当する。1351は丸底の底部から深みのある体部強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味につまみあげ、端部は鋭

く仕上げる。森分類・編年のC 2類、前VII～IX期に相当する。1368は中国製陶器の鉄釉茶入の底部である。釉調は黒釉で、底部は露胎である。底径は3.0cmである。1369は青白磁壺とみられる底部破片で、内面は無釉である。高台は「ハ」字状を呈する。近世の所産とみられる。1370は山茶碗の口縁部破片で、口縁端部はやや玉縁状を呈する。復元口径は13.9cmである。1371は瀬戸美濃緑釉小皿で藤澤編年の後期IV（下）に比定される。1372は越中瀬戸の丸皿で灰釉が施される。1373は越中瀬戸壺で、内外面に鉄釉が施される。1374～1383・1389は珠洲で、1374～1378は壺の口縁部破片であり、1379・1389は壺、1380～1383は擂鉢である。1374・1377・1378は、短頭で、「く」字状に屈曲する口縁端部を有し、端部は円頭を呈する。1375は短頭で、口縁端部は方頭を呈する。1376は口縁部は外反ないしは直立気味に立ち上がり、端部は方頭を呈する。1379は底部破片で、静止糸切りによる切り離しである。1389はやや肩が張る体部から口縁部は緩やかに外反する。端部はやや面取る。1380は口縁部破片で、体部から口縁部が直線的に開き、口縁の端面に丸味を持たせる。復元口径17.8cmである。1381は幅の広いほぼ水平の口縁部端面を有し、外端は側方に嘴状に突き出す。復元口径26.9cmである。1382は幅の広いほぼ水平な口縁部端面を有し、僅かに外端が側方へ突出するものが多い。擂目は10条一単位である。1383は底部破片で、内面は著しく摩滅しており、擂目が消失している。珠洲の時期は、1380・1389は吉岡編年のII期に、1374はIV 1期に、1375・1378はIV 2期に、1381はIV 3期に、1377はIV期に、1376・1382はV期にそれぞれ相当する。1384は八尾壺の口縁部破片で、頸部が発達し幅広の口縁帯が形成され、断面形は「N」字状を呈する。口縁帯の上端と下端は、それぞれ丸くおさめる。森分類のIII類に比定される。1385は伊万里とみられる青磁折縁皿の口縁部破片である。1386は伊万里の猪口で、底部は蛇の目凹高台である。外面には植物文とみられる文様が描かれている。1387は唐津の碗で、いわゆる京焼風唐津とよばれるものである。1390は唐津擂鉢で、底部は回転糸切り痕が残る。体部は直線的にのび、口縁部は肥厚し、端部は水平に仕上げている。法量は口径25.7cm、器高は12.6cmである。1388・1389は須恵器で、1388は杯蓋で扁平な天井部を有し、口縁端部は下方に垂下する。

#### （7）F 2・3 地区：（図面280～282-1391～1534）

中・近世（図面280～282-1391～1534）

遺物には中世土器皿、珠洲、八尾、中国製青磁・白磁、瀬戸美濃、越中瀬戸、伊万里、唐津、瓦質土器などが出土している。

##### 〈井戸〉

SE01（図面280-1393）：1393は土師器の小皿で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類、後I～II期に相当する。

SE04（図面280-1391・1392）：1391・1392は土師器の小皿で、1391は底部はやや扁平な丸底で、体部との境界は明瞭でない。体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 5類、後 I 期に相当する。1392は狭い丸底と体部を有するが、器高が低く扁平である。口縁部も浅く斜外方へ大きく開く。口縁部は端部に向かい鋭く仕上げる。森分類・編年のC 3類、前IX～後 I 期に相当する。1391・1392ともに口縁部にはススが付着する。

##### 〈土坑〉

SK01（図面280・281-1394～1397・1458）：1394・1395・1458は土師器の小皿で、1394は器高が低く平底気味の平坦な底部から、口縁部が浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。

- 森分類・編年のA 2類、前VI期に相当する。1395は扁平だが、丸底の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB 2類、前VI～VII期に相当する。1458は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類、前IX～後I期に相当する。1396・1397は珠洲播鉢で、1396は体部がわずかに内湾しながら開き、口縁部は単純方頭を呈する。1397は底部破片で、内面の描目は直線的に7条一単位である。
- SK05**（図面280-1398～1405）：1398～1402は土師器の皿類で、1398は丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 9類、後II～III期に相当する。1399～1402は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類で、1399～1401は後I～II期、1402は前IX～後I期にそれぞれ相当する。1403は瀬戸美濃持腰形香炉である。やや肩の張る球洞状の体部から、頸部は直立し口縁端部は肥厚する。復元口径10.7cmである。藤澤編年の中後期IIに相当する。1404・1405は珠洲播鉢の口縁部破片で、直線的に開く体部に口縁端面が外傾し、端面はやや鋭く、外端が側方にわずかに張り出す。1404は描目は8条一単位であり、1405は片口を有する。
- SK10**（図面280-1419）：1419は土師器の皿類で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類で、前IX～後I期に相当する。
- SK12**（図面280-1422）：1422は龍泉窯系青磁環で、口縁部は端反、体部外面には連弁文が巡る。大宰府分類のIV類から上田分類のII類に相当する。
- SK15**（図面280-1406～1411）：1406～1410は一括性の高い土師器の皿類で、丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類、前IX～後I期に相当する。1411は珠洲播鉢で、直線的に開く体部に口縁端面が外傾し、端面はやや鋭く、外端が側方にわずかに張り出す。描目は10条一単位である。復元口径は26.1cmである。
- SK18**（図面280-1434）：1434は唐津内野山皿の底部破片である。底部は削り出し高台を有する。内面には銅緑釉がかかり、見込みには蛇の目釉剥ぎが施される。復元底径4.3cmである。
- SK20**（図面280-1412～1418）：1412～1418は土師器の皿類である。1412・1413・1416は丸底の底部から深みのある体部強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味につまみあげ、端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のC 2類で、1412・1416は前IX～後I期、1413は後I期に相当する。1414は狭い丸底基調の底部と体部を有するが、器高が低く扁平である。口縁部も浅く斜外方へ大きく開く。口縁部は端部に向かい鋭く仕上げる。森分類・編年のC 3類、前IX～後I期に相当する。1415・1417・1418は丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1類で、1415は後I～II期、1417・1418は前IX～後I期に相当する。
- SK21**（図面280-1423～1425）：1423は瀬戸美濃の持腰形香炉で、底部には低い足を有する。外面には灰釉がかかる。1424・1425は珠洲壺の口縁部破片である。1424は口徑より胴径が上回り、口頭部はやや短頸気味で、「く」字状に屈曲し、端部は円頭ないしはやとがる円頭を呈する。1425は口徑より胴径が上回り、口頭部は短頸で、「く」字状に屈曲し、端部は弱い円頭を呈する。
- SK26**（図面280-1426～1431）：1426は龍泉窯系青磁環の底部破片で、高台端部は釉を搔き取る。大宰

府分類のⅢ 1 類に相当する。1427は越中瀬戸灰釉丸皿で、底部は削り出し高台を有する。復元口径10.5cmである。1428～1430は土師器の皿で、1428・1429は小皿、1430は大皿である。1428は底部で、径の小さな平底の底部を有する。内底面の見込み外縁に沿って、圓線上の凹線が巡る。底部外面に回転糸切り後ナデを施す。森分類・編年のC 6 a類類、後I期に相当する。1429は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、前IX～後I期に相当する。1430はやや丸みを持った平底の底部から体部が浅く開き、端部付近を強く屈曲させ、先端が短い段差状の「S」字を描く。端部は鋭くおさめる。森分類・編年のZ 1 1 類、後III期に相当する。1431は八尾窯の底部破片で、外面に2条の沈線が巡る。

SK27（図面280-1432・1433）：1432は越中瀬戸の灰釉丸皿で、底部は削り出し高台を有する。1433は伊万里の染付碗で、外面に網目文様が描かれている。法量は口径10.1cm、器高6.8cmである。

SK32（図面280-1420・1421）：1420は龍泉窯系青磁碗の体部破片で、外面に連弁文を有する。大宰府分類のII-b類（旧I-5-b類）に相当する。1421は越中瀬戸播鉢の底部破片で、底部は回転糸切り痕が残る。内外面に鋸歯がかかり、播目は9条一単位である。

SK33（図面280-1435～1442）：1435～1441は土師器の皿類である。1435は大皿の口縁部破片で、体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 5 類、前IX期に相当する。1436～1439は小皿で、丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、前IX～後I期に相当する。1440・1441は小皿で、扁平だが、丸底ないしは丸底風の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾するか、ないしは軽く外反する。口縁端部にはスグが付着する。森分類・編年のB 2 類、前VI～VII期に相当する。1442は瓦質風炉の口縁部小破片で、外面には三つ巴のスタンプがみられる。

SK36（図面281-1443～1445）：1443は土師器の小皿で、丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、後I～II期に相当する。1444は瓦質風炉の破片で、上部に窓を有する。外面には2条の凸線が巡り、その凸線の間を加飾する。下部には縱方向に三角柱状に稜線を鋭く削り出し、文様帯を形成する。1445は越中瀬戸鉄釉碗の破片で、高台付近は露胎となる。復元口径10.9cm。

SK39（図面281-1459～1461）：1459は上師器の小皿、1460・1461は上師器の中皿である。1459・1460は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、前IX～後I期に相当する。1461は器壁はやや厚めで、丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。形態は、いわゆる「へそ皿」の二次的模倣とみられる。森分類・編年のZ 9 類、後II期に相当する。

SK41（図面281-1452）：1452は上師器の小皿で、器高が低く底部は丸みを帯びる。底部から口縁部にかけての屈曲は弱く、浅い角度で側方に大きく開く。端部のつまみあげは弱い。森分類・編年のD 4 類、後VI期に相当する。

SK44（図面281-1476）：1476は中國製鉄釉天目茶碗の体部破片で、底部付近は鋸歯が施される。

SK47（図面281-1453）：1453は土師器の皿で、体部は屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、後I～II期にあたる。

SK50（図面281-1448～1450）：1448～1450は土師器の小皿である。1448は器高が低く、口縁部が直接

浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされ面を有する。森分類・編年のA 2 類、前VI期に相当する。1449は体部が斜外方へ開き、口縁部は短くS字状に屈曲させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 3 類?、前VI期に相当する。1450は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く。森分類・編年のB 3 類、前V~VI期に相当する。SK52(図面281-1457) : 1457は土師器の小皿で、丸底ないしは丸底気味の底部から体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、前IX~後I期に相当する。

SK58(図面281-1451) : 1451は土師器の大皿で、やや丸みを持った底部から体部が浅く開き、端部付近を強く屈曲させ、先端が短い段差状の「S」字を描く。端部は鋭くおさめる。森分類・編年のZ 1 類、後III~IV期に相当する。

SK69(図面281-1463~1465) : 1463~1465は土師器の皿類である。1463・1465は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類で、1463で前IX~後I期、1465で後I期に相当する。1464は体部は緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 6 類、前VII~VIII期に相当する。

SK71(図面281-1462) : 1462は体部が明確でなく、丸底ないしは丸底気味の扁平な底部から口縁部が外傾気味に短く直線的に開く。森分類・編年のB 3 類、前VI期に相当する。

SK72(図面281-1446・1447) : 1446は土師器の皿で、丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、後I~II期に相当する。法量は口径10.9cm、器高は2.2cmである。1447は瓦質土器の羽釜の口縁部破片である。外面はナデ、内面はハケ目調整である。外面にはススが付着する。搬入品で、形態から山城辺り(近江か?)で作出された可能性が高いと考えられる。

SK75(図面281-1467) : 1467は土師器の小皿で、器高が低く扁平である。口縁部も浅く斜外方へ大きく開く。口縁部は端部に向かい鋭く仕上げる。森分類・編年のC 3 類、前VII~IX期に相当する。

SK82(図面281-1466) : 1466は土師器の小皿で、底部は丸底風で、体部は緩やかに内湾した後、口縁部は直線的に外傾する。体部と口縁部の境界付近が最も肥厚し、端部に向かって鋭く仕上げる。森分類・編年のZ 5 類、後I期に相当する。

SK83(図面281-1468・1469) : 1468は土師器の小皿で、丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、前VII~VIII期に相当する。1469は越中瀬戸擂鉢で口縁部小破片である。口縁部は外側に肥厚する。内外面には錫釉がかかる。

SK85(図面281-1454~1458) : 1454・1455は土師器の皿である。1454は丸底の底部から深みのある体部強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味にまみあげ、端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のC 2 類、前IX~後I期に相当する。1455は丸底ないしは丸底気味の底部から体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB 1 類、前IX~後I期に相当する。1456は珠洲擂鉢の口縁部破片で、鋭く外端が突き出る口縁部を有し、端面は水平かわずかに内傾する。器壁はやや薄手でシャープなつくりである。

#### 〈柱穴〉

SP11(図面281-1472・1473) : 1472・1473は土師器の皿である。1472は丸底ないしは丸底気味の底部

から体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後I～II期に相当する。1473はやや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する形態である。口縁部は幅広で端部は丸く納める。森分類・編年のZ2類、前VII～VIII期に相当すると考えられる。

**SP16** (図面281-1470) : 1470は土師器の大皿で、器高は低く扁平で、口縁端部は鋭くつまみあげるように仕上げる。森分類・編年のC5類、後I期に相当する。

**SP23** (図面281-1474・1475) : 1474・1475は土師器の小皿である。丸底ないしは丸底気味の底部から体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明確である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、前VII～VIII期に相当する。

**SP53** (図面281-1471) : 1471は土師器の皿で体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、後I～II期に相当する。

#### 〈溝〉

**SD01** (図面281-1478) : 1478は土師器の皿で、丸底気味の底部から体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は不明確である。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類、前VII～VIII期に相当する。

**SD02** (図面281-1479・1480) : 1479・1480は土師器の皿である。1479は土師器の皿で体部がやや屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。口縁部付近にはススが付着する。森分類・編年のB1類、前VII期に相当する。1480はやや丸みを帯びた平坦な底部から、体部が強く屈曲して立ち上がり、軽く外反する。口縁部は幅広で端部は丸く納める。器壁も薄く、仕上げも良い。法量は口径7.8cm、器高1.6cmである。森分類・編年のZ2類、前VII期に相当する。

**SD04** (図面281-1477) : 1477は土師器の皿で、丸底の底部から深みのある体部が強く内湾して立ち上がる。口縁部は直立気味につまみあげ、端部は鋭く仕上げる。口縁部にはススが付着する。復元口径7.6cmである。森分類・編年のC2類、前IX～後I期に相当する。

#### 〈包含層〉 (図面281・282-1481～1534)

1481～1496は土師器の皿類で、1481は狭い丸底を有し、器高が低く扁平である。口縁部は浅く斜外方へ大きく開く。口縁部は端部に向かい鋭く仕上げる。森分類・編年のC3類、後I～II期に相当する。1482は底部と体部との境界は不明瞭で、体部は緩やかに内湾して開き、口縁部は短く強く外反させる。口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ5類、後III期に相当する。1483・1494は器壁はやや厚めで、丸底の底部から幅広の口縁部が大きく外反し、口縁端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のZ9類で、1483は後II期、1494は後I～II期に相当する。1484・1486～1493は丸底ないしは丸底気味の底部から体部が屈曲して開くが、底部と体部の境界は明確でない。口縁部は短く内湾した後、端部を鋭く仕上げる。森分類・編年のB1類であり、1484は前VII～VIII期、1486・1487は後I～II期、1488～1493は前IX～後I期にそれぞれ相当する。1485は器高は低く扁平で、丸底の底部から体部・口縁部にかけて「S」字状に屈曲する。とくに口縁端部は鋭くつまみあげるように仕上げる。森分類・編年のC5類、後I期に相当する。1495は器高が低く、半底気味の平坦な底部から、口縁部が直接浅い角度で短く内湾する。口縁端部は押しナデされてやや鋭く仕上げる。森分類・編年のA2類、前VII期に相当する。1496は扁平だが、丸底ないしは丸底風の底部から体部が内湾気味に開く。口縁部との境界はあまり明瞭でない。口縁部は短く外傾する。端部は鋭く仕上げる。森分類・編年のB2類、前

IV～V期に相当する。1497～1499は白磁皿である。1497は高台内に墨書が描かれるが、判読できない。1499は高台に挟りを有し、内面に重ね焼き痕がみられる。1498は口禿げである。1497・1499は森田分類のD群に、1498は大宰府分類のIX類にそれぞれ相当する。1500～1505は龍泉窯系青磁碗である。1500は口縁部小破片で、ややにぼい外反口縁を有する。1501は口縁部破片で、外面に雷文帯と蓮弁文を有する。1502は外反口縁の口縁部破片で、1503は体部破片である。1504は底部で、内面には輪状に釉カキが施される。高台内は無釉である。1505は底部破片で、内面見込みには草花文があり、高台内は無釉である。1500・1502は上田分類のD-IないしはD-II類に、1501は上田分類のC-II類、1503は大宰府分類のIV類以降、1504は明代、1505は大宰府分類のIV類にそれぞれ相当する。1506～1509は瀬戸美濃である。1506は丸皿で、内外面に灰釉がかかる。法量は口径9.6cm、器高2.3cmである。藤澤編年の大窯Ⅲ期に相当する。1507は卸皿の口縁部破片で、口縁部に灰釉を施す。後元口径12.1cmである。藤澤編年の後期Ⅲに相当する。1508は筒形容器の底部破片で、底部は回転糸切り後や高台を削り出す。外面は灰釉がかかる。藤澤編年の後期Ⅲ～IV(古)に相当する。1509は平楕の口縁部破片で、後元口径15.8cmである。藤澤編年の後期Ⅲに相当する。1510～1514は珠洲である。1510～1512は播鉢の口縁部破片で、1510は鋭く外端が突き出る口縁部で、端面は水平かわずかに内傾する。口縁の端面に波状文が施されている。1511は外端が突き出る口縁部で、端面は水平かわずかに内傾する。1512は片口を有するもので、口縁部の端面が大きく幅広に内傾するもの。口縁端部には波状文は施されていない。1513・1514は甕の口縁部で、1513は頸部が短頭で、「く」字状に屈曲し、口縁端部は方頭を呈する。1514は長頭で、口縁端部はやや嘴頭を呈する。1515～1518は越中瀬戸であり、1515は楕の口縁部破片で、内外面は鉄釉を施す。1516は灰釉丸皿、1517は鉄釉向付で、底部は削り出し高台を有する。1518は壺で、鉄釉がかかり、口縁端部は摩滅している。1519は唐津の陶胎染付の楕である。1520・1521・1522は唐津の皿で、1520は外面に黄褐色を帯びた釉がかかる。1521は内面に蛇の目釉剥ぎが施され、見込みに植物文とみられる鉄絵が描かれている。1522はハケ日文様が描かれた深皿で、高い高台を有する。1523は施釉磁器碗の底部で、外面と見込みには文様が描かれている。高台内には「道場□□」と朱書きされている。1524～1531は伊万里である。1524は碗の口縁部破片で、外面にはコンニャク印判の手法で松と団鶴が描かれている。1525は半筒形碗の破片で、体部外面には松竹などの植物が描かれ、口縁部付近の内面には四方瓣文が施される。1526は碗の破片で、外面に植物文が描かれている。1527・1528は皿で、見込みは蛇の目釉剥ぎを施し、底部は削り出し高台を有する。1527は体部内面に斜格子が描かれる。1529は輪花皿で、型打成形である。底部は蛇の目凹高台を有し、内面には樓閣山水文が描かれている。法量は口径14.0cm、器高4.1cmである。1530・1531は白磁の紅皿で、型打成形である。小さな高台を有し、高台付近は無釉である。1532～1534は瓦質土器である。1532は風炉の破片で、外面には亀甲が連続してスタンプが施される。1533・1534は火鉢の口縁部破片で、1533は内面はヘラ状工具による幅広いナデで、1534は内外面をミガキ調整で、外面には菊花文を散らしている。

#### (8) A地区：(図面283～291-1535～1943)

古代 (図面283～288-1535～1798)

古代の出土遺物には土師器、須恵器、黑色土器、赤彩土師器、灰釉陶器、土鍾などがある。記述は各遺構別に行う。

〈堅穴住居〉

**SI01** (図面283-1535～1537) : 1535は古墳時代タイプの須恵器杯蓋の破片である。天井部は丸味を有し、口縁部は軽く内湾しながら端部は垂直に接地する。天井部外面にはヘラ削りはみられず、内外にヨコナデの痕跡が残る。復元口径12.2cmを測る。1536は土師器高杯の脚部破片で、杯部は欠損する。脚部は「ハ」字状に大きく開く形態で、脚端は側方へ軽く反り返る。体部外面は柱状部と脚端部に分けた二分割ヘラ磨きが施される。脚径15.2cm、残存高10.6cmを測る。1537は上師器壺の口縁部破片。口縁部は「く」字状に外反する。内外にハケ調整の痕跡が残る。復元口径20.2cmを測る。

**SI02** (図面283-1538・1539) : 1538は黒色土器の口縁部破片。体部は外傾し、口縁端部は軽く外反する。内面は斜方向に荒い分割ヘラ磨きが施される。内面を黒化処理した、いわゆる内黒の黒色土器である。1539は土師器焼成の製塙土器の口縁部破片である。外面に荒いヘラ磨きを施すものの、内外に成形時の粘土紐巻き上げ痕や指頭痕が顯著に残る。

**SI05** (図面283-1553～1558) : 1553は土師器壺の口縁部破片で、「く」の字に開く口縁部の端面は内側に短く折り返している。1554～1558はいずれも須恵器の杯である。1554は、底端部に貼り付け高台を有する。高台の形態は、あまり高さはないが、外方へ踏ん張り内端が接地するもの。体部は外傾して直線気味に開く。底部内面にはヘラ切り成形の後、ナデ調整が施される。1555～1558は平底無高台の須恵器杯Aである。体部は底端で屈曲し、外傾気味に開く。内外ともヨコナデするが、外底面はさらに回転ヘラ削りを施す。法量は口径12～13cm、器高3.0～3.5cmを測る。

**SI06** (図面283-1540～1552) : 1540は土師器焼成の製塙土器の体部破片である。外面に指頭痕が顯著に残る。1541は土師器把手付き壺の把手部破片である。1542は須恵器杯。底部は平底で、体部は外傾気味に直線的にのびる。端部は丸く納める。体部外面には成形時のヨコナデ痕が顯著に残る。口径10.5cm、器高4.6cmの法量を有す。1543は堅穴住居のカマドの支脚に転用されていた土師器高杯である。半球状の杯部を有し、口縁端部は外反させて先端を細く仕上げる。脚部は裾に向かって「ハ」字状に大きく開くが、脚端部は消失する。杯部は内面を横方向に、外面は斜方向にヘラ磨きを施す。脚部は杯部接合部付近から縦方向にやや荒く磨く。杯部の口径14.6cm、器高5.4cm、脚部を含む残存高は12.0cmを測る。1544～1552はいずれも土師器壺である。1544～1547は体部上半および口縁部は残存するが、体部下半は消失する。口縁部と体部の境界があまり明瞭でなく、口縁部は直立気味に軽く外反する形態である。方向に、内面は横方向にハケ調整を施す。口径は10～12cmを測る。1548は唯一全体器形の完存する土師器壺。形態は、やや上下に長い球形丸底の体部に、直立気味に短く立ち上がる口縁部を有する。口縁部内面は横方向に、体部内面はランダムにハケ調整が残る。外面は口縁部および体部上半が縦方向、体部下半が斜方向にハケ調整される。口径11.3cm、器高16.4cmの法量を有す。1549・1550は土師器壺の底部破片である。丸底で、内外面にハケ調整やナデの痕跡が残る。1551・1552は1544～1550よりもやや大型の土師器壺で、体部は長胴化し、底部も平底気味の形態である。2例とも口縁部が残存しないが、短い「く」の字の口縁が付くものと考えられる。体部の内外はハケ調整されるが、1551については体部内面上半部に、ハケを応用したヘラ磨き状の調整を行っている。

#### 〈土坑〉

**SK004** (図面283-1559～1562) : 1559・1560は土師器焼成の製塙土器である。1559は体部破片で、外面には荒い縦方向のハケ目が、内面には成形時の粘土の継ぎ目と指圧痕が残る。1560は口縁部の破片で、斜外方へ直線的に開く形態のもの。1561・1562は土師器壺。1561は球形体部に「く」字状に短く外反する口縁部が付く。底部は完全丸底ではなく、平底風である。体部外面は縦ハケ調整される。このハケ調整は、体部中位で上下に二分割して施される。内面は、体部中位以下に荒いハケ状削りがみ

られる。外面のハケ調整とともに分割成形の単位を示すものと考えられる。口縁部は内面は横ハケ調整、外面はナデ仕上げされる。口径14.8cm、器高16.4cmの法量を測る。1562も1561とよく似た形態だが、体部は長胴化している。体部外面は縱方向、内面は横方向に荒いハケ調整を施す。復元口径17.4cmを測る。

SK005（図面283-1563）：1563は土師器小型甕の底部破片で、外面の体部下半は荒くヘラ削りされる。底部は平底で、回転糸切り痕がそのまま残る。

#### 〈溝〉

SD02（図面283・284-1564～1572・1574・1579～1586・1588～1596）：1564～1568は須恵器蓋。1564・1565は、扁平で平坦な天井部から口縁部が短く斜下方に内湾し、口縁端部は内側に折り曲げる形態。1564については天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。1566～1568もほぼ同様の形態だが、天井部と口縁部の境界に稜を有する。天井部位中央の宝珠状つまみは、小破片であり、いずれも欠失している。1569～1572、1574は平底無高台の須恵器杯である。1571・1572・1574は体部が外傾しながら立ち上がる形態で、底部外面は回転ヘラ切り後不調整か、ないしはナデ消し仕上げする。法量は小振りの1569で口径9.8cm、器高2.8cm、大振りの1574で口径13.5cmを測る。1579～1586・1588～1590は須恵器高台付杯である。いずれも底部に高さのない扁平な貼り付け高台を有す。底部のみの破片が多いが、1586・1588では体部が底部より強く屈曲し、やや外傾しながら直線的に立ち上がるものが多い。法量はやや小振りの1586で口径11.4cm、器高3.8cm、やや大振りの1588で口径14.8cm、器高4.8cmを測る。1591・1592は須恵器蓋の口縁部破片である。逆「ハ」字状に開く口縁部の内端に、受け口状の短い突起を付ける。1593は須恵器蓋の底部破片である。1594は回転台土師器の平底杯ないしは皿の底部破片である。底部外面には回転糸切り痕がそのまま残る。1595・1596は土師器鍋の口縁部破片である。浅く開く体部から口縁部が「く」字状に屈曲して開く形態である。1595については体部の内外面にカキ目調整の痕跡が観察できる。

#### 〈包含層〉（図面283～288-1573・1575～1578・1587・1597～1798）

ここでは、包含層からの出土遺物、および時期的に降る中世の造構から混入として出土した古代の土器を包含層として一括記述していく。1573・1575～1578は平底無高台の須恵器杯である。1573・1576～1578は斜外方へ体部が大きく開く形態で、1575は体部が外傾しながら立ち上がる形態である。1587は須恵器高台付杯である。1597～1603は古墳時代タイプの須恵器杯蓋である。1597・1598は蓋の破片で、1597は天井部の、1598は口縁部のみの残存である。このうち1597は天井部外面に回転ヘラ削りが施されている。1599～1603は杯身で、扁平平底気味の底部から体部が緩やかに内湾気味に開く。いずれも口縁部の内側に立ち上がりを有する。立ち上がりは内傾気味に短く上方へ屈曲し、端部は細く仕上げる。1599については体部下半に回転ヘラ削りを施している。これらの須恵器杯蓋は概ね6世紀末から7世紀初頭頃の時期幅で捉えられる特徴を有する。1604～1627はいざれも須恵器蓋である。天井部は扁平で高さのない天井部の中央に宝珠状つまみが付くが、大半は破片のためこれを欠失する。口縁端部は下方に短く折り曲げる（1604～1613）と、端部を内側に巻き込み、丸く仕上げるもの（1614～1625）がある。1613はさらに天井部外面に墨書がみられるが、文字は判読できない。1628は須恵器長脚二段高杯の脚部破片である。脚部中央の二条の横線を境に、上下二段に縱方向の透かしを切り込んでいる。1597～1603の須恵器杯と同時期のものと考えられる。1629は灰釉陶器である。体部が浅く開く椀で、底部にはやや扁平な三日月高台が貼り付けられている。灰釉は濁け掛けで、外底面には回転糸切り痕が残る。O53（大原2号窯）段階の製品と考えられる。1630～1637は平底無高台の

須恵器杯である。底部から体部が直立気味に立ち上がる形態のもの（1630～1633）と、斜外方に大きく開く形態のもの（1634～1637）がある。1638～1659は須恵器高台付杯である。高台は貼り付けのもので、断面が逆台形を呈し、外端が外方へ踏ん張る形態のものが大半であるが、断面方形で、扁平な角高台のものも若干みられる。体部の残存するものでは、内湾気味に立ち上がるもの（1647）、「S」字状を呈し口縁部が外反するもの（1638・1654）、外傾しながら直線的に開くもの（1648～1650、1655～1658）などがある。法量は最も小型の1638が口径7.8cm、器高3.7cm、大振りの1658で口径15.0cm、器高6.1cmを測る。1660～1667は須恵器蓋の口縁部破片である。1662は逆「ハ」字状に口縁部が大きく外反し、端部に狭い面を有する。1662は外傾して直線的にのび、端面は幅広で水平の面とする。外面に一条の沈線を巡らせる。1662～1666は、外反気味に開く口縁部の端面は、垂下気味の幅広のものが多い。1667はやはり外反して開く口縁部を有し、先端は折り曲げて、側方へ突出する形態である。1669、1670は須恵器蓋の体部破片である。1671は須恵器短頸壺で、底部を欠失する。球形で肩の張った体部に、短く直立する口縁部が付く。肩部の外面には一条の沈線を巡らす。体部の内外は横ナデ調整されているが、外面下半についてはさらに回転ヘラ削りを施している。1672は須恵器壺の底部で、おそらく短頸壺の底部と考えられる。底部には大型で逆「ハ」字状の貼り付け高台が付く。また体部外面下半は、1671と同様に回転ヘラ削りが施される。1673～1678・1684は須恵器壺の底部である。いずれも平底無高台の形態で、体部は直立気味に軽く外傾するものが多い。1673～1675・1678・1684については、体部外面に斜方向の不規則なヘラ削りが観察される。これらは双耳壺の底部の可能性が高い。1679～1683は須恵器双耳壺の体部破片である。肩部に突帯を巡らす1681以外は、いずれも体部外面に耳の一部が貼り付けされた状態で残存する。耳の外形は長方形（1679）、多角形（1682）、半円形（1683）などがあるが、紐穴はいずれも円孔である。1685は須恵器双耳壺の耳部破片である。1686・1689は須恵器壺の口縁部である。小破片であるが、口縁端部を折り曲げて側方に突出させ、口縁部外面直下には波状文を施す。1687は須恵器横瓶の体部破片である。樽型の体部の外面にはカキメが顕著に残る。1688・1690～1693は須恵器壺の口縁部破片である。1688・1690は短く外反する口縁部の端部は外側に肥厚する。1690は体部の内外面に成形時の叩き目と当具痕が残る。1691・1692は外反して開く口縁の端部を折り曲げて、側方に突出させる形態である。1691は口縁部の内外面にヘラで、沈線状の模様を刻む。1692は体部外面に成形時の叩き目が、内面にこれに呼応する当具痕が残る。1693は逆「ハ」字状に外反する口縁の端部は、外傾する幅広の端面となっている。体部の内外に成形時の叩き目および当具痕が残るが、外面についてはさらにナデ調整によって叩き目が擦り消されており、部分的にしか叩き目は残されていない。1694～1704・1706～1709は黒色土器である。これらは、基本的には内面のみを黒化処理した内黒の黒色土器である。1694～1697は内湾して開く体部から口縁部が短く屈曲する形態。器壁は厚く、口縁部端面は丸く仕上げる。体部の内外面には幅の太いヘラ磨きを横方向から斜方向に密に施す。1698～1704・1708は高杯ないしは浅い杯と考えられるもの。内湾して浅く開く体部の中位で、一端段をつけ、そこから口縁部を大きく外反させるもの（1698・1699・1702～1704）と、それほど顕著に体部と口縁部を屈曲させずに、浅く外反させるもの（1700・1701・1708）がある。器表面の内外は幅の太いヘラ磨きを横方向から斜方向に密に施している。1706・1707は丸底の黒色土器の底部である。1709は黒色土器の高杯の脚部で、浅く「ハ」字状に大きく開く脚端を有する。1705は黒色土器ではなく、土師器の高杯の杯部破片と考えられるもの。体部中位で屈曲、段を有し、そこから口縁部が大きく外反する形態である。内外面はヘラ磨きされていないが、丁寧にナデ仕上げされている。1710～1739は土師器杯である。基本的に回転台成形のもので、体部の内